

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第319集

狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線建設工事関連遺跡発掘調査



(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第319集
 狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正
13		おおかみさわ	おいのさわ
27	24	10は土師器の	16は土師器の
27	31	と思われる, 18は	と思われる, 19は
27	33	19~21は	18・20・21は
27	33	あるのは20	あるのは21
27	34	また19は	また10は
27	34	22は厚減が	20は厚減が
27	35	須恵器の耳23	須恵器の耳22
27	36	24は回転糸切りで	23は回転糸切りで
27	37	土師器の耳(25・26)	土師器の耳(24・25)
104	2	である	である。
111	9	第2図、第11図	第2図、第10図
112	6	遺物が集中して	遺物が集中して11層

頁	行	誤	正
112	13	是は他の大瓶	これは他の大瓶
116	1:3のスケール内 5cm(誤)		10cm(正)
119	28	土師器の可能性高い	土師器の可能性が高い
147	写真図版1 上 西から		矢印がない
152	上部の写真の上が切れている。		
153	上部の写真の上が切れている。		
153	周溝断面(切)の写真が上下逆		
157	上部の写真の上が切れている。		
156	上部の写真の上が切れている。		
159	参道断面(3)の写真が上下逆		
201	表2	部種・部位	器種・部位
201	表3	口径 底径 器高	口径 \square 底径 \square 器高 \square
201	表4	長さ 幅 厚さ 重さ	長さ \square 幅 \square 厚さ \square 重さg
201	表5	長さ 幅 厚さ 重さ	長さ \square 幅 \square 厚さ \square 重さg

狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線建設工事関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されています。これら多くの先人たちの創造してきた文化遺産を保存し後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な施策であります。発掘によって遺跡が消滅することはまことにほしいことではあります。その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明が当たるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する処置をとってまいりました。

本書は、日本道路公団東北支社北上工事事務所による東北横断自動車道釜石秋田線建設事業に関連して、平成10年度に発掘調査を実施した花巻市狼沢Ⅱ遺跡・高松寺遺跡・上駒板遺跡の調査結果をまとめたものです。本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました日本道路公団東北支社北上工事事務所や花巻市教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 船越昭治

例 言

1. 本書は、東北横断自動車道釜石秋田線建設に係る花巻市に所在する狼沢Ⅱ遺跡・高松寺遺跡・上駒板遺跡の発掘調査報告書である。岩手県遺跡台帳番号は狼沢Ⅱ遺跡はME15-1313、高松寺遺跡はME27-2317、上駒板遺跡はME27-2317で、略号は順にOSⅡ-98、TKM-98、KKⅠ-98である。
2. 狼沢Ⅱ遺跡発掘調査は平成10年4月13日～7月15日、高松寺遺跡は同年4月10日～8月7日、上駒板遺跡は8月6日～10月1日で、各遺跡の室内整理は11月1日～3月31日まで行われた。
3. 調査面積は順に3040㎡、8250㎡、6640㎡である。
4. 今回の発掘調査による成果の一部は、平成10年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第集の「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」にて公表してきたが、本書を正式な報告書とする。
5. 発掘調査および整理は、狼沢Ⅱ遺跡は鳥居達人・中村比呂志、高松寺遺跡は金子昭彦・松川由次、上駒板遺跡は岩測計・菊池榮壽・布谷義彦が担当した。
6. 執筆・編集でⅠ調査に至る経過は中川重紀、Ⅱ遺跡の環境の1遺跡の位置は鳥居達人、2周辺の遺跡は松川由次、その他は岩測計・鳥居達人・金子昭彦が執筆・編集した。
7. 航空写真・平面実測・分析・鑑定および鑑定業務は次の方々に依頼した。(敬称略)

	狼沢Ⅱ	高松寺	上駒板
航空写真	東邦航空株式会社	東邦航空株式会社	
基準点測量	慶長測量株式会社	株式会社協進測量設計	株式会社協進測量設計
石質鑑定	花崗岩研究会	花崗岩研究会	花崗岩研究会
鉄製品の保存処理		岩手県立博物館	
写真測量		(株)シン技術コンサル	

8. 本報告書挿図中に使用した土色表記は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」4版1990年を使用した。
9. 調査および本報告書で使用した地図は、国土地理院発行「花巻」5万分の1の地形図、また日本道路公団・北上工事事務所所有の2千分の1の地形図・路線図である。
10. 野外調査や整理・報告書の作成には次の方々の協力指導をいただいた。
《狼沢Ⅱ》 佐藤 勝・藤井 敏明 (花巻市教育委員会)
《高松寺》 佐藤 勝・藤井 敏明 (花巻市教育委員会)・高橋龍三郎 (早稲田大学)
中村良幸 (大迫町教育委員会)・熊谷常正 (盛岡大学)
稲野裕介 (北上市埋蔵文化財センター)・齋藤邦雄 (岩手県教育委員会文化課)
小林克 (文化庁)・菅谷通保 (財)長生郡市文化財センター)・小林圭一 (財)山形県埋蔵文化財センター)
《上駒板》 佐藤勝・藤井敏明 (花巻市教育委員会)
11. 野外調査の作業には地元花巻市・北上市の方々からご協力をいただいた。
12. 発掘調査による出土品および記録資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序
例言

〔本文〕

I 調査に至る経過	3	2 立地と環境	91
II 遺跡の環境	4	3 調査・整理の方法と経過	96
1 遺跡の位置と地形	4	4 遺構	98
2 周辺の遺跡	5	5 遺物	112
III 狼沢Ⅱ遺跡	13	6 考察	122
1 遺跡の立地	15	7 まとめ	124
2 基本土層	15	V 上駒板遺跡	181
3 調査と整理の方法	17	1 遺跡の立地	183
4 検出遺構と出土遺物	21	2 遺跡の基本土層	183
5 遺構外出土遺物	55	3 調査と整理の方法	186
6 まとめ	61	4 検出された遺構	188
IV 高松寺遺跡	89	5 出土遺物	196
1 調査の目的と結果の概要	91	6 まとめ	202

〔図版〕

第1図 岩手県全図	1	第4図 周辺の遺跡図	7・8
第2図 遺跡位置図	2	周辺の遺跡分布一覧表	9・10
第3図 地形分類図	4		

狼沢Ⅱ遺跡

第1図 基本層序模式図	15	第16図 RD07～RD12	38
第2図 周辺の地形図	16	第17図 RD13～RD17	40
第3図 グリッド配置図	18	第18図 RD18～RD21	41
第4図 遺構配置図	19・20	第19図 RD22・カマド状土坑	44
第5図 陥し穴	23	第20図 遺構内(土坑)出土遺物	45
第6図 RA01 竪穴住居跡	25	第21図 PP01～PP39	47
第7図 RA01 竪穴住居跡カマド	26	第22図 PP52～PP79	48
第8図 RA02 竪穴住居跡	28	第23図 溝跡平面図	52
第9図 RA02 竪穴住居跡カマド	29	第24図 溝跡断面図	53
第10図 RA01 出土土器	30	第25図 掘立柱建物跡	54
第11図 RA01出土土器・石器 RA02出土土器	31	第26図 遺構外出土遺物(1)土器	56
第12図 RA02 出土土器	32	第27図 遺構外出土遺物(2)石器	57
第13図 RA02 出土土器	33	第28図 遺構外出土遺物(3)石器	58
第14図 RA02 出土土器・石器	34	第29図 遺構外出土遺物(4)石器・古銭	59
第15図 RD01～RD06	36		

〔表〕

表1 柱穴観察表	49	表3 遺構外石器その他観察表	60
表2 縄文土器観察表	56		

〔写真図版〕

写真図版 1 空中写真	67		
写真図版 2 調査前状況・基本土層	68	写真図版13 P P 0 1 ・ 0 4 ・ 0 6 ・ 2 6	79
写真図版 3 陥し穴	69	写真図版14 柱穴集中区・5 2 ・ 5 3 ・	
写真図版 4 R A 0 1	70	5 4 ・ 5 5	80
写真図版 5 R A 0 1 カマド・遺物出土状況	71	写真図版15 R G 0 1 ・ 0 2 ・ 0 3 ・ 0 4	81
写真図版 6 R A 0 2	72	写真図版16 R G 0 1 ・ 0 6 ・ 0 7 ・ 0 8 ・ 0 9	82
写真図版 7 R A 0 2 カマド・柱穴等	73	写真図版17 溝跡集中区・掘立柱建物跡	83
写真図版 8 R D 0 1 ・ 0 2 ・ 0 4 ・ 0 7	74	写真図版18 遺構内出土土器	84
写真図版 9 R D 0 5 ・ 0 6 ・ 0 8 ・ 1 0	75	写真図版19 遺構内外出土土器	85
写真図版10 R D 1 1 ・ 1 2 ・ 1 3 ・ 1 5	76	写真図版20 遺構内外出土土器	86
写真図版11 R D 1 6 ・ 1 7 ・ 1 8 ・ 1 9	77	写真図版21 遺構外出土石器・陶器・古銭	87
写真図版12 R D 2 0 ・ 2 1 ・ 2 3	78		

高松寺遺跡

第 1 図 遺跡の位置	92	第18図 縄文・弥生土器(5)	129
第 2 図 周辺の地形と調査範囲	93・94	第19図 縄文・弥生土器(6)	130
第 3 図 遺構全体図	99・100	第20図 縄文・弥生土器(7)	131
第 4 図 竪穴住居跡(1)	101	第21図 縄文・弥生土器(8)	132
第 5 図 竪穴住居跡(2)	102	第22図 縄文・弥生土器(9)	133
第 6 図 A区地形測量図	105・106	第23図 縄文・弥生土器(10)	134
第 7 図 礎石建物跡	107	第24図 縄文・弥生土器(11)	135
第 8 図 土塁・平場と参道跡(1)	108	第25図 縄文・弥生土器(12)	136
第 9 図 土塁・平場と参道跡(2)	109	第26図 縄文・弥生土器(13)	137
第10図 溝	113	第27図 土師器	138
第11図 沢跡捨て場	114	第28図 土偶、鉄製品、古銭	139
第12図 有機物質包含層	115	第29図 石器(1)	140
第13図 遺構内出土遺物	116	第30図 石器(2)	141
第14図 縄文・弥生土器(1)	125	第31図 石器(3)	142
第15図 縄文・弥生土器(2)	126	第32図 石器(4)	143
第16図 縄文・弥生土器(3)	127	第33図 石器(5)	144
第17図 縄文・弥生土器(4)	128		

〔図版〕

〔写真図版〕

写真図版 1 遺跡全景	147	写真図版11 礎石建物跡(3)・参道跡	157
写真図版 2 調査区全景(1)	148	写真図版12 土塁、東側斜面断面	158
写真図版 3 調査区全景(2)	149	写真図版13 参道跡断面	159
写真図版 4 調査前風景(1)	150	写真図版14 平場断面・高松寺跡古碑	160
写真図版 5 調査前風景(2)	151	写真図版15 溝	161
写真図版 6 竪穴住居跡(1)	152	写真図版16 沢跡捨て場(1)	162
写真図版 7 竪穴住居跡(2)	153	写真図版17 沢跡捨て場(2)・有機物質捨て場	
写真図版 8 平場・土塁	154	B区尾根遺物出土状況(1)	163
写真図版 9 礎石建物跡(1)	155	写真図版18 B区尾根遺物出土状況(2)	
写真図版10 礎石建物跡(2)	156	B区平坦面調査状況	164

写真図版19	調査風景ほか	165	写真図版27	縄文・弥生土器(8)・土師器	173
写真図版20	縄文・弥生土器(1)	166	写真図版28	土偶・鉄製品・古銭	174
写真図版21	縄文・弥生土器(2)	167	写真図版29	石器(1)	175
写真図版22	縄文・弥生土器(3)	168	写真図版30	石器(2)	176
写真図版23	縄文・弥生土器(4)	169	写真図版31	石器(3)	177
写真図版24	縄文・弥生土器(5)	170	写真図版32	石器(4)	178
写真図版25	縄文・弥生土器(6)	171	写真図版33	石器(5)	179
写真図版26	縄文・弥生土器(7)	172	写真図版33	石器(6)	180

上駒板遺跡

第1図	基本土層柱状図	183
第2図	遺跡周辺地形図	184
第3図	遺構配置図	185
第4図	土坑(1)	189
第5図	土坑(2)・焼土遺構・陥し穴状遺構	191
第6図	溝跡	192
第7図	柱穴状小土坑群(1)	194

〔図版〕

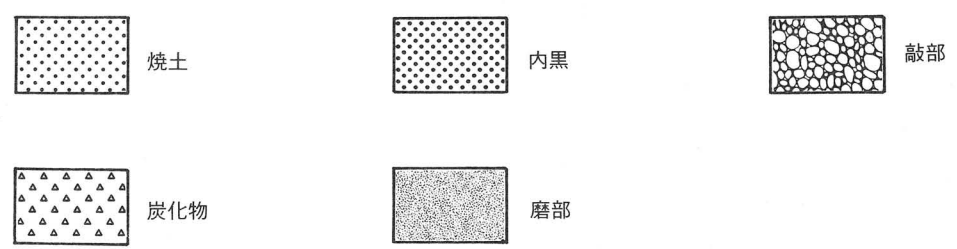
第8図	柱穴状小土坑群(2)	195
第9図	出土遺物(1)遺構内	197
第10図	出土遺物(2)遺構外土器	198
第11図	出土遺物(3)遺構外土器・石器	199
第12図	出土遺物(4)遺構外石器・石製品	200

〔表〕

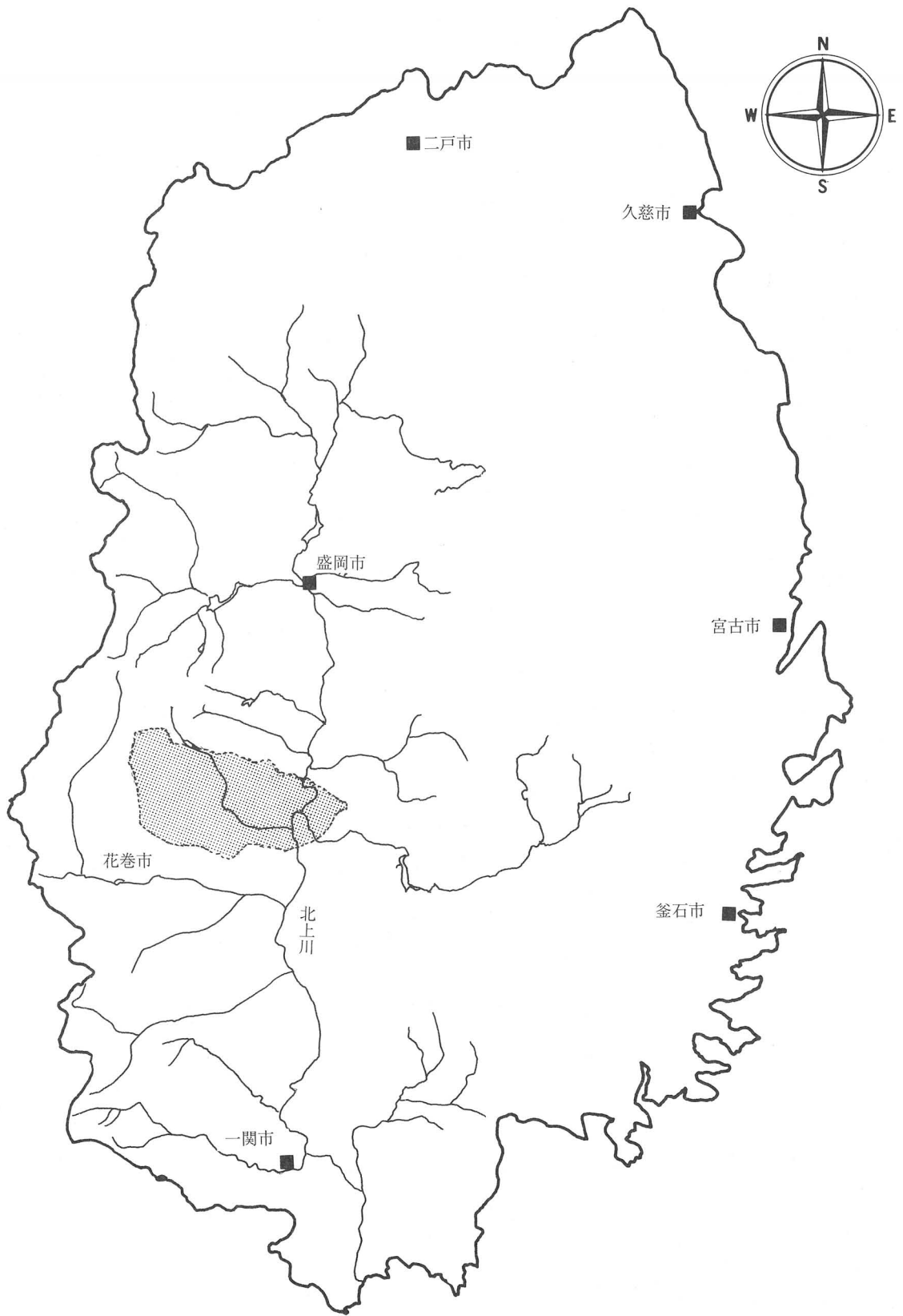
表1	柱穴状小土坑観察表	193・194	表4	石器観察表	201
表2	土器観察表 縄文土器	201	表5	石製品観察表	201
表3	土器観察表 土師器・須恵器	201			

〔写真図版〕

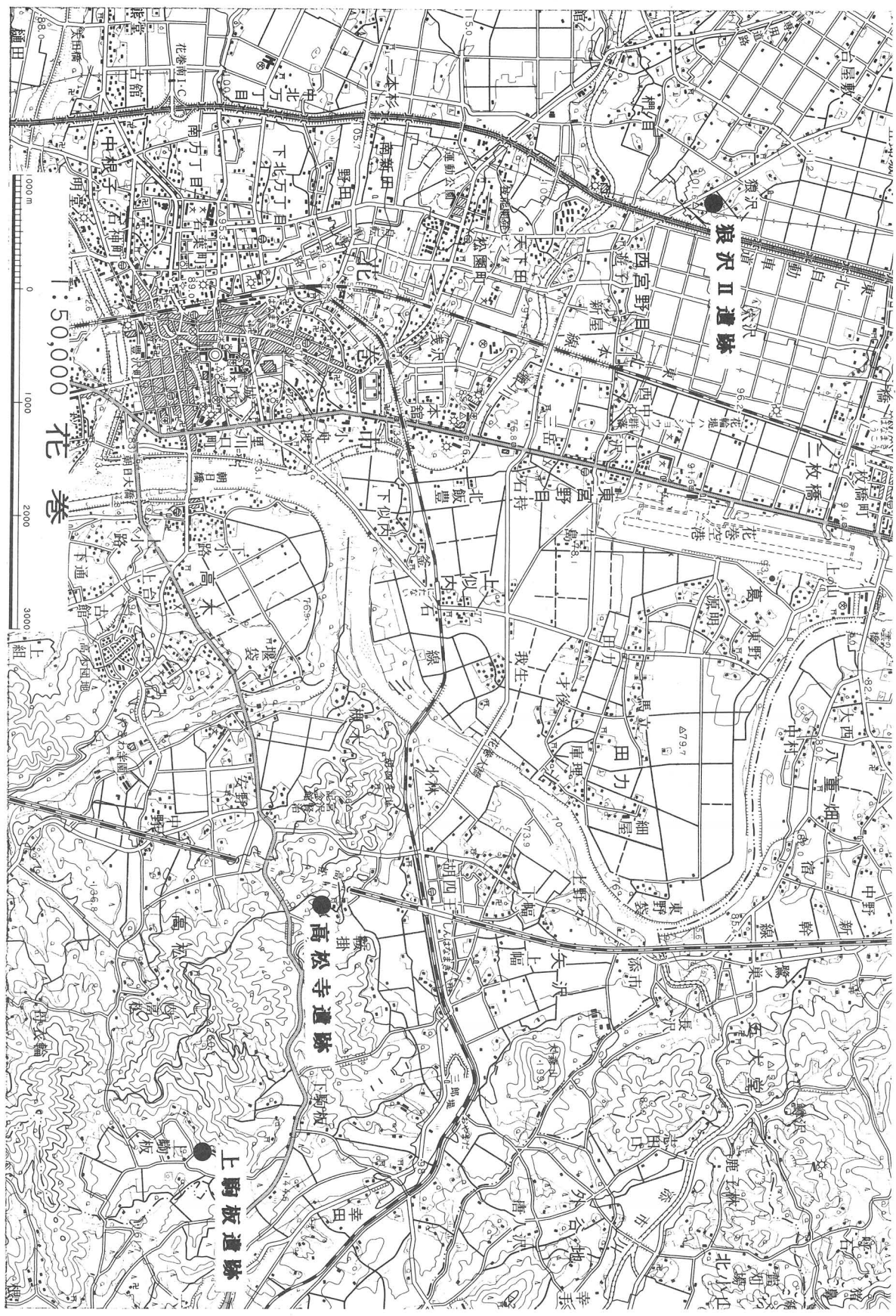
写真図版1	遺跡遠景・近景	205	写真図版6	柱穴状小土坑群	210
写真図版2	調査区近景・作業風景	206	写真図版7	出土遺物(1)	211
写真図版3	土坑(1)	207	写真図版8	出土遺物(2)	212
写真図版4	土坑(2)・焼土遺構・陥し穴状遺構	208	写真図版9	出土遺物(3)	213
写真図版5	溝跡	209			



実測凡例図 (合冊分)



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

狼沢Ⅱ、高松寺、上駒板遺跡は「東北横断自動車道釜石秋田線の建設工事」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

1. 事業概要および沿革

東北横断自動車道釜石秋田線は、東北地方を縦に貫く大動脈である東北縦断自動車道に対し、これを交差する形で東北地方を横に伸びる高速自動車国道である。

当区間は、秋田自動車道の太平洋沿岸地域への延伸区間の一部であり、この区間を供用することにより北上山地沿いに位置する市町村は産業や観光等の活性化が図られる。さらに沿岸部に対する高速交通サービスの拡大等、県内高速交通体系を形成する上で要の区間となり、産業文化の発展に果たす役割は大きい。なお、当区間の延伸釜石で三陸縦貫自動車道とネットワークが予定される計画となっており当路線の整備効果は大きなものがある。

2. 路線概要

当路線は釜石を起点とし東北縦貫自動車道を経由して秋田に至る路線であり、東北縦貫道から秋田市までの間は秋田自動車道として既に供用している。

当該区間は、東和ICを起点とし、一般国道283号線に沿って東和町、花巻市と進み、JR東北新幹線、JR釜石線および一級河川北上川を横過した後、花巻東ICで一般国道4号花巻東バイパスおよび県道花巻空港アクセス線と連結する。

さらに、一級河川瀬川に沿って西進し、一般国道4号線およびJR東北本線を横過し、花巻JCTで東北縦貫自動車道と連結する区間で、東北縦貫自動車道から太平洋沿岸地域への延伸する区間であるとともに、花巻空港と接続して陸・空の交通体系を形成し、本地域を含めた広範囲な地域における経済・産業・文化等の発展に寄与するものである。

3. 調査に至る経過

平成9年9月18日付東北支北工第695号岩手県教育委員会委員長宛「平成10年度以降における埋蔵文化財関連開発事業計画」の回答書を提出し、平成9年10月17日付け東北支北工第745号により、岩手県教育委員会事務局に「東北横断自動車道釜石秋田線（東和～花巻間）の建設に伴う埋蔵文化財試掘について」（依頼）し、岩手県教育委員会事務局文化課は狼沢Ⅱ遺跡平成9年11月25・26日、似内遺跡（平成12年以降の報告遺跡）12月5日、高松寺遺跡平成9年12月9・11日、上駒板遺跡平成9年12月22日および平成10年2月2・3日で調査した結果、平成10年1月27日付け文教第898号により上記の区間に対し調査対象（範囲および調査）総面積30,700㎡と決定した。それを受け、当公団と岩手県教育委員会事務局文化課と（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと平成9年12月22日に4遺跡の現地調査をし、その後（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとの工事工程および発掘調査工程等の打合せを重ね、平成10年4月からの埋蔵文化財発掘調査を確認した。

そして狼沢Ⅱ遺跡は平成10年4月13日～7月15日、高松寺遺跡は平成10年4月13日～8月7日、上駒板遺跡は8月6日～10月1日まで発掘調査された。

II 遺跡の環境

1 遺跡の位置と地形

狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡のある岩手県花巻市は、県の中央部やや南西より、北上盆地の中央に位置する。北は岩手郡雫石町・稗貫郡石鳥谷町、東是和賀郡東和町、南は同郡和賀町・江釣子村・北上市、西は沢内村に接し、当市域の東方を南流する北上川の中流域に当たる。

市街地は北上川と豊沢川の合流付近に広がっている。城下町で、その中心となる花巻城は古くは鳥谷ヶ崎城といい稗貫氏の居城であった。明治8年、城は破却され、現在は市役所・市民体育館などがある。

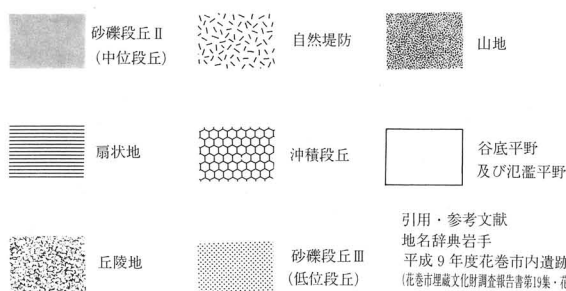
市域を縦断する主な交通路には、北上川東岸を走るJR東北新幹線、西岸の同東北本線・国道4号線・東北自動車道などがあり、東北本線花巻駅からJR釜石線が東方に分岐、同線の南を平行して花巻―釜石を結ぶ国道283号線が、また花巻市街から豊沢川に沿って西方に主要地方道花巻―大曲線が走る。

地形的には北上川東部は北上高地の西端に当たり、早池峰山南面を水源とする猿ヶ石川およびその支流によって開析された段丘群・沖積地と胡四王山で代表される低位山地である。

一方西部は、奥羽山脈に属する標高600～900mの山地で、北上川支流の諸河川によって解析された低位段丘・沖積地で構成される。北部を南東流する台川・鍋割川は小瀬川付近で合流し瀬川となり同川や雫石町・沢内村境の山地を水源となる支流を集めた豊沢川が北上川右岸に注ぐ。

地質的には東側の北上山系には泥岩およびチャートよりなる古生代二畳期の地層や中生代の花崗岩類、斑レイ岩類、蛇紋岩類、さらに中新生の安山岩類と鮮新生の炭層をはさむ砂岩、頁岩層が分布している。

一方西側の奥羽山系には主に新第三紀中新世グリーンタフ活動による安山岩質～流紋岩質岩が砂岩や礫岩・頁岩を伴い分布するほか更新生や第四紀の岩盤層が分布する。



2. 周辺の遺跡

平成10年4月現在の文化財包蔵地として登録された遺跡は、石鳥谷町内185ヶ所、花巻市内267ヶ所、北上市内412ヶ所、東和町内129ヶ所を数える。(岩手県教育委員会まとめ①②)。ただし東和町に関しては、県教委登録が76ヶ所、町教委登録が53ヶ所(④)

第4図では狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板の各遺跡を中心に、時代や地理的環境を勘案して周辺86遺跡の分布図を⑨ページには分布一覧表を作成した。以下3遺跡と関連の想定できる遺跡を中心に、周辺の遺跡について時代順に述べる。

周辺にある縄文時代の遺跡について見てみると、ほとんどが散布地だが、特に猿ヶ石川の段丘と北上山地の谷底平野部を中心に遺跡が集中しているのがわかる。

久田野Ⅱ遺跡(39=分布図・一覧表の遺跡番号、⑩=参考文献の番号。以下同じ)は猿ヶ石川左岸の河岸段丘上に位置し、20棟以上の竪穴住居跡(大型住居を含む)や広場を有する市内最大級の縄文時代中期集落跡である。遺跡整備を目的とした調査は1993年から継続して行われてきており、全容はまだ不明である。

川を挟んだ段丘上にある中野D遺跡(41-③※「高松遺跡」から名称を変更)からは、遺物包含層が見つかった。大洞A式土器を主体とし、住居跡ないし集落跡に伴う雑物廃棄施設の痕跡であると考えられる。しかし、土偶やミニチュア土器などの遺物も出土していることから、祭祀遺構である可能性もある。

西流していた猿ヶ石川が、北に流路を変えるあたりの段丘上に、横欠遺跡(76-⑫)がある。ここからは、19棟の竪穴住居跡を有する大木8b~10式期の集落跡が発掘されている。遺物として早期末葉・中期後葉・晩期末葉の土器も出土している。また、高畑遺跡(前期集落跡)(78)や、臥牛遺跡(中・後・晩期散布地)(75)等に隣接していることから、猿ヶ石川に沿って長期に亘る活動の場があったことが想定できる。

北上川支流の添市川段丘上では、東北新幹線建設関連で高畑遺跡(大木10式期)(5-④⑬)と、河川改良事業関連で安堵屋敷遺跡(大洞C式)(4-⑮)の発掘調査が行われた。高畑遺跡では複式炉を持った竪穴住居跡が7棟、安堵屋敷遺跡では竪穴住居跡2棟と埋設炉4基の遺構が検出されている。

他に、豊沢川河岸段丘に位置する万丁目遺跡(54-⑯)では土器埋設炉3基(1基は中期末葉、あとの2基の時期は不明)、石囲炉2基(1基は中期末葉から後期初頭、あとの1基は不明)が検出されている。また、北上川の氾濫平野にある石持Ⅰ遺跡(23)では、1998年の調査により県内最大級180基前後の陥し穴が見つかり、狩り場であったと思われる。調査は継続中であるため、最終的には200基を超えるものと見られている。

この石持Ⅰ遺跡から、ほど近いところに似内遺跡(24)がある。ここでも30基近い陥し穴が見つかり、北上川氾濫平野で、広く狩猟が行われていたのであろう。

弥生時代の遺跡は少なく、特に7遺跡が猿ヶ石川の低位段丘上に集中している。このうち谷起島式土器が、高松Ⅱ(33-⑦)・安野Ⅱ(37-⑦)・成田(70-⑬)の各遺跡から出土している。ほかに中野D遺跡から中期と特定される土器が、また添市遺跡(19)は、高松寺遺跡の北方約3kmの北上川低位段丘上に位置し、後期の弥生土器が見つかり、

さらに4km北の稗貫川の下位河岸段丘上に、大明神遺跡(図中にはない-③)がある。ここでは南北12m、東西9mの遺物含有区域が発見され、生活廃棄物の処理施設と見られている。包含層中の遺物942点のうち、そのほとんどが土器片で、谷起島式土器に比定される。

遺跡の分布状況から、猿ヶ石川や北上川の低位段丘上を中心に弥生時代の集落が形成されていたことも想定できる。しかし何れの遺跡も散布地であって、弥生時代の遺構はまだ確認されておらず、今後の発掘調査

を待たれるものである。

古代になると、集落が北上川や豊沢川の河岸段丘に数多く形成されるようになる。狼沢Ⅱ遺跡は、瀬川の中位段丘上に形成された平安時代の集落跡である。そのおよそ4 km南方の花巻南インター付近、豊沢川の沖積段丘上には7～9世紀に作られた熊堂古墳群(50-⑨⑱)がある。藩政時代の文献(『邦内郷村志』・『和賀稗貫郷村志』)に記され、出土品は藩主に献上されている。玉類や方頭太刀、蕨手刀、鍔帯金具、和同開珎などの副葬品が出土している。現在は壊滅しているが、50～60基の古墳があったと言われており、近辺に大規模な集落が存在していたと予想される。

また、ほぼ同時期の遺跡として古館Ⅱ遺跡(53-⑰)がある。1985年の発掘調査では、古代の竪穴住居跡29棟(奈良時代15棟、平安時代8棟、時期不確定6棟)、遺物は紡錘車や土器類が多数出土している。近接する万丁目遺跡(54-⑯)では、奈良時代が3棟、平安時代が2棟の計5棟の竪穴住居跡が検出されている。前出の石持Ⅰ遺跡や似内遺跡では平安時代の集落跡が見ついている。特に似内遺跡では、県内最大級の竪穴住居跡(隅丸方形8.9×8.3m)を含む、集落跡が確認されている。この集落では漁撈を行っていたのであろうか、1棟の住居の床面から300点を越える土錐が出土している。また、1997年に調査を行った庫理遺跡(平安時代)(17)の竪穴住居跡からは、東日本ではほとんど出土例がない〔置きカマド〕が出土している。これには水鳥が描かれており、線刻の施してあるものは全国的にも例を見ない。

高松寺遺跡では、沢づたいの緩斜面から平安時代の竪穴住居跡1棟を検出しているが、近接する矢沢八幡遺跡(30-③)でも、東北新幹線建設に伴う緊急発掘調査(1976年)で平安時代の竪穴住居跡3棟を検出している。また、胡四王山館遺跡(29-⑲)の館跡に関する実年代は不明だが、南西斜面から20棟を越える平安時代の住居跡が見ついている。この時期に住居を編んだのが平地だけではないことを窺わせている。

近世の遺跡について見てみると、矢沢八幡遺跡から掘立柱建物跡4棟と溝跡1条が検出されている。花巻市の中心部南には19世紀の窯跡である桜町窯跡(64-⑤)があり、日用雑器としての陶磁器が焼成されていたという報告がある。

※文及び表中の①～⑱は参考文献の番号、括弧内には一覧表・分布図の番号を付してある。



第4図 周辺の遺跡 (合冊分)

周辺の遺跡分布一覧表

〈稗貫郡石鳥谷町〉

番号	文献番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	①②	荒野	散布地	土師器	字八重畑
2	①②	宿	集落跡	縄文土器、土師器	字八重畑
3	①②	蛇蛭蛆	散布地	土師器	字五大堂
4	①②⑮	安塔屋敷	散布地	縄文土器、土師器	字五大堂
5	①②④⑬	高畑	集落跡	縄文土器	字五大堂
6	①②	鱒沢Ⅰ	散布地	縄文土器	字五大堂
7	①②	鱒沢Ⅱ	散布地	縄文土器	字五大堂

〈花巻市〉

8	①②	狼沢Ⅰ	散布地	土師器	字狼沢
9	①②⑥	太子堂	散布地	縄文土器、石器	字太子堂
10	①②⑥	小瀬川	集落跡	陥し穴状遺構、竪穴状遺構、石器、縄文土器（中期）	字小瀬川
11	①②⑥	幅	集落跡	溝状遺構、竪穴状遺構、石器、縄文土器（中期）、土師器、須恵器	字銀名
12	①②⑥	高円万寺	集落跡	堀、土壘、住居栗石、砥石片、塚、土師器、須恵器、有孔刀子	字高円万寺
13	①②⑦	上ノ山館	城館跡・散布地	堀、縄文土器（前・中期）石器、土師器、須恵器	字上ノ山
14	①②⑦	宮野目方八丁	城館跡	竪穴住居跡、土師器、須恵器、鉄器、砥石、二重土壘、堀	宮野目方八丁
15	①②⑦	源明Ⅰ	散布地	須恵器	葛
16	①②	葛	散布地	縄文土器、土師器	田力
17	①②⑦	庫理	居住域	縄文土器、土師器	田力
18	①②⑦	東野袋	散布地	土師器	田力
19	①②	添市	散布地	縄文土器（前？中・晩期）弥生土器（後期）、石器	字添市
20	①②⑦	矢沢古堂	集落跡	土師器、須恵器、鉄製鋏	字古堂
21	①②⑦	上野々	散布地	石斧、石器	字沢
22	①②⑦	上幅	集落跡	縄文土器、石器、竪穴住居	字上幅
23	①②⑦	石持Ⅰ	散布地	土師器	字石持
24	①②⑦	似内	集落跡	竪穴住居跡、土師器、須恵器	字上似内
25	①②⑦	下似内	散布地	土師器、須恵器	字下似内
26	①②⑦	槻ノ木Ⅰ	散布地	縄文土器（晩期）、弥生土器	字槻ノ木
27	①②⑦	槻ノ木Ⅱ	散布地	縄文土器、石器	字槻ノ木
28	①②⑦	槻ノ木Ⅲ	散布地	縄文土器、石器、土師器、須恵器	字槻ノ木
29	①②⑦⑱	胡四王山館	城館跡	空壕、竪穴状遺構、縄文土器、土師器、須恵器、土製鞆口、砥石、古銭、二重空堀	字矢沢
30	①②③⑦	矢沢八幡（古館・矢沢館）	集落跡・城館跡	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土師器、須恵器、陶磁器、古銭	字八幡
31	①②⑦	経塚森	経塚	土師器、塚2基以上	高松
32	①②⑦	寺場	集落跡	土師器、須恵器、竪穴住居跡	高松
33	①②⑦	高松Ⅱ	散布地	縄文土器（晩期）、土師器、弥生土器（谷起島）	高松
34	①②⑦	高松Ⅲ	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	高松
35	①②⑤	堰袋Ⅰ	散布地	縄文土器石器、土師器	字堰袋
36	①②⑦	安野Ⅰ	集落跡	縄文土器（後期）	字安野
37	①②⑦	安野Ⅱ	集落跡	弥生土器（谷起島）、石斧	字安野
38	①②⑦	中野B	散布地	縄文土器（後期）、弥生土器、石器	字中野
39	①②⑤⑩⑪	久田野Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中期）	高松
40	①②⑦⑩	中野C	集落跡	焼土、土坑、石器、土製耳栓、縄文土器（大木7b・後期）、石鏃、土師器	字中野
41	①②③⑦	中野D	散布地	縄文土器（前・中・大洞A'）、弥生土器（中期）、ピット、石器、土偶片、土師器	字中野

42	①②⑦	高松山経塚	経塚・廃寺跡	経塚、竪穴状遺構、白磁瓶、常滑壺	高松
43	①②⑦	長根坂	散布地	縄文土器（晩期）、石器	字平良木
44	①②⑦	明戸Ⅰ	集落跡	縄文土器（後期）、石器	字平良木
45	①②⑦	明戸Ⅱ	集落跡	縄文土器、石器、土師器	字平良木
46	①②⑤	荒屋敷	集落跡	焼土、土師器	字荒屋敷
47	①②⑥	鬼屋敷	集落跡	土師器	字和田
48	①②⑥	道願	古墳	切子玉、ガラス玉	字道願
49	①②⑥	樋口	集落跡	土師器（内黒処理）	字樋口
50	①②⑥⑨⑬	熊堂古墳群	古墳群	方頭太刀、蕨手刀、刀小、玉類、古銭、土師器、須恵器、青磁碗、縄文土器（後期）、石器ほか	字熊堂
51	①②⑥	魔王塚	墳墓（?）	土師器（糸切底）、須恵器	字欠端
52	①②⑥	米倉	集落跡	土師器、須恵器	字米倉
53	①②⑥⑰	古館Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡、柱穴群、井戸跡墓壇、土坑、土師器、須恵器、土製品、鉄滓、刀子ほか	字古館
54	①②⑥⑱	万丁目	集落跡	竪穴住居跡、炉、掘立柱建物跡、縄文土器、石器、土師器、須恵器	中根子
55	①②⑤	種市	集落跡	土師器、須恵器	中根子
56	①②⑥	古館Ⅲ	集落跡	土師器、須恵器	字古館
57	①②⑤	古館Ⅳ	集落跡	縄文土器、土師器	字古館
58	①②⑤	石神	集落跡	縄文土器（中期）、土師器、須恵器	石神町
59	①②⑧⑪	杉ノ目	集落跡	縄文土器、石器、土師器	字坂井
60	①②⑧	施田Ⅱ	集落跡	土師器、土玉	字施田
61	①②⑧	下坂井Ⅰ	集落跡	石器、土師器、須恵器	字坂井
62	①②⑤	諏訪Ⅱ	集落跡	竪穴住居跡、方形状落ち込み、縄文土器（晩期）、石器、土師器、須恵器	諏訪
63	①②⑤	不動Ⅰ	集落跡	縄文土器（後・晩期）、石器	不動
64	①②⑤	桜町窯跡	近世窯跡	陶磁器、瓦片	桜町
65	①②⑤	沖	散布地	土師器	十二丁目
66	①②⑧	堰六	集落跡	土師器、須恵器	北笹間
67	①②⑧	内野	集落跡	竪穴住居跡、溝状遺構、井戸竪穴状遺構	字内野

<北上市>

68	①②	唐戸崎Ⅲ	散布地	土師器	字唐戸崎
69	①②	月館	散布地		飯豊町
70	①②⑬	成田	集落跡	竪穴住居跡、縄文土器（中・晩期）、弥生土器（谷起島式・後期）	字成田
71	①②	下成田	散布地	縄文土器、須恵器	字成田
72	①②	堀ノ内	散布地	土師器	字大木
73	①②	中宿	散布地	縄文土器、石皿、石斧	字更木
74	①②	大竹廃寺	平安寺院跡	土師器、須恵器	字大竹
75	①②	臥牛	散布地	縄文土器（中・後・晩期）、土偶、須恵器	字臥牛
76	①②⑱	横欠	集落跡	縄文土器、石器、竪穴住居跡	字臥牛
77	①②	長根	散布地	縄文土器、石器	字臥牛
78	①②	高畑	集落跡	縄文土器（前期）	字臥牛
79	①②	坊主	散布地	縄文土器、竪穴住居跡、石器	字臥牛

<和賀郡東和町>

80	①②⑭	赤坂Ⅰ	散布地	縄文土器（後期）	安俵
81	①②⑭	高八卦	散布地	縄文土器（中期）、石鏃	安俵
82	①②⑭	矢崎	散布地	縄文土器（晩期）、石器、土師器	安俵
83	⑭	北成島A	散布地	縄文土器（晩期）	北成島
84	①②	長根	散布地	縄文土器（中・晩期?）、炉跡	字小通
85	①②	成嶋寺	散布地	縄文土器（中・晩期?）、石鏃	北成島
86	⑭	毘沙門D-4Ⅰ	散布地	縄文土器（晩期）	北成島

<参考文献>

- ①岩手県教育委員会 1998 「岩手県遺跡基本図」
- ② 〃 1998 「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」
- ③ 〃 1979 『岩手県文化財調査報告書第34集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- ④ 〃 1980 『岩手県文化財調査報告書第49集 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
- ⑤花巻市教育委員会 1990 『花巻市内遺跡詳細分布調査報告書〈花巻地区〉』
- ⑥ 〃 1991 『 〃 〈湯口地区〉』
- ⑦ 〃 1992 『 〃 〈矢沢地区〉』
- ⑧ 〃 1993 『 〃 〈西南地区〉』
- ⑨ 〃 1989 『花巻市熊堂古墳群』
- ⑩ 〃 1996 『花巻市内発掘調査報告書』
- ⑪ 〃 1998 『 〃 』
- ⑫北上市教育委員会 1980 『横欠遺跡発掘調査概要』
- ⑬ 〃 1991 『成田遺跡Ⅱ』
- ⑭東和町教育委員会 1997 『町内遺跡詳細分布調査報告書』
- ⑮岩手県土木部 1983 『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』
- (財)岩手県埋蔵文化財センター
- ⑯ 〃 1985 『万丁目遺跡発掘調査報告書』
- ⑰ 〃 1985 『古館Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- ⑱ 〃 1985 『岩手の遺跡』
- ⑲江上波夫ほか編著 1958 『館址 東北地方における集落址の研究』 東京大学東洋文化研究所

Ⅲ ^{おおかみさわ} 狼 沢Ⅱ 遺跡

所 在 地 花巻市狼沢8地割
委 託 者 日本道路公団東北支社北上工事事務所
事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線建設工事
発掘調査期間 平成10年4月13日～7月15日
調査対象面積 3,040m²
発掘調査面積 3,040m²
遺跡番号・略号 ME15-1313 OSⅡ-98
調査担当者 鳥居達人・中村比呂志
協力機関 花巻市教育委員会

1. 遺跡の立地と地形

狼沢Ⅱ遺跡は花巻市の北西部花巻市狼沢8地割に位置し、東北自動車道花巻インターチェンジからほぼ南方に2km、東北自動車道下り線沿いから100mほどに西方に離れたところにある。

北緯39度25分、東経141度06分に位置し、南流する台川と西流する瀬川の合流地点に広がる河岸段丘の東端にあり、周囲はよく区画整理された水田が広がり、大型の水路が張り巡らされている。

遺跡の標高は平均で海拔97m前後で小さなうねりをもつが全体的に平坦である。現況は山林で、巨大な杉などの針葉樹がそびえ立つ。近所の住民の話によると、神社があったというのが田などの農地に利用されたことは近來なかったようである。

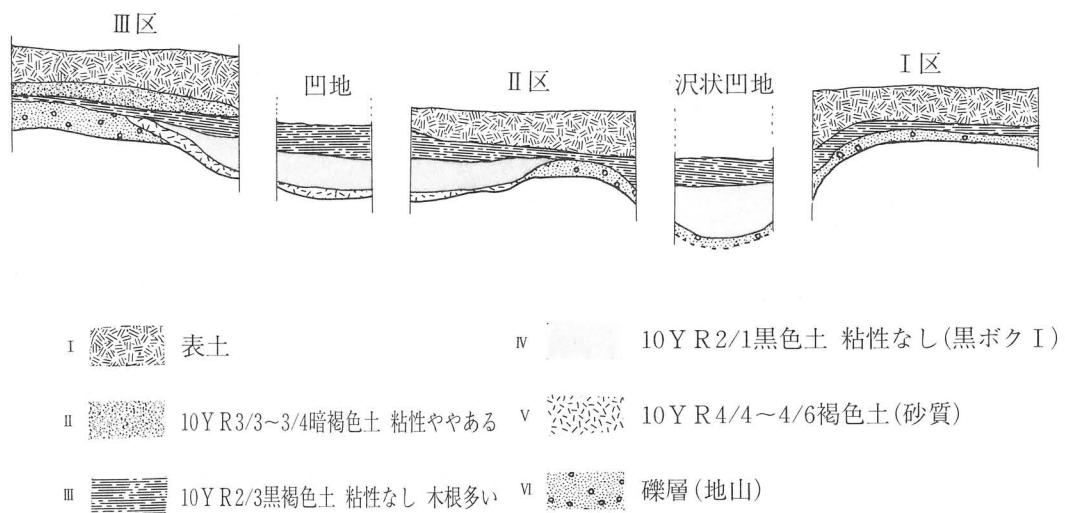
2. 遺跡の基本土層

調査区域を3分割して、その区域の特徴的な相違について述べたい。

調査区南側のⅢ区は調査区全体の中で最も標高が高い区域である。ここでは表土（森林の腐食土）が20cmほど堆積し、その下に暗褐色土が10～30cmほど堆積する。この暗褐色土は縄文時代の石器・土器が出土している遺物含有層である。また北側の落ち込む部分には黒色土が厚く堆積する。それらの下には褐色土が5～10m存在し、もっとも南側の丘状の区域はその下が礫層の地山、中央部のなだらかに落ち込む部分は黄褐色土の砂が堆積している。

調査区中央部Ⅱ区はⅢ区で見られるような暗褐色土の堆積は少ない（10cm程度）。しかし黒褐色土が厚く堆積している区域である。特に沢跡と思われる部分と住居跡が検出された部分、そしてⅢ区側の落ち込んでいる区域で40～50cmと厚い。その下に褐色土（5～6cm）、そして礫層の地山となる。Ⅲ区に見られるような細かい砂粒は見られないが粒の大きな砂が存在している部分が西側に見られる。また沢跡の南側の丘状の区域はⅢ区の南側と同じような層位になっている。

調査区北部Ⅰ区では、黒褐色土が残る区域ではあるが5cm前後と薄い。その下は褐色土がわずかに残るのみで、すぐ礫層の地山となる。特に東側では礫が地表面まで張り出している。



第1図 基本層序模式図



第2図 周辺の地形図

3. 調査と整理の方法

(1) 野外調査

①グリッドの設定

調査区は、最大南北に120m、東西に60m延びる。そこで調査区全体をカバーできるよう西北端に基点を設け、国家座標第X系に乗るようにこれを通る座標北を求めて基準線とした。南北は1～31、東西はa～nと4m単位に分け、グリッドを設定した。調査区が南北に長いために、便宜上北から南に向かって40mづつに分け、それぞれⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区とした。

発掘調査において基準点を2ヵ所設けた。その平面直角座標第X系による成果値と杭高（標高）は以下のようである。

基準点1	X = -64283.760m	Y = 23308.049m	標高 = 95.131m
基準点2	X = -64336.241m	Y = 23302.811m	標高 = 96.100m

②粗掘りと精査

調査区の現況は山林であったが、特に障害になるようなものはなく調査に入ることができた。まずは、調査区全体にトレンチを入れて、土層を確認した。このトレンチは、遺物含有層もしくは検出面の確認のためであり、調査区の土壌堆積状況を確認するものではない。表土が薄く主だった遺物含有層も確認できなかったために、手掘りによる表土の除去と同時に最南端の深堀を実施し土壌堆積状況を確認した。

その後、重機による粗掘りと伴に、南側Ⅲ区からの調査を開始した。

精査は、上方の面から層位毎に掘り下げ、遺構検出を行った。基本的には竪穴住居は4分法、土坑等は2分法による覆土の観察を行ったが、広がりをもつ大型住居や重複関係にある遺構等は適宜ベルトを設定した。

遺構は、土層断面および平面を写真撮影と実測で記録しながら調査した。

遺構・遺物の種別を表す略号は住居跡はRA、土坑はRD、柱穴・柱穴状ピットはPP、溝はRGとし検出順に登録した。その他は略号を使っていない。

遺物の取り上げは、遺構外出土のものはグリッド単位で層位を記入し、遺構内では遺構名と出土層位を記入して取り上げている。

③遺構の記録

断面図の作成は、遺構の上面に水平の水糸を張って実測の基点を設定して行い、レベルの数値をできるだけ変えないよう意識して実測した。平面図の作成では、基本的に地表面に直角座標系の軸線に合わせて東西、南北に各1mの水糸を張って基線とする簡易遣り方による測量法によって実測した。平板による平面図測量も適宜使用した。縮尺については20分の1を原則としたが、竈・焼土の断面図・平面図などは10分の1、溝の平面図は40分の1で実測した。

写真撮影はモノクロ（35mm・6×7cm）、カラーリバーサル（35mm）の3台を用いて、遺構検出時の確認状況、埋土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態と精査の段階毎に撮影を行った。

また遺跡遠景・調査終了全景は航空写真撮影を行った。

(2)整理方法

①遺構図面

遺構図面は、点検後必要に応じて第2原図を作成した。挿図中の縮尺は竪穴住居跡は1/60、カマド・陥し穴・土坑・掘立柱建物跡は1/40を原則としているが、柱穴群の平面図は1/80、断面図は1/40とし、

また溝跡の平面図は1/100、断面図は1/30にしており、任意の縮尺についてはスケールに付してある。
なお使用したスクリーン・トーンの種類は凡例の通りである。

土層注記は基本層位にローマ数字を用い、遺構埋土にはアラビア数字を用いた。

遺構番号は遺構種別毎の検出順に連番としたが、精査過程あるいは整理段階において欠番になったものや略号の変更になったものもある。欠番になったものや変更した遺構は本文で示している。

②遺物

出土した土器・石器・土製品・陶磁器などの遺物は、水洗い・記名の後、出土状況に合わせて遺構内と遺構外に仕分けをし、次いで接合・復元の作業を実施した。そして、写真撮影を行い実測図・拓影図の作成をし、トレースして報告書に掲載した。

遺構内の遺物は復元できた土器を中心にできるだけすべて掲載するように勤めたが、除外したものもある。また平安住居跡埋土の上位に出土した縄文土器片・石器は遺構外として登録してある。

③遺物図版

図版は遺構内出土遺物は遺構順に遺構外出土遺物は種類別に作成して掲載した。挿図中の土器・礫石器は1/3、剥片石器は1/2、陶磁器・古銭は1/2を原則としているが、縄文土器片、土坑出土の礫石器は1/2としており任意の縮尺についてはスケールを付している。

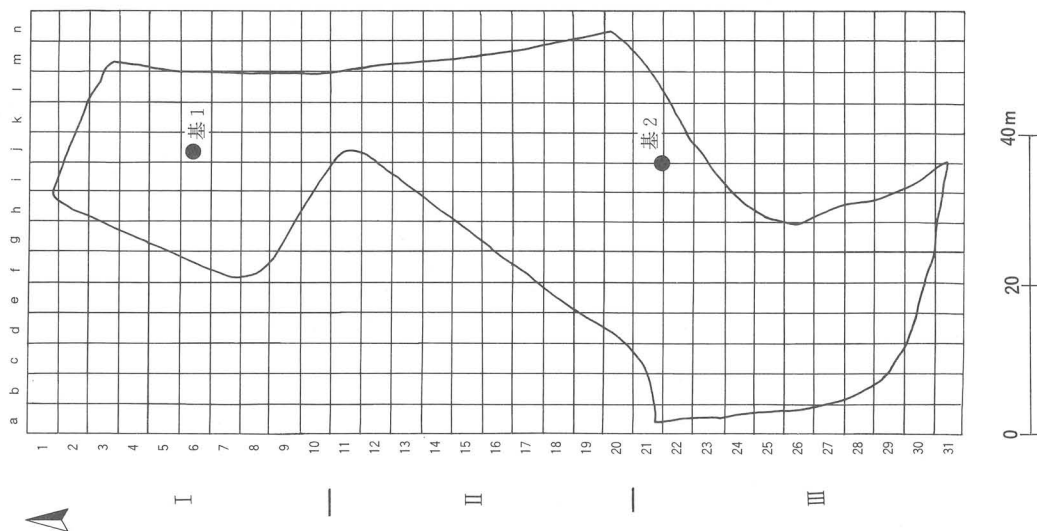
登録した遺物については観察・計測を行い観察表を作成し掲載したが、土器・石器等の観察中の法量の推定値は()、残存地は〈 〉で表示した。

④写真図版

空中写真・遠景は、調査の最終段階での状況であり、完掘状況ではない。

遺構写真は、各遺構の平面・断面を中心に、竪穴住居跡はカマド・遺物出土状況等も合わせて掲載した。各写真の縮尺については不定である。

遺物写真では、土器・礫石器は1/4、縄文土器片・剥片石器・陶磁器は1/2を基本としている。

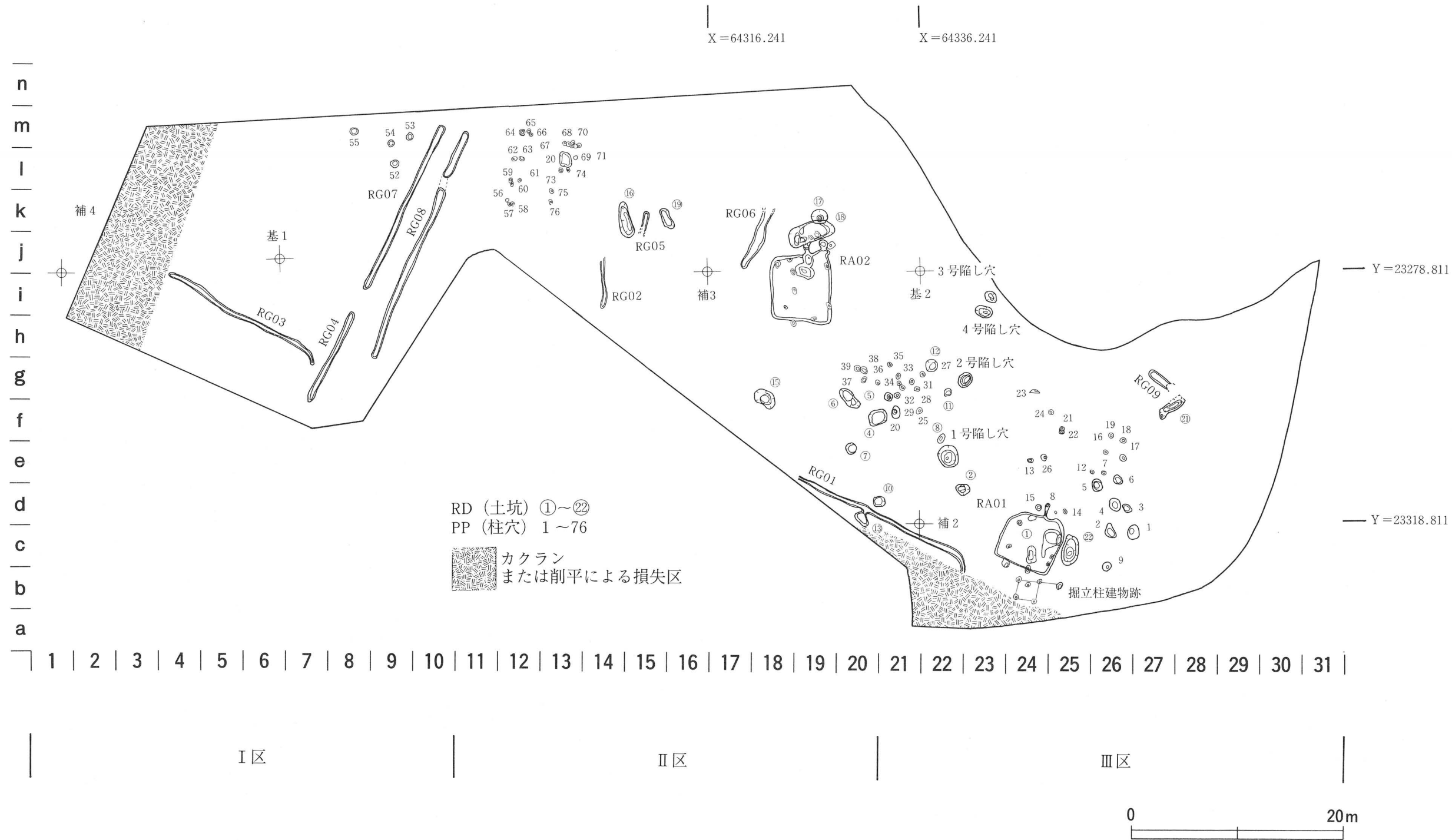


第3図 グリッド配置図



基準点1 X=-64283.760m
Y= 23308.049m 標高=95.131m

基準点2 X=-64336.241m
Y= 23302.811m 標高=96.100m



第4図 遺構配置図

3. 検出遺構と出土遺物

遺構配置図に示した通り、今回の発掘調査で検出された遺構は以下の通りである。

竪穴住居跡 (R A)	2 棟
掘立柱建物跡	1 棟
土坑 (R D)	19基
陥し穴	4 基
柱穴と柱穴状ピット (P P)	61基
溝状遺構 (R G)	9 条

その中で時代を特定できる遺物の出土しているものは竪穴住居跡 2 棟と陥し穴 1 基、土坑 2 基のみでありそれ意外には遺構内の遺物はない。また、遺構外でも遺物が少なく埋土状況などから時代を特定することが困難な遺構が多い。

そこで縄文時代の陥し穴と平安時代の竪穴住居跡を一括して(1)・(2)で述べ、ほかを(3)その他の遺構として取り上げて報告する。

土坑については遺物が出土しているいないに関わらず連番とし本文の中で時代を推測している。柱穴・柱穴状ピットについては、集中している箇所 4 つ (Ⅲ区南、Ⅱ区中央、Ⅰ区東、沢状凹地)に分け、まとめて報告する。

(1) 縄文時代の陥し穴

4 基検出した。それぞれ土坑 (R D) や柱穴 (P P) と登録したものを変更したものである。すべて調査区Ⅲ区の北側で検出した。その中には逆茂木痕が認められた陥し穴と、礫に覆われて認めれないがその規模や配列から陥し穴としたものの 2 種類ある。逆茂木痕は遺構の断面実測が行われ、完掘した後の最終段階での検出であるために平面図へは現場で挿入できたが、断面図はその後付け足して図化したものがあり、その場合は推定線で示した。

1号陥し穴 (図版第 5 図、写真図版 3)

検出当初は土坑 R D 03 として登録したが、精査終了後の駄目押しの段階で底面に逆茂木痕を認めることができたために 1 号陥し穴と変更した。調査区Ⅲ区の北側中央、グリット 22 e に位置する。

規模・形状は開口部径 2 m 15cm × 2 m 5 cm でほとんど真円に近い。上部は全体的になだらかに落ち込むが下部は急激に垂直に落ち込む。底部は 1 m × 75cm で楕円形である。深さは平均 78.9cm と深い。下場中央に直径 12cm、深さ 20cm ほどの逆茂木痕を持つ。埋土は厚い黒褐色土をもち、その下に暗褐色土が存在する自然堆積である。底部の褐色土の下に固くしまった礫層がある。

出土遺物は確認できなかった。

2号陥し穴 (図版第 5 図、写真図版 3・19)

検出当初は R D 14 として登録した。精査の段階で底部の礫を取り除いて確認した際、明確な逆茂木痕は確認されなかったが、その配列と埋土状況から 2 号陥し穴と変更した。調査区Ⅲ区の北側やや東より、グリット 22 g に位置し、1 号陥し穴からは東に約 8 m 離れる。

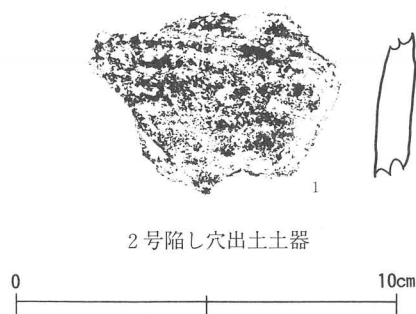
規模・形状は開口部径 1 m 40cm × 1 m 60cm でやや楕円形である。上部でゆるやかに落ち込み、下部で急激に垂直に沈み込む形状は 1 号と酷似する。底部は径 1 m 4 cm × 65cm でだ円形で、深さは平均で 86.7cm で 1 号

よりも深い。

埋土は黒褐色土を中央に持つ自然堆積である。底部近くは砂質の褐色土で、その下に礫を持つのは1号と同じである。

礫の下に明確な逆茂木痕は確認できなかったが痕跡たるくぼみを持つ。

遺物は埋土下位の黒褐色土から土器片1点が出土した。摩滅が激しく地文などは確認できないがハート型？貼付文のはがれたような痕跡から縄文時代前期後葉のものと思われる。



No	器種	出土地点	層位	部位	観察	時期	写真図版
1	深鉢	2号陥し穴	埋土下位	口縁	ハート型(?)貼付文の痕跡 地文摩滅著しい	前期 後葉?	19

3号陥し穴 (図版第5図、写真図版3)

検出当初はP P50として登録した。その配列と埋土状況から3号陥し穴と変更した調査区Ⅲ区の北側東端グリット23 i に位置し、1号陥し穴から東に16m、2号陥し穴から8m離れる。

規模・形状は、開口部1 m30cm×1 mでやや楕円形である。底部は60cm×30cmでひょうたん型を呈す。深さは約50cmで前述の2基よりは浅い。

埋土は黒色土を中心とした自然堆積であるが、暗褐色土と褐色土の堆積がほとんど見られない。下部に礫層を持ち、締まりはよい。しかし逆茂木痕は判然とせず、遺物も出土していない。

4号陥し穴 (図版第5図、写真図版3)

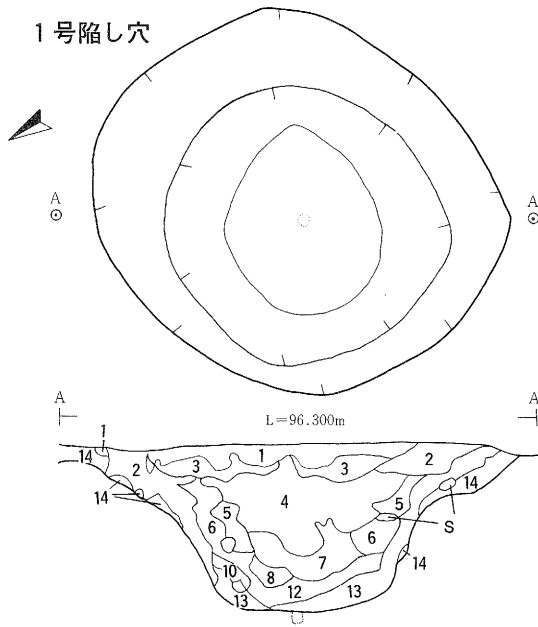
検出当初はP P51と登録したが、駄目押しの段階で底面に逆茂木痕を確認できたことにより4号陥し穴に変更した。グリット23 i に位置し、3号陥し穴の西側に近接する。

規模・形状は、開口部1 m55cm×1 m25cmで楕円形である。3号と同じように急激に落ち込み、底部は1 m×60cmでややひょうたん型をしている。深さは最大76.8cmを計る。

埋土は黒色土を中心とした自然堆積で、下部に暗褐色土を持ち、その下にしまった礫層がある。その礫層の下に逆茂木痕を検出した。深さは5 cm程度である。

遺物は出土していないが、3号と4号上部の黒色土からは、縄文土器が出土している。

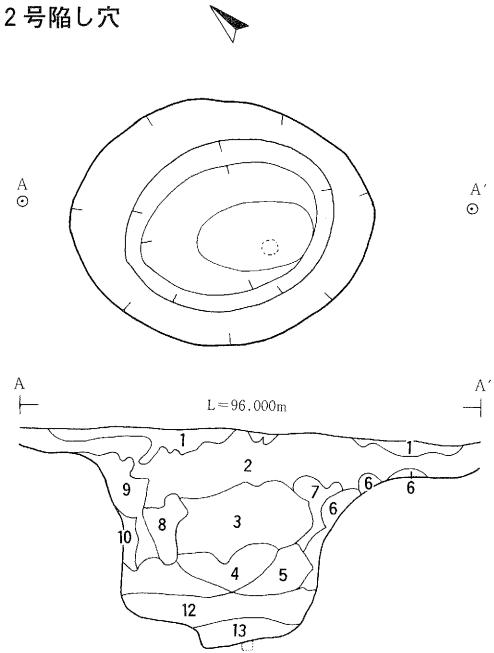
1号陥し穴



1号陥し穴

- | | | | |
|----|--------------|--------|-------------------------|
| 1 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性なし | しまりあり |
| 2 | 10Y R3/3黒褐色土 | 粘性なし | 固くしまる |
| 3 | 10Y R3/3黒褐色土 | 粘性なし | しまりなし 木根含む(3%) |
| 4 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性なし | しまりなし 木根含む(5%) |
| 5 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 6 | 10Y R3/4黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 7 | 10Y R3/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり 顆粒状10Y R5/8混入 |
| 8 | 10Y R3/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり 顆粒状10Y R5/8混入 |
| 9 | 10Y R4/4黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 10 | 10Y R4/4黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりややあり |
| 11 | 10Y R4/6黒褐色土 | 粘性なし | 固くしまる 黄褐色砂土(10Y R5/8)混入 |
| 12 | 10Y R4/6黒褐色土 | 粘性なし | 固くしまる |
| 13 | 10Y R4/6黒褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 14 | 10Y R5/8黒褐色土 | 粘性なし | 固くしまる |

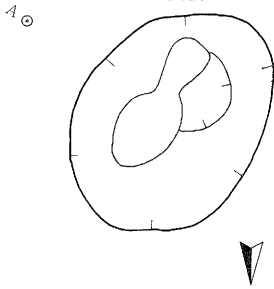
2号陥し穴



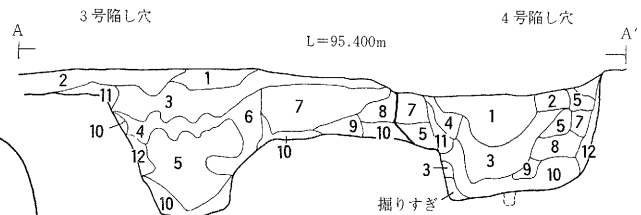
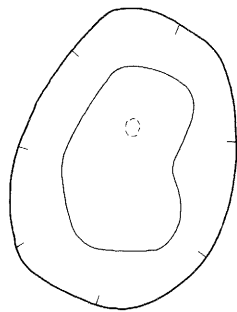
2号陥し穴

- | | | | |
|----|------------------------------|---------|----------------|
| 1 | 10Y R3/1黒褐色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 2 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 3 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 4 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 5 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性あり | しまりややあり |
| 6 | 10Y R4/4褐色土 | 粘性あり | しまりややあり |
| 7 | 10Y R4/4褐色土と10Y R2/1黒色土との混合土 | 粘性あり | しまりなし |
| 8 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 9 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 10 | 10Y R5/8黄褐色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 11 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性ややあり | 固くしまる |
| 12 | 10Y R4/4褐色土 | 粘性なし(砂) | しまりなし 礫(20%)含む |
| 13 | 7.5Y R5/8明褐色土 | 粘性なし(砂) | しまりなし 礫(20%)含む |

3号陥し穴



4号陥し穴



4号陥し穴

- | | | | |
|----|--------------|-----------|---------------------------|
| 1 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 2 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりなし 褐色土(10Y R4/6)含む(5%) |
| 3 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 4 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりややあり 木根含む(50%) |
| 5 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 6 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 7 | 10Y R4/6褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 8 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性なし(砂) | しまりあり |
| 9 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性あり(粘土質) | しまりあり |
| 10 | 10Y R3/4暗褐色土 | 粘性ややあり | 固くしまる |
| 11 | 10Y R5/8黄褐色土 | 粘性なし | しまりあり |
| 12 | 10Y R5/8黄褐色土 | 粘性なし | しまりなし |

3号陥し穴

- | | | | |
|----|--------------|--------|---------|
| 1 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 2 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 3 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 4 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 5 | 10Y R2/1黒色土 | 粘性ややあり | しまりややあり |
| 6 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 7 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 8 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 9 | 10Y R3/4暗褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 10 | 10Y R3/4暗褐色土 | 粘性なし | しまりなし |
| 11 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 12 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |



第5図 陥し穴

(2) 古代の竪穴住居跡

2棟の平安時代の竪穴住居跡が検出された。どちらも東側壁にカマドをもつ大型の住居跡で壁等の残存度は高い。また土器も比較的多く出土している。そのうちRA01の埋土中から縄文土器片や石器が出土しているが遺構外出土遺物として取り上げる。次に各々の特色を述べ、2つの住居跡の関連性や時代については5のまとめでふれたい。

RA01竪穴住居跡 (図版第6・7・10・11、写真図版4・5・18・20)

位置は、調査区Ⅲ区の西側で、調査区の中でも比較的標高の高い24Cグリットに位置する。地表面から約20cmの暗褐色土の精査中に検出された。

規模・平面形は現代遺構の攪乱の影響を受けない東壁から西壁の径(短軸)は5m14cm、北壁から南壁までの径(長軸)が推定で5m70cm前後で隅丸の台形状を呈すると思われる、主軸はやや北東方向に傾く。床面積は約20㎡である。

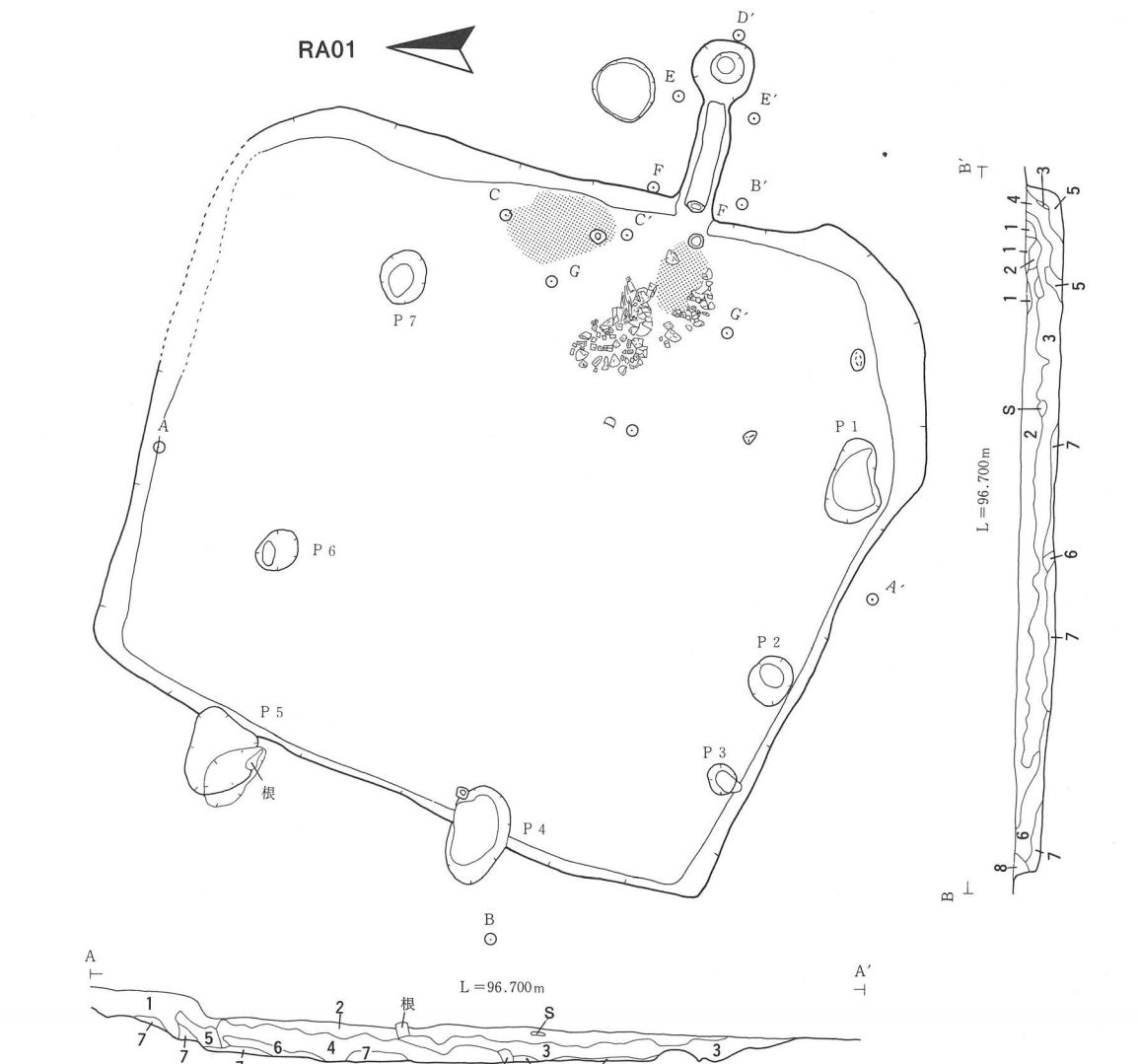
埋土は暗褐色土と黒褐色土が厚く堆積するが、埋土の暗褐色土からは縄文の石器・土器片などが、黒褐色土からは古代の土器片が出土することから、上層は盛り土であることが考えられる。

壁は比較的残りのよい東・南壁で最大37cmを計り、平均では25~30cmであるのに対し、西側は低く20cm前後である。また東南側は下部が少々外傾するのみでほとんど真上に立ち上がるが、西側はなだらかに外傾しその上端部が判別しない。

柱穴は、南壁際床面に3基、西壁中に2基、北壁からやや離れた床面に2基の計7基検出した。そのなかで配置・深さ等の条件からP1・2・6・7が主柱穴になると考えられる。また西側の2基は埋土が暗褐色土であり、方向が住居跡の外側に向かっているという点でほかの5基とは違う形態をもつ。

カマドは、東壁南寄りに付設される、掘り込み式である。煙道はカマド付設壁際から煙だしピット中心部まで1m22cm、掘り込みの深さは、平均で10cm、掘り込みの幅は15cmほどである。煙だしピットは開口部50cm、下径13cmのほぼ円形に近く深さは37cmである。カマド本体では明確な袖の形態と架構を検出することができなかったが、支脚は土師器の甕を逆さに使用しており、袖の芯材や架構として多量の礫と土師器の破片を利用している跡がうかがえられた。また、カマド北側に90cm×54cm・厚さ6~8cmの焼土も確認された。遺物は、カマド周辺と床、埋土などから土師器の甕形土器、坏形土器が出土したが、復元できたのは各3個体のみである。須恵器は長頸壺・短頸壺のどちらかと思われるものの一部と坏が出土した。1はカマドの支脚として利用されていた土師器の長胴甕である。外面をハケメ主体で調整し一部ヘラでなでている。内部はヘラナデ中心で調整している。口縁部がゆるく短く外反し、底部がやや外に張り出す。2・3はカマド隅の北東壁付近から出土したもので、カマドの芯材として利用されていたものと考えられる。2は球胴甕と思われるが、外面が磨耗されており、わずかにケズったあろうあとがみられる。3は赤焼きの甕でロクロ成形であるが外面にケズリ調整が施される。口縁部が短く外反し、口唇部は上方に挽出する。内面は黒色処理が施されている。4の小型甕は煙道の埋土から出土したもので、器面の調整はほとんど見受けられない。5は南西部の床から出土した須恵器の壺である。口辺部の器形とその厚さなどから長頸壺か短頸壺と思われる。同じ床面南西部から出土した6の須恵器の坏は底部切離しが回転ヘラ切り、またカマドの袖から出土した土師器の坏7は回転糸きりで切り離されている。また埋土下位から須恵器破片8・9が出土した。

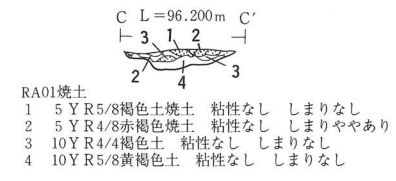
石器は南東部の床面から凹石が出土した(1)



- N-S
- 1 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりふつう 木根多く含む (20%)
 - 3 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりなし 黄褐色土 (10Y R5/8) 砂20%含む
 - 4 10Y R5/8黄褐色土と10Y R3/4暗褐色土との混合土 粘性なし (砂) しまりなし
 - 5 10Y R5/8黄褐色土と10Y R3/4暗褐色土との混合土 粘性なし (砂) しまりややあり
 - 6 10Y R4/6褐色土 粘性なし 固くしまる 木根5%含む 5cmφ礫含む
 - 7 10Y R4/6褐色土 粘性なし 6よりないがよくしまる 礫などを含まない
 - 8 掘りすぎ 壁の残り
- W-E
- 1 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりややあり 木根多く含む
 - 3 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 木根多く含む (20%)
 - 4 10Y R2/3黒褐色土と10Y R4/6褐色土との混合土
 - 5 10Y R4/6褐色土 粘性なし よくしまる (N・Sベルトの7層)
 - 6 10Y R4/6褐色土 粘性なし よくしまる 木根含む (1%)
 - 7 10Y R6/8明黄褐色土 褐色土 粘性なし 強くしまる (床面)

柱穴観察表

P	1	2	3	4	5	6	7
口径cm	34.0	37.0	20.0	39.0	28.0	31.0	36.0
下径cm	10.0	20.0	15.0	20.0	20.0	11.0	11.0
深さcm	34.0	64.3	41.3	33.8	76.0	36.0	67.0?



第6図 RA01竪穴住居跡



第7図 RA01竪穴住居跡カマド

R A02竪穴住居跡（図版第8～14、写真図版6・7・18・20）

調査区Ⅲ区の南側の中央部、グリット18ij・19ijで検出された。R A01の北東約32m離れたところがあり、検出時R A01と同じぐらいの標高であったが、実際はそれよりも低いところに位置する。

規模・平面形は長軸が東西に6m46cm、短軸が南北に5m86cmで南北にやや長い長方形である。主軸方位はほぼ北 -0° —南で、床面積は25.4 m^2 と推定されR A01よりも広い。床面施設では、カマドの袖の端西部に掘り込んだ跡が認められた。また、東壁と北側壁の交点に床面を掘りこんだ貯蔵穴と思われる施設も確認された。埋土は、上部に黒褐色土が厚く、壁際に褐色土が堆積する自然堆積である。西側壁近くには壁崩壊後の礫が床面を覆う。縄文等の遺物含有層である暗褐色土は一部にしか見られない。埋土上位に黒褐色土を掘りこんだ柱穴状のピットをもつ。

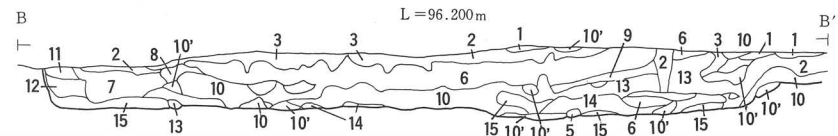
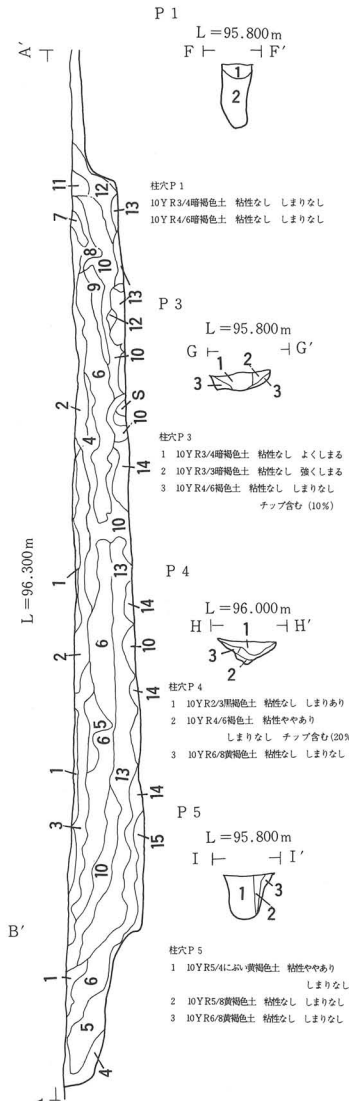
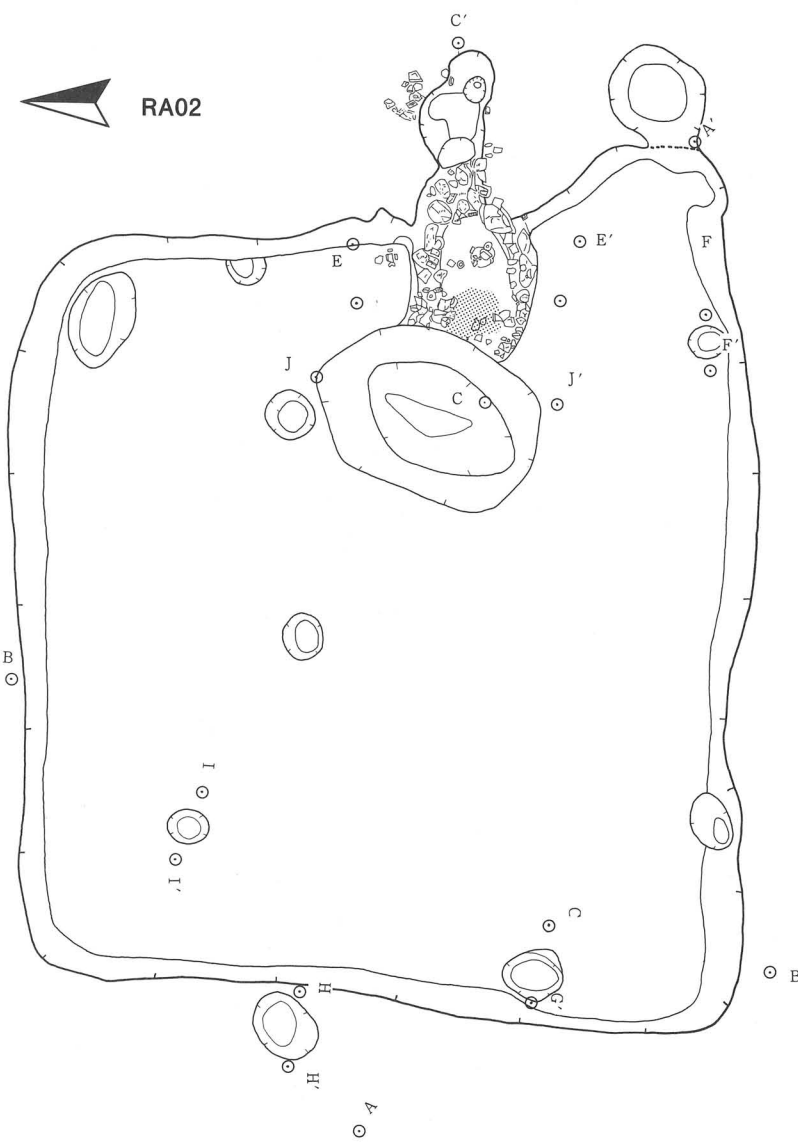
壁は、崩壊したであろう西側壁以外保存状態はよい。北側最大45.4cm・南側最大34.1cmを計り、北東南壁で平均31.3cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが南壁の東よりと南よりは比較的なだらかである。

柱穴は、8基検出した。その規模・配置などからP1・2・5が主柱穴と考えられるが、もう1基は判然としない。少しずれるがP8がそれに当たる可能性もある。P6・7はその埋土状況から住居跡の伴わないものの可能性も否定できない。また、P3・4は配列がR A01のP4・5と似ており、住居跡のなんらかの施設にかかわるものであろう。

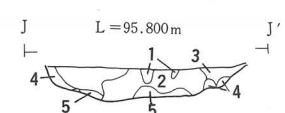
カマドは、東壁の南寄りに付設されており、架構は崩壊しているがその他の残存度は高い。石で囲ったくり抜き式で、煙道は短くすぐに立ち上がる。煙だしピットは判然とせず、開口部20cm・深さ30cmのものが礫で覆われているが利用されていたかどうかは不明である。袖部には大量の礫と土師器・須恵器片が芯材として利用されている。支脚には土師器の甕を逆さにして付設されており、架構部に使用されていたと思われる丸い自然石が検出された。カマドの北側壁には、土器が埋設されていた痕跡もあり、また南側角にはカマドを構築していた痕跡も認められることから2つのカマドをもつ住居跡だった可能性もある。

遺物は、土師器・須恵器の坏形土器・甕形土器や石器がカマド付近を中心に出土し、比較的多く復元できた。その中にはカマドの芯材として利用されていたものも含まれる。

10は土師器の小型甕で、ロクロ成形で底部は回転糸きりで切り離されている。外部をヘラケズリで再調整し、器形は口縁部が短く外反し、口辺部は上部に逸出しそして口唇部は平らである。胴上部にふくらみをもつが最大径は口縁部にある。11・12は非ロクロの甕で内外ともナデで調整されている。口頸部に沈線状の不明瞭な段をもち、口縁部はなだらかに大きく外反する。13はロクロ使用の甕と思われる、一部ケズリがあるものの、ほとんど無調整である。口縁部から口唇部にかけての特徴は上記の10と似ている。14は長胴甕で外面はハケメとナデ、内面はナデで調整される。16は前出の5個と異なり、カマドからやや離れた床から出土した甕である。外面は荒いナデとケズリで、底部がやや張り出し木葉痕が認められる。17はカマドの支脚として使われていたものと思われる甕で口縁部は短く大きく外傾する。逆さにして安定させるためと思われる。18は、土師器の広口壺でヘラケズリ等で器面調整されているが、ロクロ成形である。口縁部が強く大きく外傾する特色を持ち最大径は肩部にある。19～21は赤焼きの土器で、ロクロ成形であり底部切離し痕があるのは20のみで回転糸切りである。また19は木葉痕をもつ。21はR A01出土の3と同じ特徴をもつ。22は摩滅が激しいが内部の器面調整は11や12と同じである。須恵器の坏23は底部切離しが回転ヘラ切りと思われるが判然としない。24は回転糸切りで切り離されている。この2つの特色は胴部に段を有することで、特に23は全体に明瞭に存在する。その他内面に黒色処理を施した土師器の坏（25・26）も出土している。石器はカマド燃焼部内から擦り石（2）たたき石（3）が、かまど西の土坑の埋土から石鏃（4）が出土した。



- 1 10Y R4/3褐色土 粘性なし しまりなし
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりややあり
- 3 10Y R2/3褐色土 粘性なし しまりややあり
- 4 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし 木根5%含む
- 5 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
- 6 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり 木根多く含む(10%) 礫含む(2%)
- 7 10Y R4/6褐色土 粘性なし 固くしまる
- 8 10Y R5/4(ふい)黄褐色土 粘性なし しまりややあり
- 9 10Y R4/4(ふい)黄褐色土 粘性なし しまりややあり 10Y R2/3黒褐色土少々含む(5%)
- 10 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりややあり (砂質) 10'しまりなし
- 11 10Y R5/6黄褐色土 粘性なし しまりややあり
- 12 10Y R4/3(ふい)黄褐色土 粘性なし しまりあり 土器片・礫・炭化物含む(2%)
- 13 10Y R3/2黒褐色土 粘性なし しまりややあり
- 14 10Y R5/6黄褐色土と10Y R4/6褐色土との混合土 粘性なし しまりあり 礫多く含む
- 15 10Y R7/6黄褐色土 粘性なし 非常に固い 床面の掘りすぎの可能性高い
礫多く含む(50%) 5cm以下の礫多し

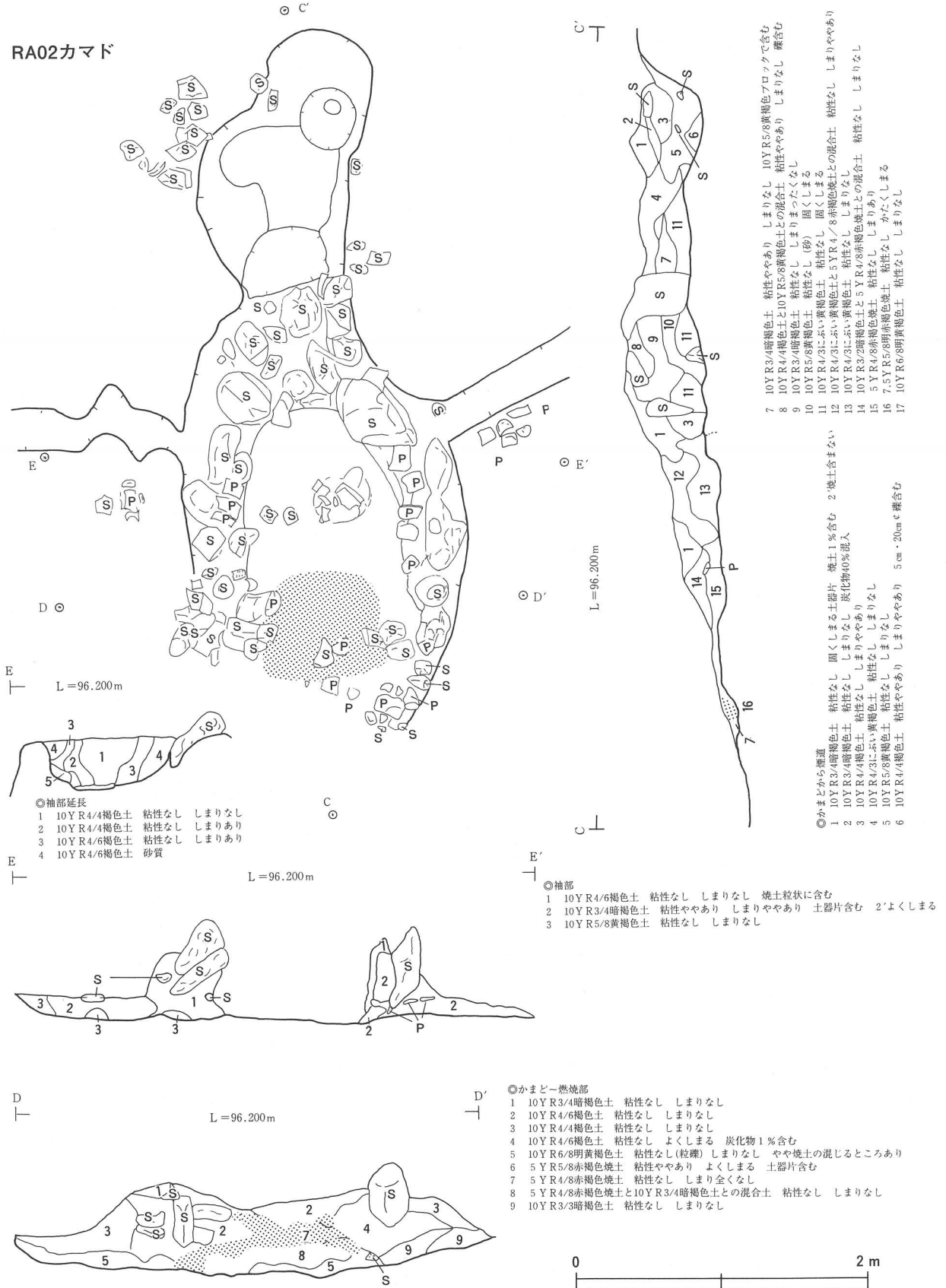


- RA02カマド掘り下げ
- 1 10Y R2/2暗褐色土 粘性なし しまりあり
 - 2 10Y R2/3暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 炭化物1%含む
 - 3 10Y R2/3暗褐色土 粘性ややあり よくしまる 炭化物1%含む
 - 4 10Y R2/3暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 5 10Y R2/2黄褐色土 砂

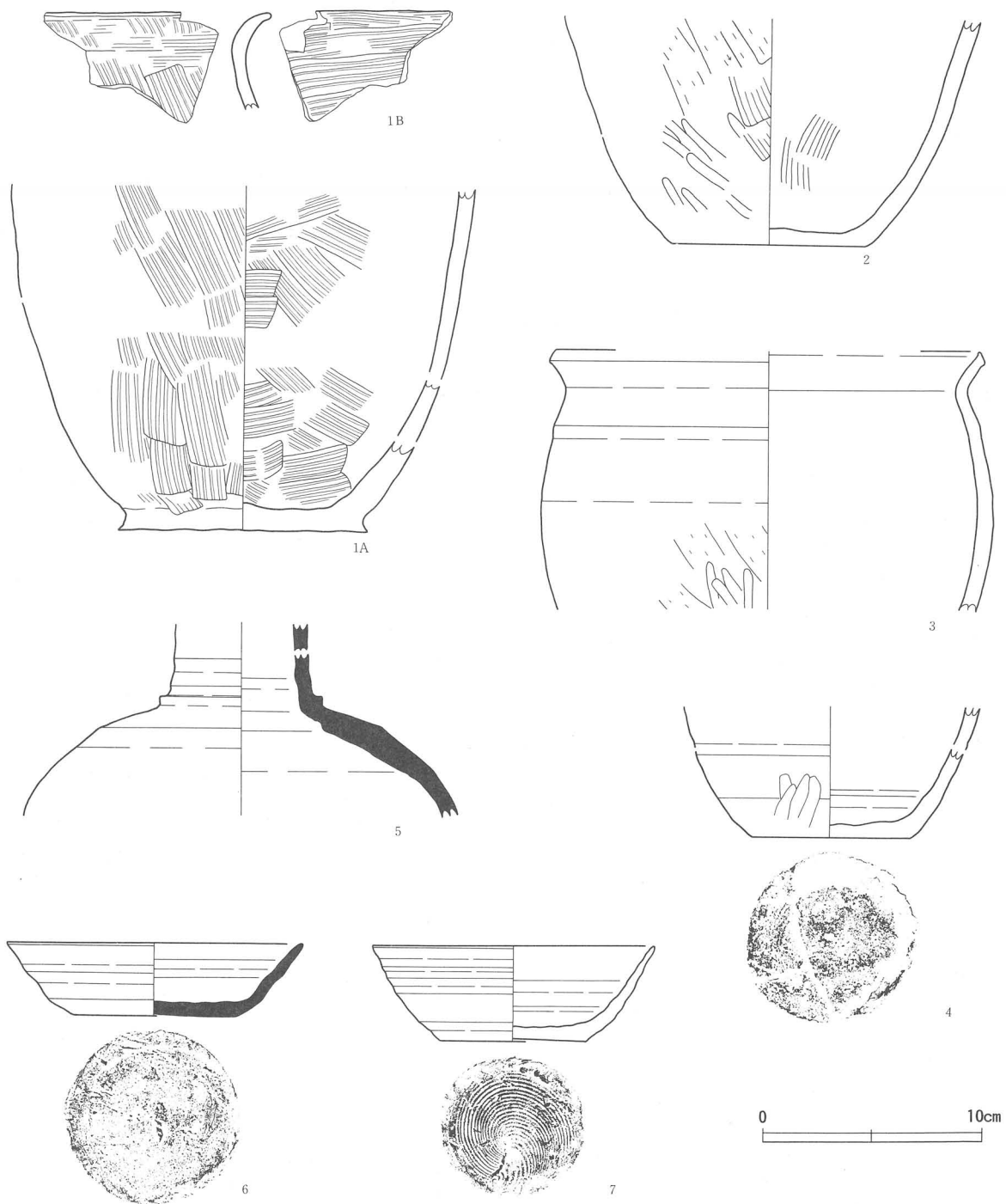


第 8 図 RA02 竪穴住居跡

RA02カマド

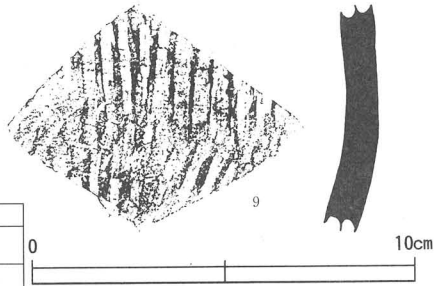


第9図 RA02竪穴住居跡カマド

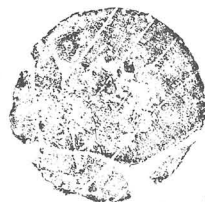
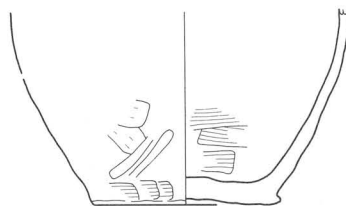
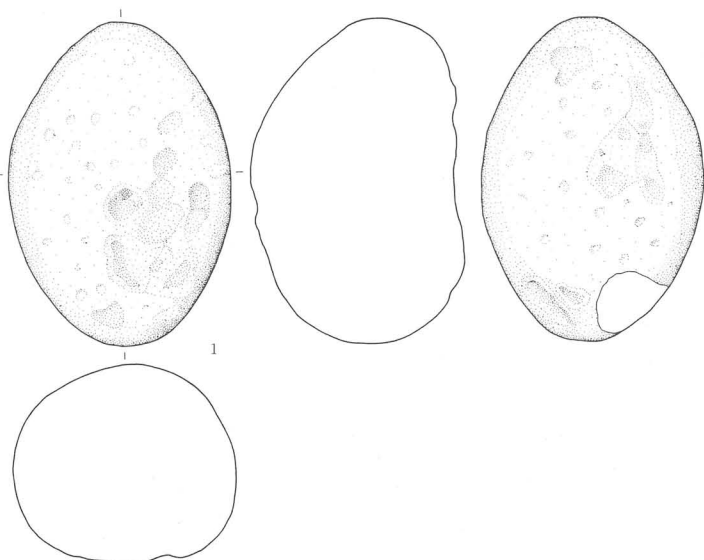


図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備 考
1	RA01 かまど支脚	土師器 長脚甕	平安時代	—	11.4	(16.0)	(A) 外ノハケメ・一部ヘラナ内ノハケメヘラナ 底部やや外に張り出す (B) 口縁部(一部残る)ゆるく広く外反・口縁部内外面とも2次焼成受ける(すす)
2	RA01 床直北東墓付近	土師器	平安時代?	—	9.0	(10.5)	外ノケズリーナ 内ノヘラナ(無調整に近い) 体部から底部にかけてゆるやかに絞れる
3	RA01 床直北東墓付近	土師器 小型甕・鉢	平安時代	(19.5)	—	(12.0)	ロケロ使用 外ノ唇面調整あり 一部ミガキ・ケズリ 内(2次焼成うける) 口縁部短く外反 口唇部上方に縁出・平ら 口頸部に不明瞭な段あり
4	RA01 かまど挿だしピット	土師器 小型甕・鉢	平安時代	—	7.4	(6.1)	ロケロ使用 底部切離し・回転ヘリ切り? 唇面調整 外一部ミガキ 口頸部に明瞭な沈線(段)有す 内面の体部下位に段
5	RA01 床直(南西部)	須恵器 長い・短頸甕	平安時代	—	—	—	ロケロ使用 底部切離し 回転ヘリ切り? 内外とも無調整 体部直線的に立ち上がる(体部中央に段) 内部の底部と体部の境界に沈線状の段を有す
6	RA01 かまどそで上部	須恵器 坏	平安時代	13.5	7.4	2.4	ロケロ使用 底部切離し 回転ヘリ切り? 内外とも無調整 体部直線的に立ち上がる(体部中央に段) 内部の底部と体部の境界に沈線状の段を有す
7	RA01 かまどそで上部	土師器 坏	平安時代	12.3	6.5	4.3	ロケロ使用 底部切離し 回転糸切り須恵系土器の坏か 体部中央に沈線状の段2つ有す 体部と底部の境界にくまみ

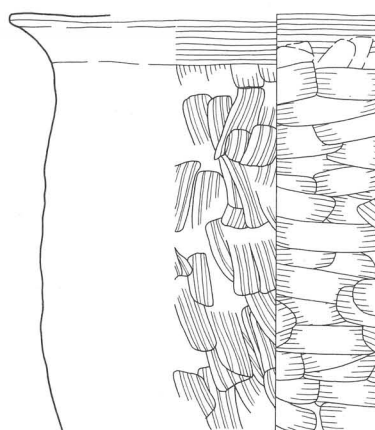
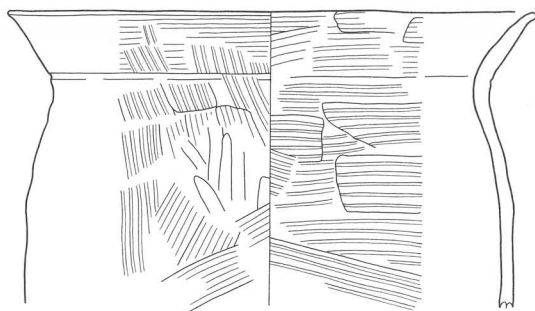
第10図 RA01出土土器



図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備考
8	RA01埋土2層	須恵器	平安時代	-	-	-	拓本 たたき目痕 あて具痕は不明
9	RA01埋土2層	須恵器	平安時代	-	-	-	拓本 たたき目痕 あて具痕は不明

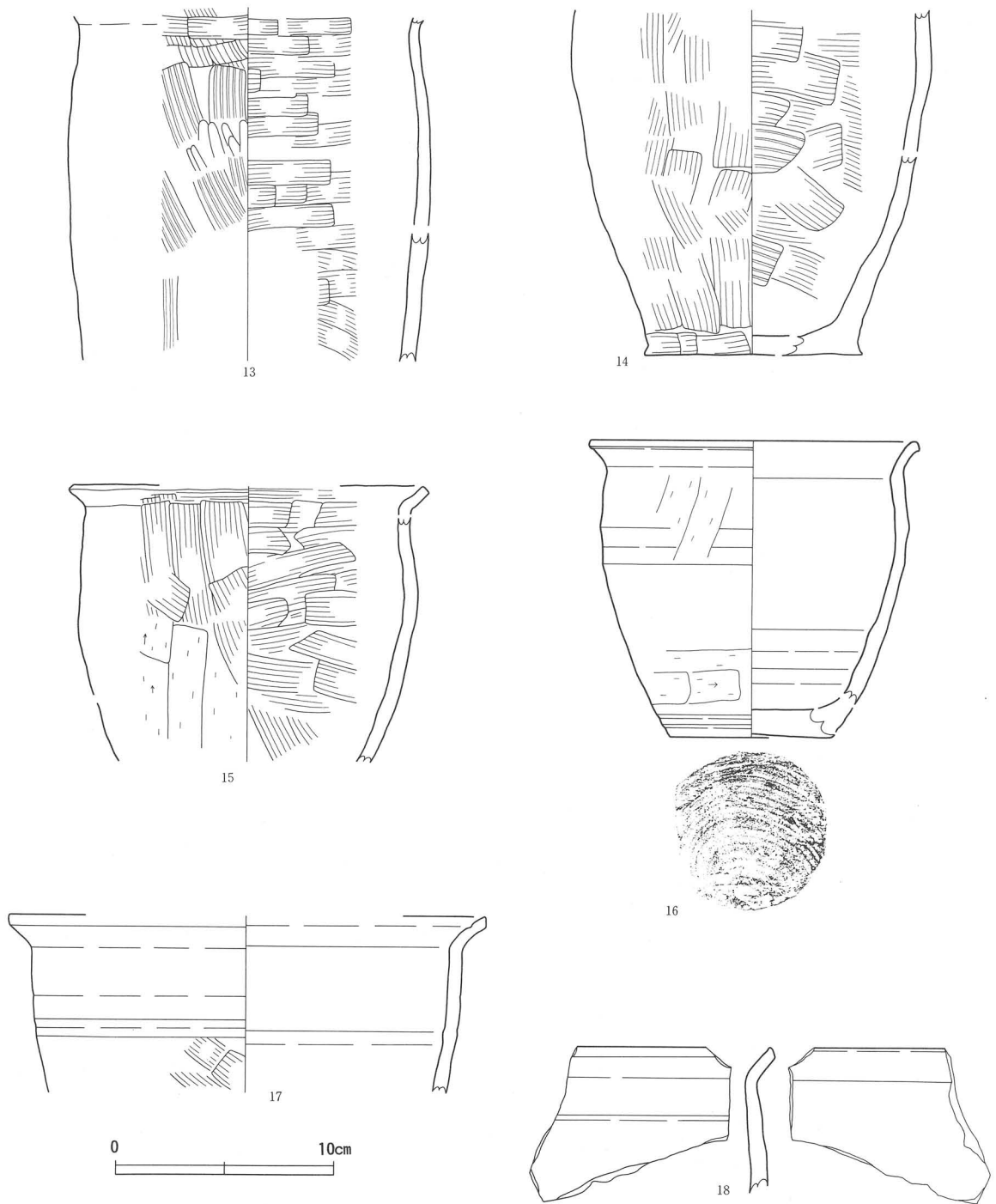


図版	器種	出土地点	層位	長さ	はば	厚さ	重さ	石器(産地)等
1	凹石	RA01	床直	12.9	8.7	8.2	995.00	安山岩(奥羽山脈)



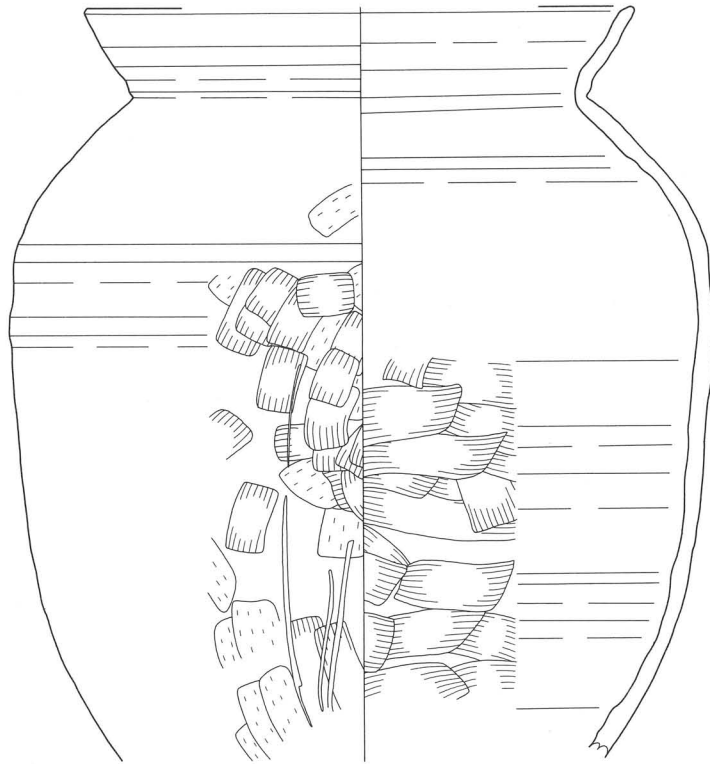
図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備考
10	RA02 カマド埋土-そで上部	土師器 小型甕	平安時代	-	(7.6)	(7.9)	ロクロ?再調整 外/ケズリ ナデ内/ヘラナデ 底部張り出し 木葉痕
11	RA01 床直 (南東壁)	土師器 甕	平安時代	(21.0)	-	(11.7)	外/ナデ-ミガキ・口縁部ヨコナデ内/ヘラナデ (金剛) 一部ナデ 口縁部:沈線状の痕あり口縁部はなだらかに大きく外反する・口径部は丸みをもつ口縁部に最大径
12	RA01 かまど埋土-そで芯材	土師器 甕	平安時代	(21.0)	-	(16.5)	外/ハケメ・口縁部ヨコナデ内/ヘケメ・一部ナデ/ヘラケズリ 口縁部:沈線状の痕あり口縁部はなだらかに大きく外反する・口径部は丸みをもつ口縁部に最大径

第11図 RA01出土土器(2)石器 RA02出土土器(1)

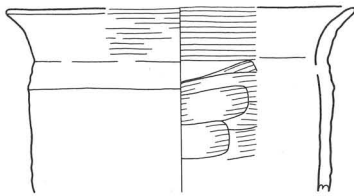


図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備 考
13	RA02 かまど埋土~そで芯材	土師器 長胴甕	平安時代	(8.0)	(7.6)	(16.4)	外/ハナメ鉄ナデ?一部ミガキ・口縁部ヨコナア 内ヘラナア 口縁部に沈線状の段を有す 口縁部に沈線状の段を有す
14	RA02 埋土	土師器 甕	平安時代	-	(10.0)	(16.8)	外/ヘラナア・指ナデ 2次焼成によつてす 内/ナデ・一部ハナメ 底部張り出し 擦り消されているが木垂後の痕跡
15	RA02 カマド支脚	土師器 小型甕	平安時代	(16.5)	-	(12.8)	外/ヘラケズリ・ヘラナア 内/ヘラナア 口縁部短く縁く外反 口縁部平ら 最大径を体部中央にもつ 外面に煤
16	RA02 床面(南東葉)	土師器 小型甕	平安時代	(14.7)	(7.3)	13.7	ロケロ使用 底面平坦し 回転し切り痕 外/再調整 ヘラケズリ 体下部と底部の境界に2本のろくろ帯 体上部に膨らみ 口縁部短く外反し口縁部上部に挽出・口唇部は平ら
17	RA02 かまど埋土~そで芯材	土師器 小型甕	平安時代	(11.0)	-	(8.2)	ロケロ使用 外/再調整一部ヘラナア 口縁部に細い線によつて仕切られた沈線状の不明瞭な段 体上部に2本の沈線 口縁部は小さく縁く外反し口縁部上部に挽出・口唇部は平ら
18	RA02 カマド周辺床面	土師器 甕	平安時代	-	-	(7.2)	ロケロ 再調整なし? 口縁部に2本の沈線 口縁部急角度に外傾 口辺部わずかに内湾 口唇部平ら 赤焼き土器

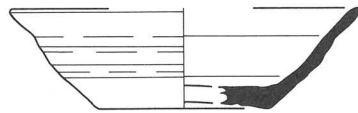
第12図 RA02出土土器(2)



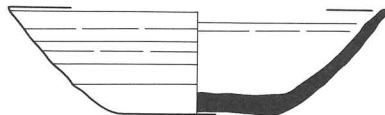
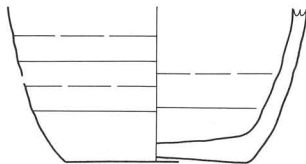
19



20



22



23



21

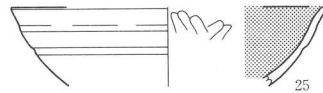


図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備考
19	RA02 かまど埋土-そで上部	土師器 広口甕	平安時代	(21.4)	-	(30.0)	再調整 外/ヘラズリヘラナデ 内/ヘラナデ 口縁部狭(大きく外縁と中部にふくらみをもつ口唇部を有) 最大径は肩部-体部上部にかけて肩部に沈没
20	RA02 かまど埋土-燃焼部	土師器 小型甕	平安時代	(13.6)	-	(7.3)	ロクロ? 外/再調整なし 内/ヨコナデ 赤焼の土器
21	RA02 かまど燃焼部内	土師器 碗	平安時代	-	3.7	(6.2)	ロクロ 回転系切り底 再調整なし 体部下部和底部境界に不明瞭な段をもつ 赤焼きの土器
22	RA02 かまどそで	須恵器 坏	平安時代	(13.8)	(6.8)	4.0	ロクロ 回転ヘラ切り? 体部全体に段 体部でやや膨らみ 口縁部で外縁 口唇部はる
23	RA02 床直(南西部)	須恵器 坏	平安時代	(7.5)	(3.0)	4.2	ロクロ 回転系切り 体部に沈没状の明瞭な段を有す

第13図 RA02出土土器(3)

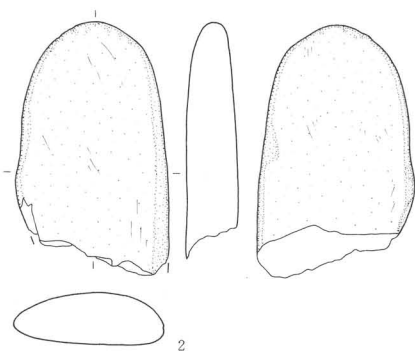


24

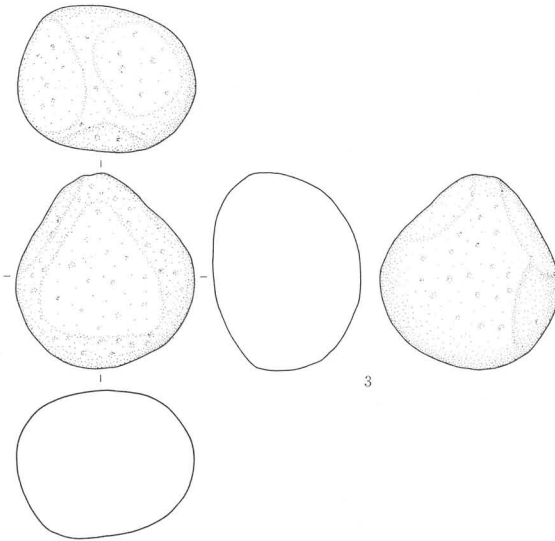


25

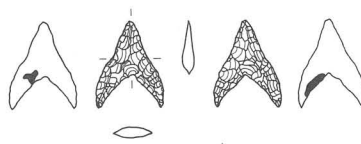
図版	出土地層位	器種	時期	口径cm	直径cm	器高cm	備 考
24	RA02 埋土3層(裏側)	土師器 坏	平安時代	-	(6.8)	(2.5)	ロウロ 回転染切り? 内/ミガキ内黒
25	RA02 埋土上部	土師器 坏	平安時代	(12.4)	-	(3.2)	ロウロ 内/ミガキ 内黒 体部上部に沈線状の段を有す



2



3



4

図版	器種	出土地点	層位	長さ	はば	厚さ	重さ	備 考
2	擦り石	RA02かまど	燃焼部内	7.8	7.1	5.7	360.00	石英質安山岩(奥羽山脈)
3	擦り石	RA02かまど	燃焼部内	10.1	6.1	2.5	185.00	頁岩(北上産地)矢沢産?
4	石鉄	RA02土坑	埋土 黒褐色土	2.3	1.8	0.3	0.55	頁岩 アスファルト付着



第14図 RA02出土土器(4) 石器

(3) その他の遺構

① 土坑

土坑はR D01～R D21まで登録したが、R D03とR D14をそれぞれ1号陥し穴・2号陥し穴と変更し、またR D09はその後の精査で攪乱と分かりカットした。その上でR A01床面から検出したカマド状土坑を含めれば合計で19基検出したことになる。そのうち遺物が出土したR D07とR D16の2基は縄文時代の可能性が高いが埋土中位の出土で、土器も摩滅が激しいことから判然としない。よって、ここでは時代順ではなく連番で述べる。

R D01 (図版第15図、写真図版8)

R A01の床面精査中に検出した。R A01の西側グリット24cに位置する。R A01のP4と重複する。

規模・平面形は、開口部径1 m66cm×88cm、底部径1 m7cm×40cmの楕円形で、断面形は皿状である。北側が南側より強く外傾する。深さは最大で44.7cmを計る。

埋土は、上位に黒褐色土を下部に暗褐色土を持つ自然堆積であるが、上部はふみかためられているようすである。

出土遺物はないが、この土坑の上部にあるR A01の埋土暗褐色土に縄文時代の遺物があることから、時代は縄文時代の可能性が高い。

R D02 (図版第15図、写真図版8図)

調査区Ⅲ区の北西側、グリット22dで検出した。1号陥し穴の南西約2m離れたところに位置する。Ⅲ区北側の斜面、黄褐色砂土での検出である。重複はない。

規模・平面形は、開口部径1 m25cm×1 m15cm、底部径88cm×70cmの真円に近い形状で、断面形は皿状である。深さは浅く、最大で22.9cm程度である。

埋土は底部に暗褐色土、上部は木根を多く持つ締まりのない褐色土である。

出土遺物はなく時期も不明である。

R D04 (図版第15図、写真図版8図)

調査区Ⅱ・Ⅲ区の境界の中央部、グリット20・21fで検出した。中央部の柱穴集中部の西側、礫を含む褐色土下での検出である。重複はない。

規模・平面形は、開口部径1 m86cm×1 m43cm、底部径1 m55cm×1 m24cmの楕円形で、断面形は皿状である。深さは最大でも25.9cmと浅い。

埋土は上部にしまりのない黒褐色土、下部には黄褐色土・褐色土などの混合土が中心である。

出土遺物はなく時期も不明であるが、縄文時代以降のものであろう。

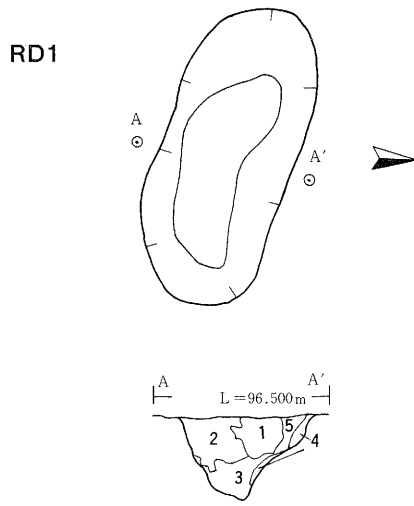
R D05 (図版第15図、写真図版9図)

調査区Ⅱ区南端の中央部、グリット20f・gで検出した。中央部の柱穴集中部の北西側、礫を含む褐色土下での検出である。R D06に切られる。

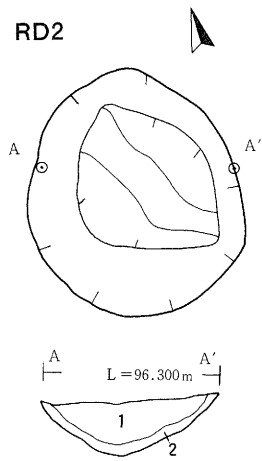
規模・平面形は、開口部径?×95cm、底部径?×53cmの楕円形と推定され、断面形は逆台形状である。西側に比べて東側壁が急に落ち込む。深さは最大で41.4cm、平均37cmである。

埋土は、礫を多く含む黒褐色土と暗褐色土の下に褐色土を持つ自然堆積である。

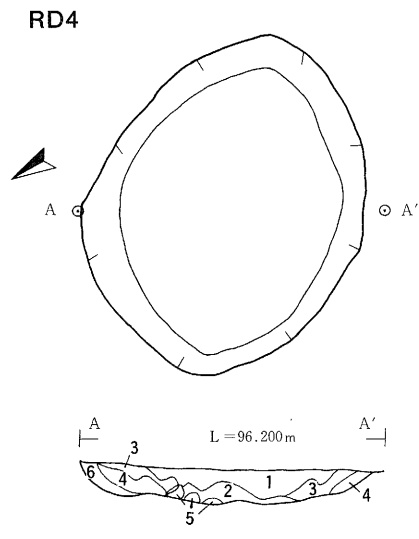
出土遺物はないが、同じような埋土を持つR D07と同時期の縄文時代のものであろう。



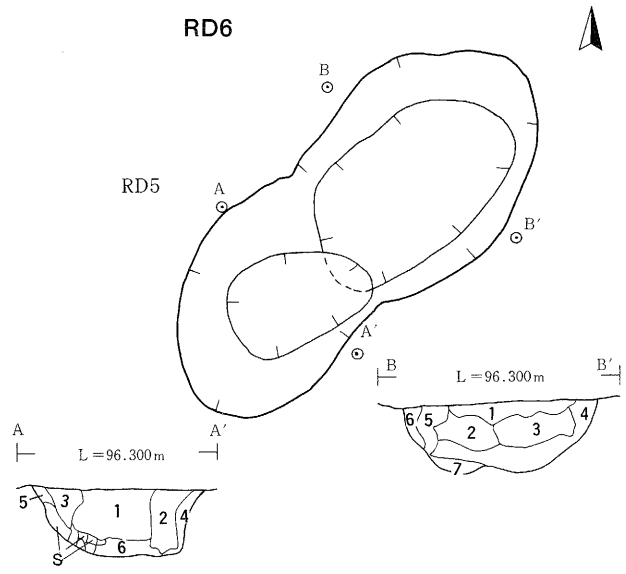
- RD01
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 2 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし しまりあり
 - 3 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややなし しまりあり
 - 4 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 5 10Y R4/3黒褐色土 粘性なし しまりややあり



- RD02
- 1 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややあり しまりなし

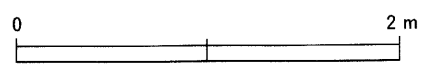


- RD04
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりなし
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 3 10Y R4/3褐色土 粘性なし ややしまりあり 黄褐色土 (10Y R8/4) 一部混入
 - 4 10Y R8/8黄褐色土 粘性なし しまりあり
 - 5 10Y R6/8明褐色土 粘性なし しまりなし
 - 6 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし



- RD05
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりなし 5 cm 礫含む (10%)
 - 2 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし しまりなし 5 cm 礫含む (10%)
 - 3 10Y R3/2黒褐色土 粘性なし しまりなし 3 cm 礫含む (20%)
 - 4 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 5 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性なし しまりなし
 - 6 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし 7 cm 礫含む (50%)

- RD06
- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり 5 cm 礫含む (10%)
 - 2 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりなし 7 cm 礫含む (10%)
 - 3 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりなし 5 cm 礫含む (5%)
 - 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりなし
 - 5 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 6 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 7 10Y R3/2暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり



第15図 RD01~RD06

R D 06 (図版第15図、写真図版 9 図)

R D 05を切る形で、その北西側で検出した。R D 05と同じく礫を含む褐色土での検出である。

規模・平面形は、開口部径?×1 m 08cm、底部径1 m 20cm×68cmの楕円形で、断面形は皿状である。壁全体がなだらかに落ち込み、底部に礫を持つ。深さは最大で51.3cm、平均37.5cmである。

埋土は、中央部にレンズ状に礫を多く含む黒褐色土と壁際の暗褐色土である。しかし、R D 05より礫を含む褐色土の堆積が少ない。

出土遺物はないが、R D 05と同時期のものであろう。

R D 07 (図版第16・20図、写真図版 8・19図)

調査区Ⅱ区南端の中央部、グリット20 fで検出した。中央部の柱穴集中部の北西側、礫を含む褐色土下での検出である。R D 05・06から西に4 m離れたところに位置する。

規模・平面形は、開口部径1 m 15cm×95cm、底部径75cm×58cmの真円に近い形状をしている。断面形は逆台形状である。東側に比べて西側壁が急に落ち込む。深さは最大で32.1cm、平均30cmである。

埋土は、礫を多く含む黒褐色土と暗褐色土の下に褐色土を持つ自然堆積である。

出土遺物は、埋土中位の暗褐色土から縄文土器片2点が出土している。2は摩滅が激しく地文などは把握できないが、2号陥し穴での出土破片(第4図P₂)と同類の縄文時代前期後葉の深鉢の破片と思われる。3は沈線主体で半截竹管による斜位の文様がある。縄文時代中期中葉頃の遺物か。このことからこの遺構は縄文時代前期～中期のものと思われる。

R D 08 (図版第16図、写真図版 9 図)

調査区Ⅲ区北端の西部、グリット22 e・fで検出した。1号陥し穴の東1 mに位置する。黄褐色土の砂土が検出面である。

規模・平面形は、開口部径99×55cm、底部径85×42cmの楕円形で、断面形は皿状である。東側に柱穴状のくぼみを持ち、その深さは43.9cm、全体の平均は約20cmと浅い。

埋土は、黄褐色土の混じった黒褐色度の単層に近い。

出土遺物はない。その形状から柱穴の可能性があり、時代は不明である。

R D 10 (図版第16図、写真図版 9 図)

調査区Ⅲ区北端の西部、グリット21 dで検出した。R G 01の壁から1 mと離れない。R D 07等と同じく、礫を含む褐色土下が検出面である。

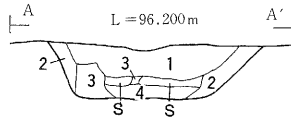
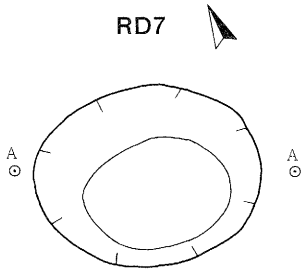
規模・平面形は、開口部径98×88cm、底部径66×68cmの真円で、断面形は逆台形状である。深さは遺構の中心部の礫を取り除いたくぼみまでは46.1cmとやや深い、全体の平均は35cmである。

埋土は、しまりのよい暗褐色土と砂状の褐色土・黄褐色土を持つ自然堆積である。

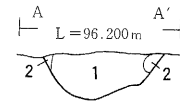
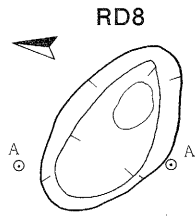
出土遺物はないが埋土状況から縄文時代の可能性が高い。

R D 11 (図版第16図、写真図版10図)

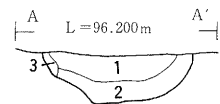
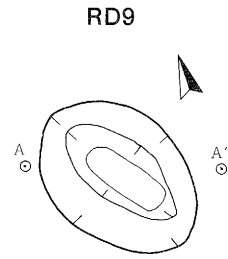
調査区Ⅱ区南部、グリット22 gで検出した。中央部の柱穴集中部南側、2号陥し穴から北西2 m離れたところの位置する。礫を含む褐色土下が検出面である。



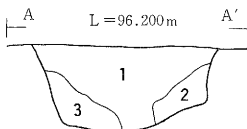
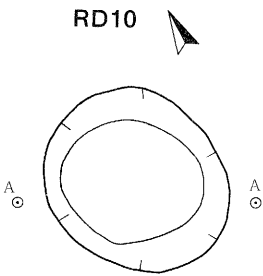
- RD07
- 1 10Y R3/1黒褐色土 粘性あり しまりなし 礫含む
 - 2 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 3 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりなし
 - 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性あり しまりなし



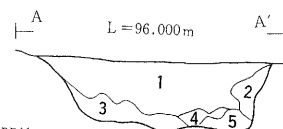
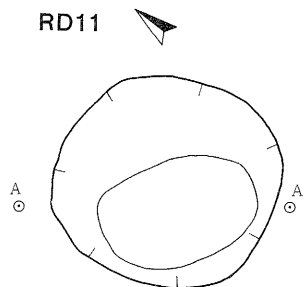
- RD08
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまり
 - 2 10Y R4にぶい黄褐色土 粘性ややあり



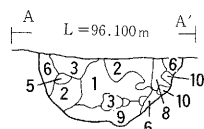
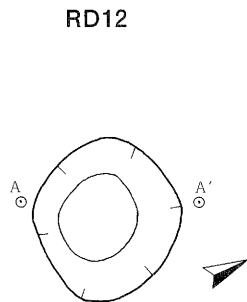
- RD09
- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややあり しまりなし
 - 3 10Y R3/3暗褐色土 粘性なし しまりなし



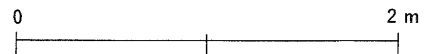
- RD10
- 1 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 木根
 - 2 10Y R4/6褐色土 粘性なし (砂) しまりややあり
 - 3 10Y R7/8黄褐色土 粘性つよい しまりややあり 木根



- RD11
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりなし
 - 2 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 3 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 4 7.5Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし
 - 5 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし



- RD12
- 1 10Y R3/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 3 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりなし
 - 5 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 6 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 7 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 8 10Y R3/4黒褐色土 粘性なし しまりなし



第16図 RD07~RD12

規模・平面形は、開口部径1 m 12cm×1 m 10cm、底部径55×84cmの真円形で、断面形は逆台形状である。なだらかに落ち込む西側壁に対して東側のそれは垂直気味に落ち込む。その深さは最大で39.1cmである。

埋土は、黒褐色土の下に暗褐色土・褐色土をもつ自然堆積である。底部に礫の堆積が多く見られる。

出土遺物はない。また、時期も不明である。

R D 12 (図版第16図、写真図版10図)

R D 11検出と同グリット21gで検出した。2号陥し穴から北西に1 mほど離れる。検出面も同じである。規模・平面形は、開口部径85cm×75cm、底部径47×40cmの円形で、断面形は皿状とおもわれる。その深さは最大で38cmである。

埋土は、中央に黒褐色土をもち、上部に暗褐色土をもつ人為的堆積か。底部に礫の堆積が多く見られ、出土遺物はない。時期は縄文時代と思われるが、判然としない。

R D 13 (図版第17図、写真図版10図)

調査区Ⅱ区南西端部、グリット20dで検出した。約18mの長さをもつR G 01の中央部の西側に位置する。検出状況は、R G 01を検出した礫を含む褐色土では把握できず、R G 01の精査中に西側壁を切る形で検出された。

規模・平面形は、開口部径1 m 49cm×82cm、底部径1 m 14cm×65cmの楕円形で、断面形は皿状である。R G 01は中央部において西側に枝分かれをするが、その枝が40cmいったところでR D 13に止められるような形である。深さは最大で30.8cmであるが、R G 01平均の底面の高さよりも約20cm低い。

埋土は、固くしまった黒褐色土の単層に近い。底部に礫を多く含む褐色土をもつ。

出土遺物はない。R G 01との関連性が考えられ、貯水穴としての役割を持っていた可能性があり、時期もR G 01と同時期ではないかと思われる。

R D 15 (図版第17図、写真図版10図)

調査区Ⅱ区南西部の標高のやや高い区域、グリット18f・gで検出した。R A 02から北西に8 mほど離れる。検出面は礫を多く含む褐色土下である。

規模・平面形は、開口部径2 m 13cm×1 m 34cm、底部径1 m 15cm×1 m 02cmの楕円形で、断面形は逆台形状で、北側壁がややなだらかに落ち込む。その深さは南壁側が最大で76.6cmを計る。

埋土は、上部にしまりのない暗褐色土、下部に礫を含んだ褐色土をもつ自然堆積である。

出土遺物はない。時期は縄文時代と思われるが、判然としない。

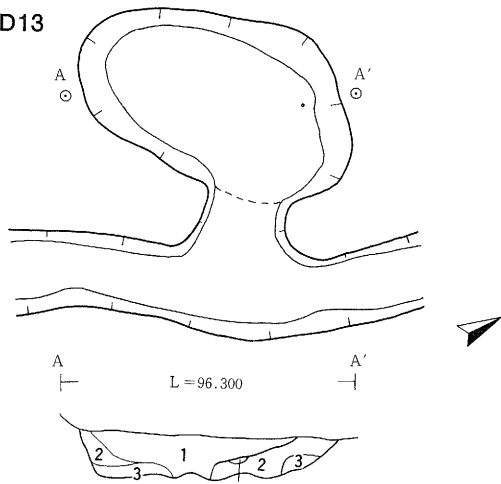
R D 16 (図版第17・20図、写真図版11・20図)

調査区Ⅱ区南西部の標高のやや高い区域、グリット18f・gで検出した。R A 02から北西に8 mほど離れる。検出面は礫を多く含む褐色土下である。

規模・平面形は、開口部径3 m 32cm×1 m 21cm、底部径1 m 37cm×0 m 42cmの東西に伸びる楕円形で、断面形は逆台形のピーカー状で、南側壁が急激に落ち込む。開口部に比べて底部が極端に狭い。深さは南壁側が最大で76.5cmを計り、全体の平均は70.8cmである。

埋土は、やや礫を含む黒褐色土を中心に、壁際に暗褐色土の堆積が見られる。

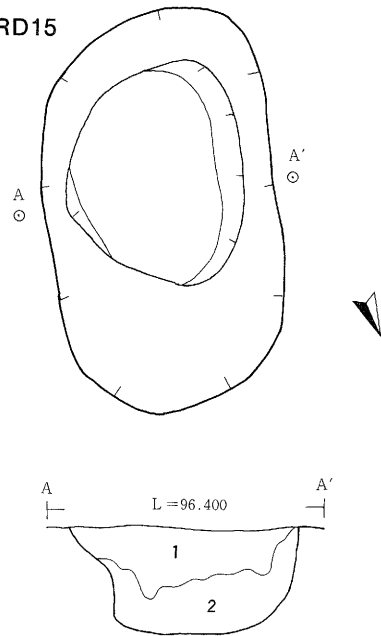
RD13



RD13

- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり 固くしまる
- 2 10Y R2/3黒褐色土と10Y R5/8黄褐色土との混合土 粘性ややあり 固くしまる
- 3 10Y R4/6褐色土 粘性なし(砂質) しまりあり 小礫10%含む

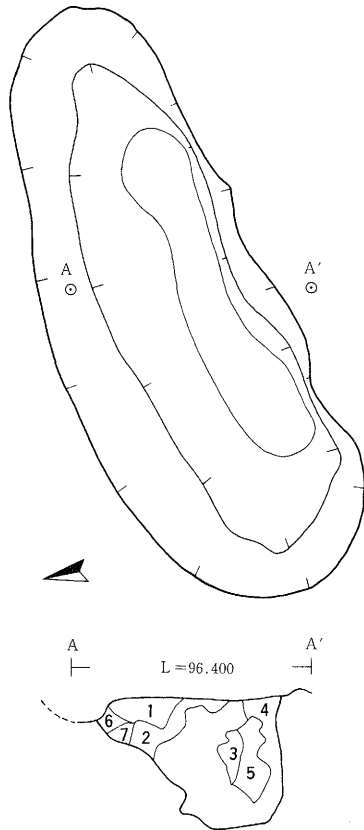
RD15



RD15

- 1 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりなし
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし 礫含む(30%)

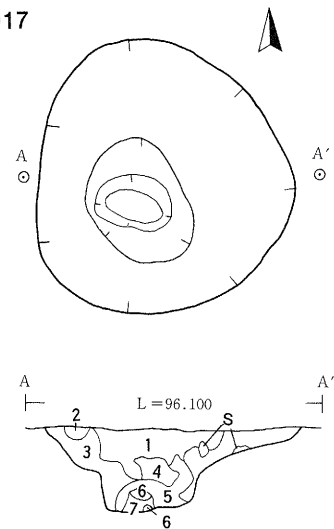
RD16



RD16

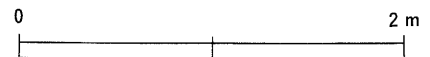
- 1 10Y R3/2黒褐色土 粘性ややあり しまりなし
- 2 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
- 3 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりあり
- 4 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりなし
- 5 10Y R2/3黒褐色土 粘性あり しまりなし
- 6 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりなし
- 7 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりあり

RD17

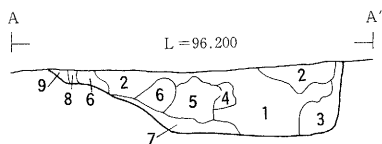
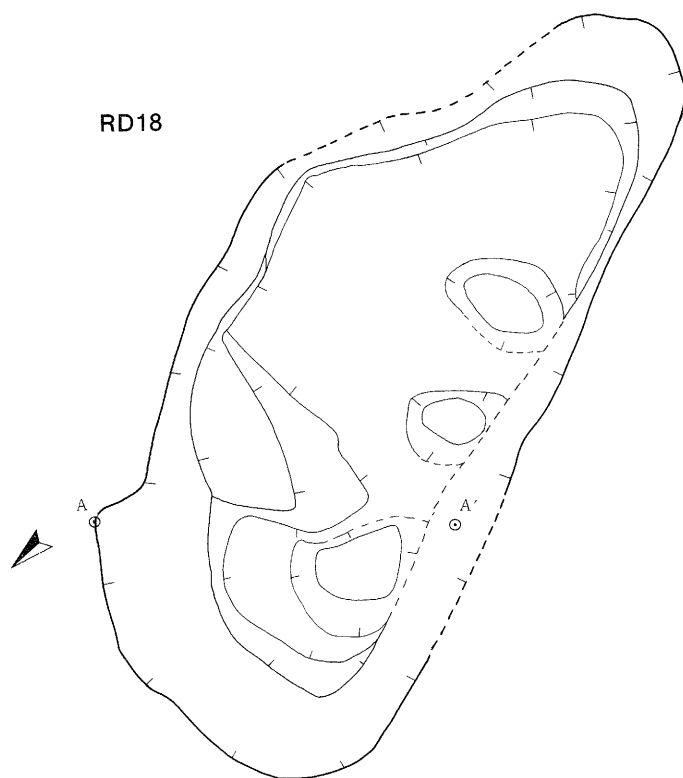


RD17

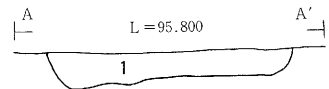
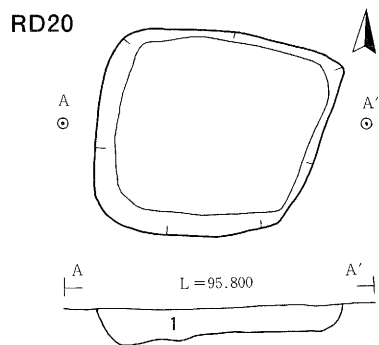
- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりややあり
- 2 10Y R5/8黄褐色土 粘性なし しまりあり
- 3 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりあり 黒褐色土(10Y R2/2) まばらに含む(20%)
- 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
- 5 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 砂状の黄褐色土(10Y R5/8) 含む(20%)
- 6 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりあり 砂状の黄褐色土(10Y R5/8) 含む(50%)
- 7 10Y R5/8黄褐色土 粘性なし(砂質) しまりなし



第17図 RD13~RD17

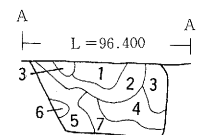
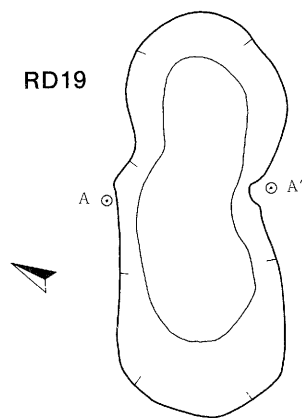


- RD18
- 1 10Y R2/1黒色土 粘性ややあり しまりなし
 - 2 10Y R2/3黒褐色土 粘性全くなし しまりややあり
 - 3 10Y R2/2黒褐色土 粘性あり しまりややあり 礫含む
 - 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりあり
 - 5 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 6 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし
 - 7 10Y R5/8黄褐色土 粘性なし(砂) しまりなし
 - 8 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし
 - 9 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし



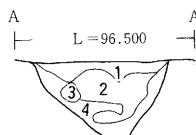
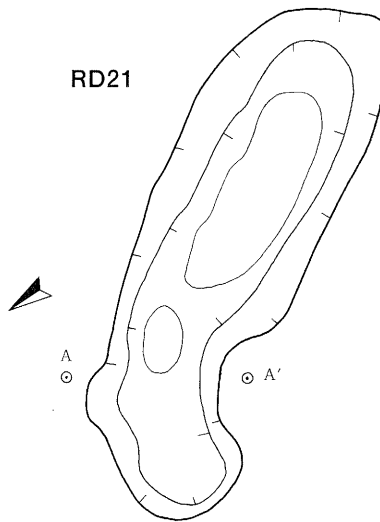
- RD20
- 1 10Y R2/3黒褐色土 粘性ややあり しまりあり
黄褐色土 (10Y R5/8) まばらに含む (10%)

RD19

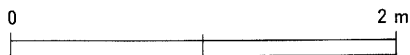


- RD19
- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性あり しまりあり 小礫含む (30%)
 - 2 10Y R2/3黒褐色土 粘性あり しまりややあり
 - 3 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし 礫含む (10%)
 - 4 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりまったくなし 礫含む (20%)
 - 5 7.5Y R5/8暗褐色土 粘性なし しまりなし 礫含む (50%)
 - 6 7.5Y R8/8黄褐色土 粘性なし しまりなし 礫含む (50%)
 - 7 7.5Y R7/8橙褐色土 粘性なし しまりなし 礫含む (70%)

RD21



- RD21
- 1 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性なし かたくしまる
 - 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 3 10Y R4/4褐色土 粘性なし かたくしまる
 - 4 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし



第18図 RD18~RD21

出土遺物は、礫石器が2点出土している。5はくぼみ石、6は石斧で埋土3層黒褐色土からの出土である。時期は、縄文時代である可能性が高い。

R D 17 (図版第17図、写真図版11)

調査区Ⅱ区東部のグリット19kで検出した。R A 02の東側の煙だしピットに近接するR D 18と重複する。細かい砂質の褐色土での検出である。

規模・平面形は、開口部径1 m 45cm×1 m 27cm、半ば径67cm×50cm、底部径30cm×30cmの、真円形で断面形は、中段まではなだらかに落ち込むが底部まではまっすぐ落ちる柱穴状である。深さは開口部から柱穴状の底場まで最大で42.5cmを計り、半ばから底部までは30.3cmである。

埋土は、中心に黒褐色土を壁側に褐色土をもつ。下部には砂質の混合土がある。

出土遺物はない。これを柱穴とするならば、R A 02や次に述べるR D 18との関連性を考えねばならないが根拠がない。

R D 18 (図版第18図、写真図版11)

調査区Ⅱ区東部のグリット19kで検出した。R A 02の東側の煙だしピットに近接する。R D 17と重複するが新旧は判別しない。礫を含む褐色土での検出で、R A 02検出面と同じである。

全体の規模・平面形は開口部径4 m 38cm×1 m 90cm、底部径3 m 50cm×1 m 42cmの楕円形で、断面形は逆台形状である。深さは、南壁で41cm、北壁で38.3cmを計る。底面に3基の柱穴状のくぼみを持つ。

北から順にa・b・c穴とし、各々の《開口部・底部・深さ》の平均を比べると次のようになる。(単位cm)

a穴《54・35・23》 b穴《42・25・42》 c穴《60・43・26》。これら、3基の柱穴状のくぼみはR A 02の煙だしピットの東側に並ぶように配列されている。

埋土は、柱穴状のくぼみ周辺に中心に黒色土を持ち、カマドに近い西壁に黒褐色土、カマドの反対側に褐色土や瓦礫を含む黄褐色土をもつ。a・b・c穴の埋土はすべて黒色土の単層である。人為的な堆積と思われるが判然としない。

出土遺物はない。埋土状況などからR A 02と時期を同じくするものと思われる。その観点から、この3つの柱穴状のものを含むR D 18は、カマドの周辺のなんらかの施設のものと考えられるが、根拠に乏しい。

R D 19 (図版第18図、写真図版11)

調査区Ⅱ区中央部のグリット16kで検出した。R D 16の南4 mに位置し、検出面は、R D 15・16と同じ礫を含む褐色土下である。重複はない。

規模・平面形は、開口部径2 m 16cm×78cm、底部径1 m 53cm×52cmの中央部にくぼみをもつ瓢箪状の楕円形状で、断面形は逆台形状である。北壁に比べて南側壁が垂直に落ち込む。深さは南壁で最大42.5cmを計る。埋土は、黒褐色土の下部に褐色土のある自然堆積で、下部に礫を多く含む黄褐色土がある。

出土遺物はない。時期は検出面が同じR D 16と同じ形状と埋土状況から縄文時代の可能性がある。

R D 20 (図版第18図、写真図版12)

調査区Ⅱ区北部の沢跡と思われる区域グリット13 lで検出した。厚く堆積した黒色土の下、砂質の黄褐色土が検出面である。周囲には開口部径20cm深さ20cm程度の柱穴が並ぶ。

規模・平面形は、開口部径 1 m 20cm × 1 m 15cm、底部径 1 m 03cm × 95cm の台形状で、断面形は皿状である。深さは最大で西壁際 24cm を計るが全体的に浅い。

埋土は、礫を含む黒褐色土の単層でしまりがよい。出土遺物はない。時期は不明である。

R D 21 (図版第18図、写真図版12)

調査区Ⅲ区の南端グリット 27・28 f で検出した。礫の混じる褐色土での検出である。

規模・平面形は、開口部径 2 m 65cm × 90cm、底部径 1 m 48cm × 39cm の溝状に延びる楕円形で、断面形は皿状である。深さは南壁際が最大で 51.7cm を計るが細く延びる南西側は全体的に浅い (20cm 程度)。

埋土は、中央に暗褐色土、下部に褐色土をもつ自然堆積である。

出土遺物はない。時期は縄文時代と思われるが、判然としない。

R D 22 (図版第19図、写真図版12)

調査区Ⅲ区の南西端グリット 25 c で検出した。R A 01 から南へ 50cm ほど離れる。重複はない。Ⅲ区に残る暗褐色土での検出である。

規模・平面形は、開口部径 2 m 76cm × 1 m 62cm、底部径 1 m 62cm × 67cm の楕円形で、底面の中央部に直径 30cm 程度の円形のくぼみをもつ。断面形は西側に比べて東側がやや緩やかに落ち込む皿状である。深さは西壁側が最大で 109.4cm を計り、平均でも 80cm の深さをもつ。

埋土は、暗褐色土と黒褐色土の人為的堆積と思われる。

出土遺物はない。時期は不明であるが、埋土状況などから R A 01 と同時期とも考えられるが、判然とせずまたそれ以前の遺構とも考えられる。

カマド状土坑 (図版第19図、写真図版12)

調査区Ⅲ区の南西端グリット 25 c で検出した。R A 01 床面南側に位置し、床面精査中に検出した。当初は貼床と思われたが、埋土状況から時期は住居跡より新しいと判断、その土坑から西側に煙道状の遺構が確認されたが、カマドとしての機能には不完全で、よってカマド状土坑とした。R A 01 の柱穴 P 1 を切る。

規模・平面形は、切られている P 1 を含めて開口部径 1 m 73cm × 1 m 50cm 程度、底部径 1 m 56cm × 1 m 10cm の真円形で、断面形は皿状で、深さは 20~25cm を計る。西側に長さ 2 m 30cm、幅 20cm、深さ 5cm ほどの溝が見られる。溝の西端に開口部径 25 × 25cm 深さ 10cm 程度のピットが存在する。

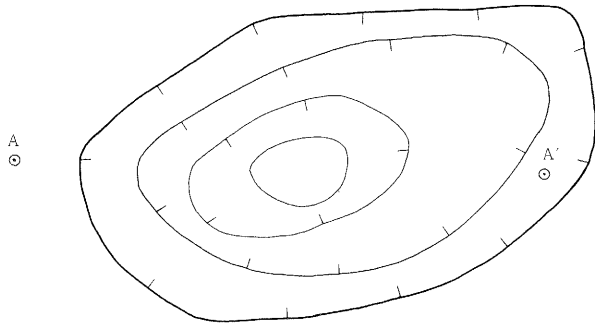
埋土は、砂質の黒色土と黄褐色土が中心で一部焼土が含まれる。

出土遺物は、上位から R A 01 のカマド近くで出土した甕 (第 9 図 3) の破片が出土した。時期はこの住居跡よりは新しいがさほど時がたっていないのではないと思われる。まだ床面が存在していた時になんらかの施設 (カマド?) が存在していた可能性がある。

② 柱穴・柱穴状ピット

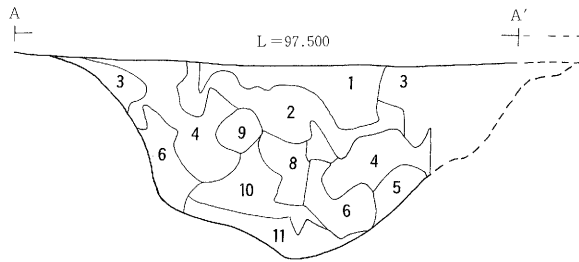
柱穴もしくは柱穴状ピットは大小かわからず、通し番号で P P 1 ~ 76 まで登録した。そのうち調査の便宜上 P P 40 ~ 49 は登録していない。また、前述したように P P 10 は R D 22、P P 50・51 はそれぞれ陥し穴に変更している。すなわち、柱穴・柱穴状ピットの検出数は 62 基となる。ここでは、A Ⅲ区南側、B Ⅱ

RD22

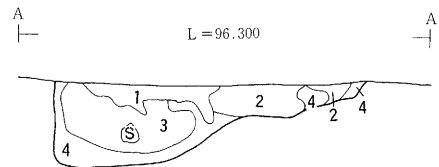
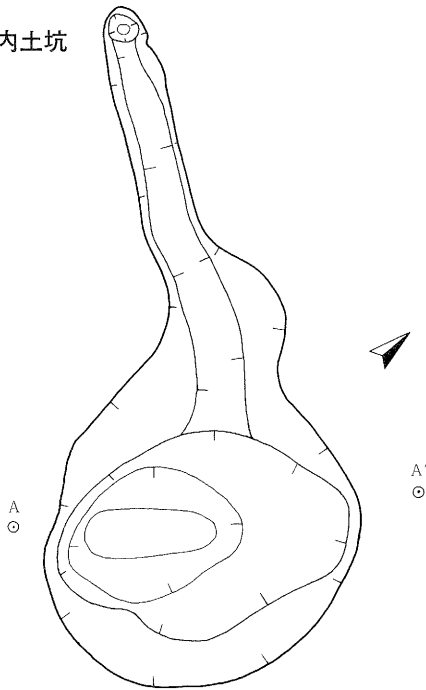


RD22 (PP10あらため)

- | | | | |
|----|--------------|--------|---------|
| 1 | 10Y R3/3暗褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 2 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 3 | 10Y R4/6褐色土 | 粘性なし | しまりややあり |
| 4 | 10Y R3/4暗褐色土 | 粘性あり | しまりなし |
| 5 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりなし |
| 6 | 10Y R2/2黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 7 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりややあり |
| 8 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりあり |
| 9 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性ややあり | しまりややあり |
| 10 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性あり | かたくしめる |
| 11 | 10Y R2/3黒褐色土 | 粘性あり | しまりあり |

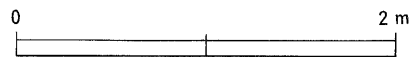


RA01内土坑



RA01内カマド状土坑

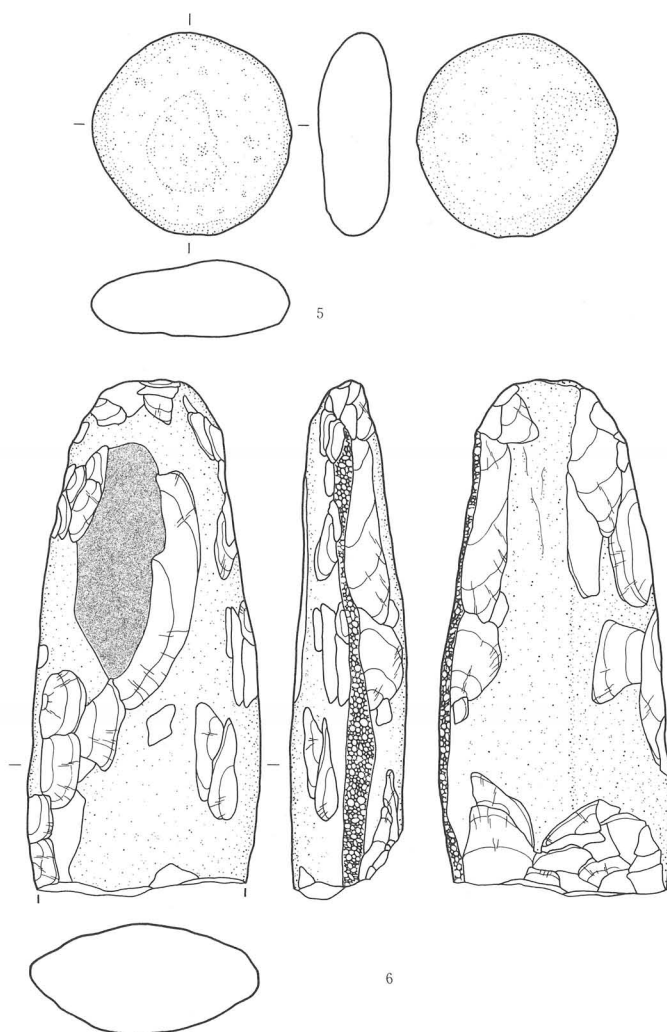
- | | | | | |
|---|------------------------------|--------------|---------------|---------|
| 1 | 10Y R2/1黒色土と10Y R3/4暗褐色土の混合土 | 10Y R5/8黄褐色土 | まばらに含む | 砂質 |
| 2 | 10Y R2/1黒色土と10Y R5/8黄褐色土の混合土 | | | 砂質 |
| 3 | 10Y R3/4暗褐色土 | 粘性ややあり | しまりややあり | |
| 4 | 10Y R5/8黄褐色土 | 砂質 | 5 Y R4/8赤褐色焼土 | ブロックで含む |



第19図 RD22 カマド状土坑



No	器種	出土地点	層位	部位	観 察	時 期
2	深鉢	RD07	埋土	口縁?	短い沈線による模様	前期 後葉?
3	深鉢			胴部	平行沈線・斜位の沈線	中期前葉・中葉



No	器種	出土地点	層位	長さ	はば	厚さ	重さ	石質(産地)等
5	すり石	RD16	埋土2層	5.4	5.3	2.0	60.00	石英質安山岩(奥羽山脈)
6	石斧	RD16	埋土2層	6.0	13.5	2.9	315.00	ホルンフェルス(北上産地) 矢沢産?

第20図 遺構内(土坑)出土遺物

区南側、C I区東側、D 沢跡 における柱穴群に別けて述べたい。

A III区南側における柱穴群 (P P 1～7: 12-16-19・21-24・26) (図版第21図、写真図版13)

この区域(グリット24・25・26・c・d・e・f)の柱穴は、P P 1を代表とする大型の柱穴とP P 26に見られるような小型の柱穴もしくは柱穴状ピットの分かれる。

P P 1はトレンチ中に検出されたものである。よって一部破壊されている。検出面は礫を含む褐色土である。開口部径は不明、底部径は65×40cmの楕円形で、深さは76cmを計る。埋土は中央に暗褐色土、下部に黒褐色土をもつ。P P 4はP P 1の北東約3mに位置する。検出面は同じ。開口部径1 m 35cm×1 m 12cm、底部径65×45cmで、深さは77cmを計る。埋土は中央部に黒褐色土をもつ。P P 6はP P 4の東2 m 30cmに位置する。検出面は、上記の2基と同じである。開口部径88×88cmで底部55×53cmの真円形で、深さは67cmを計る。埋土は中央部に黒褐色土をもつ。

黒褐色土の深く入り込んだこれらの3基は、その埋土から縄文時代の遺構である可能性があり、その規模から掘立柱建物跡と考えられるが、判然としない。

これらの回りには、大小多くの柱穴もしくは柱穴状の遺構が存在する。いずれにも出土遺物はなく、検出面は礫層か黄褐色土の砂層である。時代は不明である。

B II区南側における柱穴群 (P P 20・25・27-39) (図版第21図、写真図版14)

グリット21 f・g付近で検出された柱穴状ピットの検出面はR A 02と同じ黒褐色土の下である。明確な並びは判別できない。時期は平安時代の属するものと思われるが、判然としない。規模・平面形は表に記す。

C I区東側における柱穴群 (P P 52-55) (図版第22図、写真図版14)

グリット8・9・1・mで4基の比較的大型の柱穴4基を検出した。検出面は礫を含む褐色土の下である。平面形はいずれも真円形、規模は4基とも開口部60-80cm、底部46-60cm、深さ40-50cmで同一性が見られる。また、断面形もすべて逆台形状で、埋土は暗褐色土や黒褐色土が中心に見られる。

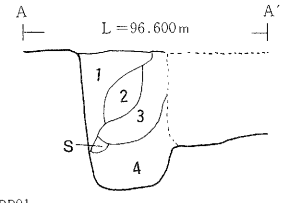
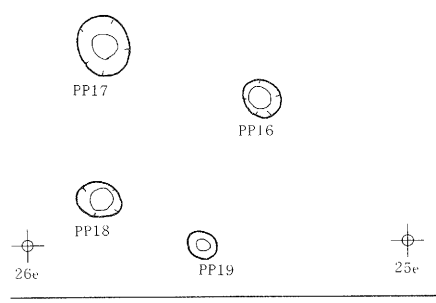
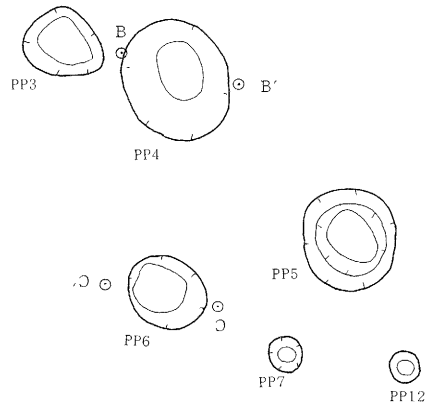
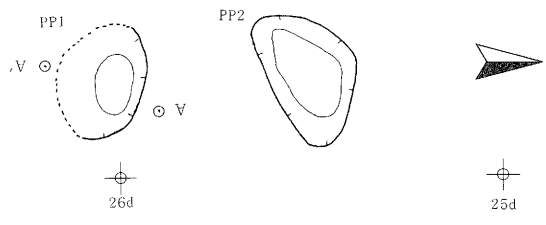
これらのことから、時期は不明だが掘立柱建物跡の柱の一部と思われる。

D 沢跡における柱穴群 (P P 56-76) (図版第22図、写真図版14)

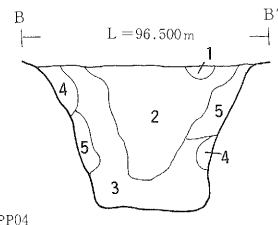
グリット12・13・1・mの沢跡と思われる区域の黒色土を除いた黄褐色土面から検出されたのが、22基の柱穴群である。いずれも小型で、平面形は真円形であることは共通しているが、開口部径16-38cm、深さ10.9-52.0cmと規模はばらばらである。埋土はすべて砂質の黒色土の単層で、一部底に礫が入る。

この柱穴群の中で、やや規則的な配列が見えるのがP P 56-66である。P P 56と58との間隔は約60cmとやや詰まるが、ほかは概ね80cm間隔で離れる。そして2列渋滞を成し、その東西の間隔は2 m-2 m 50cmである。深さは、P P 59が54cmとやや深いほかは概ね30-40cmを計る。

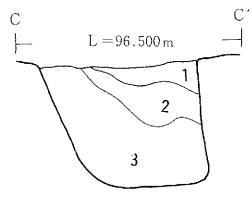
この区域は前述した通り、黒色土を除いた検出であるが、この黒色土上あるいは黒色土中には検出されていない柱穴もあると予測される。時代は新しいが、なんらかの施設(神社?)があっただろうと思われる。



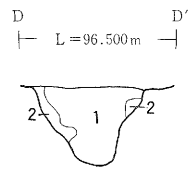
- PP01
- 1 10Y R5/6黄褐色土 粘性あり しまりややあり
 - 2 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし
 - 3 10Y R3/3暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 4 10Y R2/3黒褐色土 粘性あり しまりややあり



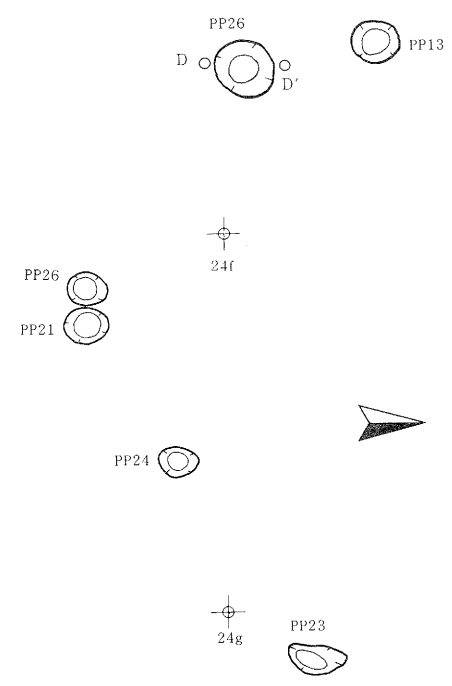
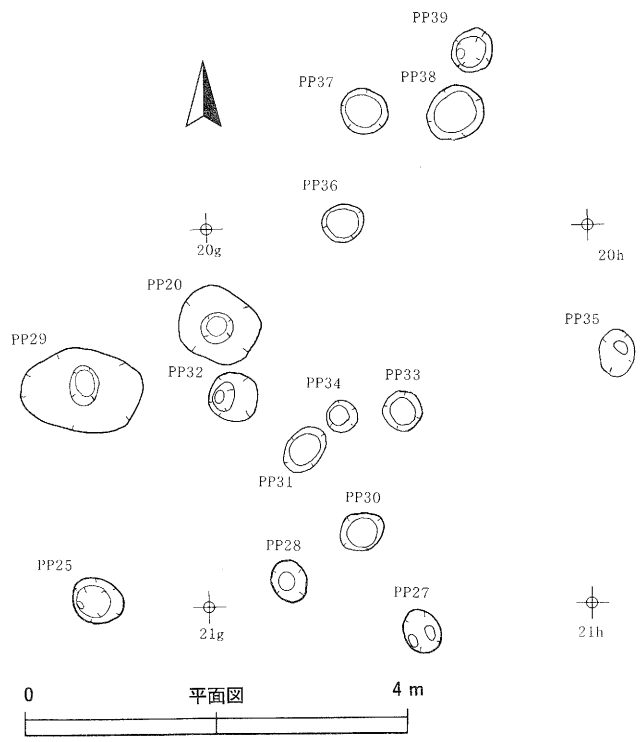
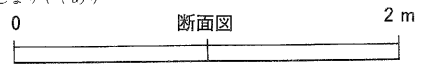
- PP04
- 1 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりややあり
 - 2 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 3 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性あり しまりややあり
 - 4 10Y R4/4褐色土 粘性あり しまりややあり
 - 5 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり



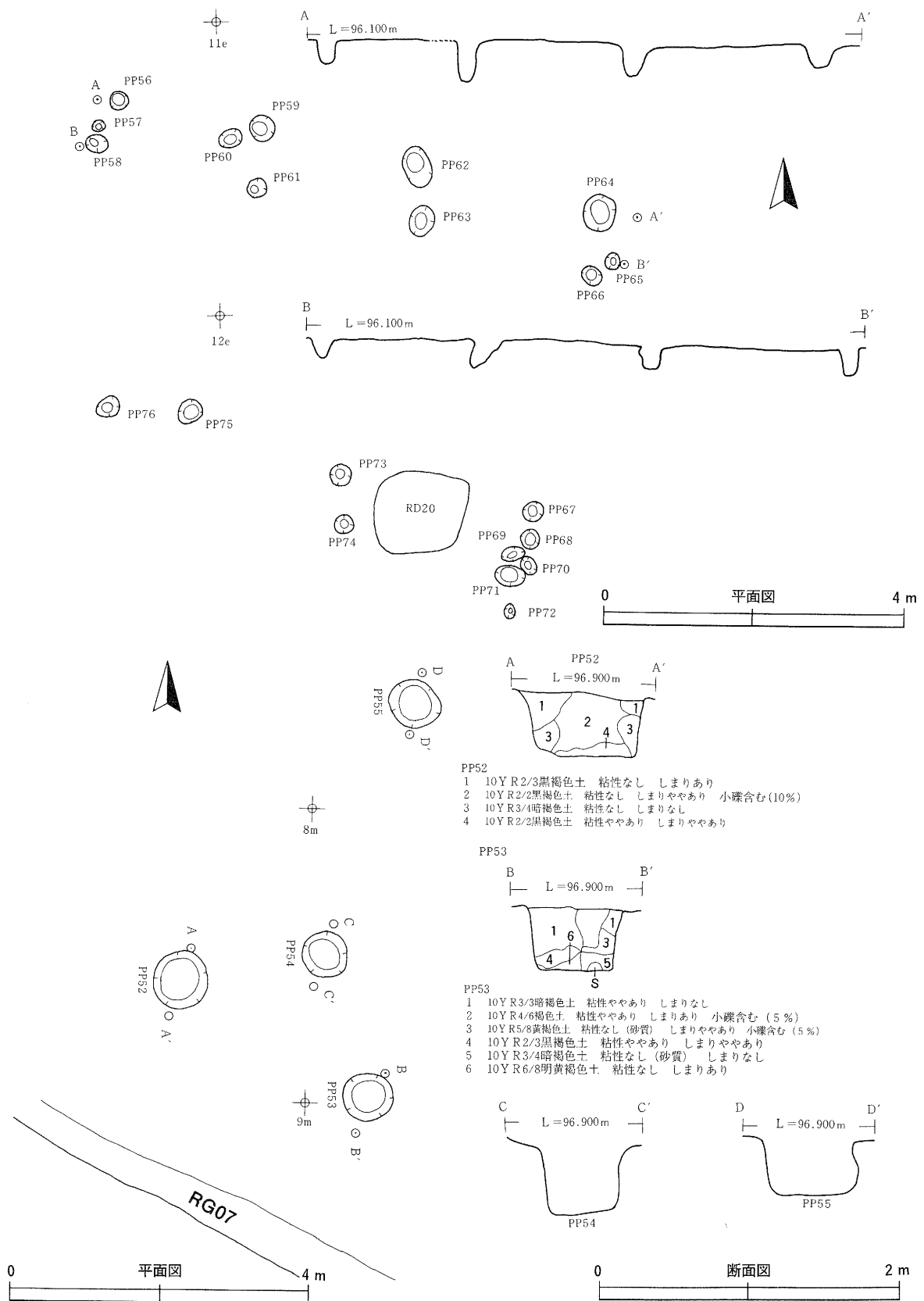
- PP06
- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 2 10Y R4/4褐色土 粘性ややあり しまりややあり
 - 3 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりややあり



- PP26
- 1 10Y R4/4褐色土 粘性なし 固くしまる
 - 2 10Y R5/8黄褐色土 粘性なし しまりあり



第21図 PP01~PP39



第22図 PP52~PP79

表1 柱穴および柱穴状ピット観察表

単位cm88×は真円もしくは真円状

番号	地点	開口部径	底部径	深さ	特筆事項
1	A	<100>	65×40	76.0	断面図
2	A	150×100	105×58	25.0	重複?
3	A	70×60	50×40	30.4	
4	A	135×112	65×45	77.0	断面図
5	A	90×90	40×40	13.8	埋土は砂質の褐色土
6	A	88×	55×	67.0	断面図
7	A	30×28	10×10	11.4	
8	A	10×10	77×	ごく浅い	RA01の南側
9	A	70×60	12×12	59.6	
10	-	-	-	-	R D 2 2 に変更
11	A	46×40	20×20	20.0	掘立柱建物跡の中
12	A	32×	20×	14.0	土器片含むが微小で判別不可能
13	A	40×	20×	22.0	
14	A	62×	36×	ごく浅い	
15	A	50×	46×	ごく浅い	R A 0 1 に関連か
16	A	40×	15×	15.0	
17	A	46×	16×	13.0	
18	A	34×	10×	14.0	
19	A	24×	13×	19.0	埋土 黒褐色土しまりあり
20	B	30×	20×	27.0	
21	A	35×	11×	9.0	埋土 暗褐色土
22	A	30×	13×	10.0	埋土 暗褐色土
23	A	30×	10×	18.0	
24	A	24×	7×	30.0	
25	B	50×	12×	34.7	
26	A	58×	30×	42.0	断面図
27	B	39×	33×	29.0	
28	B	38×	33×	36.0	埋土 黒褐色土
29	B	35×	31×	51.0	
30	B	44×	36×	18.0	
31	B	39×	33×	28.0	
32	B	50×	44×	20.0	底部に柱痕か?くぼみをもつ
33	B	43×	34×	18.0	埋土下部に礫
34	B	33×	22×	22.0	埋土下部に礫
35	B	34×	30×	22.0	埋土下部に礫

単位cm88×は真円もしくは真円状

番号	地点	開口部径	底部径	深さ	特筆事項
36	B	43×	42×	37.0	
37	B	51×	39×	17.0	埋土下部に礫
38	B	44×	40×	15.0	埋土下部に礫
39	B	44×	39×	29.0	埋土 黒褐色土
50					3号陥し穴に変更
51					4号陥し穴に変更
52	C	82×	66×	48.0	断面図
53	C	64×	50×	44.0	断面図
54	C	60×	48×	45.0	空断面
55	C	60×	48×	40.0	空断面
56	D	35×	28×	34.0	空断面 埋土、沢状跡の黒色土
57	D	14×	8×	19.5	
58	D	32×	10×	26.0	空断面
59	D	35×	20×	58.0	空断面
60	D	30×	16×	52.0	
61	D	30×	12×	36.0	空断面
62	D	53×36	26×	46.0	空断面
63	D	45×30	16×	34.0	空断面
64	D	42×	28×	33.0	空断面
65	D	24×	10×	38.0	空断面
66	D	40×25	15×	21.0	
67	D	26×	14×	28.0	
68	D	28×	14×	37.0	
69	D	33×20	15×	32.0	
70	D	28×18	8×	30.0	
71	D	38×30	23×	11.0	
72	D	15×	7×	31.0	
73	D	30×	15×	21.0	
74	D	25×	10×	16.0	
75	D	30×	20×	25.0	
76	D	28×	14×	20.0	

③溝跡

調査区域で検出された溝跡・溝状遺構は9条である。調査区Ⅰ区で検出された4条とⅡ区・Ⅲ区の西側に位置する1条は溝跡といって差し支えないであろう。残りの5条は規模も小さく、溝状遺構とする。

ここでは検出順に述べる。

R G 01 (図版第24図、写真図版15)

調査区Ⅰ区とⅡ区の最西端、グリット20dを中心として北東から南西に縦断する。規模は長さ約12mで、幅は平均北側で26cm、南側で36cmである。深さは南側で深くなり平均30cm、北側で20cm、南側の最深部は46cmある。北側は調査区外に、南側は攪乱されているが西側に延びるものと思われる。

埋土は黒褐色土の単層に近く、出土遺物はなく時期は不明であるが、住居跡よりは新しい可能性が高い。

R G 02 (図版第24図、写真図版15)

調査区Ⅱ区黒色土の堆積のある区域よりやや南側、グリット13i付近で検出した。規模は長さ3m、幅30cm、深さはごく浅く5～6cmほどである。ほぼ東西に延びる。

時期は不明である。

R G 03 (図版第24図、写真図版15)

調査区Ⅰ区の西側、グリット5i付近で検出された。規模は長さ11m以上、幅35～40cm、深さ5～10cmで、R G 01とほぼ同方向の北東から南西に縦断する。北側は削平された調査区外に、南側は浅くなっており判然としないが、R G 04に接続する可能性もある。

埋土は黒褐色土中心である。出土遺物は、南西北壁の土坑状の黒褐色土中から縄文時代晩期中葉（大洞C2式？）のほぼ完形品の深鉢（図版第26図 写真図版17・19）が出土した。この遺構の壁を切る形で検出された土坑状の遺構の埋土から出土していることから少なくともR G 03は縄文時代晩期より新しいものである。また、埋土状況から住居跡の時期よりも新しいだろう。

後述するR G 04・07・08も同時期と予測する。

R G 04 (図版第24図、写真図版15)

調査区Ⅰ区の西側、グリット8g付近で検出された。規模は長さ約6m30cm、幅30～40cm、深さ5～10cmで、R G 03とほぼ垂直方向の北西から南東に縦断する。南側は、木根などの攪乱を受け定かではないが、R G 08に延びると思われる。埋土は黒褐色土中心である。

R G 05 (図版第24図、写真図版16)

調査区Ⅱ区の北側、グリット15kで検出された。R D 16の南1mに位置する。規模は長さ約1m60cm、幅28～34cm、深さ5cm程度で、北西から南東に延びる。

埋土は黒色土の単層である。出土遺物はなく、時期も不明である。

R G 06 (図版第24図、写真図版16)

調査区Ⅱ区の中央、グリット18jで検出された。R A 02の北東壁から約2m北方に離れたところに位置する。規模は長さ4m以上、幅40～70cm、深さ10～30cm程度で、北西から南東に延びる。

埋土は砂状の褐色土中心である。出土遺物はなく、時期も不明であるが、住居跡との関連性も考えられる。

R G 07 (図版第24図、写真図版16)

調査区Ⅰ区の西側、グリット9 k付近で検出された。規模は長さ12m以上、幅35～45cm、深さ5～10cmで、R G 04と同方向の北西から南東に縦断する。北側は、木根などの攪乱を受け定かではないがR G 04に延び、南側も調査区外に延びるものと思われる。

埋土は黒褐色土中心である。

R G 08 (図版第24図、写真図版16)

調査区Ⅰ区の西側、グリット9 k付近で検出された。R G 07から西側に1 m 50cm並行に離れたところに位置する。規模は長さ16m、幅30～50cm、深さ5～10cmで、同方向の北西から南東に縦断する。北側は、浅くなっており延長するかはわからないが、南側は調査区外に延びるものと思われる。

埋土はR G 03・R G 04・R G 07と同様である。

R G 09 (図版第25図、写真図版17)

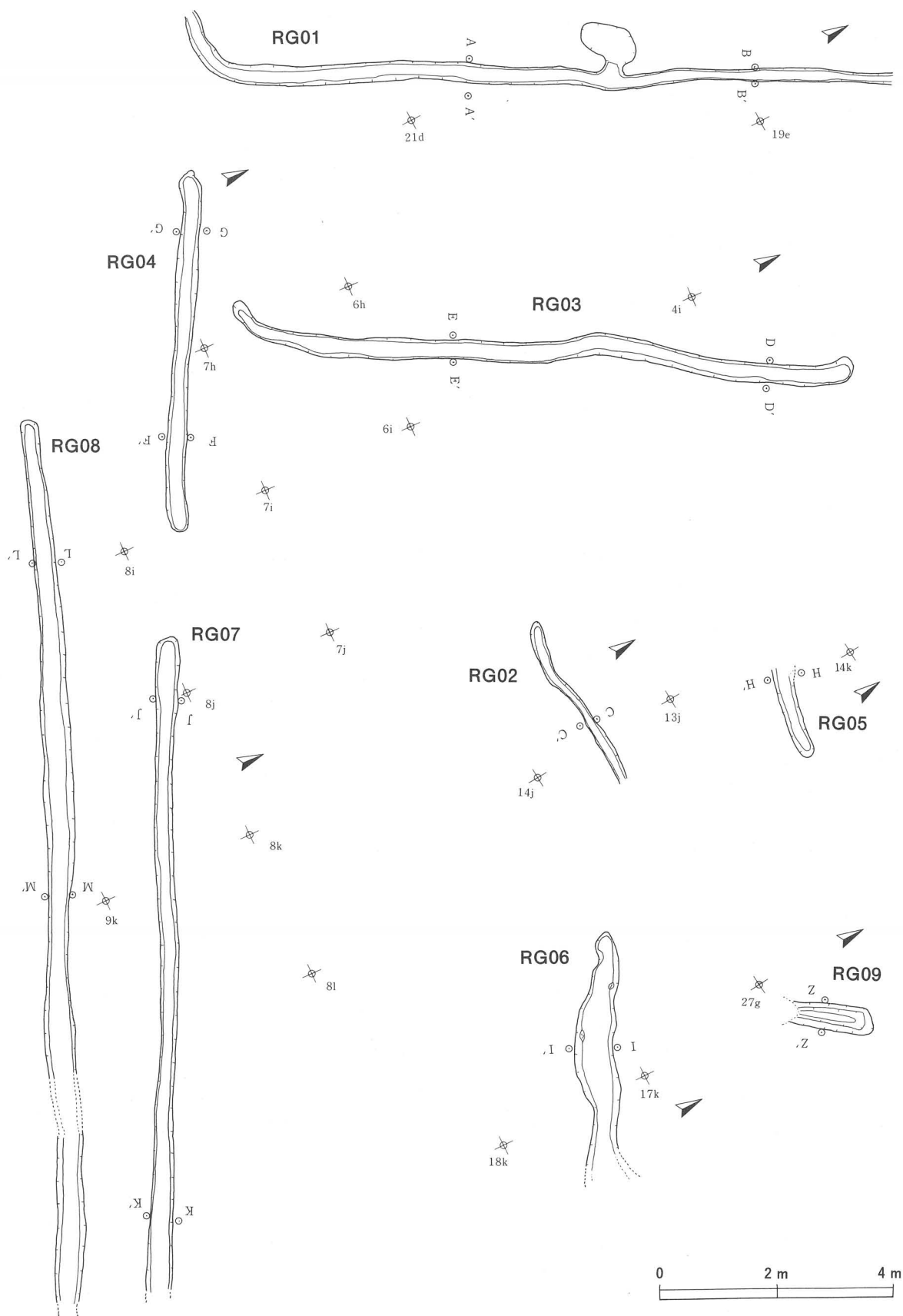
調査区Ⅲ区の南東端、グリット27 gで検出された。R D 21に近接する。褐色土の礫を除いたⅢ層での検出である。

規模は南側が切られていて、残存径は長さ2 m 35cm、幅70cm、深さ35cm程度で断面形は逆台形状を呈す。埋土は褐色土中心の自然堆積で、時期は不明である。

④掘立柱建物跡 (図版第25図、写真図版17)

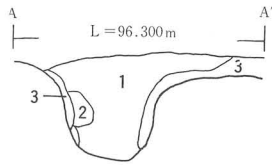
調査区Ⅲ区最西端、グリット24 bで検出した。R A 01の西側に位置し、検出面は礫を含む褐色土下である。一部削平されているが、検出された規模は1間(1 m 80cm)×2間(3 m 60cm)程度で、全体像は定かではない。柱穴の平面形は開口部が40～55cm、深さは25～55cmである。柱穴の一つには柱が残る。

埋土は礫を含み、時期的には新しいと思われる遺構である。



第23図 溝跡平面図

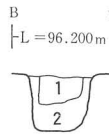
RG01南A



RG01 南A

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりややあり
- 2 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 3 10Y R5/6黄褐色土 粘性なし しまりなし

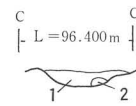
RG01北B



RG01 北B

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 2 10Y R4/2灰黄褐色土 粘性あり しまりあり

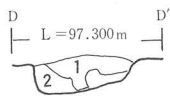
RG02



RG02

- 1 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性なし しまりあり
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりなし

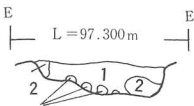
RG03北



RG03 北

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性なし しまりややあり 礫含む(30%)

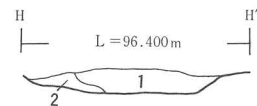
RG03南



RG03 南

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 2 10Y R3/4褐色土 粘性ややあり しまりややあり

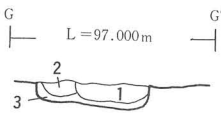
RG05



RG05

- 1 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりなし 小礫混じる(10%)
- 2 7.5Y R5/6明褐色土 粘性なし しまりなし

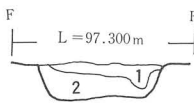
RG04東



RG04 東

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややなし しまりややあり
- 2 10Y R2/3黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 3 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性なし しまりややあり

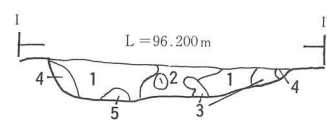
RG04西



RG04 西

- 1 10Y R3/2黒褐色土 粘性なし しまりなし
- 2 7.5Y R5/6明褐色土 粘性ややあり しまりなし 礫含む(50%)

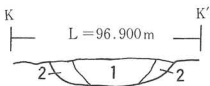
RG06



RG06

- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややなし しまりややあり
- 2 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性なし しまりややあり
- 3 10Y R5/6黄褐色土 粘性なし しまりややあり
- 4 10Y R4/6褐色土 粘性なし しまりややあり
- 5 10Y R5/4にぶい黄褐色土 粘性なし しまりなし

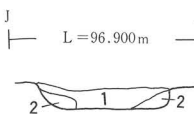
RG07西側



RG07 西

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややなし しまりなし
- 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややなし しまりなし

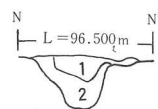
RG07東



RG07 東

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりなし 小礫混入
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性ややあり しまりなし

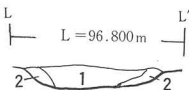
RG09



RG09

- 1 10Y R3/4暗褐色土 粘性ややなし しまりあり
- 2 10Y R4/4褐色土 粘性ややあり しまりややあり

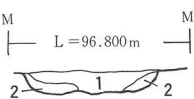
RG08東



RG08 東

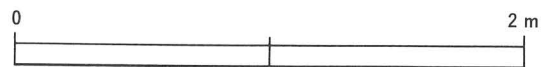
- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややあり しまりなし 小礫混入
- 2 10Y R4/6褐色土 粘性ややあり しまりなし

RG08西

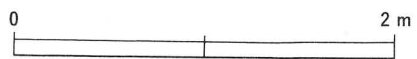
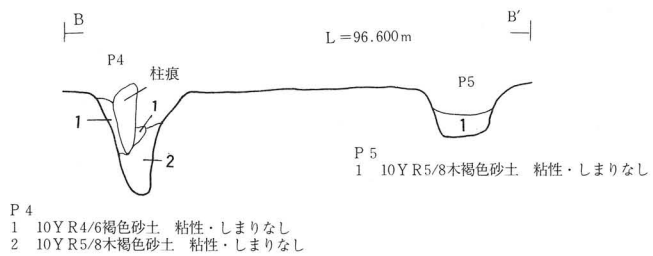
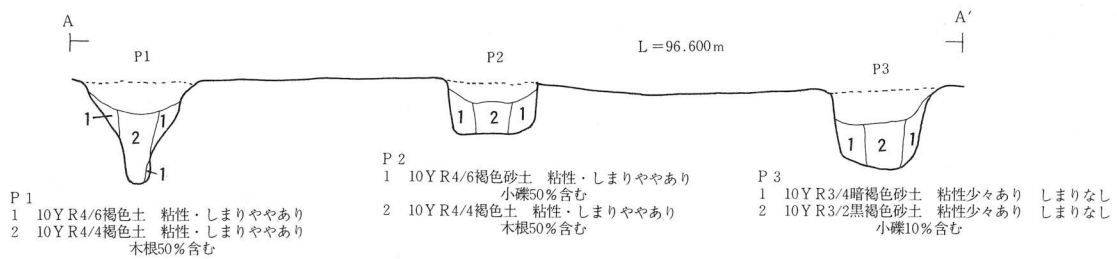
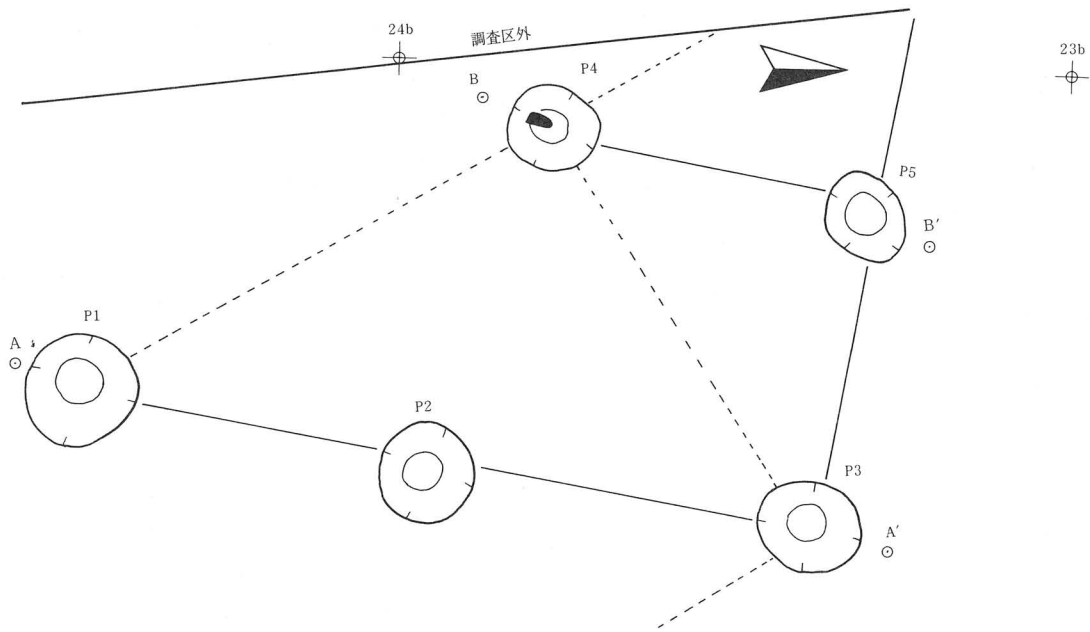


RG08 西

- 1 10Y R2/2黒褐色土 粘性ややなし しまりなし
- 2 10Y R3/4暗褐色土 粘性なし しまりなし



第24図 溝跡 断面図



第25図 掘立柱建物跡

5. 遺構外の出土遺物

遺構外からは土器では縄文土器片9点、縄文土器完形品1点、石器は剥片石器・フレークなど小コンテナ0.5箱、その他では陶器片2点、古銭1点出土した。ここでは、石器は完成品を中心に21点、縄文土器やその他は出土したすべての遺物を取り上げる。

(1)縄文土器 (図版第26図、写真図版19)

1から9の土器片の内、1～4と6・7は調査区のⅢ区の検出面（R A01の埋土上位を含む）もしくは縦穴状と命名した区域（最終的にはくぼ地）の黒色土から出土である。摩滅が激しく、また小破片のため、時期を特定するには至らず、ほとんどが?である。5・8・9はⅡ区北側の沢跡状くぼ地での出土でこちらも判別しがたい。これらは一つの時期に限られず、前期から後期または晩期にかけてのものである。R G03付近の黒褐色土中で出土した10は、小型の深鉢で外部に擦消縄文が施され、内部はていねいに磨かれている。大洞C2式と思われる。

(2)石器 (図版第27図、写真図版20)

石器の出土は縄文土器片と同じように、Ⅲ区に集中する。特にR A01の埋土1層の暗褐色土やその付近に多い。また、耕作土中や表土の上から採集したものもある。石質はすべて頁岩であり、産地は奥羽山脈・北上山地のどちらともいえず、逆を返せば、どちらでも産する種類のものである。また、石器製作の際のフレイクチップが100点あまり出土している。

◎石錐・石匙・石篋

1はその形態から石錐としたものだが作りかけか、または石鏃の可能性もある。表裏剥離調整されている。2～4は石匙であるが、2・3は完成品、4は未完成品と思われる。2は先端部破損、3は破損もなく鋭い刃をもつ。5～8は石篋で比較的完成されているように見受けられる。特に6は表裏刃部が鋭く調整されており使い勝手もよさそうである。8は上部を欠損している。

◎削器・不定形石器

9～19は削器として登録した。9は石匙の作りかけか。15は表裏両サイド刃を剥離調整している跡が見受けられ、上部を欠損していることから石匙または搔器に成る可能性もある。19は大型で削搔両方の機能を持ったものではないか。20は不定形石器として登録したが、石鋸のような刃をもつ特徴がある。それ以外の削器は粗雑な作りのものがほとんどである。

◎石核

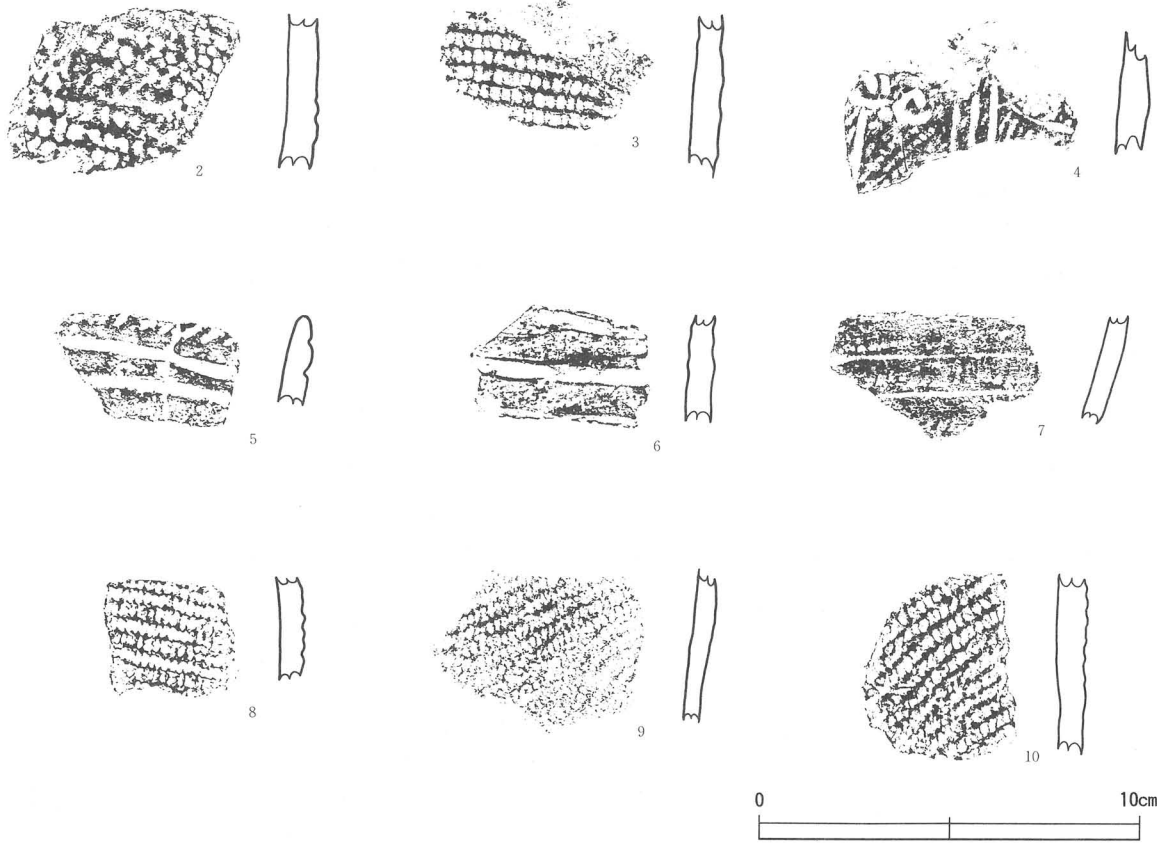
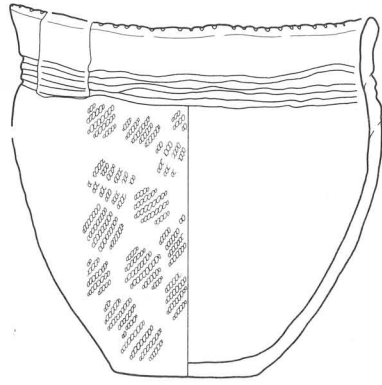
21は頁岩の石核である。残る自然面は灰褐色でその色調は上記の19や20に近い。接合できないが同一個体か、もしくは産地が同じである可能性もある。

◎その他

22は搔削器で、表土からの採集である。摩滅も激しく、調整などは定かではない。このような石器が表採されており代表として取り上げた。

(3)陶器・古銭 (図版第29図、写真図版21)

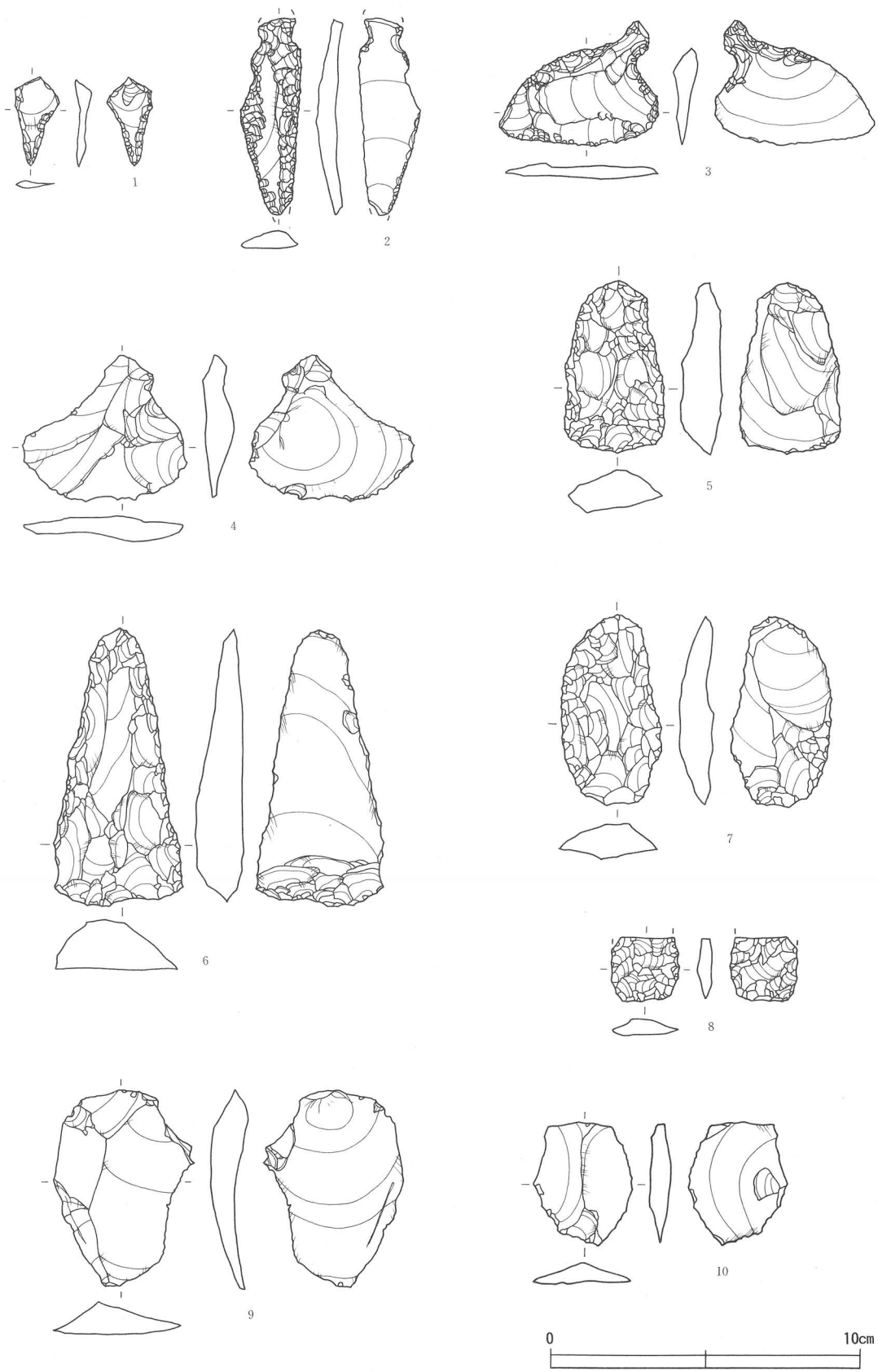
写真図版のみの掲載とした。23・24の陶器は19世紀の（江戸時代の）現地産のものであろう。花巻周辺の窯でつくられた可能性もある。25は永楽通寶で腐食が激しい。



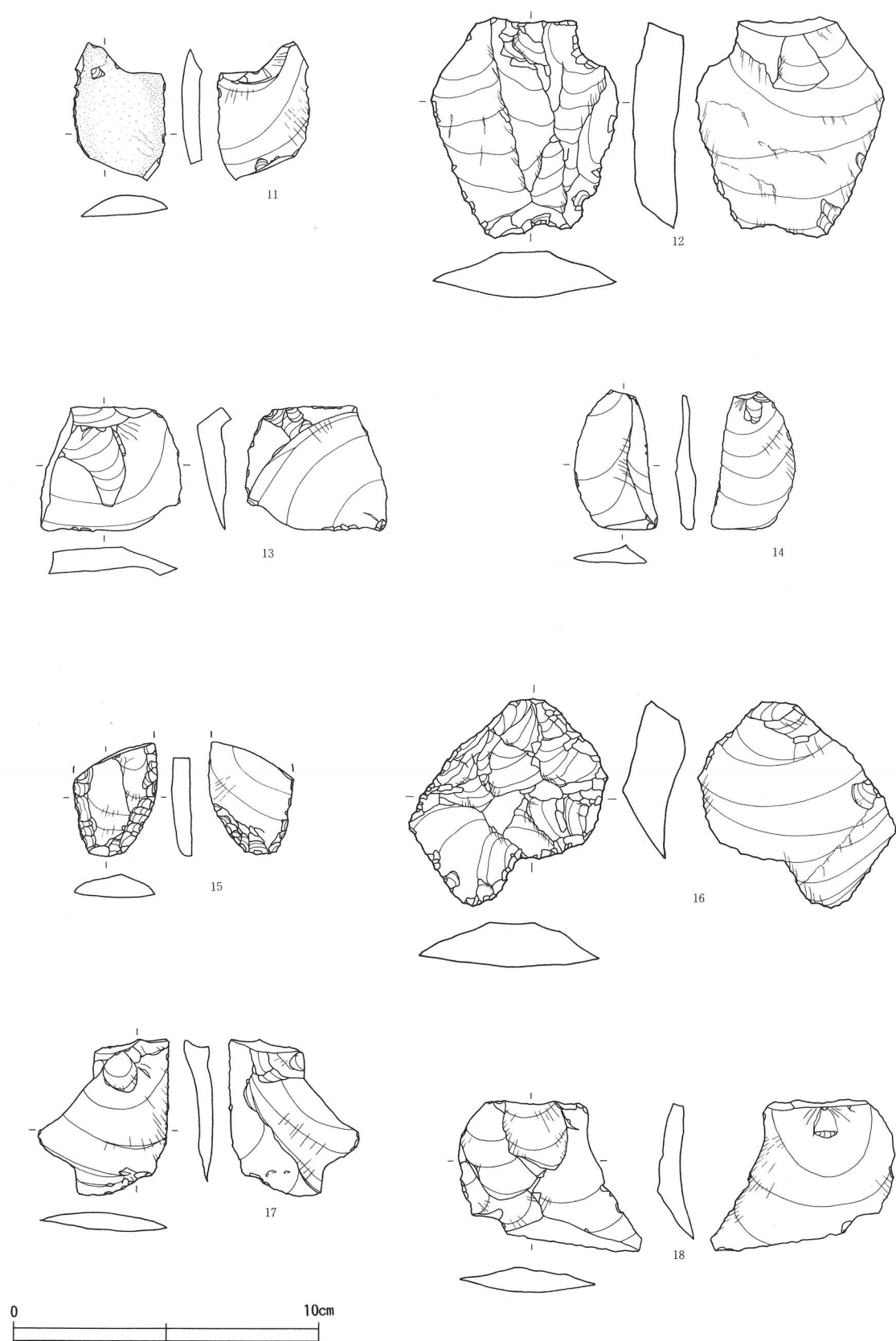
縄文土器観察表

No	器種	出土地点	層位	部位	口径	底部	器高	観察	時期
1	深鉢	RG03南壁 土坑状穴	黒褐色土		(14.4)	5.8	14.8	口頸部に3本の並行沈線、口部ややくびれ縁やかに外反 体部に擦消縄文、内部磨き	晩期中葉 大洞C2式?
2	深鉢	24・25c.d	検出面	胴部				摩滅が著しい	前期?
3	深鉢	24・25c.d	検出面	内縁-胴部				摩滅が著しい	前期?
4	深鉢	27f	排出面	口縁				線描文様、焼成よし	中期 前葉?
5	深鉢	壺穴状	黒色土中	口縁				並行沈線 口唇部に刻目文	中期 中葉か?
6	深鉢	13j	II層	口縁				半蔵竹管による並行(?)な沈線・内面ハケメ	後期
7	深鉢	24・25c.d	検出面	胴部?				不明瞭な細い並行沈線	晩期?
8	深鉢	壺穴状	黒色土中	胴部				単節斜行縄文(RL)	不明
9	深鉢	13j	II層	口縁?				単節縄文(RL)	不明
10	深鉢	沢跡	黒色土中	胴部				単節斜行縄文(LR)	不明

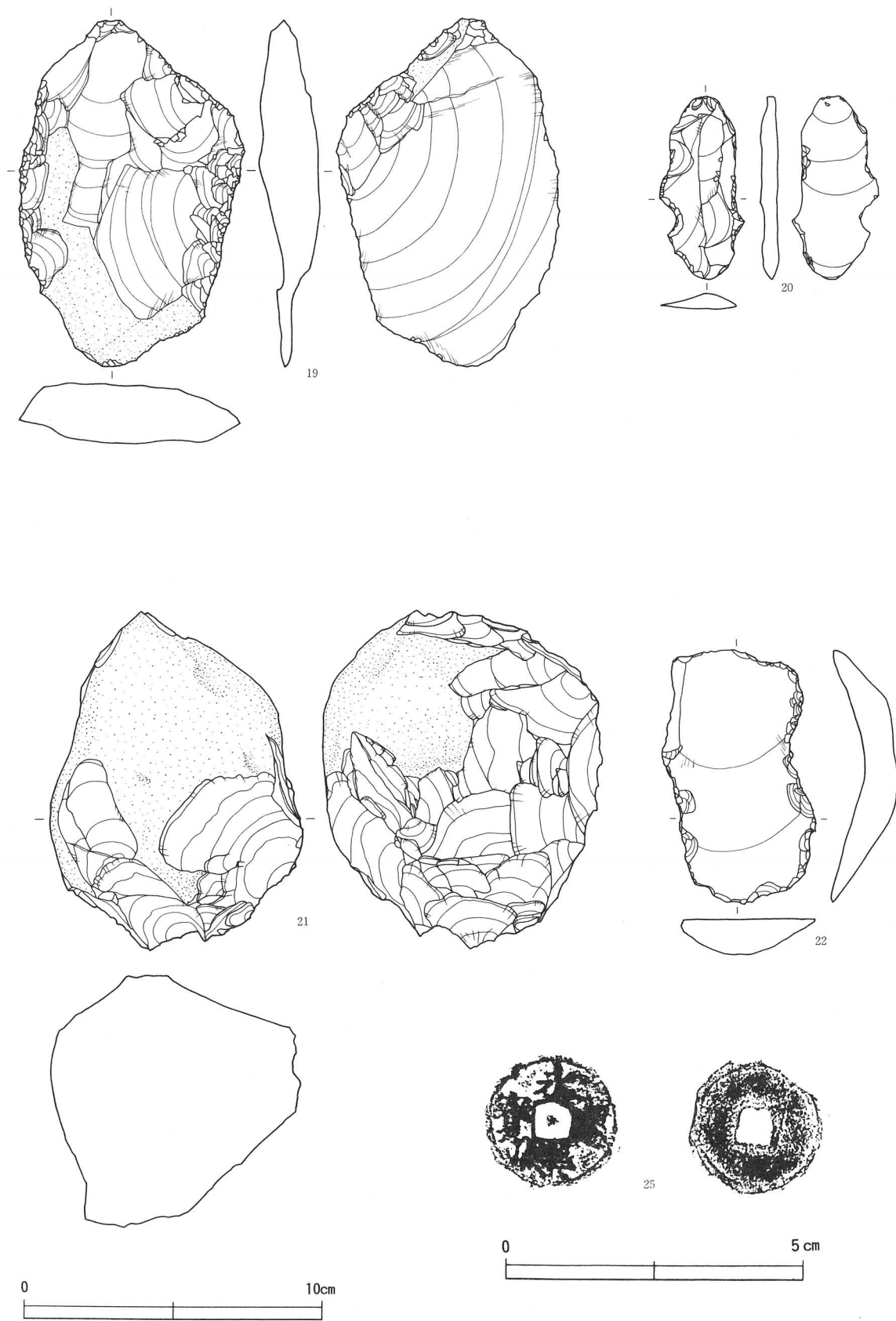
第26図 遺構外出土遺物(1)土器



第27図 遺構外出土遺物(2)石器



第28図 遺構外出土遺物(3)石器



第29図 遺構外出土遺物(4)石器 古銭

遺構外石器 その他観察表

図判	機種	出土地点	層位	長さ	はば	厚さ	重さ	石質（産地）等
1	石錐	2 2 j	Ⅱ層	2.9	1.5	0.5	1.15	頁岩
2	石匙	基2(2 1 j)	Ⅲ層	6.4	1.95	1.2	6.89	頁岩
3	石匙	トレンチ南	Ⅱ層	4.1	5.1	1.4	10.74	頁岩
4	石匙	RA 0 1	埋土1層	4.8	5.3	1.2	15.38	頁岩
5	石篋	竪穴状 25g	埋土1層黒色土中	5.6	5.3	1.4	22.45	頁岩
6	石篋	RA 0 1	埋土1層	9.0	4.1	1.6	55.29	頁岩
7	石篋	2 5 j	Ⅰ層	6.2	3.2	1.2	19.40	頁岩
8	石篋	RA 0 1	埋土1層	2.1	2.2	0.5	2.33	頁岩
9	削器?	RA 0 1	埋土1層	6.4	4.6	1.6	23.56	頁岩
10	削器	RA 0 1	埋土1層	4.0	3.2	0.7	5.90	頁岩
11	削器	RA 0 1	埋土1層	4.5	3.0	0.6	9.69	頁岩
12	削器	RA 0 1	埋土1層	7.3	6.1	1.7	60.48	頁岩
13	削器	竪穴状	埋土黒色土	4.1	4.6	0.8	18.95	頁岩
14	削器	沢跡	黒色土中	4.6	2.8	0.6	6.21	頁岩
15	削器	沢跡	黒色土中	3.7	2.7	0.75	8.32	頁岩
16	削器	2 3 h	Ⅰ層	6.8	6.4	2.0	43.44	頁岩
17	削器	2 2 j	Ⅰ層	5.1	4.2	0.8	15.04	頁岩
18	削器	2 7 c	Ⅱ層	5.0	6.0	0.8	22.63	頁岩
19	削器	2 8 f	表採	11.7	7.5	2.1	159.17	頁岩
20	削器?	RA 0 1	埋土1層	6.2	2.9	0.6	11.16	頁岩
21	石核	2 3 d	Ⅱ層	11.4	8.55	9.4	930.00	頁岩
22	搔器	2 2 i	表採					摩滅著しい

その他

図判	機種	出土地点	層位	長さ	重さ	観察
25	古銭	トレンチ 2	Ⅱ層			腐食激しい 永楽通寶か

6. まとめ

東北横断自動車道釜石秋田線建設に伴う狼沢Ⅱ遺跡の発掘調査では、縄文時代や平安時代の遺構や遺物が確認された。特に平安時代の竪穴住居跡の存在はこの区域ばかりではなく、花巻市における古代の生活を考えるに当たってよい資料になりえるものと思う。ここでは、各々の時代の遺構を中心に若干の考察を述べ、まとめとしたい。

縄文時代

縄文時代の遺構としては、4基の陥し穴が検出された。これらは逆茂木痕の備わった大型のもので、東西にほぼ直線的に配列されている。1基の埋土から縄文土器片が出土しているがその時期は判別しがたく、また、この縄文土器片を含む層が盛土である可能性を持つことから特定することはできない。しかし、この区域が縄文時代頃の狩りの場であったということは言えるであろう。

その他、縄文時代と思われる土坑・柱穴等も検出されたが、埋土状況や土器片の出土状況に確信が持てないものが多い。調査区Ⅲ区で検出された大型の柱穴群・Ⅱ区の北側のR D16とそれに類似する土坑がそれに当たる。その中の一つに北側で検出された溝跡がある。この溝跡の壁に切られた土坑状の埋土から縄文時代の深鉢が出土しているが、その出土の状況からこの溝跡の作られた時期はこの土器（縄文晩期大洞C2式？）よりも新しいと思われるが、このような完形品が壁際の比較的浅いところで逆位で出土していることから、おそらくこの溝跡を含めた4条はこの土器の時期とさほど遠くないのものであろうと予測するが確信を持っていない。

遺構外の出土遺物として比較的多くの縄文時代と思われる石器が出土している。石鏃・石匙・石筥などは完形品があり、また大型の搔器や石核なども出土している。掲載していない不定形な石器またはフレイクやチップなども多くある。これらはほとんどが頁岩で、北上山系か奥羽山系かは定かではないが、石質が同類のものも多く含まれる。このことから、縄文時代のある時期もしくは長い間、近辺で生活していた人々にとっての狩り場あるいは採集場であったと推測する。

平安時代

平安時代の遺構としては2基の竪穴住居跡が検出された。これらはいずれも東側壁南寄りに付設されたカマドをもち、また全体の規模も大型である。また、確定はできないが柱穴と思われる配列にも類似性が見られる。しかし、カマドの形態・出土遺物・埋土状況など違いもある。

そこで、この2つの住居跡の特性を花巻市やその近辺で調査完了の遺跡または調査中の遺跡を参考に考察したい。

カマドの形態は、どちらも東壁の南寄りに付設されていることは共通していることと前述したがR A01はやや中央寄りに煙道の長い掘り込み式、R A02のは同じ掘り込み式となっているが、R A01よりやや南寄りで煙道が短く立ち上がる。全体の規模をふくめたこれらの特徴を平成2年度から平成9年度に花巻市教育委員会でもとめた花巻市内遺跡詳細分布調査報告書などの中から繙いてみたい。

この8巻の古代の住居跡の例を見ると次のようになる。

発刊年度	遺跡名	時期	規模(m)		カマド	
平成9年度	杉ノ目	①奈良時代	3.2推	同規模の方形	北壁中央より	くり抜き式 煙出しP
平成8年度	下坂井I	②奈良時代中葉から後葉	6.2	隅丸方形	北壁中央より	くり抜き式? 煙出しP
		③奈良時代中葉から後葉	2.5	2.25	東壁南より	くり抜き式? 煙出しP
平成6年度	桜町	④9世紀後半から10世紀	2.0	2.1以上	東壁南より	30cmの張り出し
		⑤9世紀後半から10世紀	4.1	4.1~4.3	東壁南より	半地下式
平成4年度	似内	⑥9世紀後半から10世紀	6.3	4.8	東壁南より	掘り込み式 煙出しP
平成2年度	不動I遺跡	⑦10世紀以降	4	4	南壁東より	掘り込み式 煙出しP

当遺跡検出住居跡の概要は以下である。

平成10年度調査	狼沢II遺跡	RA01	5.14	台形?	東壁南より	掘り込み式 煙出しP
		RA02	5.86	6.46	東壁南より	掘り込み式

これらを見ると奈良時代から北側中央にあるカマドが平安時代にかけて東壁に変わる傾向にあるようである。しかし、明確な時代差はない。しかし、くり抜き式は主に奈良時代に、掘り込み式や半地下式は平安時代に横行するようである。平成9年度当センターで発掘した庫理遺跡の平安時代の住居跡でも東壁の掘り込み式?となっている。このことから考えると、当遺跡の住居跡は桜町の⑤と似内遺跡の⑥に近い形で特に大型⑥同類と見ることができるようである。

次に遺構内から出土した土器と⑤・⑥出土土器を比べてみたい。

狼沢II遺跡では甕形土器は16体掲載した。ロクロ未使用とロクロ使用が混在する。ロクロ未使用のものは比較的ヘラナデで器面調整されているものが多いが、中にはケズリ主体のものもある。またRA01のカマドの支脚に使われていたものやRA02の袖部の芯材として使われていたものはハケメを多様していた。ロクロ成形の甕は器形がわかるものはRA02で出土した小型甕2体だけであるがどちらも底部を回転糸切りで切り離し、1体は外面をヘラケズリ調整する。器形は、全体像が把握できるものはRA02出土の小型甕1体のみで、口縁部が短く外反し、胴部上位に段をもち、下部に張り出しをもたない。さらに口唇部が上方に平らに挽出す。これはロクロ成形の甕すべてに共通する。ロクロ未使用の甕は口縁部が大きく外反するものは、器面調整がハケメやハケメ状のナデのもので、底部がやや張り出す。底部は判別しないが、器面調整がナデ、もしくはケズリの場合は口縁部が短く外反する。須恵器では、短もしくは長頸壺がRA01から、広口壺がRA02から出土した。坏形土器はすべてがロクロ使用である。RA01からは須恵器・土師器1体ずつ、RA02からはそれぞれ2体ずつの出土である。底部切離し痕のあるものは土師器は回転糸切り、須恵器は回転ヘラ切りと糸切りに分かれる。RA02出土の2体は内部に黒色処理を施す。器形は、ほとんどが胴部に段をもち底部が平底であり、下半部に丸みをもつ。

⑤桜町遺跡の住居跡から出土した遺物を見てみると甕はすべてがロクロで作られ、赤焼き土器や須恵器が多い。また、外部がケズリで再調整しているものも見られる。当遺跡に見られるようなナデで外面を調整するものは見られない。坏も同じようにロクロ成形であるが一般に器高があり台付きのものも見られ、また黒色処理しているものが比較的多い。当遺跡で出土している坏の須恵器のものは類似性が認められるが、底部切離しが回転ヘラ切りのものは桜町遺跡では見られない。

出土遺物から、狼沢II遺跡の時代を考えると花巻市の桜町、似内遺跡の住居跡出土の遺物よりはやや古い

年代を与えられるであろう。よって9世紀の前半に相当するものと考えますが、相対的に見て、この2つの住居跡の時期を特定するにはあまりにもサンプルとすべき土器の出土と復元できた土器の数が少なすぎ、確証は持てない。

次に埋土状況から、この2つの住居跡の時代格差を考えてみたい。土器の様相からは明確な時代格差は認められない。しかし、土器の出土状況から見れば明らかにR A02のほうが出土量、完形品の数ともに多い。また、R A01は人為的と思われる暗褐色土が上位に存在し、R A02はその暗褐色土がほとんど見られず黒～黒褐色土中心の自然堆積的な埋土であった。これらのことから、R A01のなんらかの理由で埋められ、あるいは捨てられ、新しくR A02を作り出した可能性も考えられる。

その他の時代

その他の遺構として溝跡が検出されている。調査区域内に9条の溝が確認され、そのうち5条は幅に画一性が見られる。深さは検出状況によって違いがあるが、もっとも深いものは30cmほどであった。ほぼ東西と南北に延び、調査区域外に延長されるものと思われ、その並び方にも規則性が見られる。埋土状況からは明確な時代は得られないが、住居跡に残る黒色土以外の土層が確認されないことから、住居跡と同じかあるいは若干新しいものであろう。もっとも深い溝跡（R G01）は水路として作られたと仮定するならば、十分その機能を果たすほどの規模をもつが、ほかの4条については判然としない。ほとんど直線的に垂直に並ぶことから、土地を区画するためのものであるかもしれない。

その他、単独で検出されたものについては、小規模のうえにその他の遺構との関係も考えられないので不明である。

また調査区域に点在する柱穴や柱穴状ピットのうち、縄文時代のものと平安時代のもの以外に黒色土を掘り込んでできているものが存在するが、これらは中世以降の建物跡のものであろうと考えられる。遺跡は狼沢氏の居城であったと推定されている地域から遠くなく、また神社があったという諸説もある。

最後に今回の発掘調査において得た結果から推測するに、調査区域が舌状の河岸段丘の末端に位置することなどから、瀬川の北側に位置するこの遺跡は調査区から北西に大きく広がるものと推測する。それは、縄文時代から平安時代にまたがり、中世の遺構の存在する可能性もあるであろう。そしてそれは特に平安時代において顕著に現れるであろうと思う。発掘された2棟の竪穴住居跡は大型のものであったが、それと同様な、もしくは付随する住居跡が存在する可能性がある。

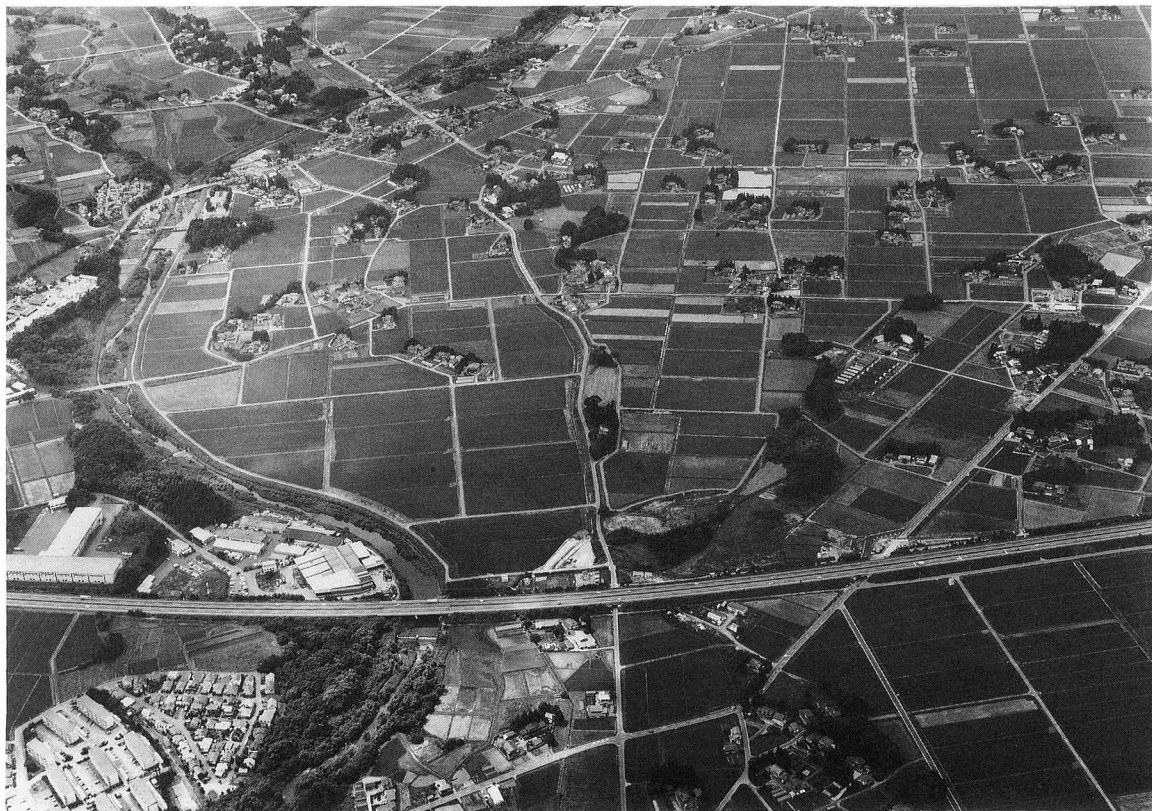
しかし、遺跡全体が大型の水路や田の造成などにより失われている観があり、現に瀬川南側の狼沢Ⅰ遺跡は削平を受け今はなく残念である。しかし影響を受けていないであろう区域も残っており、今後の発掘調査を期待したい。

引用・参考文献

- 花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成2年度 岩手県花巻市教育委員会
花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成3年度 岩手県花巻市教育委員会
花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成5年度 岩手県花巻市教育委員会
花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成6年度 岩手県花巻市教育委員会
花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度 岩手県花巻市教育委員会
花巻市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度 岩手県花巻市教育委員会
庫理遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第302集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 本宮熊堂遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第240集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

写真図版





鳥瞰



北より
写真図版1 空中写真



遺跡遠景



Ⅲ区調査前状況(W→)



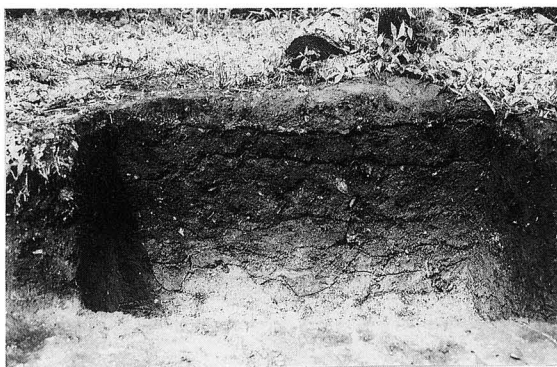
Ⅱ区調査前状況(N→)



Ⅰ区調査前状況(E→)



Ⅱ区基本土層



Ⅲ区基本土層

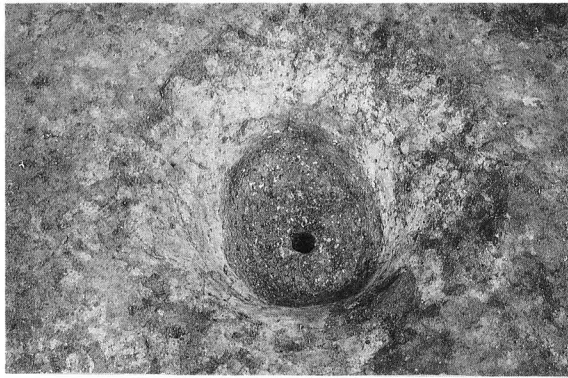


沢跡状凹地土層断面

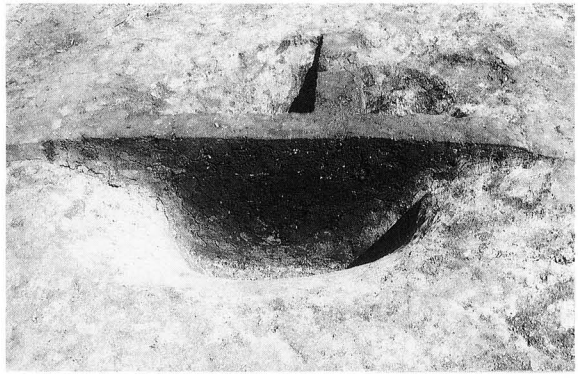


Ⅰ区基本土層

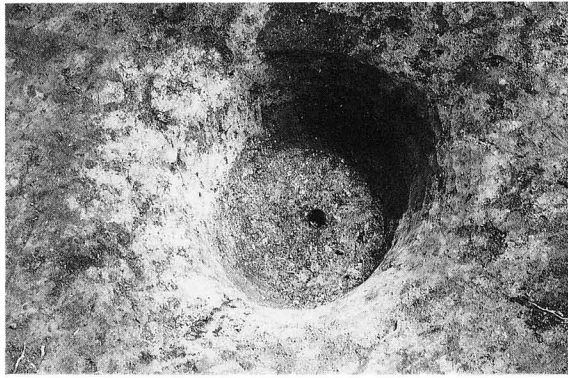
写真図版 2 調査前状況・基本土層



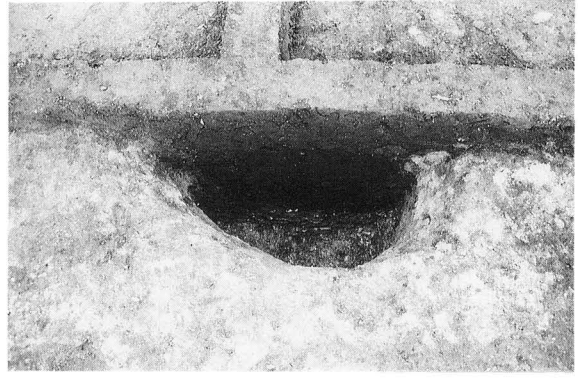
1号陥し穴平面



断面



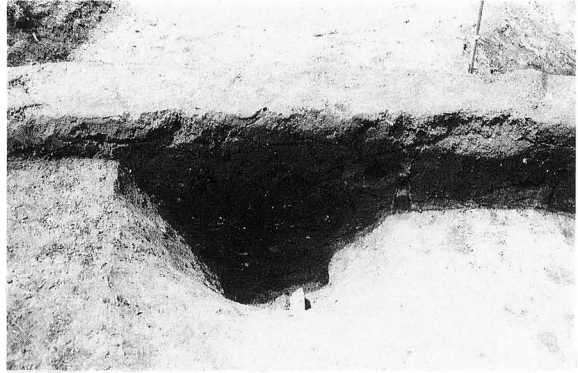
2号陥し穴平面



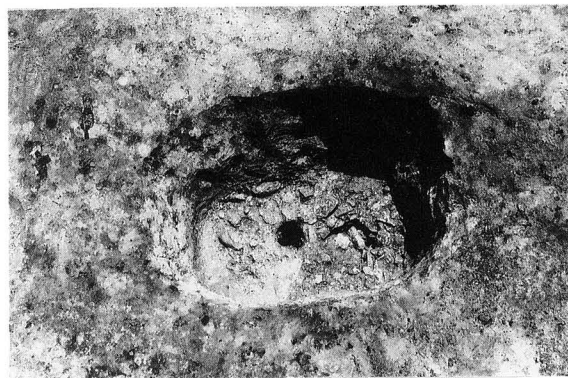
断面



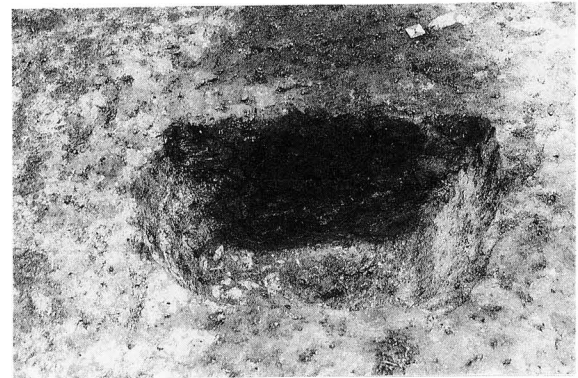
3号陥し穴平面



断面

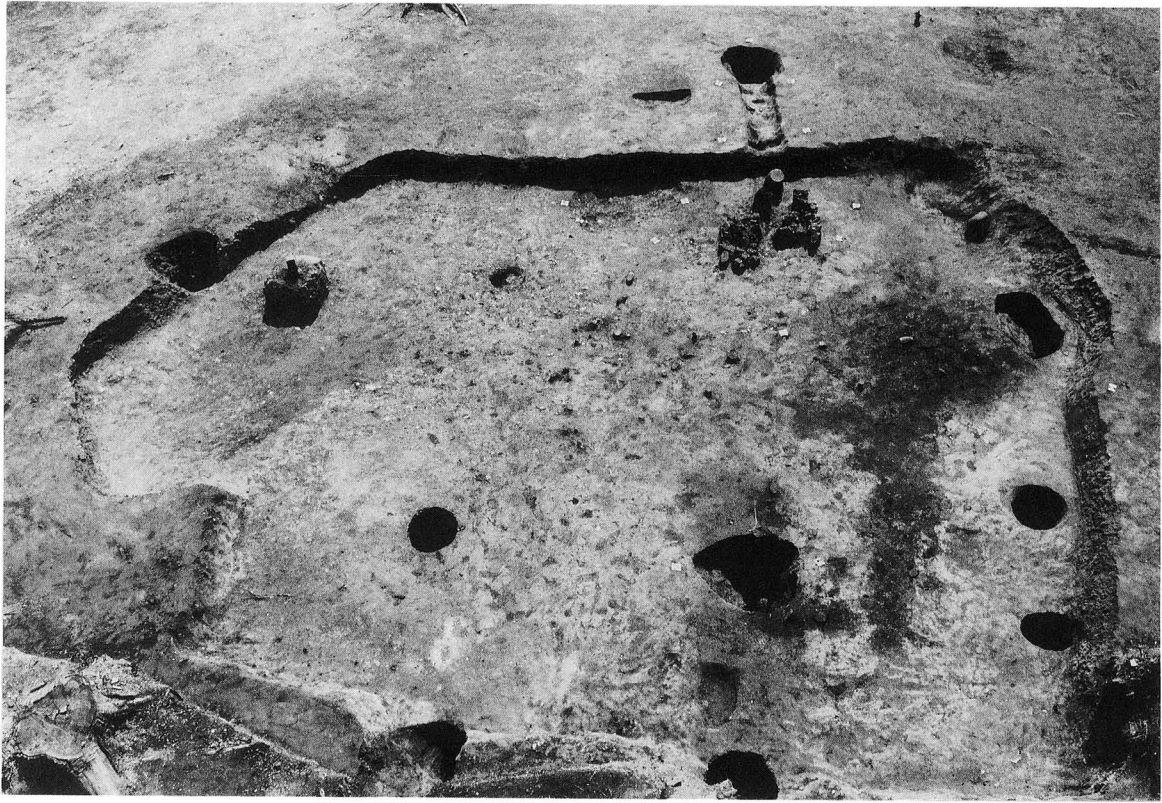


4号陥し穴平面

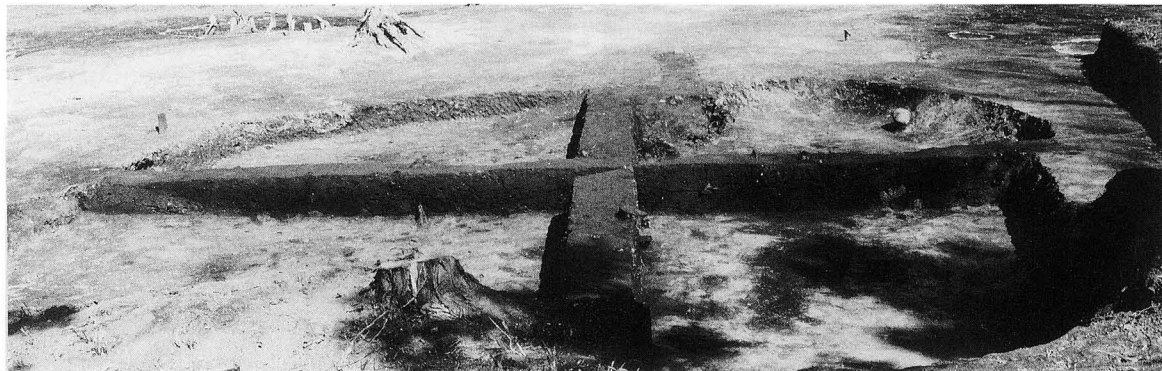


断面

写真図版3 陥し穴



RA01平面

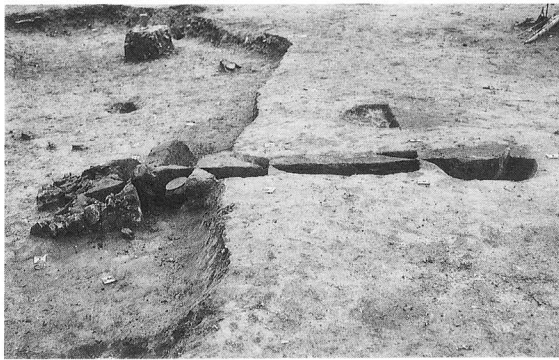


埋土断面(N-S)

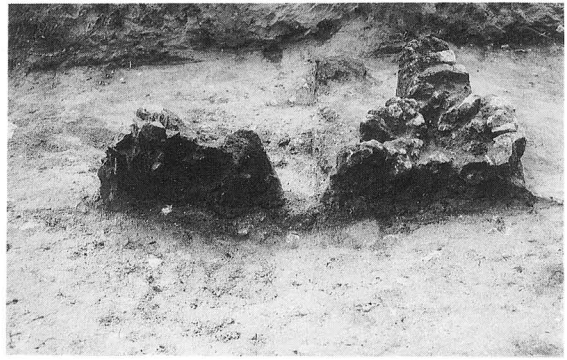


埋土断面(W-E)

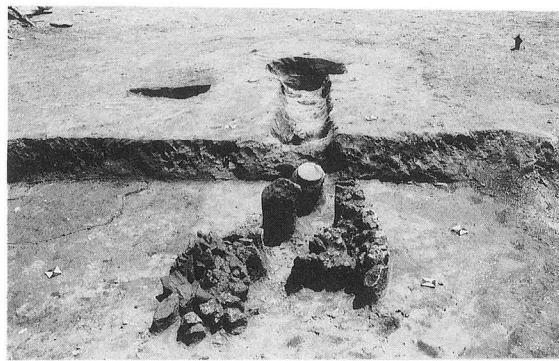
写真图版 4 RA01



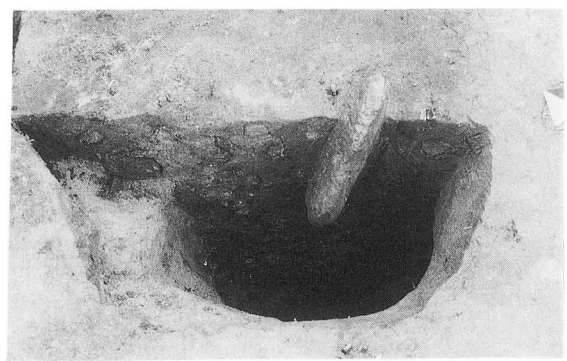
煙道～燃焼部断面



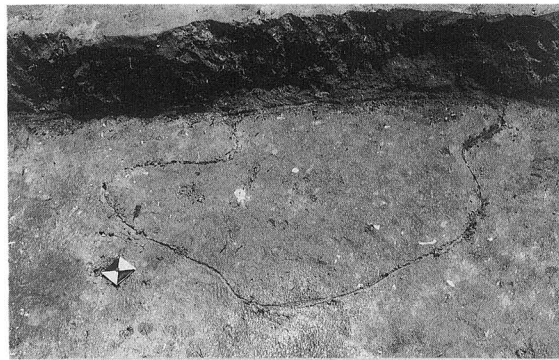
燃焼部断面



カマド完掘



煙出しピット断面



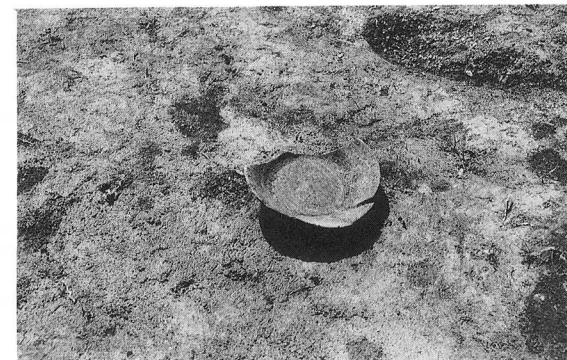
焼土



断面

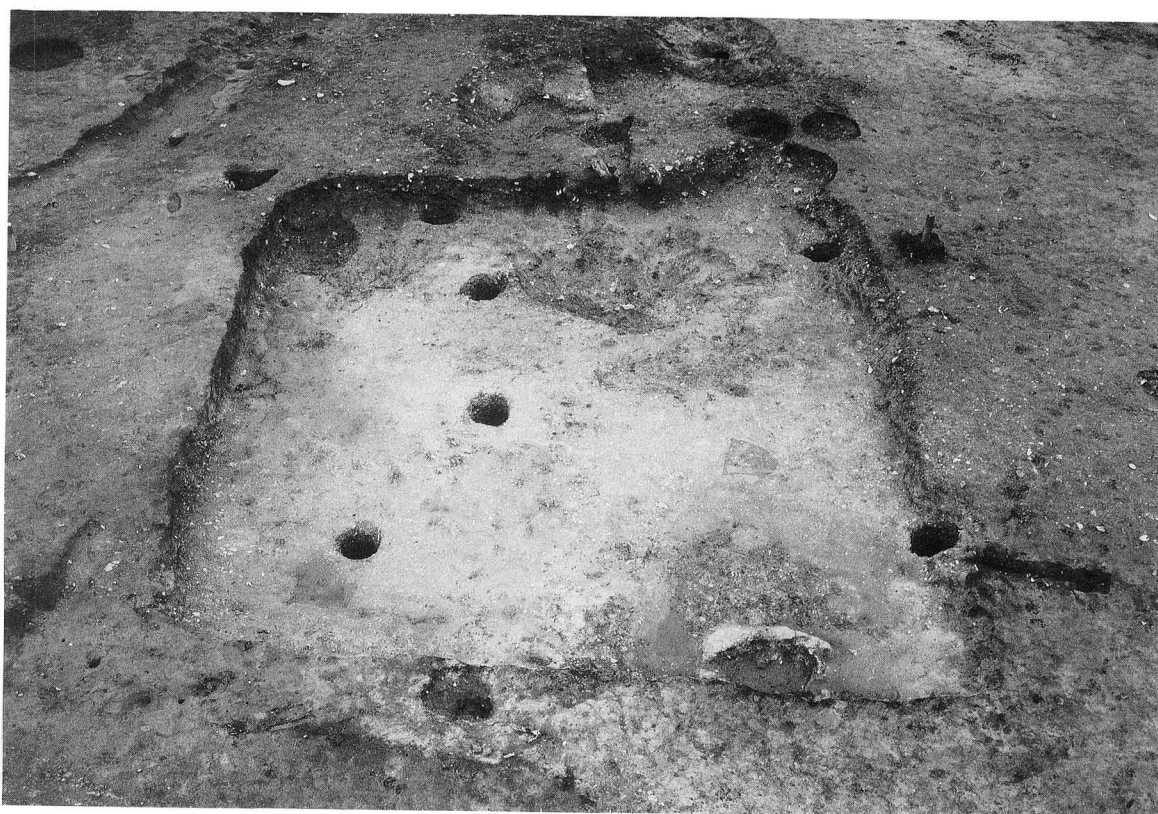


遺物出土状況(1)

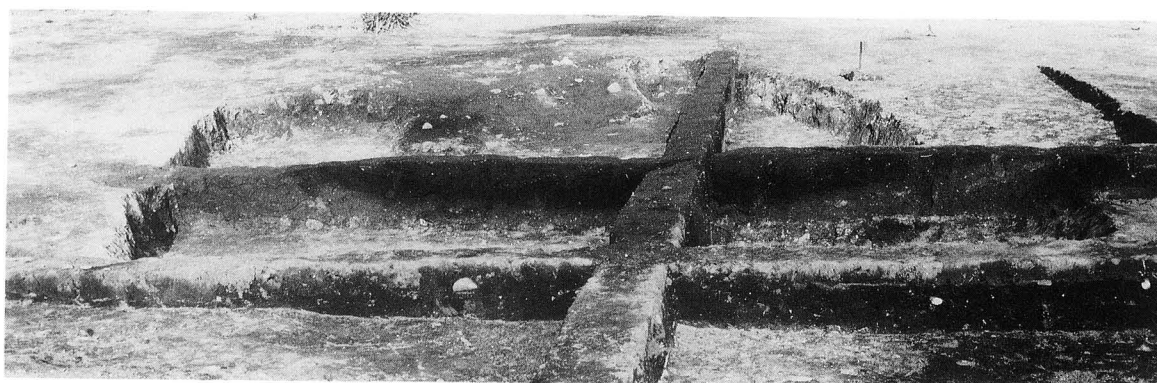


遺物出土状況(2)

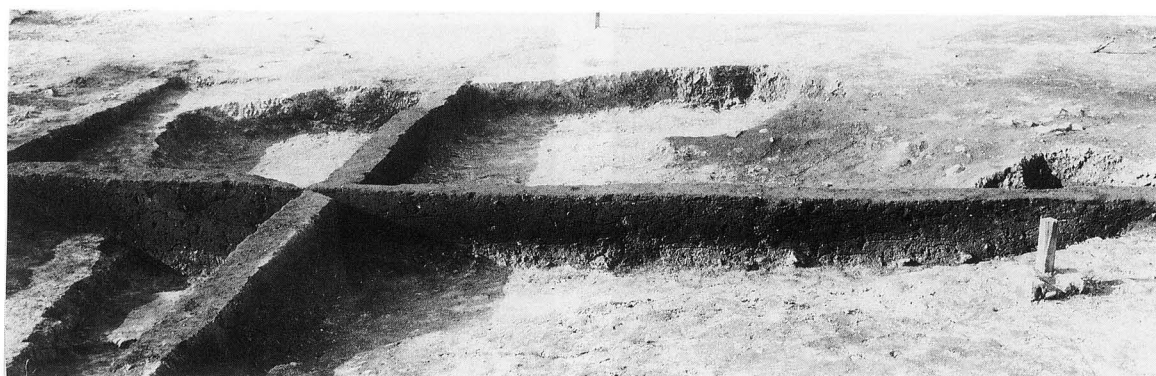
写真図版 5 RA01かまど遺物出土状況



RA02平面



埋土断面(N-S)



埋土断面(W-E)

写真図版 6 RA02平面 埋土断面



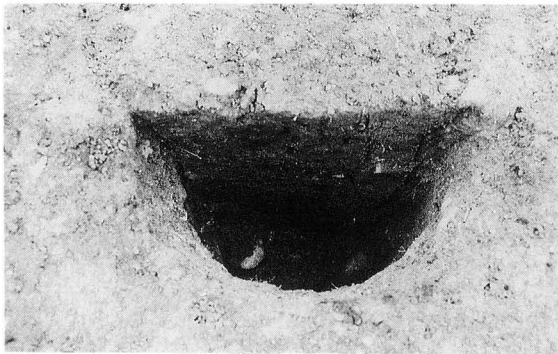
カマド平面



袖部断面



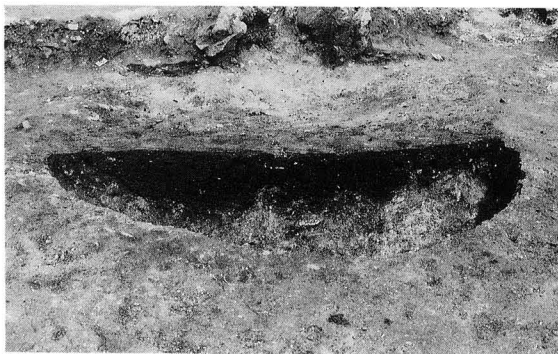
カマド支脚



柱穴(P2)



カマド横埋設土器？



カマドの掘り込み断面



遺物出土状況

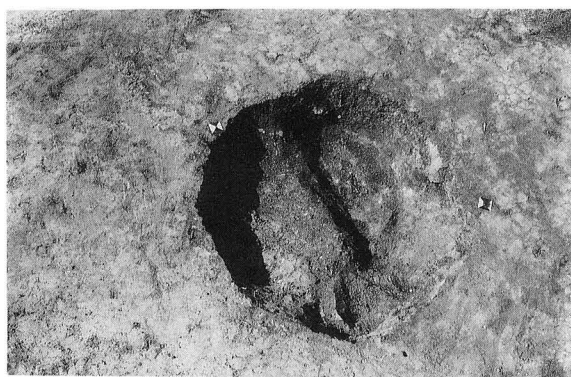
写真図版 7 RA02カマド 柱穴等



RD01平面



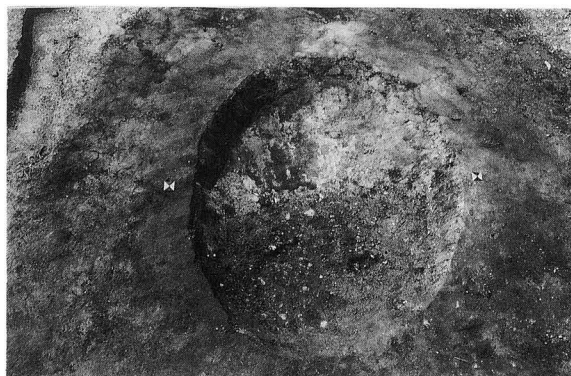
断面



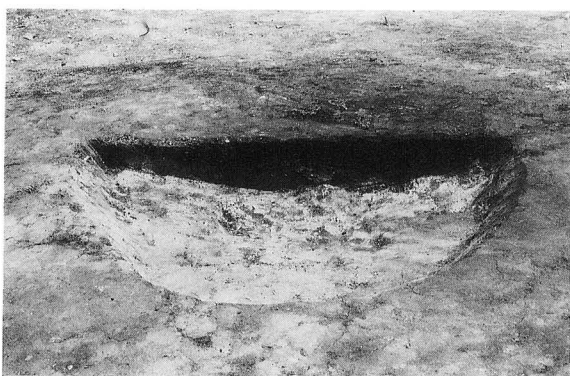
RD02平面



断面



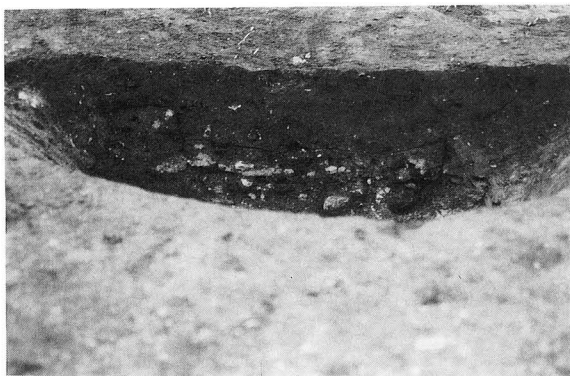
RD04平面



断面



RD07平面



断面

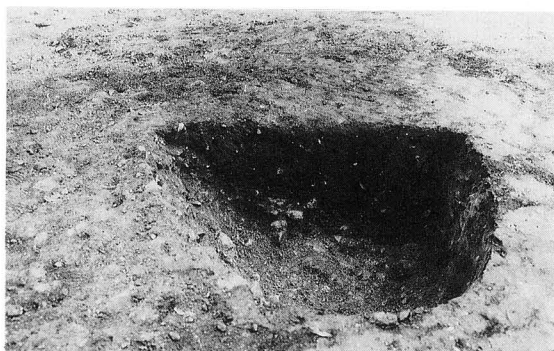
写真图版 8 RD01.02.04.07



RD05·06平面



RD05断面



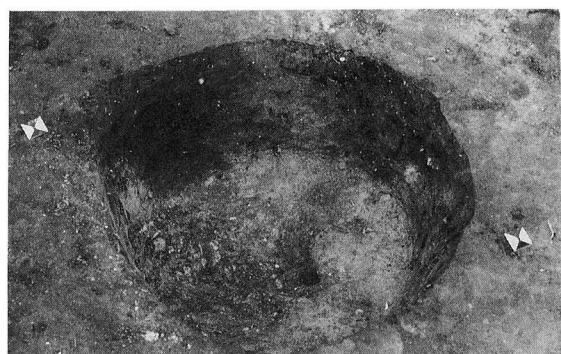
RD06断面



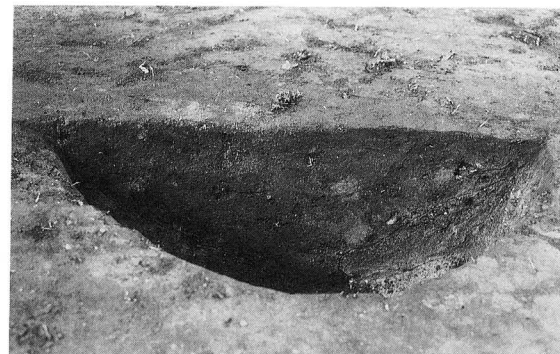
RD08平面



断面

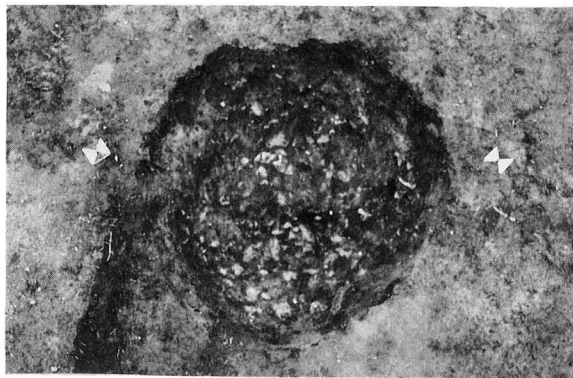


RD10平面

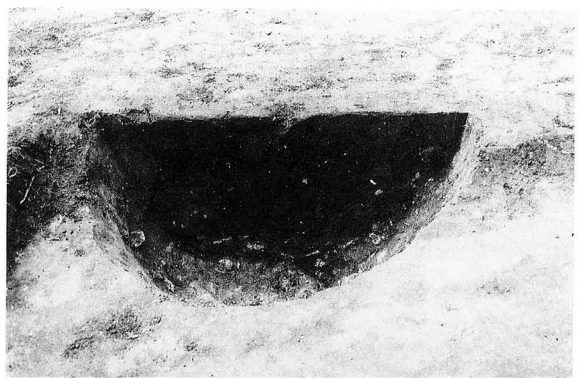


断面

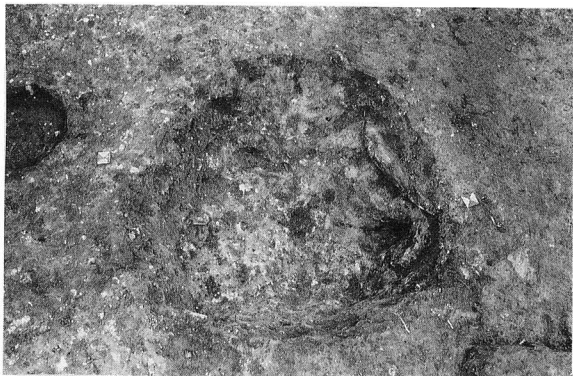
写真图版 9 RD05.06.08.10



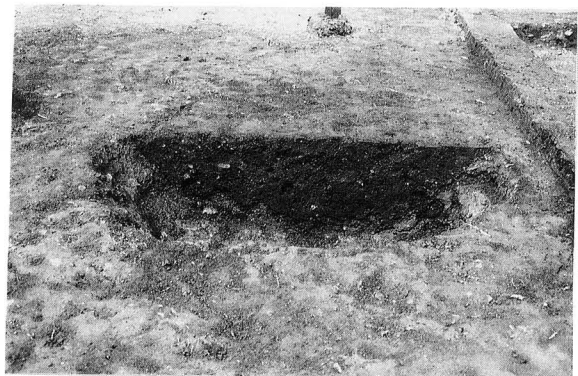
RD11



断面



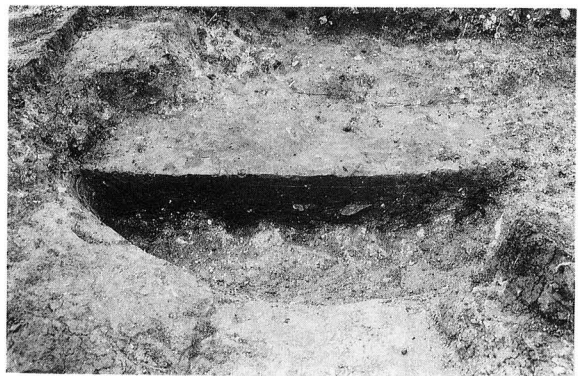
RD12



断面



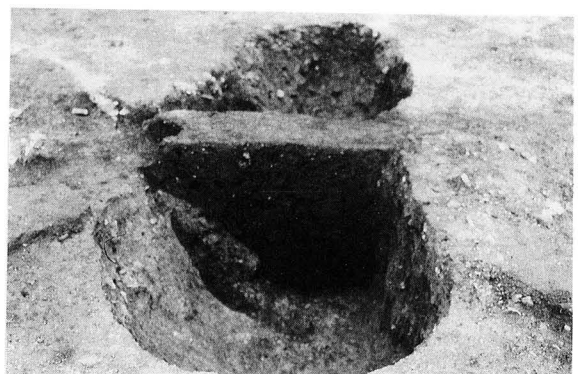
RD13



断面

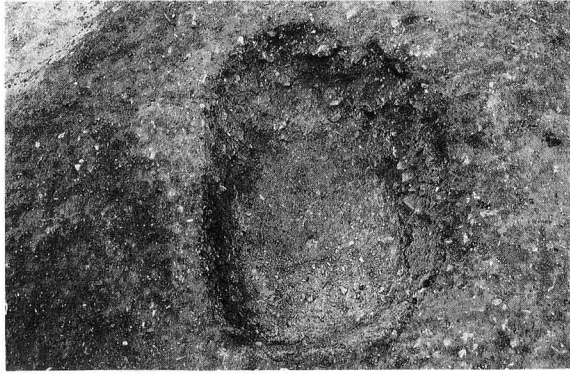


RD15

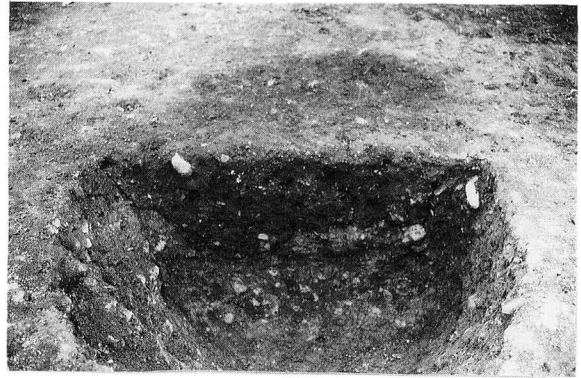


断面

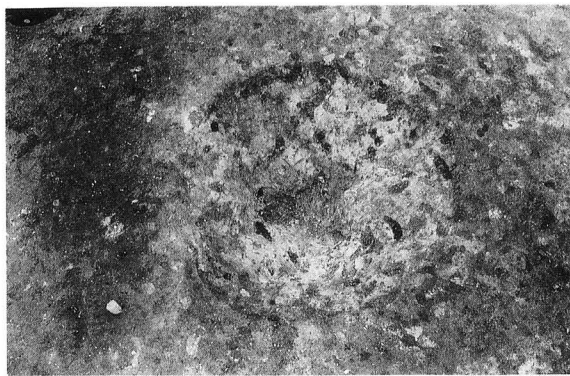
写真図版10 RD11.12.13.15



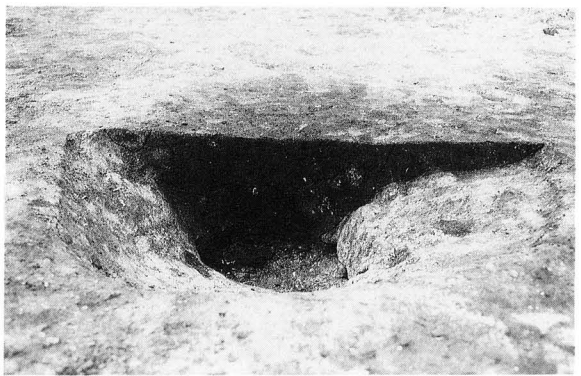
RD16平面



断面



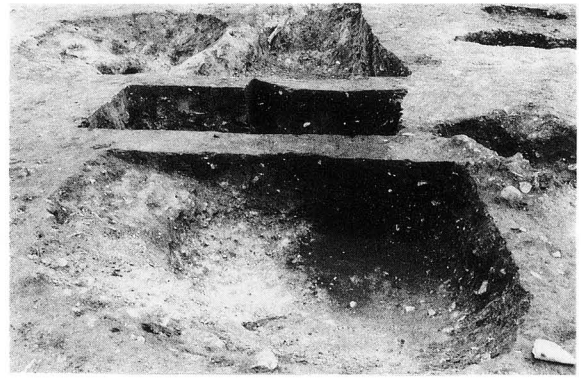
RD17平面



断面



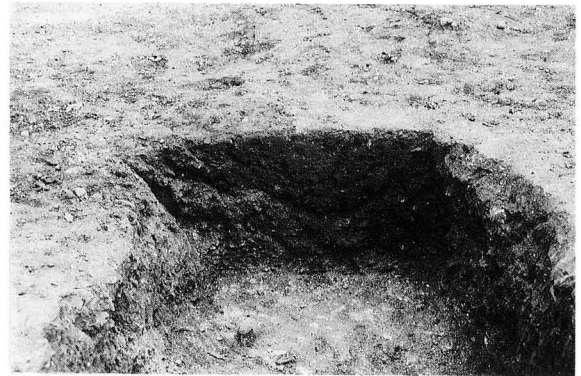
RD18平面



断面

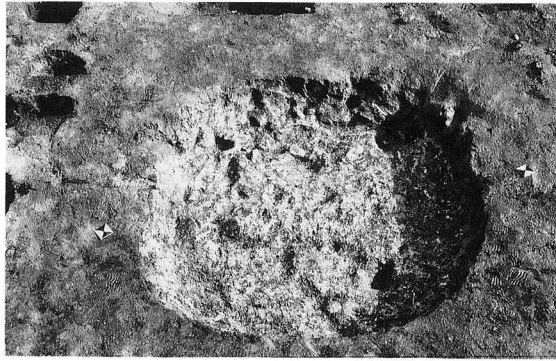


RD19平面

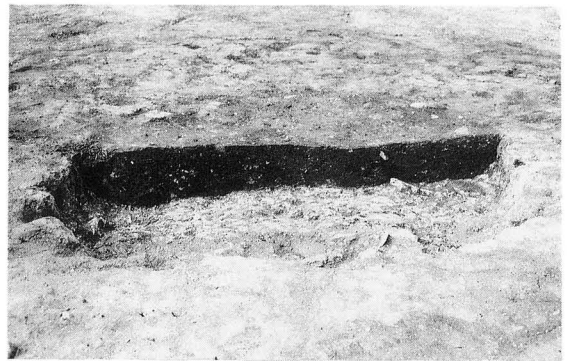


断面

写真图版11 RD16.17.18.19



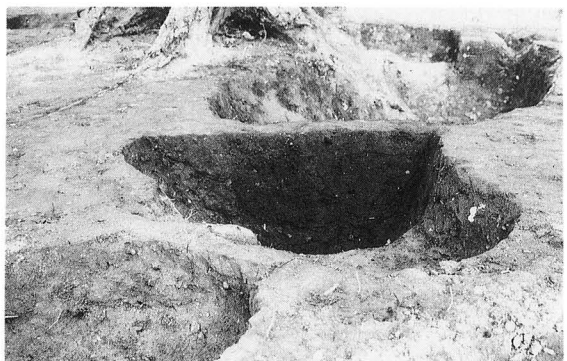
RD20平面



断面



RD21平面



断面



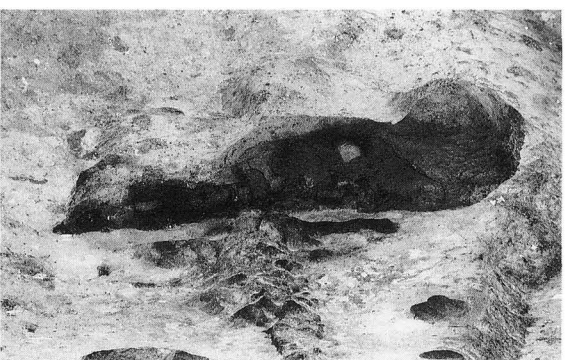
RD22平面



断面

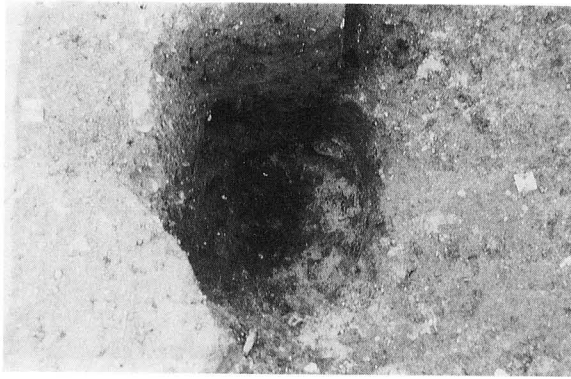


カマド状土坑平面

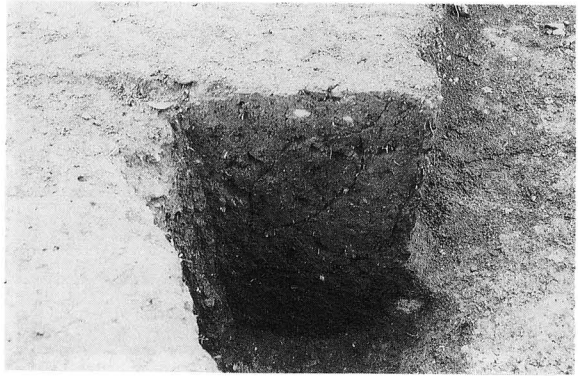


断面

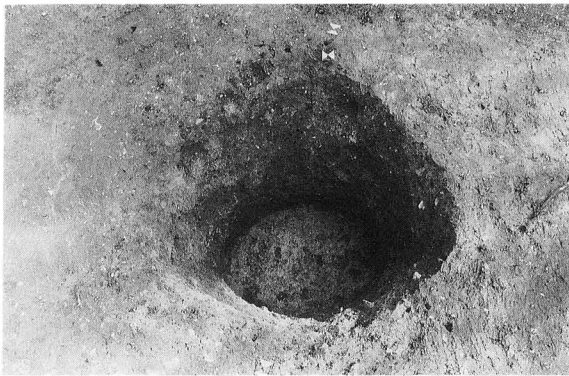
写真図版12 RD20.21.23カマド状土坑



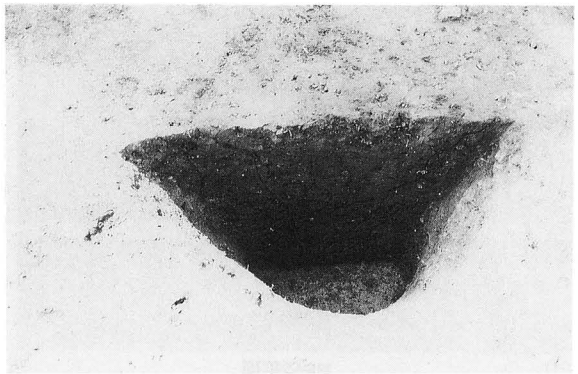
PP01平面



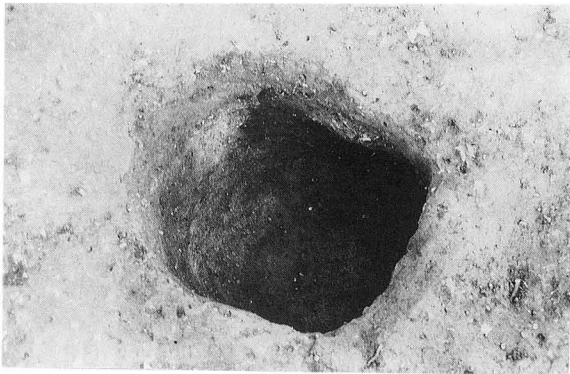
断面



PP04平面



断面



PP06平面



断面

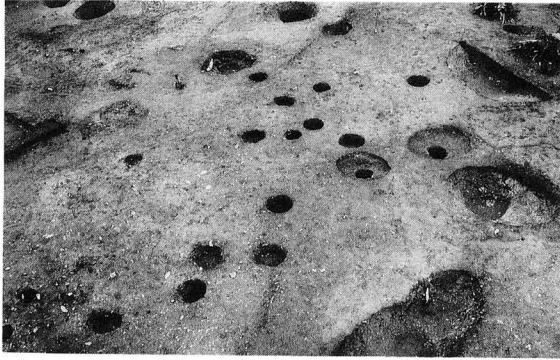


PP26平面

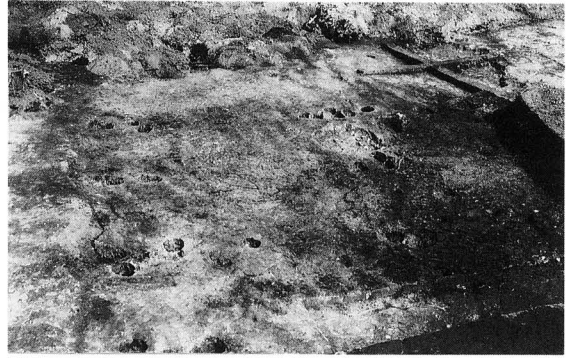


断面

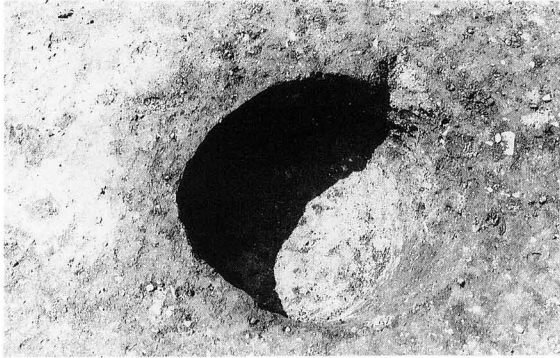
写真図版13 PP01.04.06.26



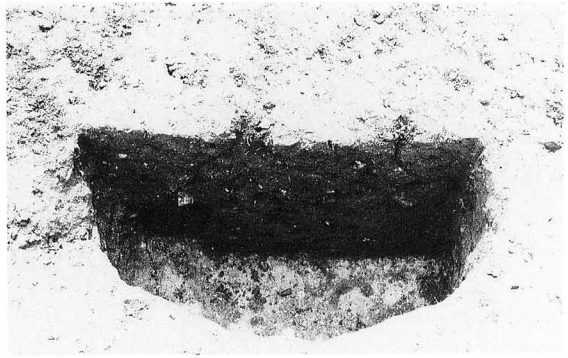
II区中央柱穴集中区



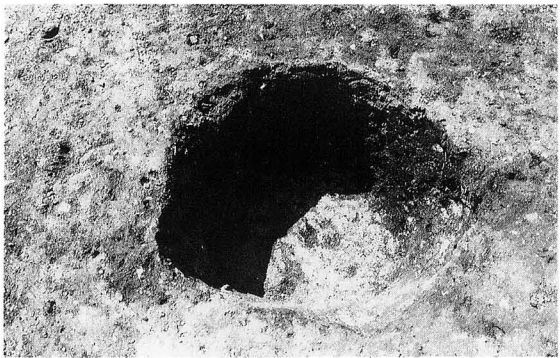
沢跡状凹地完掘



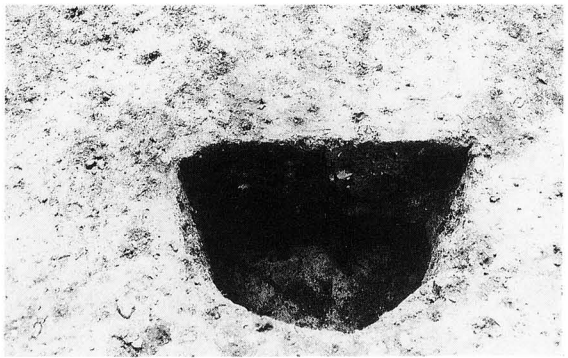
PP52平面



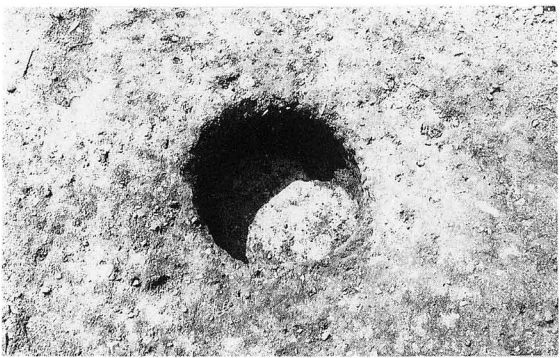
断面



PP53平面



断面

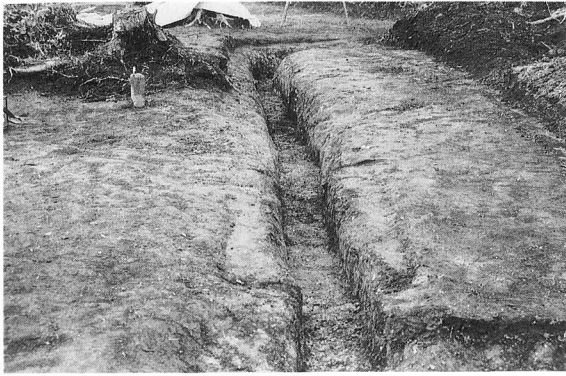


PP54



PP55

第14图 柱穴集中区 PP52·53·54·55



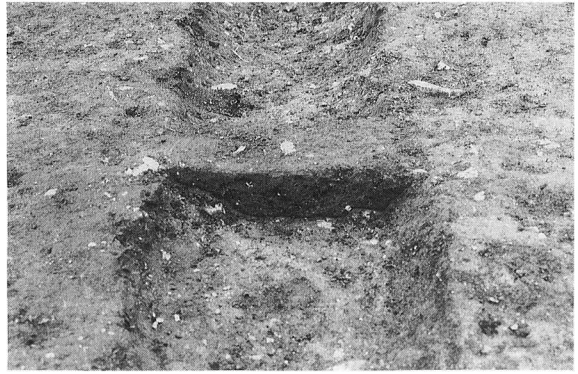
RG01



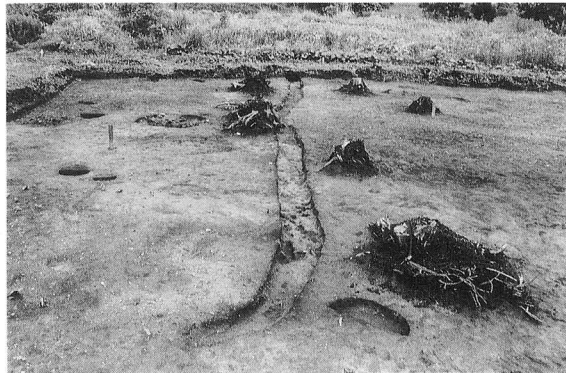
断面



RG02



断面



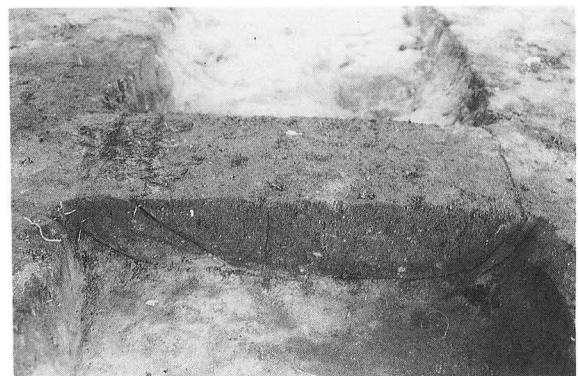
RG03



断面



RG04

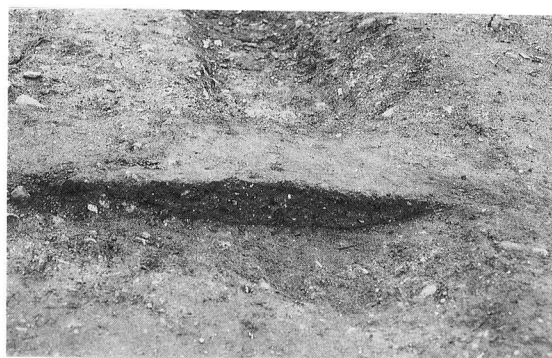


断面

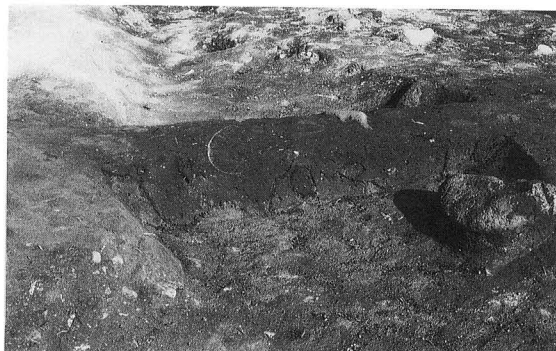
写真図版15 RG01・02・03・04



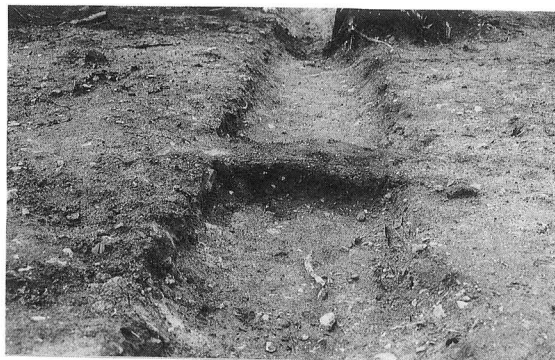
RG05



断面



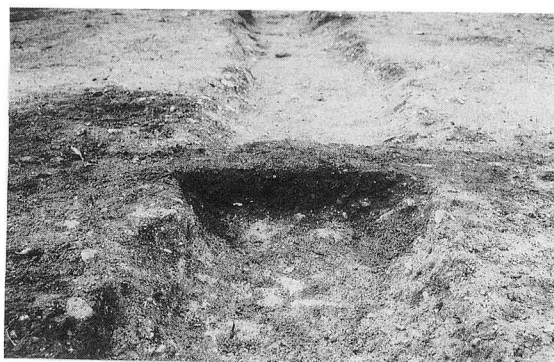
RG06断面



RG07断面



RG07·08



RG08断面

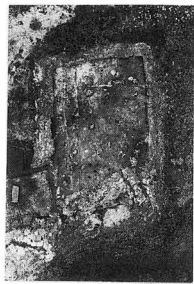
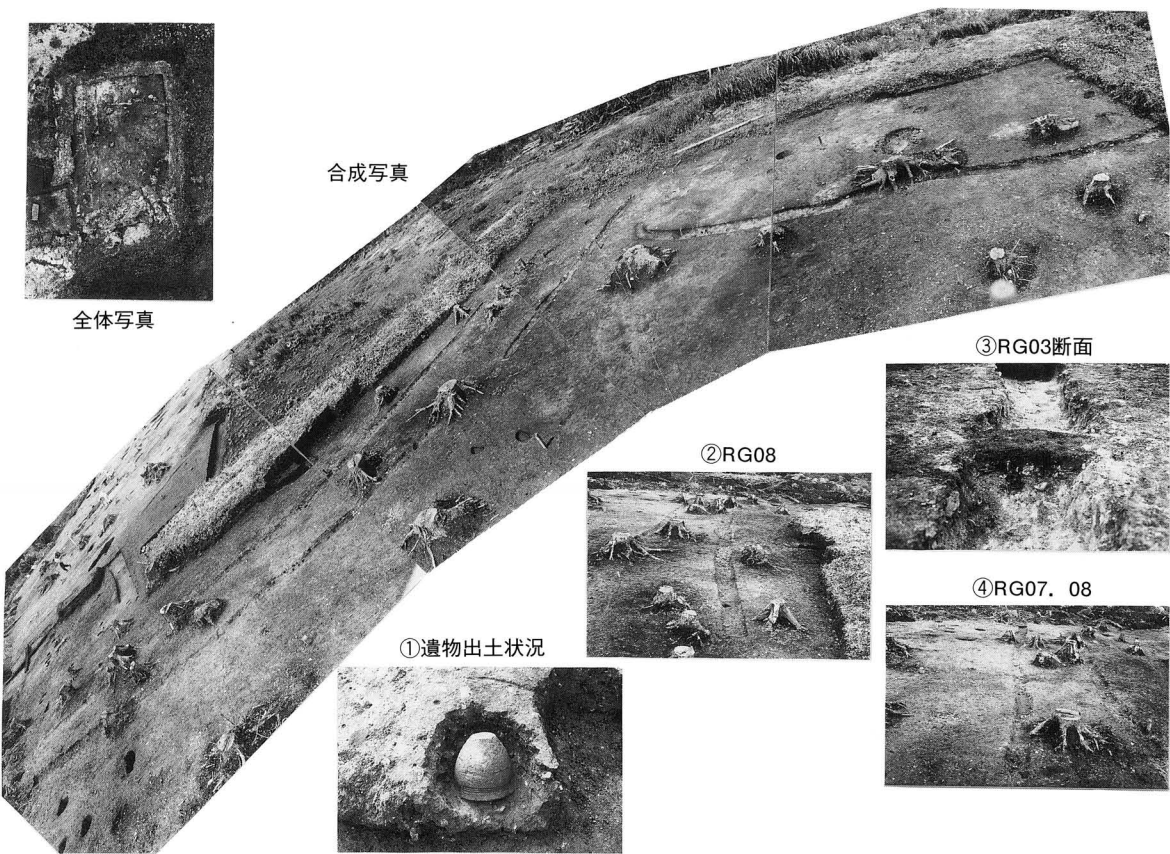


RG09



断面

写真図版16 RG05・06・07・08・09



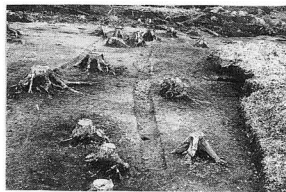
全体写真

合成写真

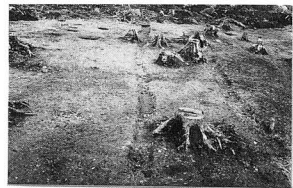
③RG03断面



②RG08



④RG07.08



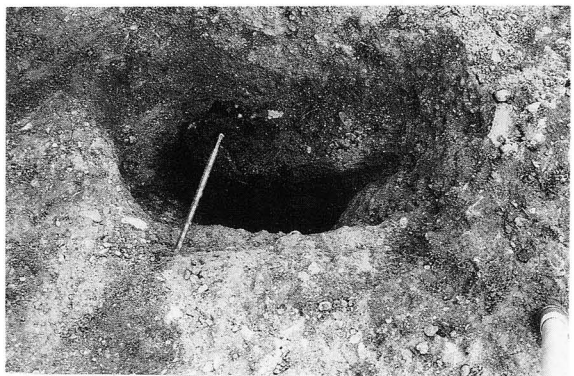
①遺物出土状況



掘立柱建物跡検出状況

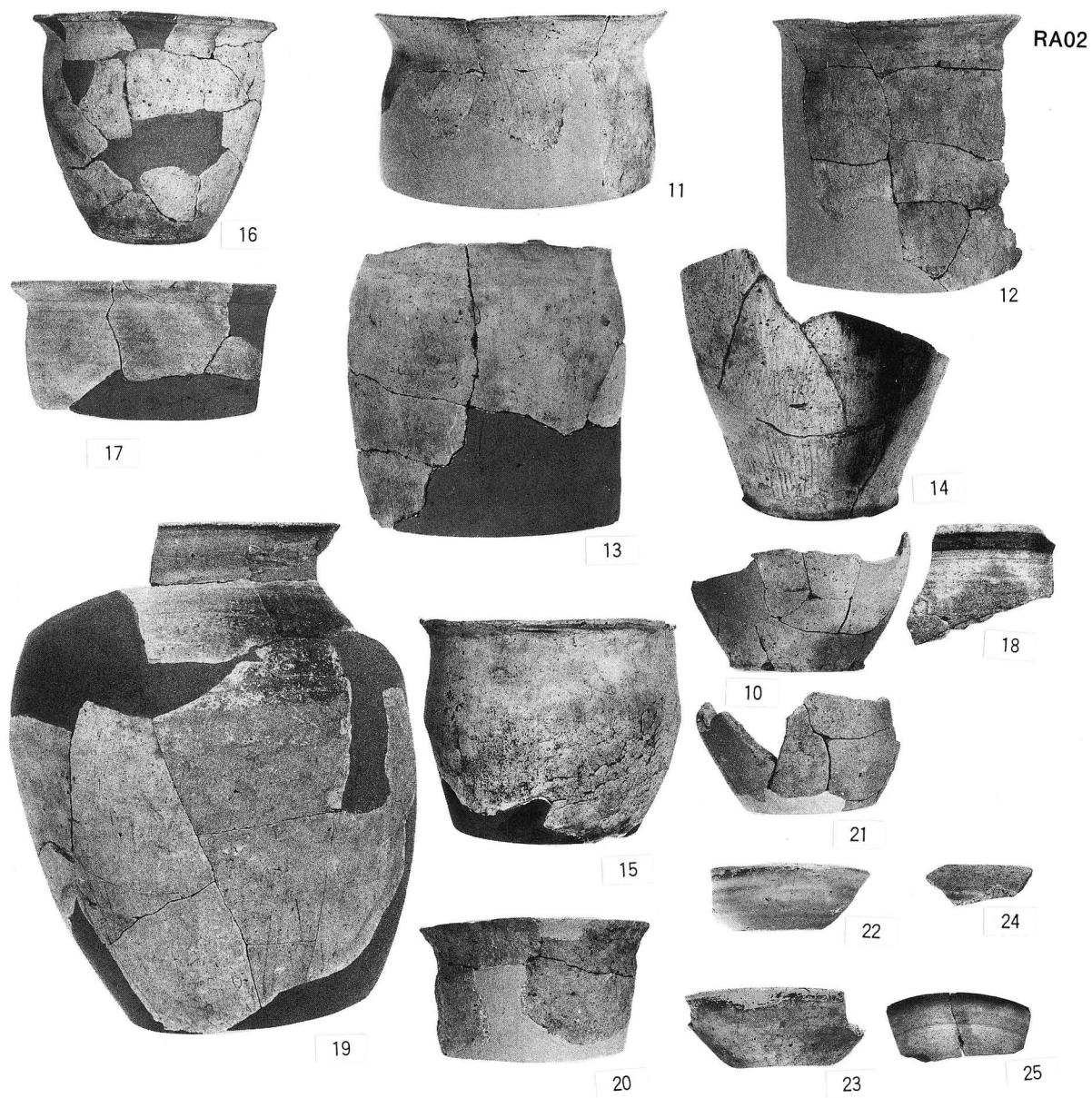
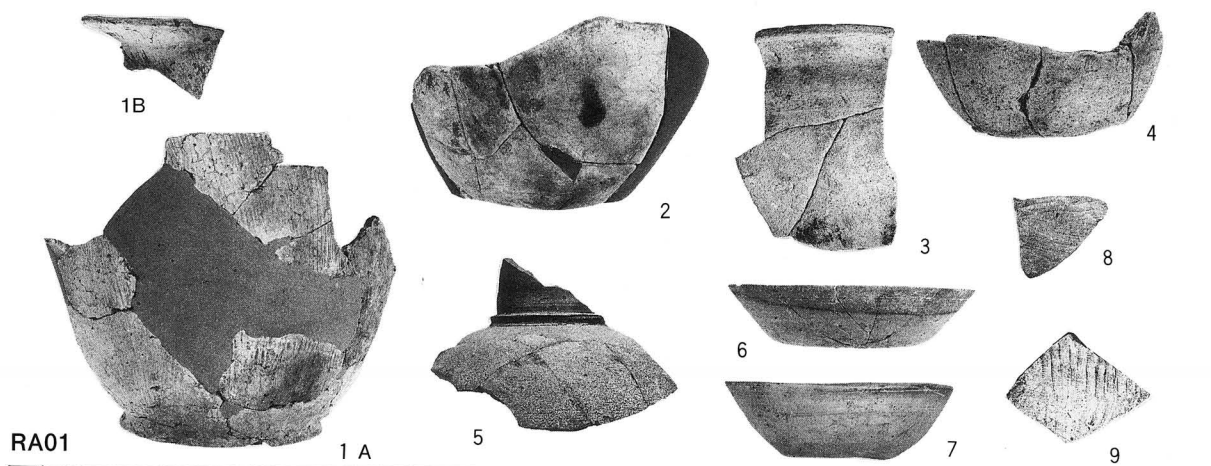


断面

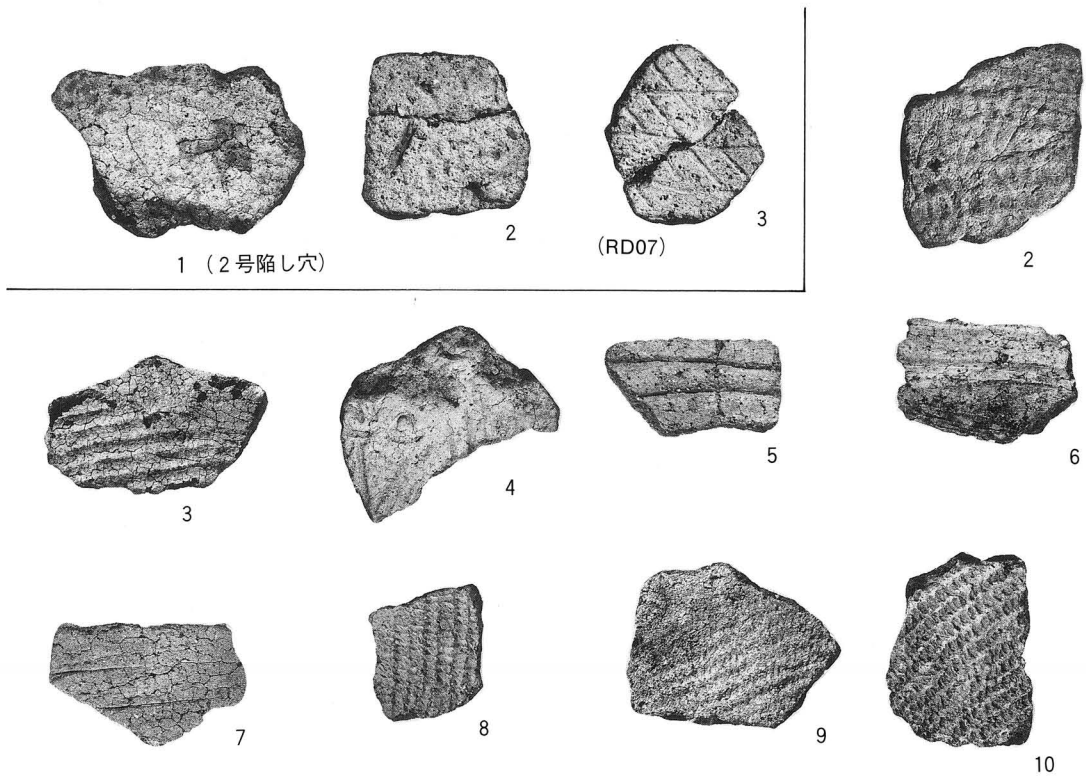


断面

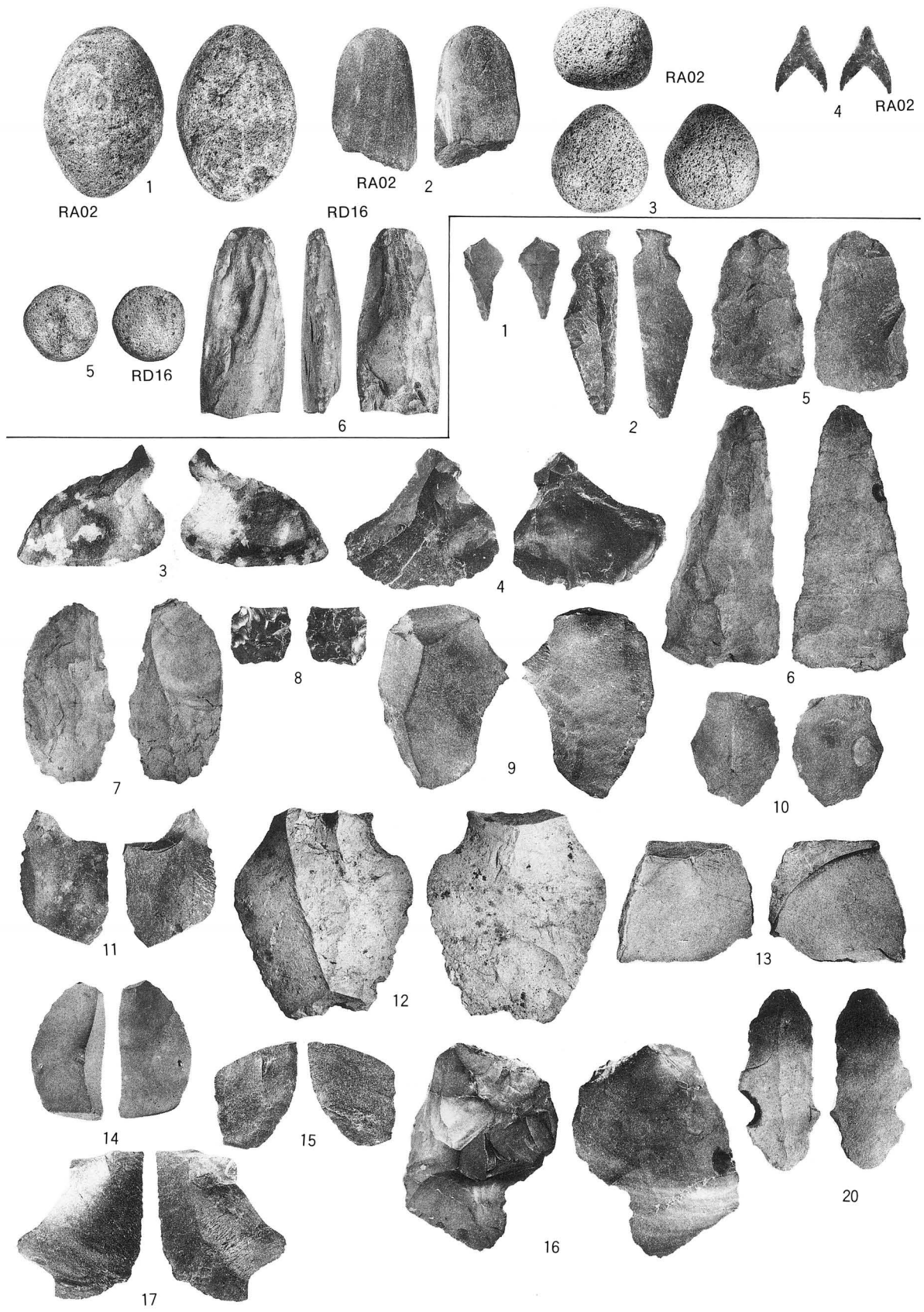
写真図版17 溝跡集中区・掘立柱建物跡



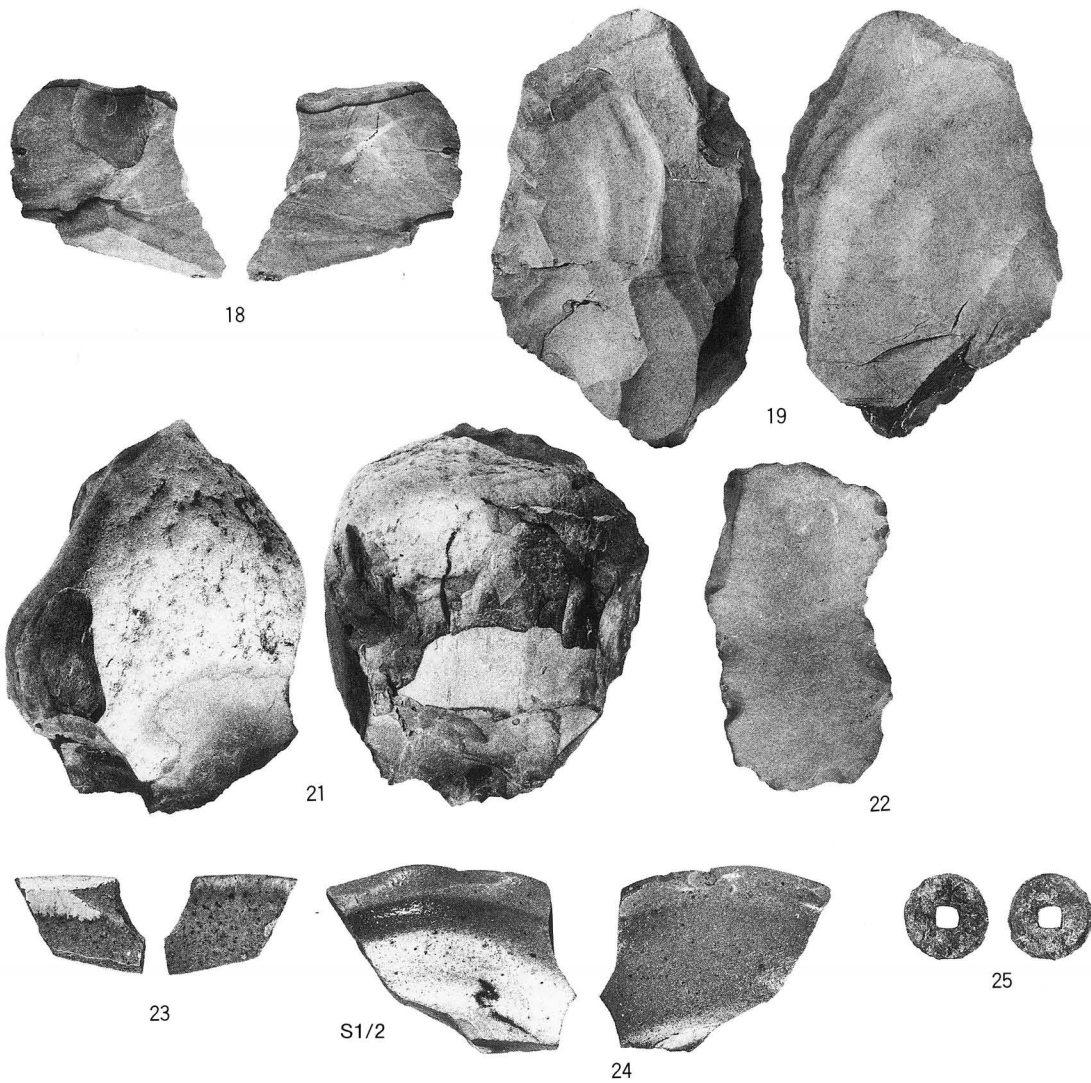
写真図版18 遺構内出土土器 (古代)



写真図版19 遺構内外出土土器（縄文土器）



写真図版20 遺構内外出土石器



写真図版21 遺構外出土石器、陶器、古銭



IV ^{たかまつでら}高松寺遺跡

所在地 花巻市高松第26地割39-1ほか
委託者 日本道路公団東北支社北上工事事務所
事業名 東北横断自動車道路建設
発掘調査期間 平成10年4月10日～8月7日
調査対象面積 8,250m² (A区1,720m²・B区6,530m²)
発掘調査面積 8,250m² (A区1,720m²・B区6,530m²)
遺跡番号・略号 ME27-1104・TKM-98
調査担当者 金子昭彦・松川由次

1. 調査の目的と結果の概要

本遺跡は、寺跡ということで、その構造を把握することを目的とした。また、次節の(3)で述べるように、本遺跡は別の場所から移ってきた寺で、その年代はいつか不明だという。そこで、年代を明らかにすることも主たる目的とした。

調査の結果、尾根を削り斜面に土を盛って平場を作り、それをL字状に土塁で囲い、平場に建物を建てたことが判った。ただし、残りが悪いせい、建物跡は貧弱なものであった。また、参道跡もどの程度の掘削をしているかわからなかった。年代についても、出土した寛永通宝から、江戸時代後期に建物があったらしいことしかわからなかった。

2. 立地と環境

(1)位置・立地（第1図、第2図、写真図版1～5、18～19）

高松寺遺跡は、JR東日本東北本線花巻駅の東約5.5km、東北新幹線新花巻駅の南約1kmに位置し、丘陵地に立地している。現況は原野で、標高は105～130m前後である。

調査範囲は、大きな沢を挟んで、西側のA区と東側のB区に分かれている（第2図）。A区は丘陵の尾根にあり、B区は、東端に尾根があり、その西は比較的平坦な地形で東西両端に沢が入り込み、その沢が合流して調査区の北端を区画している。なお、A区の総面積は1,720㎡、B区の総面積は6,530㎡である。

(2)基本層序と検出・出土状況

基本層序は、以下の通りである。A区、B区（上記参照）によって異なるが、地区ごとに分けると紛らわしいので、一括した。地区ごとに分けると、A区は、I層、III層、IV層、V層、B区は、I層、II層、V層という層順になる。

I層 表土。場所によって異なる。表土と言っても、実際にはIII～IV層が汚れたものや落ち葉の堆積そのもので、土層（土壌）として独立していない。

II層 V層の再堆積層。B区にのみ検出される。ソフトローム状のものが多く、地点によって異なる。

III層 明褐色（7.5YR4/6）粘土 固く締まる。層厚20cm。A区のみ検出される。A区でも検出されない地点が多い。IV層が根等によって変質したものか。

IV層 明黄褐色（10YR6/6）粘土 固く締まる。層厚20～40cm。A区のみ検出される。ハードローム状の良くある地山。

V層 明黄褐色（10YR6/8）砂 層厚不明。A、B両地区にあるが、地点によって大きく異なる砂層。

遺構の検出状況。A区では、地表から遺構が検出できたので、調査範囲全域、I層を丁寧に剥がしIII～IV層上面を露出させて、検出・精査した。この層以下での遺構の検出は、平場、参道跡など数カ所入れたトレンチにそれらしいものが検出されなかったため、省略した。

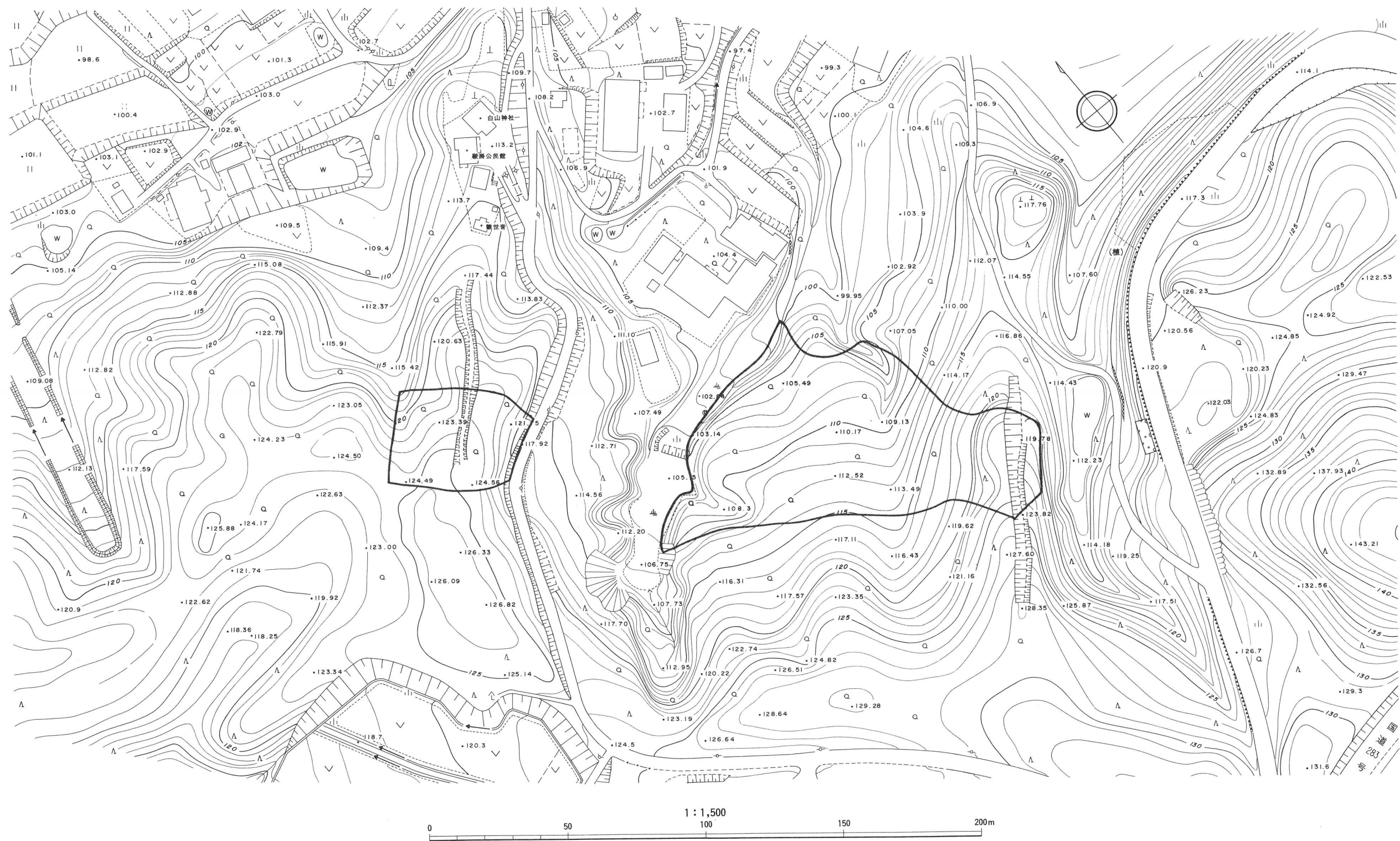
B区では、調査範囲外に排土を出せなかったため、最初から全面剥ぐのではなく、まず全域にトレンチを入れ（幅約2m）（重機で掘り、人手でジョレン掛けを行って清掃した）、その様子を見た。明らかな遺構は検出されなかったが、遺物が比較的集中して出土する部分が2箇所検出されたので、そこは全面剥ぐことにした。全面剥いだ部分（総面積2,260㎡）は、尾根と沢に挟まれた平坦面の北半分である。それ以外のB区の総面積は4,270㎡、トレンチを入れた（実際掘った）のは1,072㎡で、約25%に相当する。

全面剥いだ部分は、平坦面は主としてII層下面、尾根は（II層が検出されなかった）V層上面で検出を行った。重機で剥ぎ、その後人手でジョレン掛けを行った。平坦面では、堅穴住居跡、捨て場以外は二、



第1図 遺跡の位置

1 : 50,000 花巻



第2図 周辺の地形と調査範囲 (網がかかっている部分が調査範囲)

三箇所の疑似現象が認められるのみであった。地形および遺構・遺物の検出状況から考えれば、平坦面の中央に何も遺構がないのは不自然と思ひ、検出は丁寧に繰り返し行ひ、疑似現象も全て半裁したが、遺構にはならなかった。柱穴かと思われたものは、半裁した結果木が立ち腐れしたものと判明した。

遺物は、地山より上の土壌が未発達のため他からの影響を受けやすく保存状態は良くないが、土器については地点差が認められる。縄文時代晩期（後葉）の土器は、B区沢跡の捨て場を中心に、B区尾根に比較的まとまって出土しており、その他B区全域から点々と出土している。弥生土器（後期）はB区平坦面の北端から、土師器は堅穴住居跡を中心に、B区尾根からも出土している。

それぞれの土器の中の細かい時期の違いによる地点差・層位差については、認められなかった。沢跡捨て場からは、晩期中葉から後葉にかけての時期幅のある土器が出土しているのだが、晩期中葉に当たる土器が比較的少なく、また包含層が単層であったこともあり、層位差は確認していない。

(3) これまでの調査と周辺の遺跡

(a) これまでの調査

本遺跡は、A区については（(1)位置・立地参照）、付近に古碑もあり（写真図版14）、古くから周知の遺跡であった（花巻市教育委員会 1993）。ただし、「『矢沢村誌』」によれば、この寺は山号鷹尾山と称しもとは高松にあったとされる。しかしいつ鞍掛へ移ったのかは定かではないという。鞍掛高松寺は藩政末期まで栄えたが、明治維新となり廃寺となった。古くは真言宗の寺であつて八幡寺開創後はその下に属していた。寛文年中には寺領十石を藩からもらっている」とあるように（同上：p.12）、伝承はあつても詳細は不明であった。B区については、今回行われた県教育委員会文化課の事前の試掘調査で土器が出土したため遺跡と認定されたい。したがって、本遺跡の正式な調査は、今回が初めてである。

(b) 周辺の遺跡

周辺の遺跡については、本書の冒頭で詳細に述べられているので、ここでは今回の調査で主に発見された、縄文時代晩期後葉、弥生時代後期、平安時代、近世について若干述べたいと思う。

縄文時代晩期後葉では、本遺跡から約7 km南に行った中野D遺跡（旧名、高松遺跡）（本書冒頭—以下同じ—第4図41）が発掘調査されている（岩手県教育委員会 1979）。東北新幹線建設に伴う調査で、大洞A2～A'式期の遺物包含層と柱穴状ピット3基が検出され、該期の土偶も出土している。中位河岸段丘の縁辺部に立地する。この他、遺跡の分布調査等により、槻ノ木I遺跡（第4図26）、高松III遺跡（第4図34）、明ヶ沢遺跡、中野B遺跡（第4図38）で、該期の遺物が採取されている（花巻市教育委員会 1993）。縄文時代の遺跡が少ないこの地域で（花巻市域では多い方だが）、該期の遺跡が比較的多く発見されているのは注意される。

弥生時代後期の遺物は、今のところ周辺の遺跡からは発見されていないようである。比較的近い時期の遺跡では、安野II遺跡（第4図37）から前期末の土器が採取され、高松II遺跡（第4図33）では中期の土器が採取されている（花巻市教育委員会 1993）。ちなみに、前期の遺跡は比較的多く発見されており、上述の晩期末遺跡から継続しているものもある。

平安時代の遺跡はかなり多い。調査例も多く、本遺跡と同様の立地を示す胡四王山館（第4図29）は、古く昭和32年に調査され、館との関係は不明だが、該期の堅穴住居が検出されている（江上編 1958）。高松山経塚（第4図42）も、同様の立地で、該期の堅穴住居跡が検出されている（花巻市教育委員会 1993）。八ツ森遺跡も同様である（花巻市教育委員会 1993）。

小規模な段丘上に立地する矢沢八幡遺跡（第4図30）からは、堅穴住居跡が3棟検出されている（岩手県

教育委員会 1979)。前述の中野D遺跡（旧名、高松遺跡）（第4図41）でも該期の土器が出土しているが、遺構は発見されていない（岩手県教育委員会 1979）。

この他、分布調査に伴って、経塚森遺跡（第4図31）、寺場遺跡（第4図32）が試掘調査されている（花巻市教育委員会 1993）。経塚森遺跡は、高松川を挟んで対岸の丘陵上に立地しており、寺場遺跡はその下の低位の部分に相当する。経塚森では、4基の塚が調査され、出土遺物は封土中のものだが土師器が出土しており、報告者は「時代的には、出土遺物から10世紀以後のものと考えられ、高松寺跡との関連も考慮されるべきであろう」（同上：p.55）としている。寺場遺跡からは、竪穴住居跡が検出されている。

以上の遺跡は、本遺跡から直線距離で、矢沢八幡遺跡は北に約0.5km、経塚森遺跡と寺場遺跡は北東へ約0.5km、胡四王山館は北西に約1km、高松山経塚は南に1.3km、八ツ森遺跡は南西へ約1.7kmと、至近距離にある。

その他、分布調査によって、上幅遺跡（第4図22）、下幅遺跡、槻ノ木Ⅲ遺跡（第4図28）で、平安時代の遺物が採取されている。なお、北上川の対岸に当たる宮野目地区には平安時代の大規模集落が多く、近年、当センターや花巻市教育委員会によって、庫里遺跡（第4図17）（岩手県埋蔵文化財センター 1998）、似内遺跡（第4図24）、石持Ⅰ遺跡（第4図23）などが調査されている。

近世では、矢沢八幡遺跡（第4図30）から、該期の掘立柱建物跡が発見されている（岩手県教育委員会 1979）。中野一里塚も該期の遺跡である。

この他、寺跡としての本遺跡との関係が想定される遺跡として、高松山経塚 経塚森遺跡がある。高松山経塚は、前述のように、本遺跡に移る前の高松寺である。市指定文化財である常滑の壺が出土しており、また、発掘調査では、上記のように、平安時代の竪穴住居跡が検出され、古代仏教寺院と推定されている（花巻市教育委員会 1990）。経塚森遺跡も、試掘調査の結果、10世紀以後の塚が検出され、高松寺遺跡から約0.5kmと至近距離にあることから、本遺跡との関係が想定されている（花巻市教育委員会 1993）。

参考文献

- | | |
|--------------|---|
| 岩手県教育委員会 | 1979『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第34集 |
| 岩手県埋蔵文化財センター | 1998『庫里遺跡発掘調査報告書』（第302集） |
| 江上波夫編 | 1958『館址』東京大学出版会 |
| 花巻市教育委員会 | 1990『矢沢地区文化財調査報告書Ⅱ』 |
| | 1993『平成4年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書－矢沢地区－』 |

3. 調査・整理の方法と経過

(1) 野外調査

(a) 調査経過

今回の調査区は、沢を挟んで二つに分かれ、調査面積は、A区1,720㎡、B区6,530㎡である（第2図）。A区は、調査前から寺跡と判っており、また工事の都合上早めに終了するよう依頼されていた。

4月10日に器材を搬入して、4月13日から調査を開始した。ただし、この時点ではA区の伐採された木は撤去されておらず、B区に至っては伐採も行われていなかったため、A区の雑物撤去を行い、丸太類の撤去およびB区の伐採を委託者にお願いした。

4月は、A区の検出を主として行い、土塁に囲まれた平場に礎石建物跡を検出した。この時点で地形測量を行うこととしたので、5月は、主としてB区の雑物撤去を重機と人手で行い、その後トレンチを尾根脇の

斜面に入れた。そしてA区の地形測量が済むのを待って、6月は、A区の精査を始め、併せてB区にトレンチを入れ続けた。

A区は、実測、撮影の後、重機でトレンチを入れ、土塁、平場、参道跡の構造を調べた。

B区は、これまでのトレンチの結果、遺物の出土が非常に少なく（200㎡あたり土器片1点程度）、遺構もあまり検出されそうにないと判断された。また、地形の関係で排土を調査範囲外に出すことは難しいので、表土を全面剥ぐことは容易でない。そこで、調査範囲全体にトレンチを入れ、その中で遺物の出土が多く遺構が検出されそうな部分を面的に広げて剥ぐという方針を立てた。

この年、花巻地区は、埋蔵文化財センターだけでも3遺跡を同時並行して調査したため、作業員の数が足らず、本遺跡では一日平均の作業員の出勤が11名程度で、農繁期には10名を切る日もしばしばあった。5月の連休直後に約8名の増員をおこなったが、それでも出勤率は回復しなかった。作業員募集は続けていたが、これ以上の増員は望めそうもなかった。そこで、B区は、重機でトレンチを入れ、それを人手で検出するという手段を執ることにした。

A区は6月いっぱいでの終了の目途が付き、B区は、排土を出せないため調査範囲の半分ずつ終了することにし、そのための県教育委員会文化課立ち会いの部分終了確認を6月23日にしていただいた。

7月は、B区の残りの部分（沢に面する平坦面と尾根、総面積2,260㎡）を重機で剥ぎ、ジョレンによる検出作業を進めた。後半からは、遺構の精査も平行して行った。相変わらず作業員が足らず困っていたが、7月後半からは、調査が終了した狼沢Ⅱ遺跡の作業員が合流し（約15名）、調査ははかどった。8月からは埋め戻しも平行して行い、8月7日午前器材を搬出して、調査の全てを終了した。

この年は雨の日が多く（調査期間中12日）、また本遺跡は慢性的な作業員不足で、通常の調査より多くの期間を費やしてしまったことは否めない。

(b) 特記事項

・グリッド

グリッドは、平面直角座標（第X系）に合わせ、遺跡（調査区およびその周辺）にうまくかかるように10×10mのメッシュをかけて、東西方向は西から1、2、3のアラビア数字、南北方向は北からA、B、Cのアルファベットを付し、1A、1B等と称した。現地では基準点とした11J、11L、21R、21Uの北西端の座標値は、11J（X=-67100.000、Y=29500.000）、11L（X=-67120.000、Y=29500.000）、21R（X=-67170.000、Y=29600.000）、21U（X=-67200.000、Y=29600.000）である。

この10×10mのメッシュを基準に、遺物の取り上げは、これをさらに4等分した区画（一辺5m）を考え、北西隅を①、北東隅を②、南西隅を③、南東隅を④とし、1A①、1A②等と称した。遺物の出土が多かった場合、10×10mのメッシュを25等分（一辺2m）した小グリッドを考えていたが、今回は実際に使用しなかったため、詳述しない。

・調査体制

調査員2名と作業員平均12名である。作業員のほとんどは初心者であったが、1名調査員経験もある方がいたので実測、精査はかなり助かった。

(2) 室内整理と報告書の作成

整理作業は、2月1日～3月31日に調査員2名と作業員約4名で行った。

参考文献は、各節、各項の最後にある。遺物の全体量と掲載基準については、第5節の冒頭に記している。遺構出土の遺物も第5節のそれぞれの遺物の項で記載しているが、これとは別に遺構出土遺物の集成図を併

せて第13図として掲げている。また、石器の観察表は、図を省略して写真のみで済ませたものも多かったので、写真図版の方に掲載した。

4. 遺構

検出した遺構は、竪穴住居跡1棟、礎石建物跡1棟、土塁1基、平場1ヶ所、参道跡1基、溝1条、捨て場2ヶ所である。礎石建物跡、土塁、平場、参道跡は、寺跡（鞍掛高松寺跡）を構成するものと思われ、年代を特定するのは難しいが、近世には存在していたと思われる。竪穴住居跡は平安時代、捨て場は縄文時代で、沢跡の捨て場の方は晩期中葉～後葉である。溝については時期不明である。

調査区は、沢を挟んでA区とB区に分かれている（第2図）。A区は、調査前から寺跡とわかっており、土塁、参道跡が確認されていた。調査では、土塁に囲まれた平場に礎石建物の痕跡を検出した。この他、縄文土器片数片、石鏃等の石器数点も出土している。B区からは、竪穴住居跡、溝、捨て場が検出された。なお、19Rグリッドで沢跡捨て場覆土上層から焼土が検出されたが、近現代のものと思われた。

遺構出土遺物は、第13図にまとめているが、詳しい記載（観察表）、実測図は、第5節に掲載しているので、そちらを参照していただきたい。

(1) 竪穴住居跡

B区で1棟のみ検出した。平安時代のものである。

第1号住居跡（第4図～第5図、第13図、写真図版6～7）

〔位置・検出状況〕23S③～23T①グリッド。東に下がる斜面に構築されている。古代の遺構によく見られる黒土で検出。17T付近の沢上部の疑似現象を掘った後だったので、当初はまた疑似現象かと考えた。

〔重複〕検出時には重複はないと思われたが、カマド精査時に周溝がカマドの下に延びていることが判り、周溝とカマドに時期差を考えざるを得なくなった。そこで、単に一軒の住居が後にカマドを作っただけかも知れないが、カマドを持つ住居跡（新しい方）を第1A号住居跡、周溝を持つ住居（古い方）を第1B号住居跡と便宜的に分離して報告する。それ以外の遺構との重複はない。

・第1A号住居跡（第4図）

〔覆土・堆積状況〕下半部炭化物、炭化材含む。

〔平面形・規模〕斜面下方の東壁が流出しているのではっきりしないが、3×2.8mの隅丸方形か。

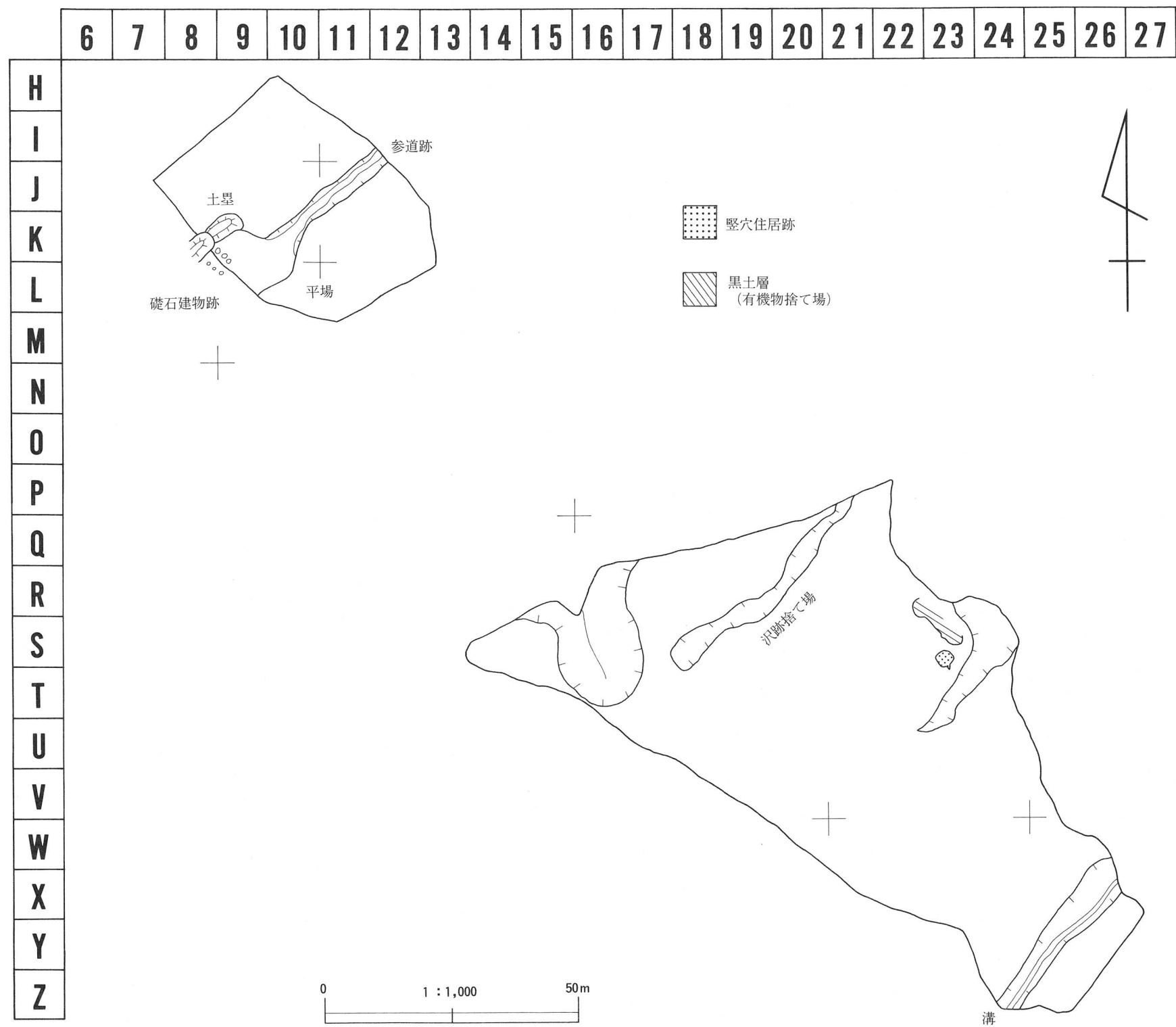
〔壁・床面・掘り方〕壁は外反するが崩れている可能性が高い。貼り床はされていない。床面に十字にトレンチを入れたが掘り方は検出できなかった。斜面に構築されているため、壁と床面東半分はⅡ層、床面西半分はⅣ層である。なお、Ⅱ層下には、有機物質捨て場とした黒土が斜面下に向かって続いている。

〔柱穴〕検出できなかった。検出を繰り返し、怪しいものを断ち割ったが、柱穴と思われるものはなかった。

〔カマド〕南東隅に構築されている。住居内に向かって崩れているが、礫を芯にし黄褐色土（Ⅳ層）で覆ってカマド袖部（本体）を作っているようである。燃烧部は、厚さ8cmの焼土が形成されているが、地山が礫を含んでいるためはっきりしない部分もある。煙道は掘り込み式。煙道の幅が狭いため一部断ち割ったので、写真では南側が広く見える。

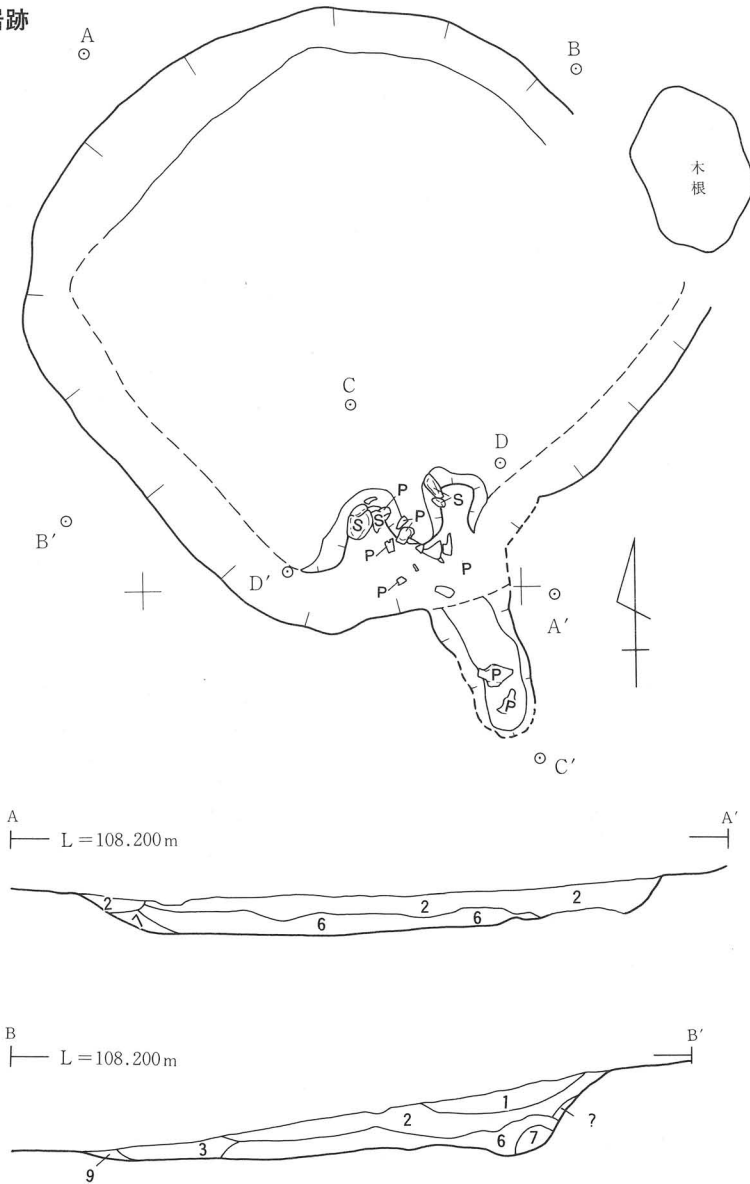
〔その他の付属施設〕検出できなかった。

〔出土遺物〕（出土状況）床面直上や6層から僅かな土器が出土しているが、比較的まとまった出土が見ら

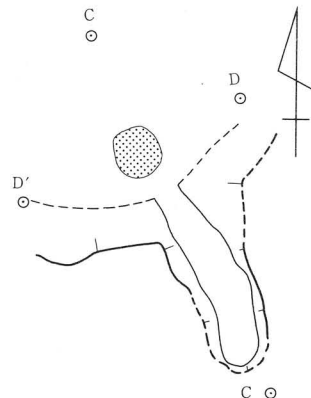


第3図 遺構全体図

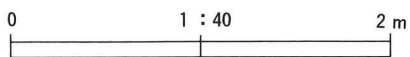
●第1 A号住居跡



●カマド掘り上がり

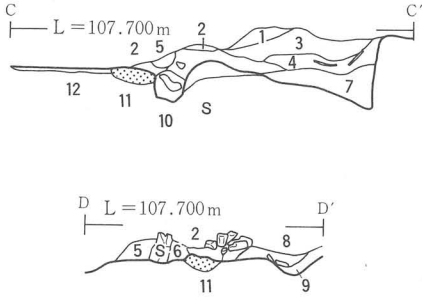


1. 暗褐(10YR3/3)粘土質シルト ローム粒? 1cm大の石含む。2層と同じ可能性が高いが、より明るく見える。
2. 黒褐(10YR3/2)粘土質シルト ローム粒? ブロック? 1cm大の石含む。土器を包含する層によくある土。
3. 灰黄褐(10YR4/2)砂質シルト 灰?ローム粒(?)多い。6層に含められる可能性あり。
4. 灰黄褐(10YR4/2)シルト 灰?ローム粒(?)多い。3層と同じ?
5. 黄褐(10YR5/6)砂質シルト ローム? (地山) ブロック。
6. 黒(10YR1.7/1)シルト ややボツボツ。炭化物多量に含む。特に①区で顕著。
7. 灰黄褐(10YR4/2)粘土質シルト ボツボツ ローム粒(?)多い。4層に似る。
8. にぶい黄褐(10YR4/3)砂質シルト 地山再堆積。第一次埋没土。
9. 褐(10YR4/4)砂質シルト 地山(II層)掘りすぎと思われる。



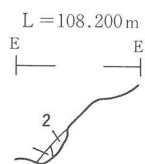
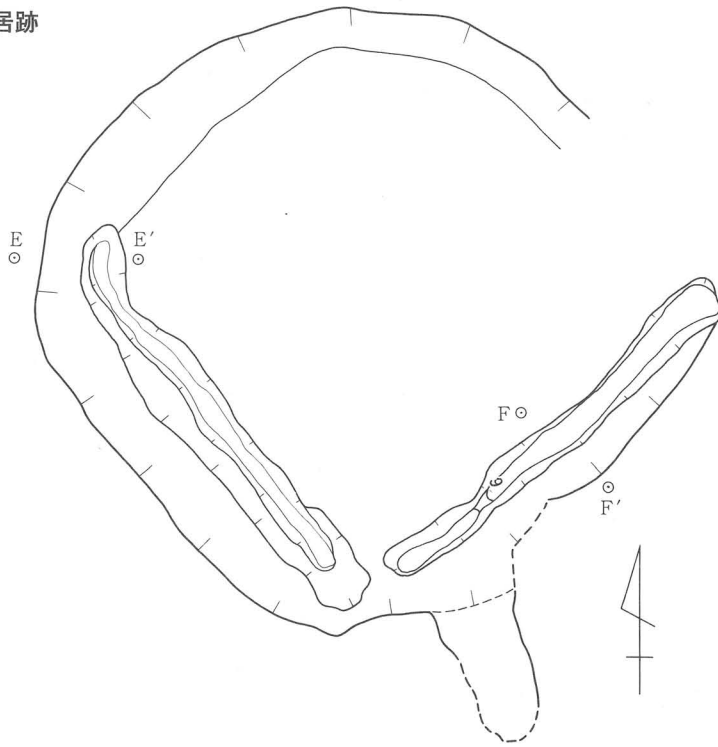
第4図 竪穴住居跡(1)

カマド断面

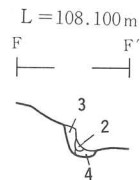


1. 黒褐 (10YR3/2) ~ にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト 根による攪乱あり。
2. にぶい黄褐 (10YR4/3) 粘土質シルト ローム粒多い。地土粒わずか。
カマド本体が崩れたものか。
3. にぶい黄褐 (10YR5/4) 粘土質シルト ローム粒多い。礫混じる。地山の再堆積？
4. にぶい黄褐 (10YR5/4) 粘土質シルト もろい。ローム粒多い。土器含む。
5. 黄褐 (10YR5/6) 粘土質シルト ややもろい。ローム粒多い。
カマド本体の崩れたものか。
6. 褐 (7.5YR4/4) 粘土質シルト ややもろい。焼土粒多い。
カマド天井部が崩れたもの。
7. 黄褐 (10YR5/6) 粘土 ややもろい。地山の再堆積。
8. にぶい黄 (2.5Y6/4) シルト 地山の再堆積。
9. にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト 灰多く、炭化物混じる。周溝覆土。
10. にぶい黄 (2.5Y6/4) に褐 (10YR4/4) 混じる。シルト 地山が汚れたような土。
周溝覆土。
11. 赤褐 (5YR4/6) 砂 焼土。カマド焼き口。
12. にぶい黄 (2.5Y6/4) 砂 炭化物混じる。床面 (V層)。

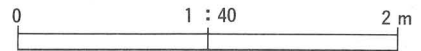
● 第1B号住居跡



周溝断面



1. 黒褐 (10YR3/2) 砂質シルト 炭化物 (2~3mm, 砂利含む) 覆い。6層と同じか。
2. にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト ローム粒多い。砂利含む。炭化物 (2~3mm) わずか。
3. 褐 (10YR4/4) シルト ローム粒多い。8層と同じ。
4. 褐 (10YR4/4) 粘土質シルト ロームブロック含む。板壁埋め戻した土？



第5図 竪穴住居跡(2)

れたのはカマド上面～覆土である（P 1～P 11）。第4図では、煙道にある土器の南側がP 6、北側がP 7で、カマド本体の上にある土器がP 1～5で、煙道と袖との中間にある土器がP 1である。P 8～11は、これらの土器を取り除いた後カマド本体下から出土した。カマド本体は崩れていたため、P 1～5とP 8～11の間に時期差があると考えて良いかどうかは不明である。なお、遺物の項の観察表および本文中のP○の後の括弧中の層名は住居ではなくカマド覆土の層名である。以上の土器の他、住居覆土6層（床直）から鉄製紡錘車が出土している。また住居南東壁～北東壁近くの6層からは、僅かながら炭化材のブロックが出土している（手違いで樹種鑑定していない）。

〔遺物〕 第13図1～4の土師器、第13図1の鉄製紡錘車が出土している。

〔時期〕 出土土器から、平安時代（10世紀前半）と思われる。

・第1B号住居跡（第5図）

〔覆土・堆積状況〕 第1A号住居跡と異なるのは周溝の覆土のみ。

〔平面形・規模〕〔壁・床面・掘り方〕〔柱穴〕 第1A号住居跡に同じ。

〔カマド〕 なし。

〔その他の付属施設〕 南東壁と南西壁に周溝を持つ。

〔出土遺物〕 第1A号住居跡参照。本遺構に帰属すると考えられる遺物はない。

〔時期〕 本遺構に帰属する遺物はなく、はっきりしない。第1A号住居跡出土として取り上げた遺物の中にも明らかに時期が異なるものは含まれておらず、そちらに紛れているとも考えられない。ただし、周溝とカマド以外は、両住居は共有しているため、第1A号住居跡とそれほど離れていない時期と思われ、平安時代の可能性が高い。

(2) 礎石建物跡

A区平場の土塁に囲まれた部分に1棟検出した。

第1号礎石建物跡（第6図、第7図、第13図、写真図版8～11、14）

〔位置・検出状況〕 A区8K～9Lグリッド。平場中央西隅に位置する（第6図のL字状の土類に囲まれた10箇所小さな丸～四角の部分）。南側の調査範囲外に続いており、この部分（土塁に囲まれた部分全体）についても検出作業を行ったが、図示したものしか確認できなかった。表面の落ち葉～薄い（数センチ）腐植土を取り除いてすぐ検出された。

〔重複〕 無いと思われるが、後世の改変を受けている。平場に生えている木は、何れも樹齢の若そうな（せいぜい2～30年）松で、これらが生える前に伐採が行われている可能性が高く、その積み出しの際に本遺構は大きな攪乱を受けている可能性がある。写真図版14の東側斜面に見られるカマボコ状の凹は、伐採された木の積み出しの痕跡と推測される。また、写真図版8に見るように、礎石跡が検出された平場の西隅は平坦であるが、東側は東側斜面下に向かって緩く傾斜している。このことから、礎石建物跡は攪乱を受け、東側については流出したと考えられる。

〔覆土〕 ほとんどなし。検出状況参照。

〔構造・規模〕 礎石がほとんど残っておらず不明だが、根石の集中部分やグライ化部分（固く重いものが載っていたため土が改変を受けたもので、柱が立っていた可能性が高い部分）を考慮すれば、梁行南北2.8mの1間、桁行東西3.8mの2間の可能性がある。ただし、平場や土塁の規模を考えれば、不自然な規模であり、

もっと大きな建物の一部のみが検出された可能性もある（〔重複〕の項参照）。

〔柱配置・柱間〕柱配置は矩形をなしている。梁方向の柱間2.8m、桁方向の柱間1.9～1.5mである

〔礎石・根固め石・グライ化部分〕礎石は、一部割れたものが残っているだけで（写真図版10～11）、原位置を保っているものはない。根固め石の集中部分が六ヶ所検出された。地山が固く赤く変質した部分が4箇所検出され、これは、上に重いもの（柱？）が載っていたためグライ化したと考えた。ただし、根固め石の集中部分と一致するのは1ヶ所のみで、グライ化とは関係ないのかも知れない。

〔その他の遺構との関係〕本遺構は、土類に囲まれた平場にあり、平場には、斜面下から登ってくる参道跡が続いている。本遺構は、参道跡の正面にはなく、西にずれている。

〔出土遺物〕（出土状況）根固め石のそばから古銭が3点出土しており、2点の出土位置は、第7図に記している。これらは第13図の1と2である。もう1点は、調査時の手抜きで第三者の手によって動かされてしまったが、後に木の切り株に載っていた第13図3が、その可能性があると考えている。

〔遺物〕古銭2点のうち、1点（第13図1）は寛永通宝（新）で、もう1点（第13図2）は鉄銭でサビがひどく不明である。同じ場所から出土したと思われる第13図3も、鉄銭でサビがひどく不明である。

〔時期・所見〕明確に伴う遺物が無く時期ははっきりしないが、出土した古銭から江戸時代後期には存在していた可能性がある。平場、土塁、参道跡の組み合わせで寺跡を構成するものと思われる。

(3) 土塁

A区で、平場をL字状に囲む土塁を検出した。

第1号土塁（第6図、第8～9図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕A区9K～8Lグリッドで検出。南側の調査範囲外に続く。地表で確認できたが、北側の一部は崩れていた。

〔重複〕無いと思われる。

〔覆土〕ほとんど全くなし。枯葉等のみ。

〔平面形・規模〕南北約23m、東西17mのL字状を呈す。平場の西辺と南辺を囲む形になっている。ちなみに平場の北側には参道が続き、東側は急斜面となっている。

〔土塁の構造・規模〕にぶい黄褐色土（7層）の上に赤土（地山土）を載せて（4層）作っている。にぶい黄褐色の土は、表土と地山の土の混土で、当時の表土を動かして盛り上げたものと思われる。幅約4～5m、高さ約1m。

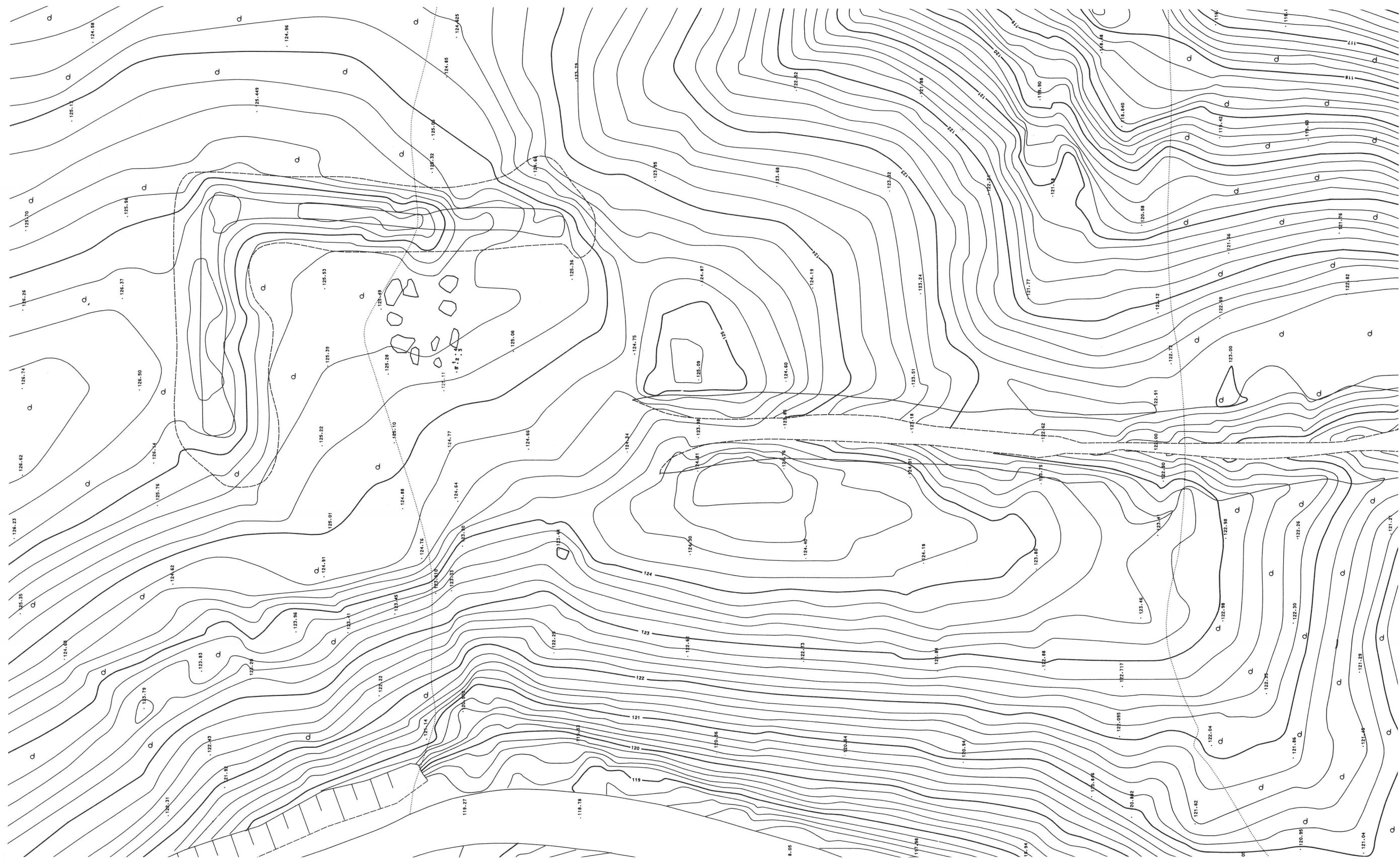
〔その他の遺構との関係〕平場の西辺～南辺をL字状に囲む。

〔出土遺物〕なし。

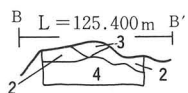
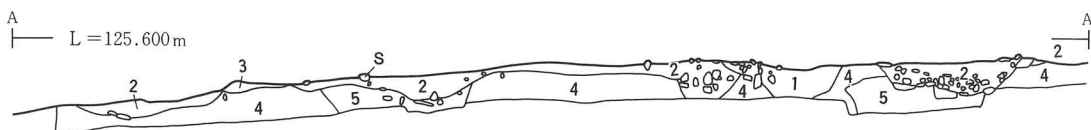
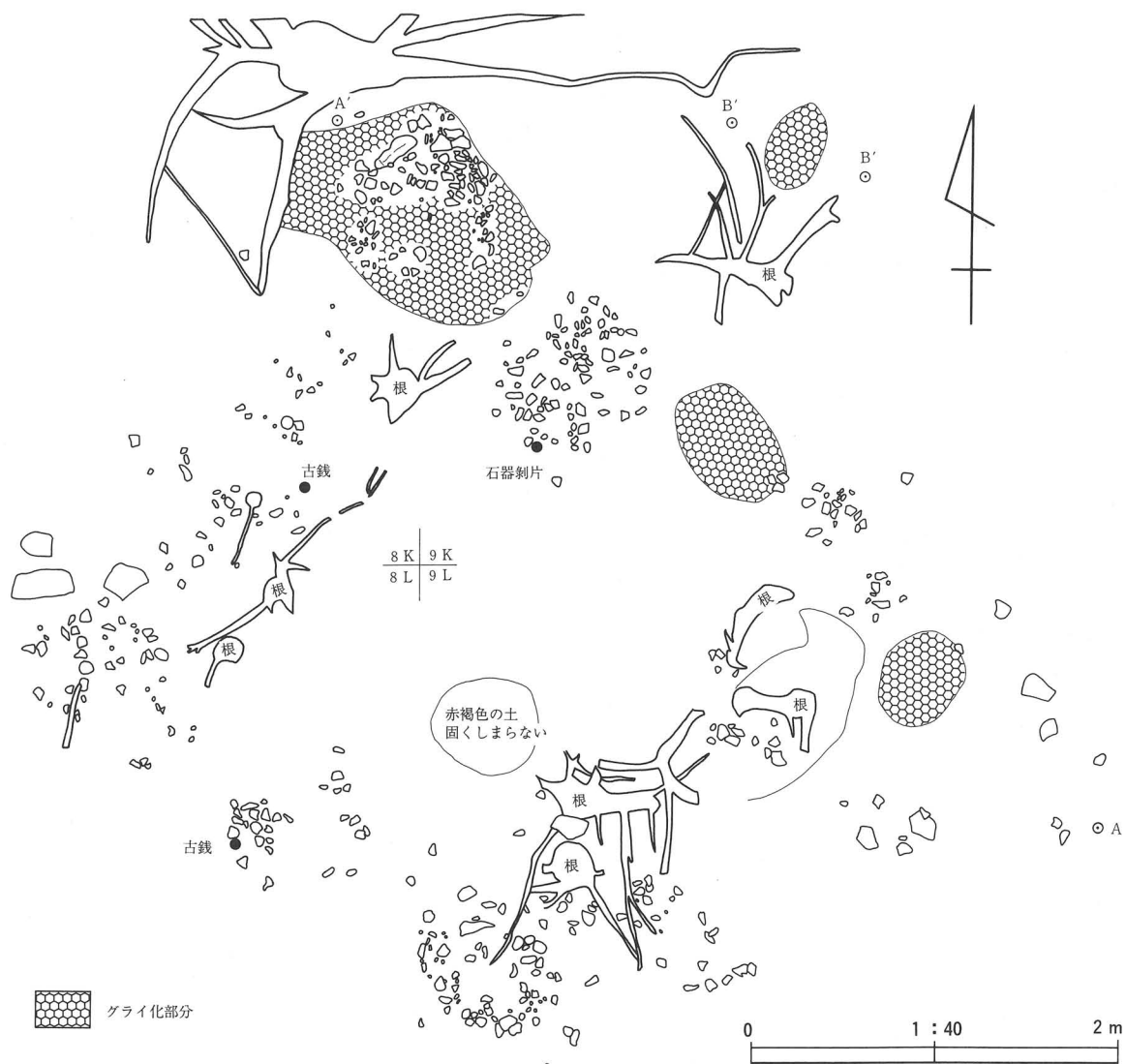
〔時期・所見〕時期を判断するものが無く不明だが、平場及び、その上に立っている礎石建物跡に伴うものと判断すれば、礎石建物跡の年代から江戸時代後期には存在していた可能性がある。

土塁に使われた土は、平場を造成する時に削った土を盛ったものと思われるが、平場は単に尾根部を削っただけでなく東側斜面に土を盛って作られているので、尾根を削った時に出た土だけで賄えないように思われる。後述するように、参道跡は、両脇に土をほとんど盛っていないので、土塁に使われたのかもしれない。

平場、礎石建物跡、参道跡との組み合わせで、寺跡を構成すると思われる。



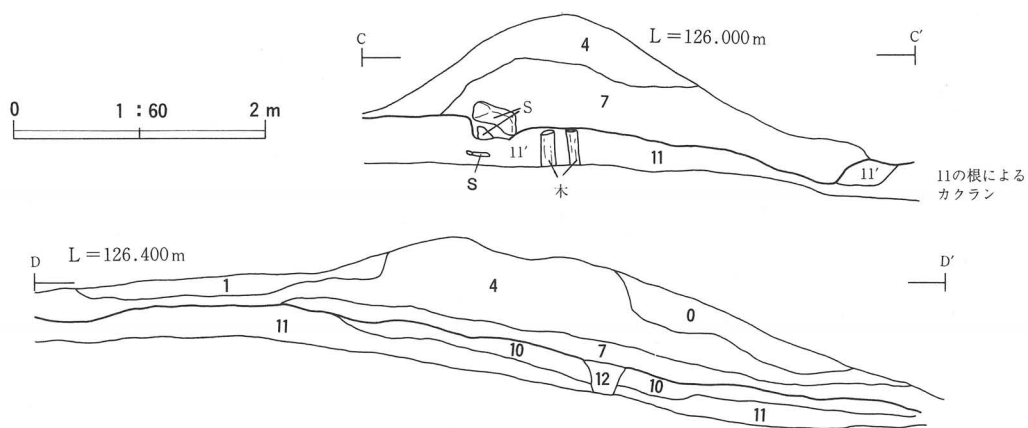
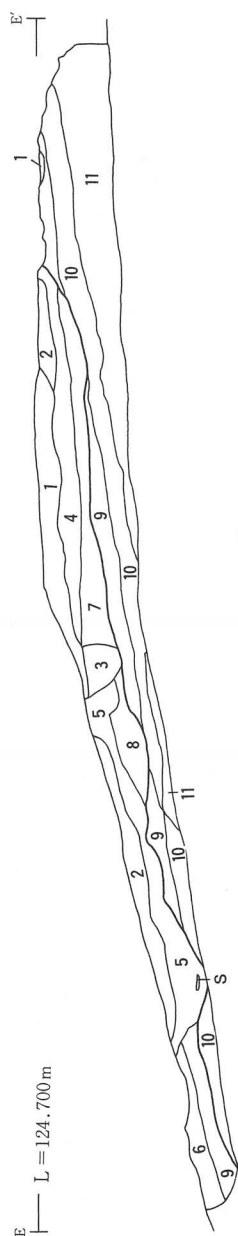
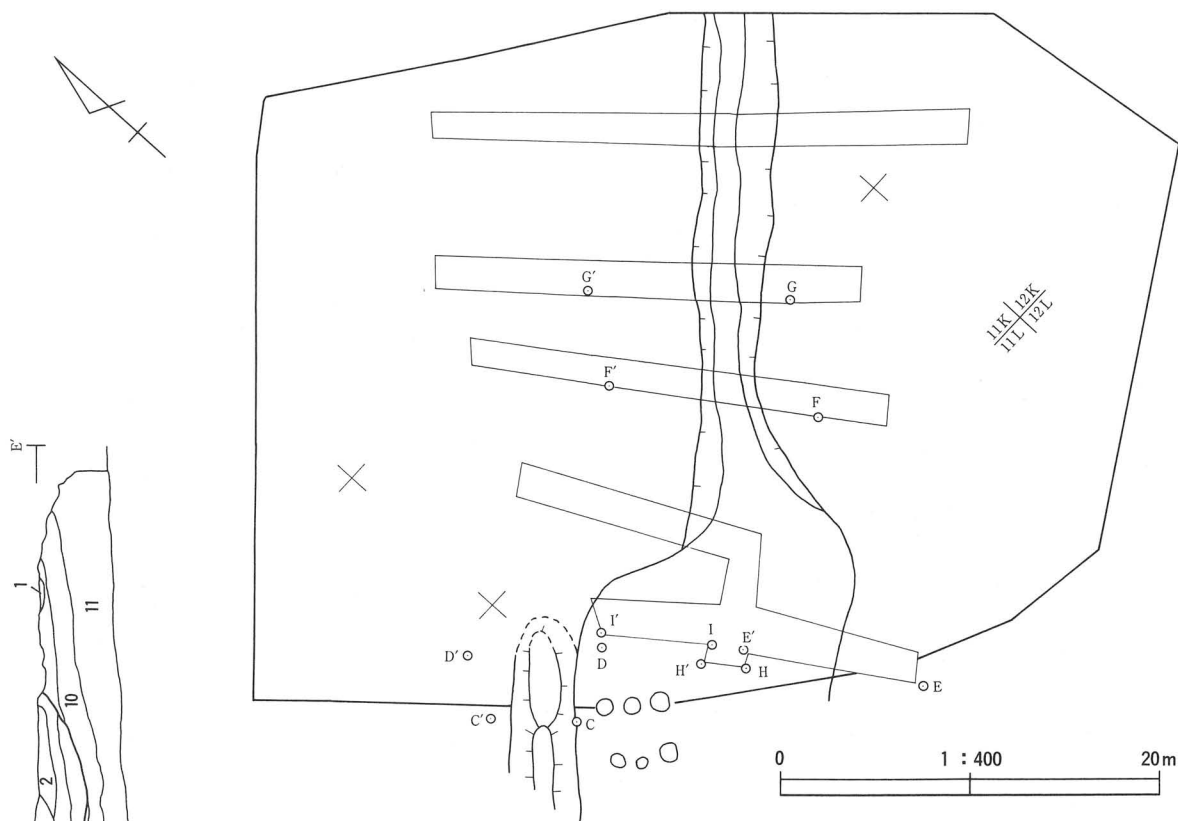
第6图 A区地形测量图



SPA (礎石)、SPB (グライ化部分)

1. 黄褐 (10YR5/6) 粘土 根多い。地山が汚れたもの (再堆積)。基本的には2層と同じだが、より暗く、掘り込みの可能性あり。
2. 黄褐 (10YR5/6) 粘土 根多い。地山が汚れたもの (再堆積?)
3. 明褐 (7.5YR5/8) 粘土質シルト 固く締まる。4層がグライ化したものと思われる。柱あたりと考えていたが、動いている可能性大。
4. 明黄褐 (10YR6/8) 粘土 地山。
5. 橙 (7.5YR6/8) 粘土 4層と同じと思うが、ウンモ? (キラキラ光る砂状のもの) を多く含む。

第7図 礎石建物跡



0. 調査時の盛土、攪乱。
 1. 黄褐 (10YR5/6) 粘土 固く締まる。地山の赤土 (IV層?) を貼ったもの。盛土。
 2. 褐 (10YR4/6) 粘土 固く締まる。1層と同じだが、混ざりものが多いせいか、色が暗い。盛土。
 3. 黄褐 (10YR5/8) 粘土 やや柔らかい。1層が根による攪乱を受けたものか。盛土。
 4. 褐 (10YR4/6) 粘土質シルト 径2~3cmのロームブロック多い。盛土。
 5. 黄褐 (10YR5/6) 粘土 4層とほぼ同じだが、色調が暗い。盛土。
 6. 褐 (10YR4/6) 粘土 1層と考えると良いと思うが、ややローム粒混じる。
 7. におい黄褐 (10YR5/4) 粘土質シルト 灰色がかった特徴的な土。盛土。
 8. 褐 (10YR4/4~4/6) 粘土質シルト もろい。7層とよく似ているがロームブロック含む。7層が根による攪乱を受けたものか。盛土。
 9. 褐 (7.5YR4/3) 粘土 やわらかい。元の表土か。III層がより濃く、やわらかくなった感じ。
 10. 明褐 (7.5YR4/6) 粘土 固く締まる。標準土層のIII層。
 11. 明黄褐 (10YR6/6) 粘土 固く締まる。標準土層のIV層。
 12. 褐 (10YR4/6) 粘土 固く締まる。1~2mmの炭化物を含む。10層が汚れた感じで、10層が攪乱を受けたものか。炭化物を含み、意味深な形をしているが、実際にはもう少し不整形で遺構とは考えにくい。
- ※ダッシュがついている層 (例えば11') はもとの層 (例えば11層) が攪乱を受けたもの。

第8図 土塁・平場と参道跡(1)

(4) 平場

A区で、土塁に囲まれ、参道跡に続く人工的な平場を検出した。

第1号平場（第6図、第8図～第9図、写真図版8、12、14）

〔位置・検出状況〕 A区9K～10Lグリッドで、地表から検出。南側の調査範囲外に続く。

〔重複〕 ないと思われるが、表面は改変を受けている可能性がある（礎石建物跡の記載参照）。

〔覆土〕 ほとんどなし。枯れ葉の下すぐと言った感じ。

〔平面形・規模〕 西辺～南辺がほぼ直角をなし東辺が斜行する台形に近い。規模は、南辺約19m、北辺約14m、西辺約21m、東辺約20m。なお、東辺下は急斜面になっている。

〔構造〕 第6図の、土塁と平場を挟んで二つに分かれている尾根が本来は一つの連続するものであり、この尾根を削り（第9図）、東側斜面にその土を盛って（第8図断面図参照）平場を作り出しているようである。

〔その他の遺構との関係〕 西辺と南辺はL字状の土塁に囲まれており、北辺は参道跡に続く。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期・所見〕 時期を判断するものが無く不明だが、礎石建物跡が平場に伴うものと判断すれば、礎石建物跡の年代から江戸時代後期には存在していた可能性がある。

礎石建物跡、土塁、参道跡の組み合わせで、寺跡を構成すると思われる。

(5) 参道跡

A区に南北に走る1条の溝を地表で検出し、他の遺構との関係から参道跡と判断した。

第1号参道跡（第2図、第6図、第8図～第9図、写真図版11、13、14）

〔位置・検出状況〕 A区9K～12Iグリッドで地表から検出。北側の調査範囲外に続く。本遺構は、北は斜面下の道路まで続いており、道路からの入り口には高松寺跡の古碑が立っている（写真図版14）。このことと、平場と土塁との関係から、本遺構をただの溝とせず、参道跡と判断した。

〔重複〕 ないと思われる。

〔覆土〕 ほとんどなし。上から崩れた土で若干埋まった程度。

〔平面形・方向・規模〕 途中ややカーブを描くが、基本的には直線状である。南北方向に走り、平場から、北側の調査範囲外では途中痕跡的になりながらも（第2図）、下の道路まで続き、全長約160mを測る。

〔断面形・規模、深さ〕 鍋底状。幅3～4m、深さ0.5～1m。

〔底面の様子〕 特に際だった特徴は見られない。

〔その他の付属施設〕 ないと思われる。

〔掘削方法・盛土〕 盛土が認められたのは、第8図中央のトレンチ（断面図G-G'の部分）のみである（第9図）。本遺構を掘って出た土は、土塁や平場を作るのに使われた可能性もあるが、雨裂状のものを掘り上げたため、あまり土が出なかった可能性もある。なお、この部分の地山下（V層）は、砂層で縞状の薄い層が多く堆積しているが、本遺構を挟んで左右に連続していないところが多い（断層？）。

〔その他の遺構との関係〕 南側は、土塁に囲まれた平場の、中央よりやや東寄りに接続する（第6図）。北側は、斜面下の道路まで続き、その途中にある、観世音、白山神社などの建物も本遺構に関係するかも知れない（中間にある建物は、鞍掛公民館である）（第2図）。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期・所見〕 時期は不明であるが、本遺構に関係すると思われる平場上の礎石建物跡から判断すれば、江戸時代後期には存在していた可能性がある。礎石建物跡、平場、土塁の組み合わせで、寺跡を構成すると思われる。また、これらの遺構と、北側の斜面下の遺構外にある建物との関係を窺わせる遺構である。

(6) 溝

B区で1条検出したが、調査前から地表で確認されていたものである。

第1号溝 (第2図、第11図、写真図版15、17)

〔位置・検出状況〕 B区尾根東脇、26X～24Zグリッドで、地表で確認。南北に延び、調査範囲外に続く。

〔重複〕 調査できた範囲ではないようである。

〔覆土〕 上から崩れた土で底がやや埋まっている程度である。

〔平面形・方向・規模〕 ほぼ直線状で、北東から南西に延びる。調査できた範囲では、長さ約35m。

〔断面形・規模、深さ〕 箱葉研に近い。上の幅は最大約8m、下端約1.2m。深さ最大約2.1m。

〔底面の様子〕 特になし。

〔その他の付属施設〕 検出できなかった。

〔掘削方法・盛土〕 脇に土は盛っていないようである。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期・所見〕 時期不明。調査範囲外でもその続きが地表から判るが(第2図)、北側、南側とも途中から痕跡的になってしまい、どこへ続くのか不明である。調査した部分が最も深い。参道跡とほぼ並行に走っているため、何らかの関係があるのかも知れない。水が流れた痕跡が窺えるので、単なる自然現象の可能性も無くはないかも知れない(雨裂?)。

(7) 捨て場

主として2箇所の捨て場を検出したが、第2号捨て場は、通常の捨て場と異なり遺物は全く出土していないが、その土層の性状から、有機物質を捨てた可能性があるかと判断して捨て場と認定したものである。

この他にも、特にB区において、土器が点々と出土しており、尾根および尾根のすぐ脇の西側斜面上方から比較的多くの土器が出土した。出土しているのは主に縄文時代晩期後葉の土器だが(第24図164～第26図183)、土師器も出土している(第27図5)。尾根には炭化物も出土しているが、これらは木が燃えてそのまま炭化した物と思われ、人工物ではない。焼土も検出されてはいない。

第1号捨て場(沢跡の捨て場) (第3図、第11図、写真図版16、17)

〔位置・検出状況〕 B区17S～21Pグリッド付近で検出。南西から北東に向かって流れる沢跡の埋まりきるぐらいの所から多量の土器が出土したので、捨て場と認定。

〔重複〕 19Rグリッドで覆土上層から焼土が検出されたが(第11図断面図4層に挟まれた部分)、共伴遺物がないので何時のものか不明である(近現代の可能性も十分ある)。その他にはないようである。

〔覆土〕 第11図1～8層が覆土となる。直上層の8層は地山の再堆積土(赤土)である。その上は基本的に黒土となるが、上記したように、途中焼土が見られる。

〔平面形・規模〕 沢跡の範囲のほぼ全域に検出されたが、先端部（調査範囲境）になると、出土土器は激減するようである。幅約1.5m、長さ約45mの溝状の範囲に、厚さ約20cmに亘って遺物包含層が堆積している。

〔形成過程〕 断ち割って観察した断面の様子（第11図）と出土土器の時期から判断すると、沢が黒土でほぼ埋まりかけた頃、比較的短期間（大洞C2式～大洞A2式期）に形成されたようである。

〔包含層の様子〕 遺物包含層は、黒土に赤土が混じったような土である。炭化物はほとんど含まない。

〔遺物の出土状態〕 今回の調査では、他の場所に比べて遺物が集中して見られただけで、それほど大量の遺物が出土したわけではない。土器は、大コンテナ（30×40×30cm）1.3箱程度で、完形土器の出土は1点程度で、ほとんどが小破片である。石器の出土は非常に少なく、その他の遺物は出土していない。

〔出土遺物〕 第14図1～第21図115の土器、石器では、第29図3、4の石鏃、第30図13、14の搔器類、写真図版30～31の32～43、写真図版31～32の47～54の剥片類などが出土している。第33図81の磨石は後世の物の可能性が高い。

〔時期・所見〕 一部後期の土器などが混じっているが（第14図3）、土器は、基本的に大洞C2式から大洞A2式のもので、この期間に捨て場は形成されたものと思われる。上で比較的短期間と述べたが、是は他の大規模な捨て場に比べてと言う意味で、実際のところは（土器型式一型式が変化するのにどの程度の時間がかかっているか不明だが、ここでは常識的な判断で一型式50年程度として）150～200年前後の時間をかけて形成されたと推測される。

では、この期間継続して形成されたかという点、大洞C2式の土器は少なく、特に後半に当たる物は見あたらない。また、大洞A式でも新しい方（大洞A2式）が主体である。したがって、この捨て場は、大洞C2式期から断続的に形成され、大洞A2式期に比較的多くの土器が捨てられて形成されたとと言える。

第2号捨て場（有機物質捨て場？）（第3図、第12図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 B区、竪穴住居跡から、沢に面する平坦面先端付近（22R～23Sグリッド）に検出。遺物（土器、土偶）がややまとまって出土したにぶい黄褐色土を掘り下げたところ、その東端付近からややふかふかした黒土を検出。遺物は全く出土しなかったが、その性状から、この土層の堆積には人間が関わっている可能性が高いと判断して、捨て場と認定した。ただし、単なる旧表土（ただし古代以前）で、その上に地山の土が再堆積（にぶい黄褐色土）している可能性もある。

〔重複〕 第1号竪穴住居の床下にも検出され、これより古い（すなわち古代以前）。

〔覆土〕 地山の再堆積と思われるにぶい黄褐色土。

〔平面形・規模〕 範囲は確認していない。

〔形成過程〕 不明。

〔包含層の様子〕 基本的には断面図の4～6層が相当すると思われる。ローム粒、炭化物含む、黒土。

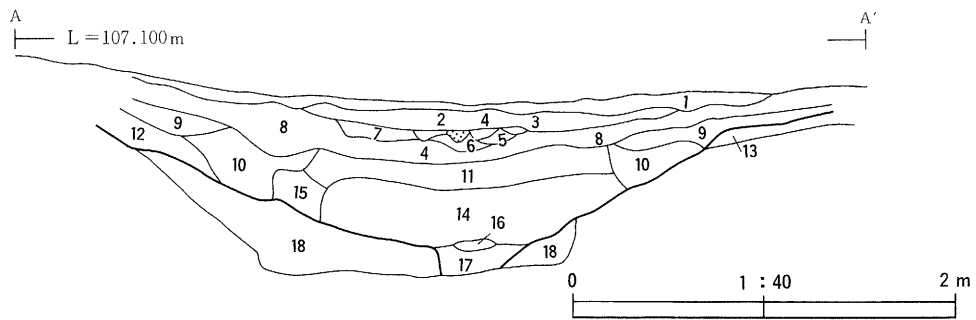
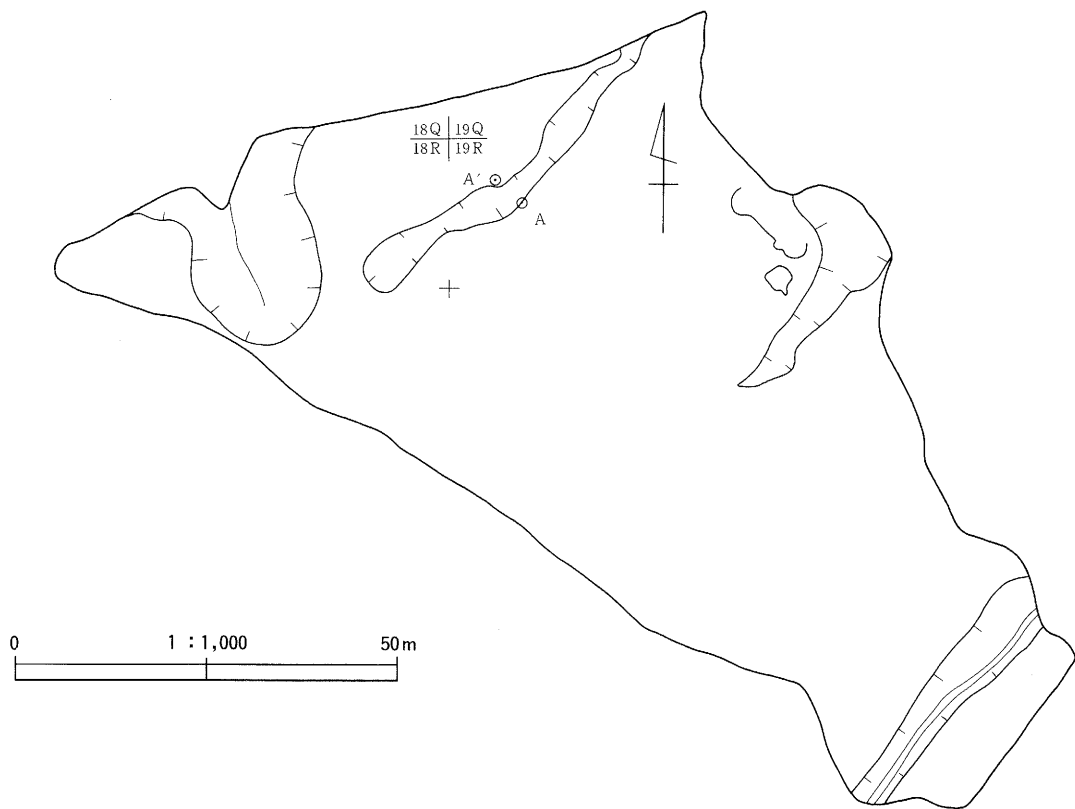
〔遺物の出土状態〕 上面の覆土からは出土するが、本遺構からは全く出土していない。

〔出土遺物〕 なし。

〔時期・所見〕 古代より古く、覆土から弥生時代後期土器が主として出土していることから、縄文時代の可能性が高い。

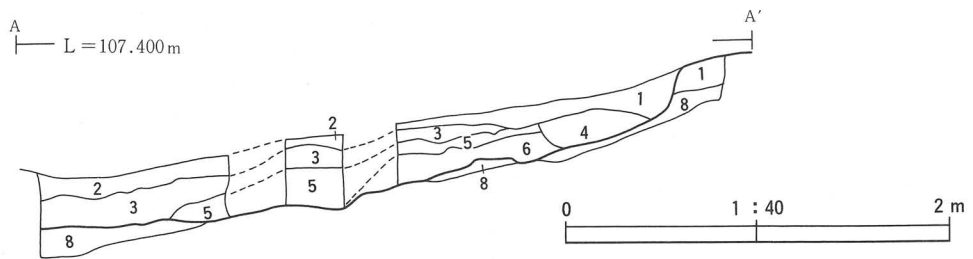
5. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文・弥生土器が大コンテナ（30×40×30cm）で2箱、土師器が小コンテ



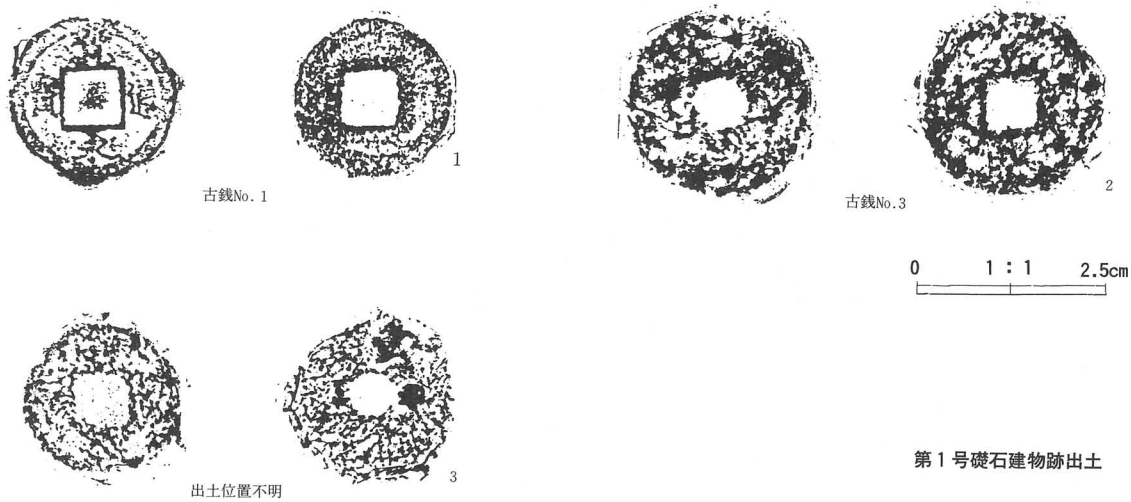
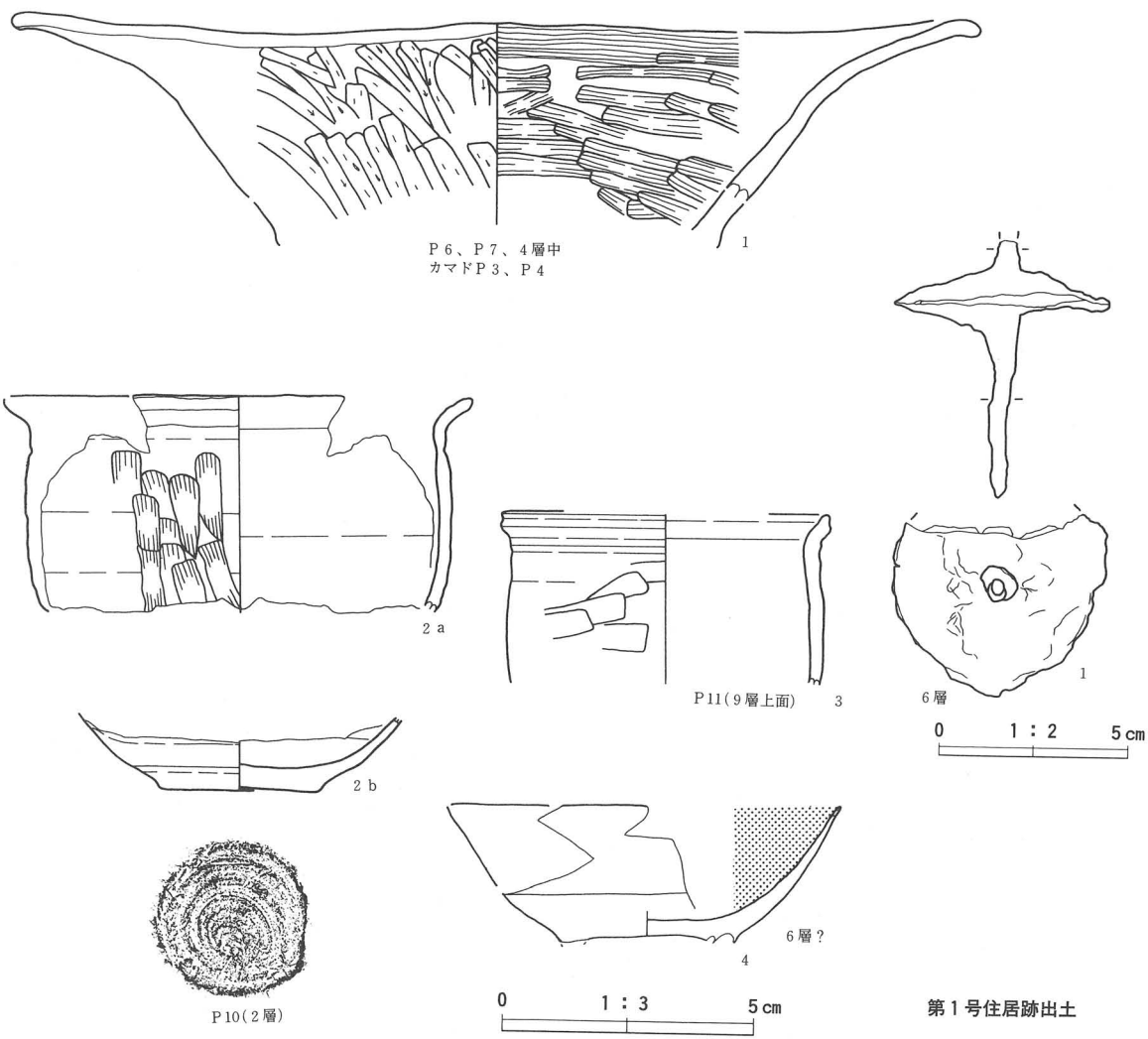
1. 黒褐 (10YR3/2) 砂質シルト ロームブロック多く、炭化物含む
2. 黒 (10YR1.7/1) 炭化物多く、ローム粒含む。
3. 褐 (10YR4/6) シルト ロームブロック。
4. 褐 (7.5YR4/6) 砂質シルト 焼土。
5. 黒 (10YR1.7/1) 砂質シルト もろい。炭化物多い。2層と区別つかない。
6. 黒 (10YR1.7/1) シルト 炭化材含む。炭化物最も多い。
7. 黒褐 (10YR3/2) シルト ローム粒多い。
8. 黄褐 (10YR5/6) シルト ロームの再堆積? II層の一部。遺物包含層(下部)。
9. 褐 (10YR4/4) 粘土質シルト 小礫(1cm大)含む。
10. にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト
11. 黒褐 (10YR3/2) シルト 土器多く含む
12. 黄褐 (2.5Y5/3) 砂質シルト V層の再堆積
13. オリーブ褐 (2.5Y4/6) 砂 V層
14. 黒 (10YR1.7/1) 粘土質シルト 1cm大の小礫含む。
15. 黒褐 (10YR3/1) 粘土質シルト 10層と14層の中間的。
16. 黒褐 (10YR3/2) 砂質シルト V層のブロック。
17. 黒褐 (10YR3/1) 砂質シルト
18. 明黄褐 (2.5Y6/6) 砂 V層。

第11図 沢跡捨て場



1. 暗褐 (10YR3/3) シルト ローム粒多い。炭化物散る。
2. 黒褐 (10YR3/2) シルト ローム粒含む。1層によく似るが色調が異なる。
3. 褐 (10YR4/6) 粘土質シルト II層の再堆積。
4. 黒褐 (10YR2/3) 粘土質シルト ローム粒含む。5層によく似るが色調が暗い。
5. 暗褐 (10YR3/3) 粘土質シルト ローム粒含む。
6. 黒褐 (10YR2/2) 粘土質シルト ローム粒、炭化物含む。
7. 黄褐 (10YR5/6) 粘土質シルト II層。
8. 黄褐 (10YR5/6) 粘土質シルト V層上面。

第12図 有機物質包含層



第13図 遺構内出土遺物

ナ(30×40×10cm)で1箱、土製品(土偶)1点、石器類が82点(石器製作時の剥片等含む)、鉄製品(紡錘車)が1点、古銭が4点などである。土製品、石器類、鉄製品、古銭については全て掲載した(石器類は、石器製作時の剥片、石核は基本的に写真のみで済ませ、図はない)。縄文・弥生土器、土師器の掲載基準については、それぞれの節を参照していただきたい。

遺物の記載は図と表で行い、本文中にはその補足と概要のみ記したので、ここで、図版、写真図版、表を見る際の留意事項について述べておく。本章では遺構出土の遺物も含めているが、それぞれ、その種類の遺物の中で、最初(遺構順)に並べている。遺構出土の遺物は、第4節の最後に遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい(第13図)。遺構外出土の遺物は、遺構出土遺物の後に出土位置の順(はっきりしているもの→はっきりしないもの、はっきりしているものはグリッド順)に並べている。観察表の計測値の()内の数値は、欠損している場合等の現存値である。外面、内面の観察事項の欄の「→」は施文、調整(整形)順序を表す。「焼けはじけ」とは、煮炊きによって土器の表面に直径0.5～1cm程度の円がたくさんできたように剥落した状態を示し、剥落がひどい場合を「ただれている」と表現している。

(1) 縄文土器・弥生土器(第14図～第26図、写真図版20～27)

縄文土器・弥生土器は、大コンテナ(30×40×30cm)2箱出土した。時期は、縄文時代晩期後葉を中心とし(約6割)、後の3割を弥生時代後期土器が占め、それ以外のもの(縄文時代後期前葉、後期末、晩期前葉)は1割程度である。

本遺跡は、遺構がないのに縄文土器・弥生土器が調査範囲内に散在するという特異な出土状況が見られ、その出土地点を網羅する意義があると思われたので、比較的多めの掲載を試みた。掲載基準は、文様のあるものに限っては、5×5cm以上を一応の目安としたが、これ未満のものも掲載している。地文のみ、あるいは平行沈線1本のみの土器は、10×10cm以上を目安とした。載せるべきか迷いながら結局掲載しなかった土器には次のものがある。24X④グリッド出土で、2～3×3cmの壺の口縁部破片で文様を持っていたが、同一個体を掲載したので。同じく24X④グリッド出土で、2×3cmの隆線状の工字文を持つ土器片。20Q③グリッドでは、7×8cmと14×10cmの胴部の地文のみの破片が著しく磨耗していたので掲載しなかった。

記載は基本的に図と表で行ったので、最初にその作成要領、表を見る際の注意事項について述べておく。掲載順序は基本的に出土位置に拠った。沢跡は正確には遺構ではないが土器の出土が集中しており、遺構に準じると考え、冒頭に掲載した。器種の「袋物」とは、壺や注口土器のように、袋のように口が閉じて出し入れが容易でない器種である。備考の欄の付着物の「スス」「吹きこぼれ」「おこげ」は、厳密に区別しておらず、単に付着している量によって分けている(右に行くほど多い)。「焼けはじけ」は本節の冒頭部分参照。その他の事項についても本章の冒頭部分参照。

基本的な観察事項は表に示したので、ここでは、まず概要を述べ、次に掲載順序に従って表の補足をする。

最初に出土状況。まず、184と185の出土位置は、後述のように記入間違いと思われる。A区も無文あるいは地文縄文のみの小破片が2～3片出土しているが、大部分はB区からの出土である。B区では、沢跡の捨て場からの出土がほとんどで、全体の出土量の2/3を占める。その他、約1/6を沢跡捨て場と西側の沢の間の斜面が占め、約1/12を平坦面の北端の沢に面したところ、約1/12を尾根の西脇の平坦面～斜面が占める。残りの部分からも、急斜面(尾根)下の部分を除いて、小片が僅かに出土しているが、今述べた4箇所に集中している。整理すれば、沢に面した部分と尾根脇である。出土土器は、22Rグリッド付近(第3図)の平坦面北端の沢に面した部分だけは、弥生時代中～後期が集中して出土しているが、それ以外の部分は縄文時代

晩期後葉が主に出土している。出土状況を考えれば、これらの部分に生活の拠点があったと想像するのが自然である。そこで、この部分に限ってはほぼ全面剥いで検出を行ったが、竪穴住居跡を検出することはできなかった。

次に型式学的特徴。小型土器は33、異形土器と思われるのは52、蓋の可能性のあるものは153?である。晩期後葉を中心として、全体的に二次焼成を受けて赤くなっている土器が目についた。

最後に時期、土器型式。土器型式の認定に当たっては、次の文献を参照した。縄文時代後期前葉に関しては、本間宏氏（本間 1987、1988）（註1）、後期末に関しては高柳圭一氏（高柳 1988）、晩期全般に関しては、山内清男氏（山内 1930、1971）、晩期中～後葉に関しては、高橋龍三郎氏（高橋 1981、1993）、晩期後葉～末に関しては、鈴木正博氏（鈴木 1985、1987）、小林圭一氏（小林 1997）、弥生時代に関しては、須藤隆氏（須藤 1983、1987）、小田野哲憲氏（小田野 1987）、弥生時代後期については、齋藤邦雄氏（齋藤 1993）、小林克氏（小林 1993）。

後期前葉（蛭沢式併行期?）の可能性のあるものは、3=129、後期末（瘤付土器第Ⅰ～Ⅱ段階）の可能性のあるものは177。146も後期末と思われるが、弥生時代後期の可能性も無くはない。

晩期前葉の可能性のあるものは、26?

晩期中葉の大洞C 1式の可能性のあるものは、47?、61。大洞C 1～C 2式の可能性のあるものは125。大洞C 2式（古）の可能性のあるものは、12、143。大洞C 2式（中）の可能性のあるものは、5、131、135、141。大洞C 2式（古～中）の可能性のあるものは、56、大洞C 2式の可能性のあるものは、31、37、38、41、49、53、67、71、75、76、87、105、107、108、114、123、127?、136である。138も晩期中葉か。

晩期後葉の大洞A 1式の可能性のあるものは、57、168、173?、178、大洞A 2式の可能性のあるものは、4、13?、14、20、24、25、40=46、42?、46、52、54、62（大洞A'式（古）?）、70、74、77、78、80、81、85、86、96、106、110?、122、169?、170、171、174?、182、大洞A式の可能性のあるものは、16、40、43、55、58、66、82～84、166、175、179～181、187、191。大洞A～A'式の可能性のあるものは、144、189。大洞A'式（古）の可能性のあるものは、35?、36。

弥生時代中期の可能性のあるものは、152、159。

弥生時代後期の可能性のあるものは、121=137、149、150、154?、155、157、158、161、164?、190。162は土師器の可能性が高い。

ここまで特に指摘しなかったものは、163を除いて、ほとんどが大洞C 2～A式の可能性が高いと思われる。

以下、表の補足。12の口縁部に刻目。口縁内面の水平沈線はA突起に向かって枝を出す。縄文（RL?）。13の頸部文様は、基本的に三本の平行沈線があり、一番下の沈線が上に向かって枝を出して三叉状を呈し、二番目の沈線がその枝（三角形の陰刻の頂部）をはさむ形になって間が開き、そこに二個一対のやや大きめの瘤状突起を持つ。31の内面底面ただれ。内面上部にスス状付着物。外面二次焼成、スス状付着物。32のB突起の中央の凹から出た沈線が二手に分かれて一周して反対側のA突起を挟む。40=46は1/4周弱残存。42は二次焼成受けている。59の口縁内面に痕跡的な水平沈線。60は1/4周残存。62の縄文LR。外面もミガキ。74は1/4周弱残存。122の工字文の縦棒の両脇に小さな瘤状の粘土の盛り上がりが見られる（粘土のまくれ痕?、瘤状突起?）。149aの同一個体破片の拓影を次の第24図に149bとして掲載。胴部最上部には条が短く縄文が帯状に密に施されるが、その下は条がやや長く疎である。さらに、胴部下半の一部では、条の間がさらに開き、節がより強く外傾して、より撚糸文に近い印象で、別の原体を使用しているような感を与える。168の底部直上に二本の水平沈線。175のA突起状の部分上に押圧。頸部文様中点にも二個一対の瘤状突起。口

縁内面に幅広く浅い水平沈線、A突起(?)に向かって枝を出す。縄文LR。184と185は、27T③の出土となっているが、全体図を見ても判るように(第3図)、調査範囲からずれているので記入間違いであろう。

註

(1) 蛭沢式を、本間宏氏は後期初頭に位置づけているが、近年の関東地方での共伴資料を考えると(秋田1995)、後期前葉に位置づけた方がよいようである。

参考文献

- 秋田かな子 1995 「八幡台地の縄文時代後期土器について」『東海大史学』29
小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告』5
小林圭一 1997 「V調査の成果」『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター
小林 克 1993 「東北北部の続縄文期の土器」『二十一世紀への考古学』(櫻井清彦先生古希記念会編) 雄山閣
齋藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』5 岩手考古学会
鈴木正博 1985 「「荒海式」生成論序説」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部
1987 「続 大洞A2式考」『古代』84早稲田大学考古学会
須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器」『考古学雑誌』68-3 日本考古学会
1987 「東日本における弥生文化の受容」『考古学雑誌』73-1 日本考古学会
高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究」『北奥古代文化』12北奥古代文化研究会(東京都)
1993 「大洞C2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』4 阿佐ヶ谷先史学研究会(東京都)
高柳圭一 1988 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代』85早稲田大学考古学会
本間宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』3 よねしろ考古学会(秋田県鹿角市)
1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』4 よねしろ考古学会(秋田県鹿角市)
山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3
山内清男ほか 1971 「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3 北奥古代文化研究会(東京都)

(2) 土師器 (第27図、写真図版27)

小コンテナ(30×40×10cm) 1箱出土し、器形を復元できるもののみ(基本的には径1/4周以上ある破片)掲載した。なお、縄文・弥生土器の162は土師器の可能性高い。

今回出土した土器のほとんどは、八木光則氏の編年(八木 1992)に拠れば、10世紀前半に位置づけられると思われる。また、なべの出土が注目される。

以下、表の補足。出土位置のP○については竪穴住居跡の項参照。1の出土位置は、全体の(以下同じ)1/4がP7(4層中)、1/8がP6(4層中)、1/8がP9(6層上面)、1/8が8層、1/16がP1、1/16がP4、第1号住居の覆土等で取り上げたものが7/32、グリッドで取り上げたものが1/32である。2aの出土位置は、全体の(以下同じ)3/8がP8(6層上面)、1/2がP11(9層上面)、1/8が6層出土である。内面焼けはじけのため調整よく見えない。2bと同一個体か。2bは、胎土、色調、残存状況(焼けはじけ)から2aと同一個体と思われるが、2bの器壁が薄く、また立ち上がりの形態からは別個体で坏の可能性もある。内外面スス状附着物。底面拓影第13図にある。4の底面外面、高台貼り付けた後に再調整をしているように思われるが、残り悪くよくわからない。5の出土状況が写真図版18にある。

参考文献

- 松本建速 1991 「東北北部の平安時代のなべ」『紀要』XI 岩手県埋蔵文化財センター
八木光則 1992 「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会 「特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相」 古代城柵官衙遺跡検討会

(3) 土製品 (第28図、写真図版28)

土偶が1点出土している。四肢欠損しているのが不明な点もあるが、屈折像姿態を取る土偶と思われる。時期は、同じグリッドから出土しているのは弥生時代中～後期の土器が多いが、これまでの類例から該期にこのような土偶が存在するとは思われない。胴部に施される文様から晩期後葉と思われるが(佐藤 1996)(註1)、該期で屈折像姿態を取るものは比較的珍しいのではないかと(磯前 1987、1992)。『土偶とその情報』研究会(1996)では、岩手県一関市草ヶ沢遺跡(p.142の4)、岩手県普代村芦渡遺跡(p.144の3)に同様の脚部形態が見られるが、それ以外の部分は異なっている。芦渡遺跡例は類似点も多く同じ系列と思われるが、プロポーション等異なる点も多い。

註

(1) 佐藤(1996)中の岩手県長者洞出土例(第2図3)に文様はよく似ている。ただし、肩部背面に施されるのは断続した点列でなく竹管状の刺突列である。

参考文献

- 磯前順一 1987 「「屈折像」土偶について」『考古学雑誌』72-3 日本考古学会
1992 「関東以西の屈折像土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37(特集 土偶とその情報)
佐藤嘉広 1996 「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』81-2 日本考古学会
『土偶とその情報』研究会 1996 『土偶シンポジウム5 宮城大会 東北・北海道の土偶Ⅱ-亀ヶ岡文化の土偶-』

(4) 石器・石製品 (第29図～第33図、写真図版29～34)

今回の調査で出土した石器類は、全部で82点で、内訳は、石鏃4点、石錐1点、石篋1点、搔器・削器等その他9点、石皿1点、砥石3点、打製石斧、磨敲器類6点(もう1点不確定のものがある)、石器製作時の剥片、残核54点である。本報告書では、器種を第1表のように分類している。搔器・削器等その他とは、定型化していない剥片石器類で、欠損してわからなくなった定形石器(特に石匙)も含めている。磨敲器類とは、磨石、敲石、凹石を総称したもので、これらの石器の使用痕が互いに複合し、うまく分けられないために作った項目である。

掲載基準。縄文土器・弥生土器の項で述べたように、今回の調査では遺構が検出されなかったのに対し、遺物は比較的まとまって出土し、こうしたあり方はやや特異と思われ、本遺跡の位置づけあるいは晩期後葉社会の様相を探るのに重要な意味を持っていると思われた。そこで、石器製作時の剥片、石核も含め石器類は全点掲載し、また剥片類は接合を試みた(詳細は、剥片、残核の項で)。

観察表は写真図版の方にある。基本的な観察は表に示したので、表の見方等の注意事項については、本章の冒頭部分を参照していただきたい。

概要。最初に出土状況。土器類と違い、A区からの出土も多く、石器12点(1、5、7～11、74、76～79)で全体の約43%、石器製作時の剥片、残核28点(18～31、33～45、59)で全体の約52%を占める。礎石建物跡から出土した18の残核?は、この建物跡に伴うものか、縄文～弥生時代の遺物がたまたま混じっているのかどうか、区別は付かない。

次に型式学的特徴。砥石類は何れも新しく古代以降のものだと思われる。点数が少なく、出土土器が多時期に渡っていることから、組成を考えてもあまり意味のないことと思われるが、石皿の出土が注目される(第

32図72)。縄文時代～弥生時代のある時期ここに生活の拠点があったことは確実であろう（岡本 1978）。

(a) 石鏃（第29図1～4）

4点出土。基部の形態は三種類ある。

(b) 石錐（第29図5）

1点、A区から出土。

(c) 石匙（第29図6）

1点、B区から出土。

(d) 石篋（第29図7）

1点、B区から出土。

(e) 搔器・削器等、その他（第29図8～第30図16）

Rフレイク含む、9点出土。

(f) 剥片（Uフレイク含む）、残核（写真図版30の17～写真図版33の71、第30図～第31図）

54点出土。接合結果であるが、あまり芳しい結果は得られなかった。60、63、66と70、71の二件の接合が見られたが、後者は剝離後に割れた（欠損）ものの接合である。前者は、同じグリッドからの接合である。

(g) 石皿（第32図72）

1点、B区沢に囲まれた部分から出土。

(h) 砥石（第31図73～第32図75）

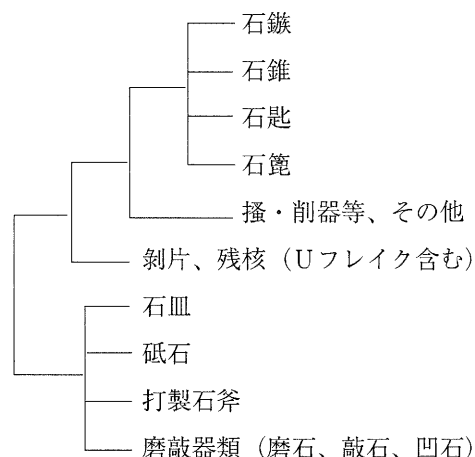
何れも新しく古代以降のものである。3点出土したが、78、79、81も加えれば6点になる。

(i) 打製石斧（第33図78）

1点、A区から出土、使用痕が磨敲器類と複合している。

(j) 磨敲器類（第32図76～第33図82）

7点出土。76はただの石の可能性があり、78は打製石斧でもある。拳大の円礫を使用した一般的な磨石は見られない。78の使用痕は複合しており、表面は磨っているように思われる。ただし、その上にある金属の刃物様のものを砥いだ痕跡は新しいものである（現代？）。



参考文献

岡本孝之 1978「住居内出土の石皿についての覚書」『神奈川考古』3

(5) 鉄製品・古銭、その他（第28図、写真図版28）

鉄製品、古銭は全て掲載した。鉄製品は紡錘車が1点古代の竪穴住居跡から出土している。古銭は4点出土し、2点は、礎石建物跡からの出土である。礎石建物跡からはもう1点出土したが、調査中に紛失した。お詫び申し上げる次第である。古銭は、残り1点B区から出土しているが、なぜ該期の遺構のないB区から出土するのか不明である。

この他、竪穴住居跡から炭化材が出土した（詳細は竪穴住居跡の項参照）。

参考文献

永井久美男 1996『日本出土銭総覧 1996年版』兵庫埋蔵銭調査会

6. 考察

時間の関係で、問題点を列挙するにとどまざるを得ない。

(1) 縄文時代

出土遺物には、土器、土偶1点などがあり、常識的には石器の大部分もこの時期のものと思われる。

土器は、ごくわずか後期、晩期前葉と思われるものもあるが、大部分は晩期（中～）後葉のものである。土偶も晩期後葉のものである。

遺構としては、B区沢跡の晩期後葉の捨て場しかない。もう一つ、B区平坦面先端の捨て場らしいものがあるが、時期ははっきりしない。

以下、特に晩期後葉に焦点を当てて、当時の生活（活動）について考えてみたい。

沢跡及び沢に面した部分に比較的多くの土器が出土しているので、その背後の平坦面に居住域があると考えるのが自然である。しかし、ここに堅穴住居を見つけることは出来なかった。

次に、石器組成から活動の様子を考えてみる。本遺跡から出土した石器のほとんどがこの時期のものとして断定するわけにはいかないが、B区の沢、尾根付近から出土したものは、この時期の可能性が高い。石鏃3点、石匙1点、搔・削器等その他約6点、剥片類約38点、石皿1点、磨敲器類2点(?)などがある。磨敲器類は、通常見られる拳大のものとは異なっている。

これらの組成から考えられるのは、植物加工あるいは食物加工と考えられるものは少なく、どちらかと言えば狩猟およびその解体に関係するものが多いということである。磨製石斧等の生活施設加工工具がほとんど見られないことから、生活の拠点（集落）ではなく、狩猟の場と考えるのが自然かも知れない。

それでは、僅かながら出土している石皿、狩猟の場にしては多い土器の出土をどう考えたら良いだろうか。

ここで注目されるのが、晩期後葉に見られる「遺跡の拡散化現象」である（佐々木 1984）。すなわち、「恒常的に営まれていた長期間に及ぶ遺跡の廃絶もしくは縮小化、さらにそれに伴うと考えられる遺物分布地点の急激な増加」（同：p.25）で、遺物分布地点は山地、丘陵地をはじめ、様々な地形の所に見られ、「これは集落を低地に営んでいた集団が、その利用する資源や環境との間に何らかの不均衡を生じたために引き起こされた現象と考えられるのであり、従来とは異なった手段による生産活動が展開されねばならなかった状況が想定されるのである」（同上）。この現象は、晩期末あるいは弥生時代初頭になると終息に向かうようである（同：p.27）。

遺跡の拡散化現象は、第1節で見たように、縄文の遺跡が比較的少ないこの地域に、該期の遺跡だけは比較的多く見られることから裏付けられる。

本来は狩猟の場であった本遺跡に、人が住むようになったのが晩期後葉であった。それは、新たなる生活を模索するためであったのだろう。出土遺跡の増加等から、この時期の土偶は意味が変質し「安産祈願といった形態にまでその意義が縮小された」と考えられている（林 1976：p.188）。この場合持ち主は一般女性と考えるのが自然だろう。本遺跡でも該期の土偶が出土していることから、男性だけでなく女性（おそらく家族）もここに住んだのであろう。そして、堅穴住居などの居住施設が見られないのは、季節的居住（夏の間のせい）と考えられる。

以上から、晩期後葉の比較的短い間、新たなる生活（生業）を模索して夏季を中心に本遺跡に人が住み、やがて他に移っていったと結論づけられるのである。

(2) 弥生時代

中期、後期の土器がB区平坦面の沢に面した部分から出土している。

唯一完形に近い第23図149の土器について、類例を捜してみたが見つけられなかった。口縁部に連弧紋を持つ土器は多いが、本例のようにここに交互刺突文や縄文を持たないものはなかった（斉藤 1993）。

後期は、また北海道系土器の濃厚な分布など、特異な様相が見られる時期である。その生活痕跡についても謎が多く、居住施設は掘立柱建物ではないかという意見もある。今回の調査では、このような意見に基づき、遺物出土地点の背後の平坦面の遺構検出を丹念に行ったが、見つけることは出来なかった。

(3) 平安時代

土師器（鍋含む）、鉄製紡錘車1点が出土しており、ごく一部の土師器がB区尾根から出土した以外は、竪穴住居跡からの出土である。

遺構は、B区平坦面東隅から竪穴住居が1棟検出されている。比較的広い面積を調査しているのに、竪穴住居はこれ1棟だけであった。尾根からの土師器の出土、土鍋の出土など、やや変わった様相も見られるが、紡錘車の出土は日常的で、他の集落と特に異なるとも言い切れない。

該期の集落は、拡散傾向が見られ、立地も様々となる。第1節で見たように、本遺跡の周囲にも、同時期の遺跡が様々な立地で見られる。その違いは何を意味するのだろうか。近年調査例も蓄積されてきており、今後まず検討したい点である。

(4) 近世

寛永通宝など古銭が出土している。

古銭の出土位置から、礎石建物跡、平場、土塁、参道跡などの寺跡も、この時期に存在していた可能性がある。ただし、今回の調査目的の一つでもあった、寺が何時から存在していたのかは、今回の調査結果からはわからない。

第1節で述べたように、本遺跡が立地する丘陵下にほど近い矢沢八幡遺跡からは、該期の掘立柱建物跡が検出されており、本遺跡との関係が注目される。また、同様に、時代は異なるようだが、高松山経塚、経塚森遺跡との関係も検討する必要がある。

(5) その他

時期不明の遺構として、B区の南北に延びる溝がある。ほとんど埋まっていないことから、近世以降の可能性が高く、用途としては、道などが考えられる。

(6) 高松寺遺跡の歴史

本遺跡の歴史について、時代別にその可能性をまとめてみる。

・縄文時代後期～晩期前葉

僅かな土器片が出土していることから、近くに集落のあった可能性がある。本遺跡には、狩猟、植物採集等でやってきたと考えられる。

・縄文時代晩期後葉

環境あるいは社会変化に伴って、新たな生活（生業）を模索するため、ここに人が移り住んだ。その生活は狩猟を中心とするものであったが、女性も一緒に住み、また冬季は他に住んだと考えられる。その生活も比較的短い間で、やがてまた別の場所に移っていったと思われる。

・弥生時代中期～後期

僅かな土器片が出土していることから、近くに集落のあった可能性がある。本遺跡には、狩猟、植物採集等でやってきたと考えられる。

・平安時代

10世紀頃、比較的短い間B区に竪穴住居が1棟あった。初めは、物置、作業小屋あるいは仮住まいだったせいかカマドが無く、後の建て替えの際にカマドが作られた。住居の規模から考えて、住んでいたのは、一人か二人であろう。ただし、孤立していたのではなく、周辺の丘陵や低い段丘に集落があり、多くの竪穴住居があった。

・近世

何時頃からか不明だが、A区およびその下に寺があった。B区にも溝があった可能性がある。付近には、集落があった。

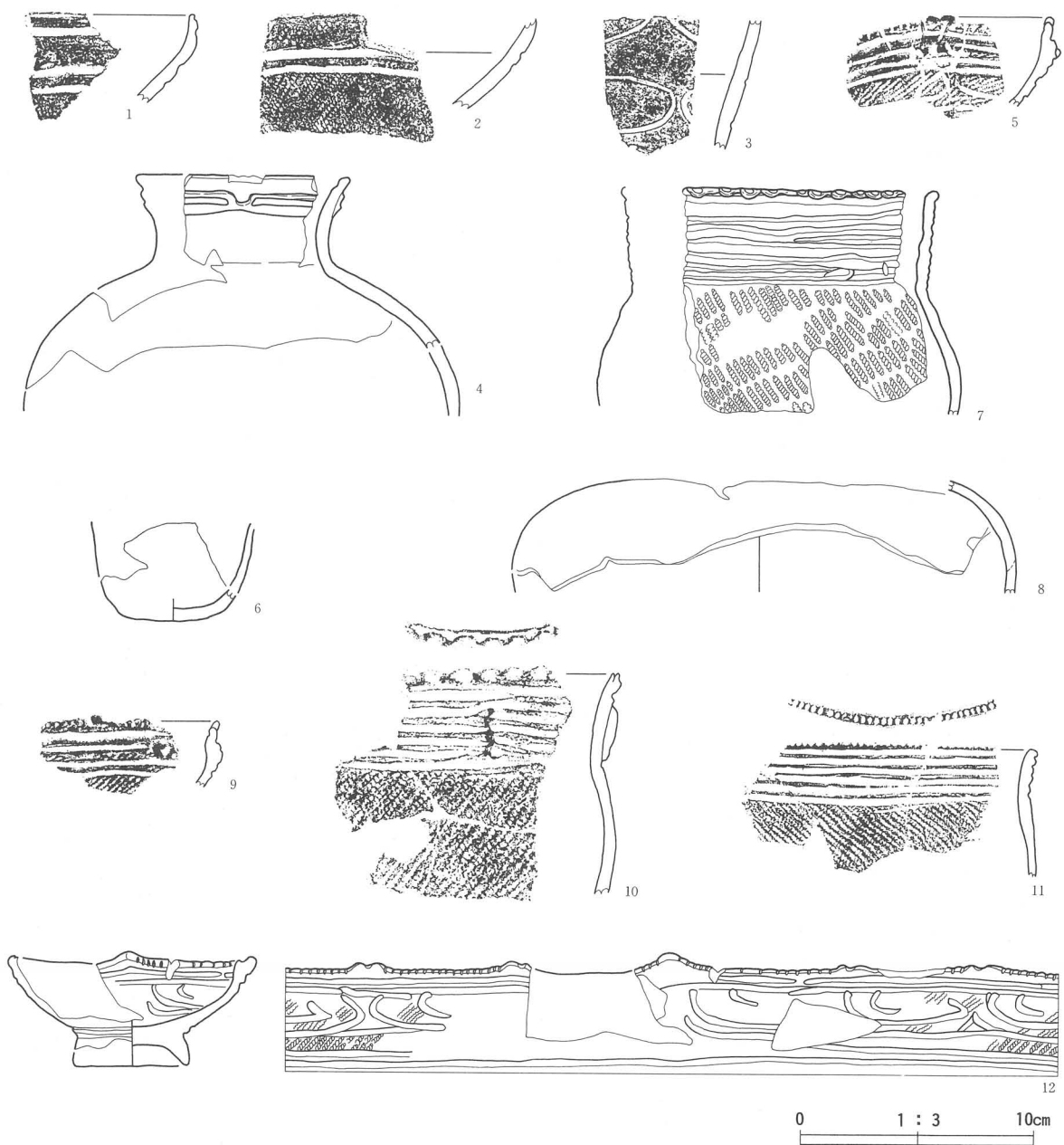
参考文献

- 齋藤邦雄 1993 「岩手県にみられる後北式土器と在地弥生土器について」『岩手考古学』5
佐々木彰 1984 「再び遺跡にみる拡散化現象について」『北奥古代文化』15北奥古代文化研究会（東京都）
林 謙作 1976 「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』寧楽社

7. まとめ

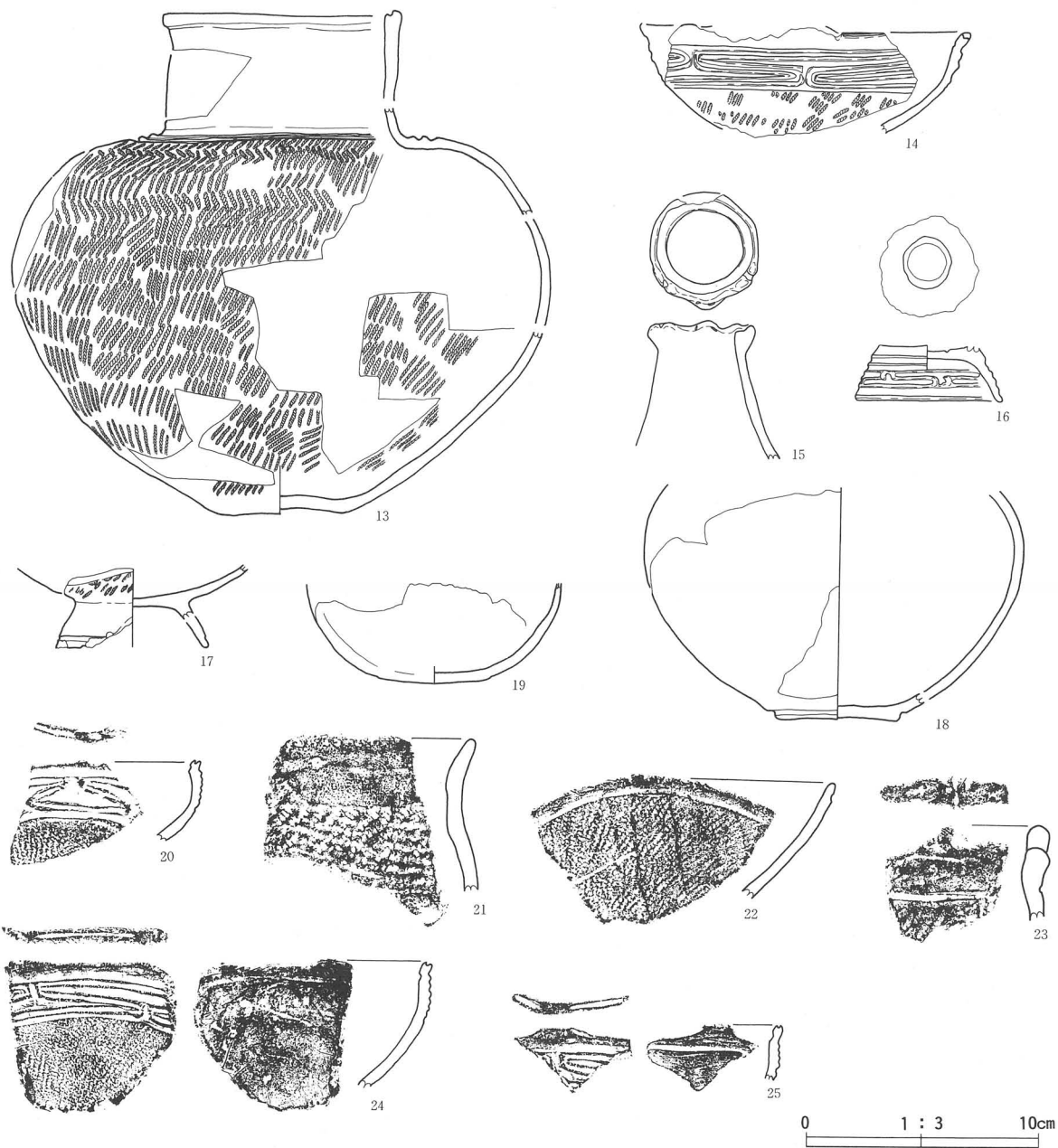
本章で述べてきたことをまとめておく。

- ・本遺跡は丘陵に立地し、今回の調査区は、沢を挟んで、尾根上のA区、尾根と沢に囲まれた平坦面からなるB区に分かれている。
- ・検出した遺構は、竪穴住居跡1棟、礎石建物跡1棟、土塁1基、平場1ヶ所、参道跡1基、溝1条、捨て場2ヶ所である。
- ・礎石建物跡、土塁、平場、参道跡は、寺跡（鞍掛高松寺跡）を構成するものと思われ、年代を特定するのは難しいが、近世には存在していたと思われる。A区にある。
- ・竪穴住居跡は平安時代、捨て場は縄文時代で、沢跡の捨て場の方は晩期中葉～後葉である。溝については時期不明である。これらは、何れもB区にある。
- ・出土した遺物は、縄文・弥生土器が大コンテナ(30×40×30cm)で2箱、土師器が小コンテナ(30×40×10cm)で1箱、土製品（土偶）1点（晩期後葉）、石器類が82点（石器製作時の剥片等含む）、鉄製品（紡錘車）が1点、古銭が4点などである。
- ・出土土器の時期は、縄文時代晩期後葉を中心とし（約6割）、後の3割を弥生時代後期土器が占め、それ以外のもの（縄文時代後期前葉、後期末、晩期前葉）は1割程度である。
- ・石器類は、全部で82点で、内訳は、石鏃4点、石錐1点、石篋1点、搔器・削器等その他9点、石皿1点、砥石3点、打製石斧、磨敲器類6点（もう1点不確定のものがある）、石器製作時の剥片、残核54点である。
- ・本遺跡は、縄文時代後期～弥生時代後期まで基本的には土器散布地で、狩猟採集の場として使われたと考えられるが、縄文時代晩期後葉の比較的短い間、夏季を中心に人が住んでいたと考えられる。
- ・平安時代にも比較的短い間人が住んでいたが、竪穴住居は1棟のみである。ただし、周囲にも該期の集落が多くあった。
- ・その後、A区に高松寺が建てられた。その時期は不明だが、江戸時代後期には存在していた。



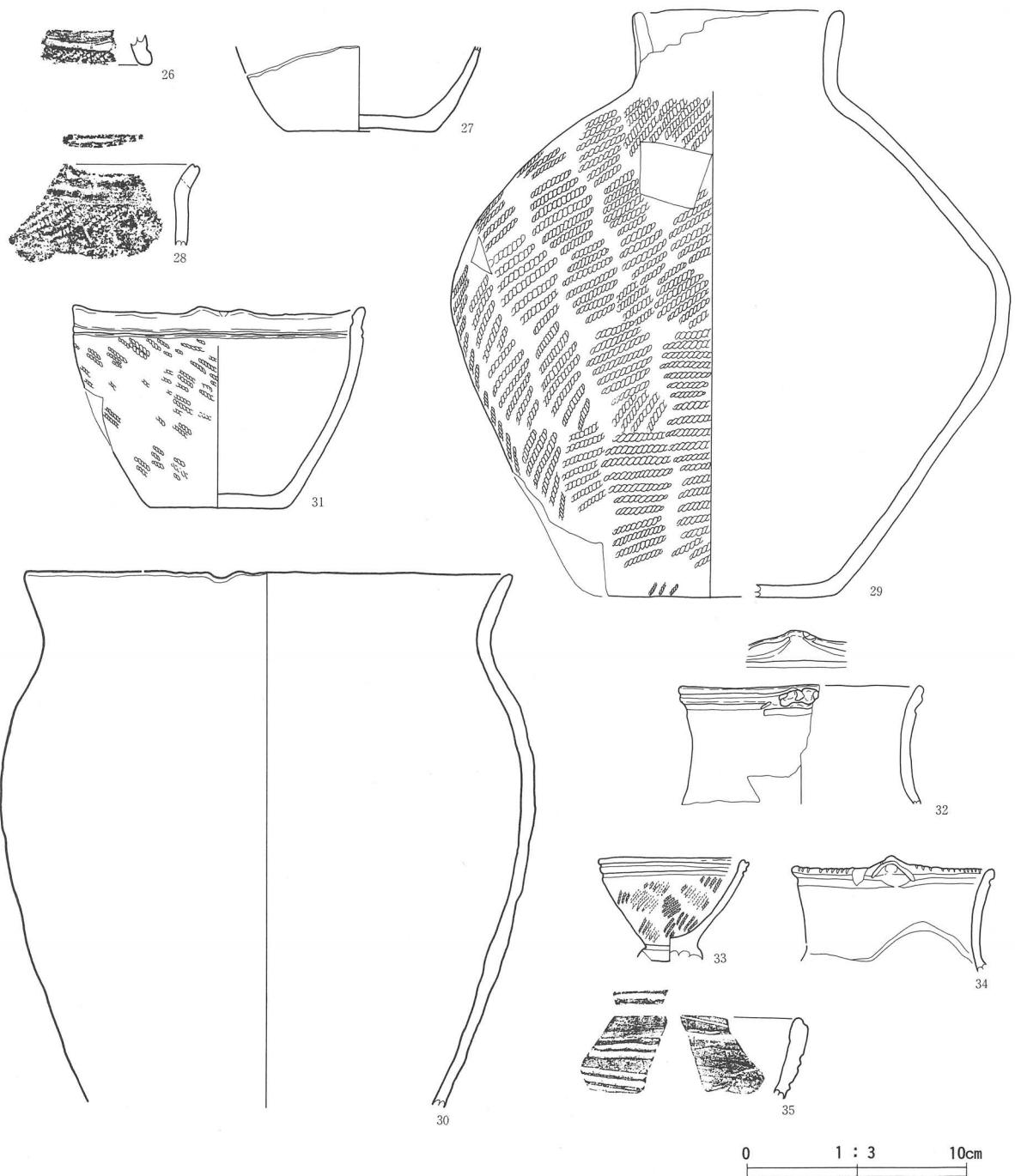
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載
1	沢跡17S④	浅鉢?・口縁部		ナデ(雑)		
2	沢跡17S④落ち込み	壺?・胴部	縄文(LR)→太い沈線	ナデ		
3	沢跡17S④落ち込み	胴部	細めの沈線→ナデ	ナデ(雑)	129と同一個体	
4	沢跡18R④	壺(口1/4、肩2/3周)	削り込みによる四字文(・ミガキ)	口ミガキ指まで		
5	沢跡18R④	浅鉢?・口縁部	口唇尖り気味の突起、刻目・突出部B突起・縄文(LR)→沈線	内外面ミガキ	内面水手沈線	
6	沢跡18R	底部		ナデ	多面摩耗内面スス丸座	
7	沢跡19R③	深鉢(1/4周)	口唇刺突列・縄文(RL)→深い沈線	ナデ	外面スス	
8	沢跡19R③	壺・肩部(2/1周)	(ミガキ)	指まで		
9	沢跡19R③				5と同一個体	
10	沢跡19R③	深鉢・口縁部	口唇部蛇行隆帯状、頸部縦位の長楕円形突起→沈線、縄文(LR)	ナデ	外面スス	
11	沢跡19R③	鉢・口縁部	口唇部刻目・縄文(LR)→沈線・上から4番目の沈線溝底に刺痕	ミガキ		
12	沢跡19R④	台付浅鉢(口4/5、底1/2周)	A突起1単位 B突起4単位・口縁内面~口唇部沈線・胴部文様5単位	ミガキ	外面摩耗	P118

第14図 縄文・弥生土器(1)



No	出土地点・層位	器種・部位	外面(文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載
13	沢跡19R④	壺(肩部、底面のみ一周)	口唇沈線、頸部下3本平行沈線・羽状縄文(RL、LR)(頸、底面、ミガキ)	ミガキ	頸部下文様	P118
14	沢跡19R④	浅鉢(1/4周)	文様隆線状・縄文(LR)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
15	沢跡19R④	壺・口縁(ほぼ全周)	丸みのあるA突起1単位? B突起2単位(・ミガキ)	ナデ?	外面スス状附着物	
16	沢跡19R④	台(全周)	三又状文上下4単位ずつ?	ミガキ	台裏側もミガキ	
17	沢跡19R④	台(2/3周)	最下部水平沈線・縄文(LR)(・ミガキ)	ミガキ	台裏側はナデ	
18	沢跡19R④	壺?(底面のみ全周)	底面直上沈線(・ミガキ)	ナデ	内面スス状附着物	
19	沢跡19R④	壺?(底面のみ全周)	床面直上痕跡的沈線→ミガキ	ナデ		
20	沢跡19R④	浅鉢?口縁部	口唇部低いB突起、それをさむ断続沈線・文様削り込みにする隆带状・縄文(LR)	ミガキ	内面水平沈線	
21	沢跡19R④	深鉢・口縁部	縄文(LR)	ナデ?	外面スス内面摩擦	
22	沢跡19R④	?・口縁部	縄文(LR)	ナデ?	二次焼成	
23	沢跡19R④	深鉢・口縁部	口唇部A突起(上に刻目)・縄文(LR)→太く深い沈線	ナデ	外面スス	
24	沢跡19R④	浅鉢?	口唇部突起をはさんで断続した沈線・文様削り込みにする隆带状・縄文(LR)	ミガキ?	口縁内面水平沈線	
25	沢跡19R④	浅鉢?・口縁部	口唇部断続沈線・文様削り込みにする隆带状	ミガキ	口縁内面水平沈線	

第15図 縄文・弥生土器(2)



No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
26	沢跡19R④	台部	縄文 (LR) (・ミガキ)	ミガキ?		
27	沢跡19R④	深鉢?・底部	(ナデ)	ナデ		
28	沢跡19R④	深鉢・口縁部	縄文 (LR)	ナデ	内外面スス、摩耗	
29	沢跡19R	壺 (胴部下半1/4欠損)	縄文 (LR) →ナデ	ナデ	底部1/2・二次焼成?	
30	沢跡19R④・20Q④	深鉢 (2/3周弱)	(ケズリ)	ナデ	内外面スス付着	
31	沢跡20R①	鉢 (一部欠損)	丸みのある大きなB突起4単位・縄文 (RL) →沈線→ミガキ (底面ナデ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	P118
32	沢跡20R①	壺・口縁 (1/2周)	突起2種類1単位 (図) 片方B突起の間から延びる沈線・口縁下沈線	ミガキ	外面もミガキ	P118
33	沢跡20R①	小形台付鉢 (一部欠損)	口唇部沈線・縄文 (LR) →沈線	ミガキ		
34	沢跡20R①	壺・口縁 (全周)	突起1単位・口唇部刻目・口縁下沈線 (・ミガキ)	ミガキ		
35	沢跡20R①	口縁部	口唇部沈線 (・ミガキ)	ミガキ	口縁内面肥厚	

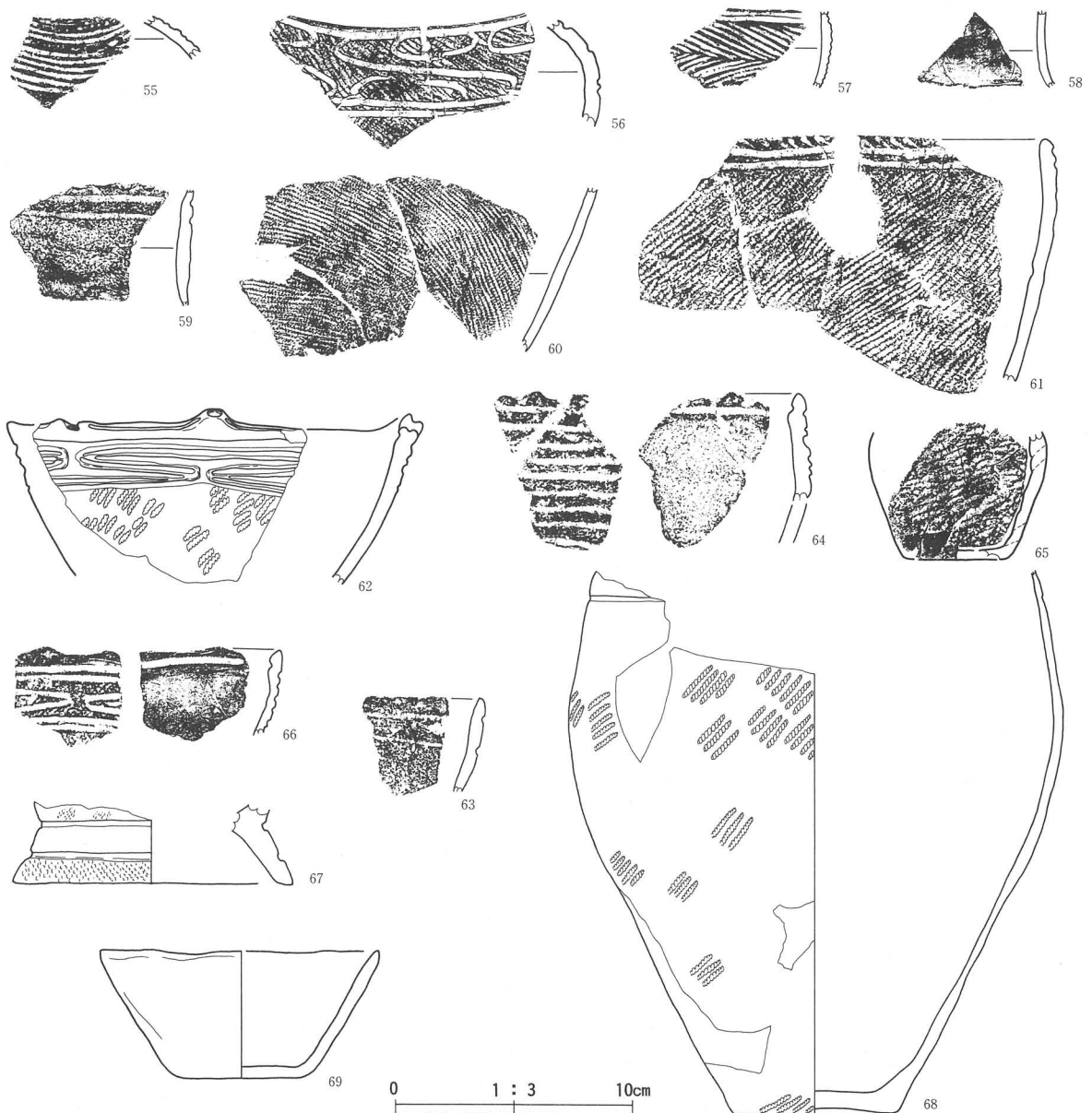
第16図 縄文・弥生土器(3)



0 1 3 5 cm

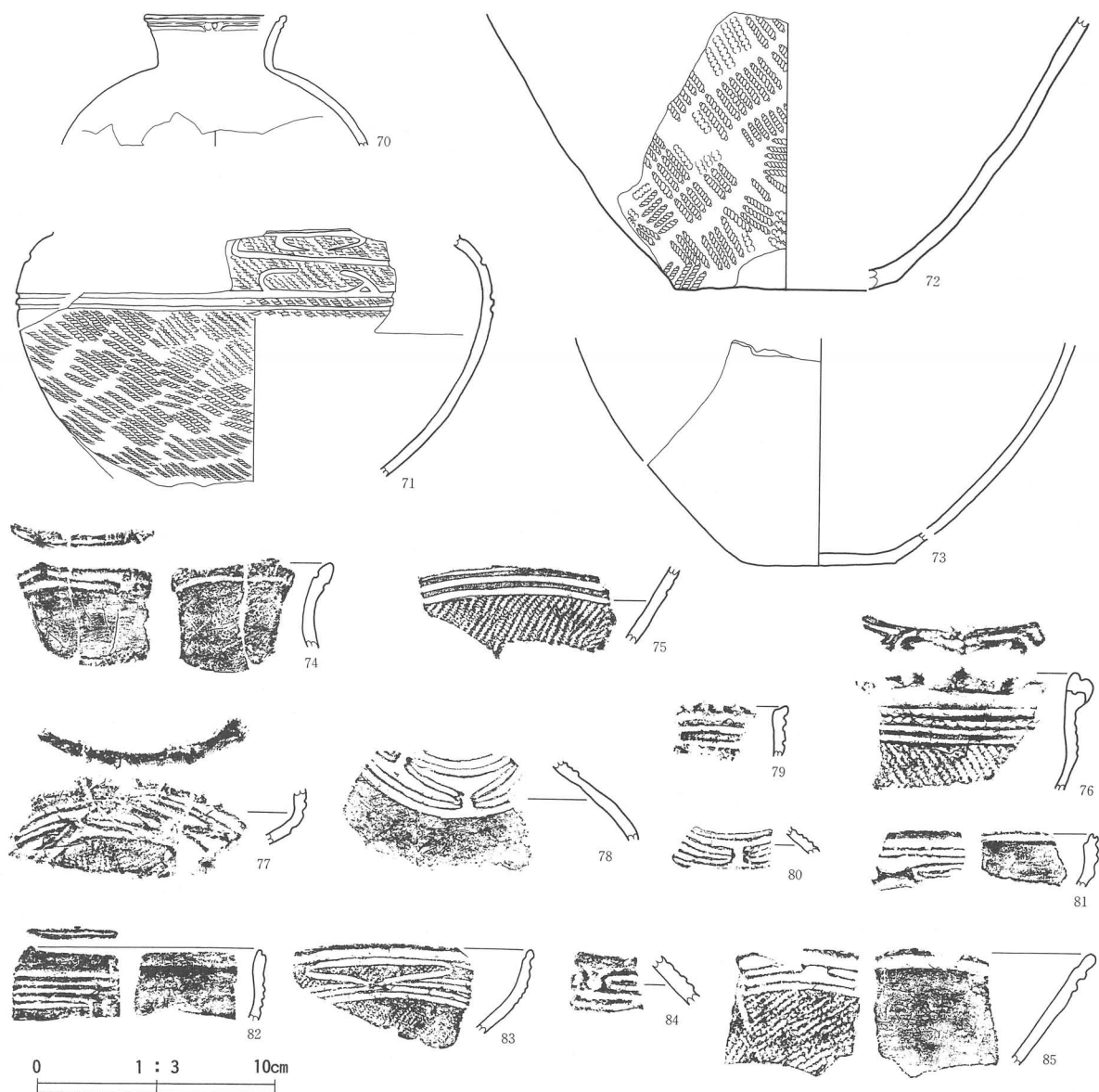
No	出土地点・層位	器種・部位	外面(文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載
36	沢跡20R①	口縁部	縄文(LR)→細く深い沈線	ミガキ?	口縁内面水平沈線	
37	沢跡20R①	鉢	口唇部刻目・羽状縄文(LR・RL)	ミガキ	外面二次焼成	
38	沢跡20R①	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線・口縁最上部横につくB突起、刻目・上から3番目の沈線溝底の刺痕	ミガキ?	外面ミガキ	
39	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による蛇行隆帯状・細く深い沈線	ナデ	摩耗	
40	沢跡20R①	浅鉢	文様内にも縄文(LR)→深い沈線(・ミガキ)	ミガキ?	口縁内面水平沈線	P118
41	沢跡20R①	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線・A突起・口縁最上部刻目	ミガキ?	内外面スス、摩耗	
42	沢跡20R①	?・口縁部	文様削り込みによる隆帯状	ミガキ?	口縁内面水平沈線	P118
43	沢跡20R①	壺・口縁部	(ミガキ)	ミガキ		
44	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による波状口縁	ナデ		
45	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による蛇行隆帯状・細く深い沈線	ナデ	二次焼成?	
46	沢跡20R①	浅鉢			40と同一個体	P118
47	沢跡20R①	鉢・口縁部	口唇部刻目・突出部横位のB突起?→縄文(LR)→沈線	ナデ	外面スス	
48	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による波状	ナデ	外面スス	
49	沢跡20R①	深鉢・頸部	溝底の刺痕・縄文(?)	ミガキ?	外面摩耗	
50	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による波状	ナデ?	外面スス	
51	沢跡20R①	口縁部	口唇部沈線・丸っぽいA突起・口縁最上部刻目	ミガキ?	外面摩耗	
52	沢跡20R①	異形壺?・胴部	一部削り込み	ナデ		
53	沢跡20R①	大型壺・肩部	縄文(LR)→沈線→ミガキ	ナデ		
54	沢跡20R①	壺・肩部	一部削り込み(・ミガキ)	ナデ	外面赤色付着物?	

第17図 縄文・弥生土器(4)



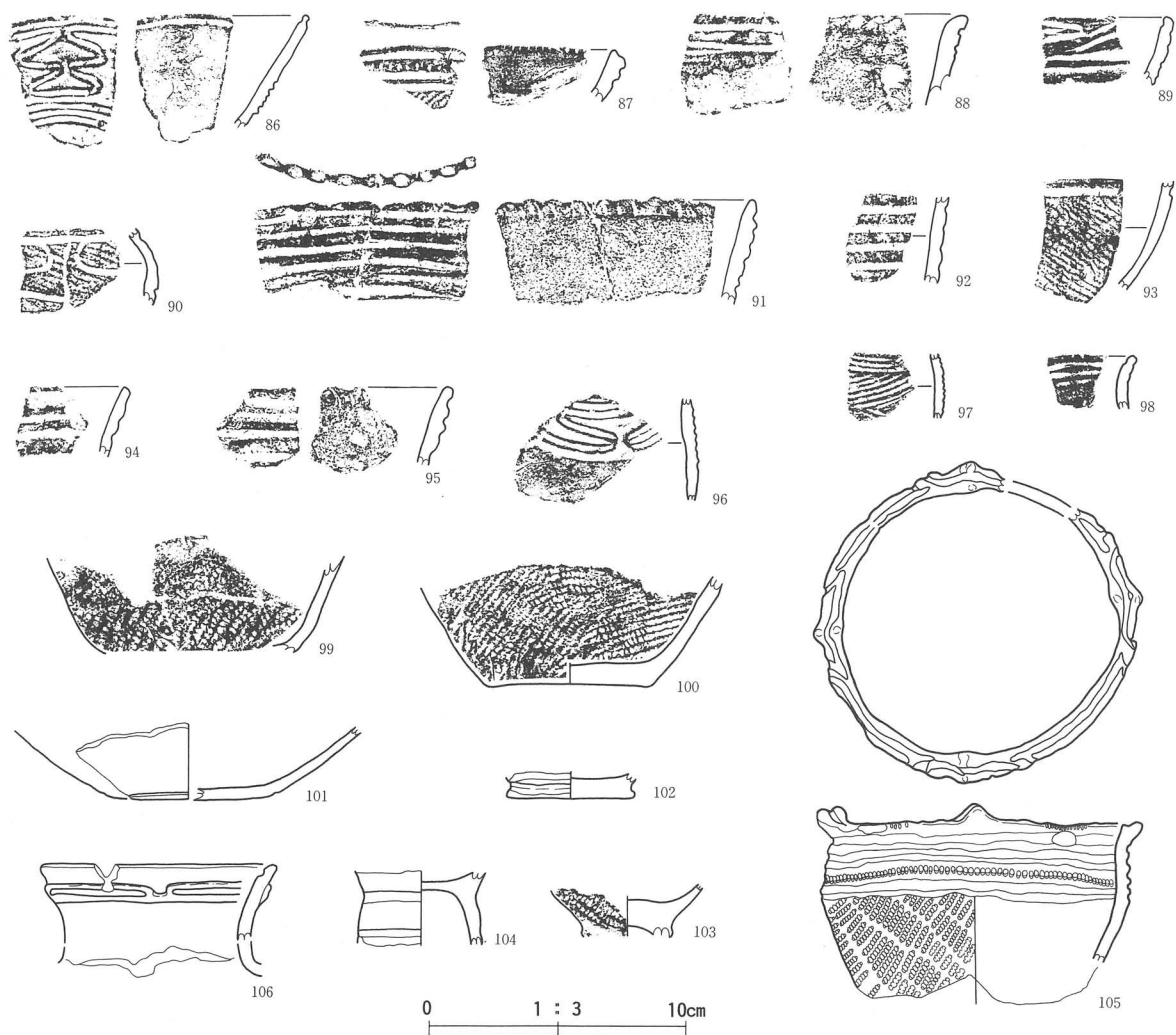
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
55	沢跡20R①	壺・肩部	小さな瘤状突起の間刺突2・溝底の刺痕	ナデ		
56	沢跡20R①	壺?・肩部	縄文 (LR) → 太く深い沈線 → 沈線底ミガキ	ナデ		
57	沢跡20R①	胴部	細く深い沈線 → ミガキ?	ナデ		
58	沢跡20R①	壺・頸部	(ミガキ)	ミガキ		
59	沢跡20R①	深鉢・口縁部	口縁部小波状・太く浅い沈線	ナデ	外面スス・内面摩耗	P118
60	沢跡20R①	胴部	縄文 (LR?)	ミガキ?	外面スス・二次焼成	P118
61	沢跡20R①	深鉢・口縁部	縄文 (LR)	ナデ	外面スス・1/4周弱	
62	沢跡20R①・③	浅鉢・口縁部 (1/4周)	突起?種類 (A突起?の上に刺突) をはさんで沈線・削り込みによる隆帯状	ミガキ	口縁内面水平沈線	P118
63	沢跡20R③	鉢?・口縁部		(摩耗)	内外面摩耗ひどい	
64	沢跡20R③	深鉢・口縁部	小波状口縁 (内外面摩耗ひどい)	ナデ?	口縁内面水平沈線	
65	沢跡20R③	壺? (袋もの)	縄文 (LR)	ナデ?		
66	沢跡付近? 20R③	浅鉢?・口縁部	小さいA突起	ミガキ	口縁内面水平沈線	
67	沢跡20R①・20Q③	台部 (2/3周)	縄文 (LR) → ミガキ? (雑)	ミガキ (雑)		
68	沢跡20Q③	深鉢 (1/2周)	縄文 (LR) (底面ナデ?)	ナデ?	二次焼成でボンボン	
69	沢跡20Q③	浅鉢 (口1/4、底2/3周)	(摩耗)	ナデ (雑)		

第18図 縄文・弥生土器(5)



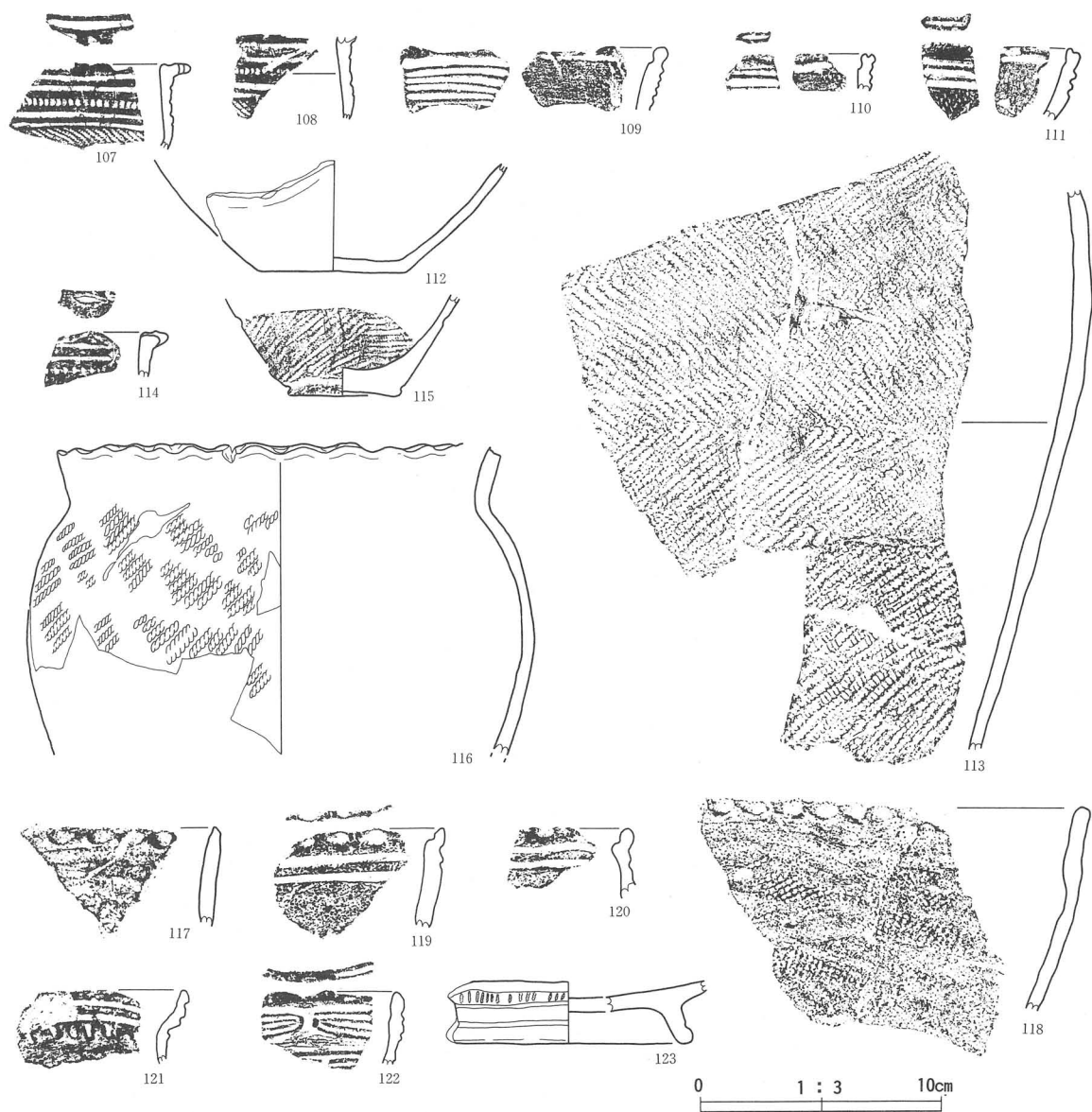
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
70	沢跡20Q③	壺(口縁1/2周、胴2/3周)	口縁文様4単位・削り込みによる匹字文(・ミガキ?)	ミガキ、ナデ	口縁内面水平沈線	
71	沢跡20Q③	壺(最高1/4周)	縄文(RL)→沈線	ナデ		
72	沢跡20Q③	深鉢(底部ほぼ全周)	縄文(RL)	ナデ	底面剥落	
73	沢跡20Q③	壺?(上破片、下全周)	(ミガキ・底面も)	ナデ(丁寧)?		
74	沢跡20Q③	壺・口縁部	A突起・口唇部突起をはさんで沈線・口唇部削り込み(匹字文?)(ミガキ)	ナデ?	口縁内面水平沈線	P118
75	沢跡20Q③	鉢?・胴部	縄文(LR)→沈線→ミガキ	ミガキ?		
76	沢跡20Q③	鉢・口縁部	丸みを帯びたA突起・口縁最上部横に載いたB突起に向かって枝出す口唇部沈線	ミガキ	溝底の刺痕、縄文(RL)	
77	沢跡20Q③	台付浅鉢・口縁部	削り込みによる文様隆線状・縄文(R?)	ミガキ?	1/4周弱・外面摩耗	
78	沢跡20Q③	壺・肩部	削り込みによる文様隆線状(・ミガキ)	指なで	1/4周弱	
79	沢跡20Q③	深鉢・口縁部	口縁最上部刻目	ナデ?		
80	沢跡20Q③	壺・肩部	削り込みによる文様隆線状	指なで		
81	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線(・ミガキ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
82	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線	(摩耗)	口縁内外面摩耗ひどい	
83	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	文様内縄文・縄文(LR)→沈線	ミガキ?	口縁内面水平沈線	
84	沢跡20Q③	袋もの・胴部		指なで		
85	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	A突起?をはさんで沈線・削り込み(匹字文)・縄文(LR)→沈線	ミガキ	口縁内面水平沈線	

第19図 縄文・弥生土器(6)



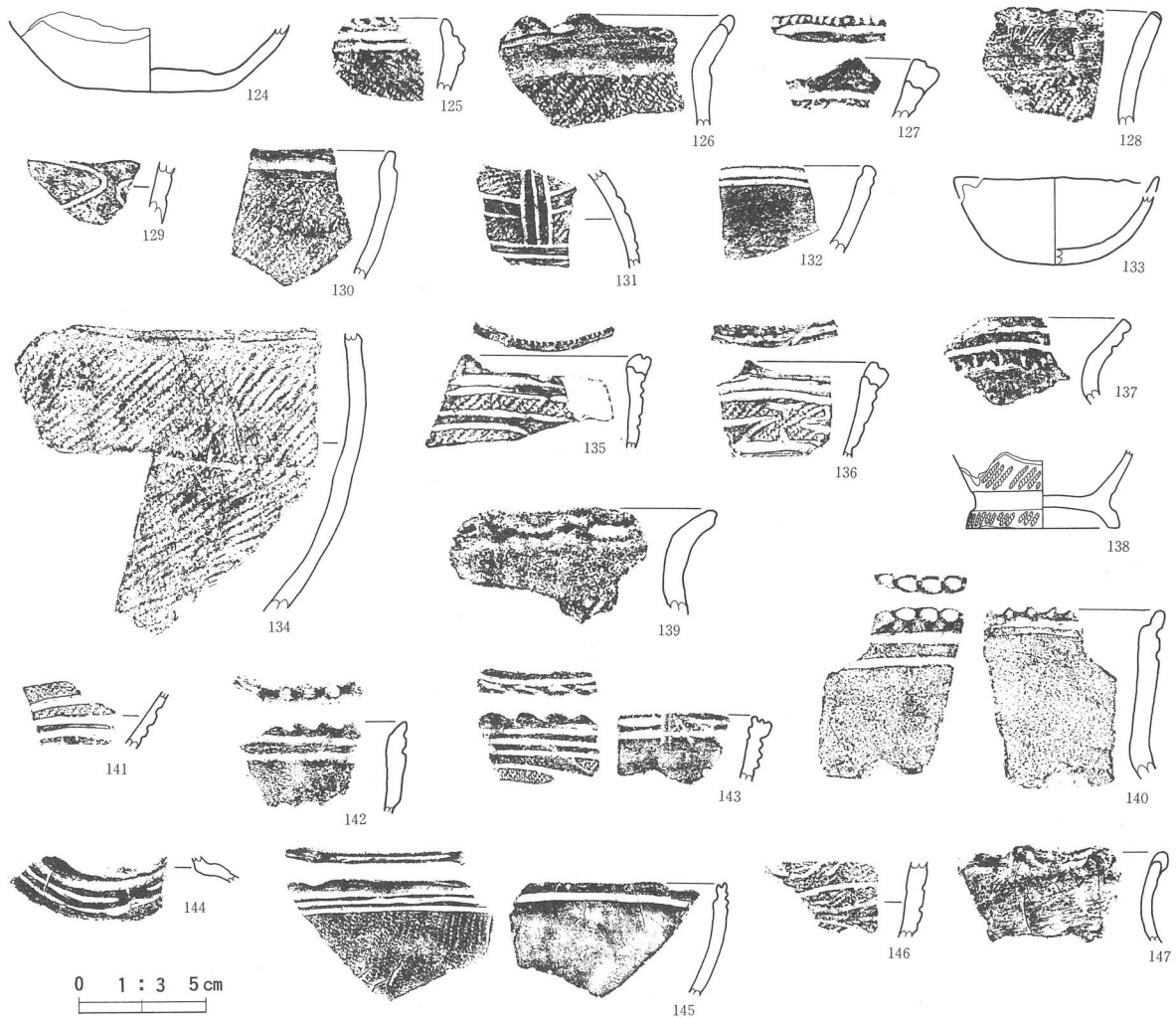
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
86	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	文様削り込みによる隆線状	ミガキ?	口縁内面水平沈線	
87	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部	突出部刻目・縄文 (LR)	ミガキ?	内面最上部刻目	
88	沢跡20Q③	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状	ナデ	内外面摩耗	
89	沢跡20Q③	浅鉢?・口縁部		ミガキ	口縁内面水平沈線	
90	沢跡20Q③				5 6 と同一個体	
91	沢跡20Q③	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状	ナデ	口縁内面爪形圧痕列	
92	沢跡20Q③	深鉢・口縁部		ナデ		
93	沢跡20Q③	壺?・胴部	縄文 (LR?) → 沈線	ナデ		
94	沢跡20Q③	口縁部		ナデ (雑)	内面整形から脚部の可能性	
95	沢跡20Q③	深鉢・口縁部			9 1 と同一個体	
96	沢跡20Q③	壺・肩部	文様削り込みによる隆線状	指なで		
97	沢跡20Q③	胴部	細く深い沈線	指なで?		
98	沢跡20Q③	壺・口縁部	(摩耗)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
99	沢跡20Q③	深鉢・底面	縄文 (LR)・(底面接合面から剝離→黒色付着物?)	ナデ (雑)	1/2周・三次焼成?	
100	沢跡20Q③	深鉢・底面	縄文 (LR) (・底面ナデ)	ナデ	全周・二次焼成?	
101	沢跡20Q③	壺?・底部	底面直上に沈線 (・ミガキ)	ナデ?	1 / 3 周	
102	沢跡20Q③	底部	(底面ミガキに近いナデ)	ナデ?	全周・二次焼成	
103	沢跡20Q③	台部	縄文 (LR)	ナデ		
104	沢跡20Q③	台部		不明	内外面ボロボロ	
105	沢跡20Q④	浅鉢 (ほぼ全周)	突起4単位・口唇部沈線文様・口縁最上部刻目・頸部中央溝底刺痕・縄文 (LR)	ナデ?	外面スス付着、劣化	
106	沢跡20Q④	壺・口縁部 (2/3周)	文様4単位・文様削り込みにする四字文 (・ミガキ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	

第20図 縄文・弥生土器(7)



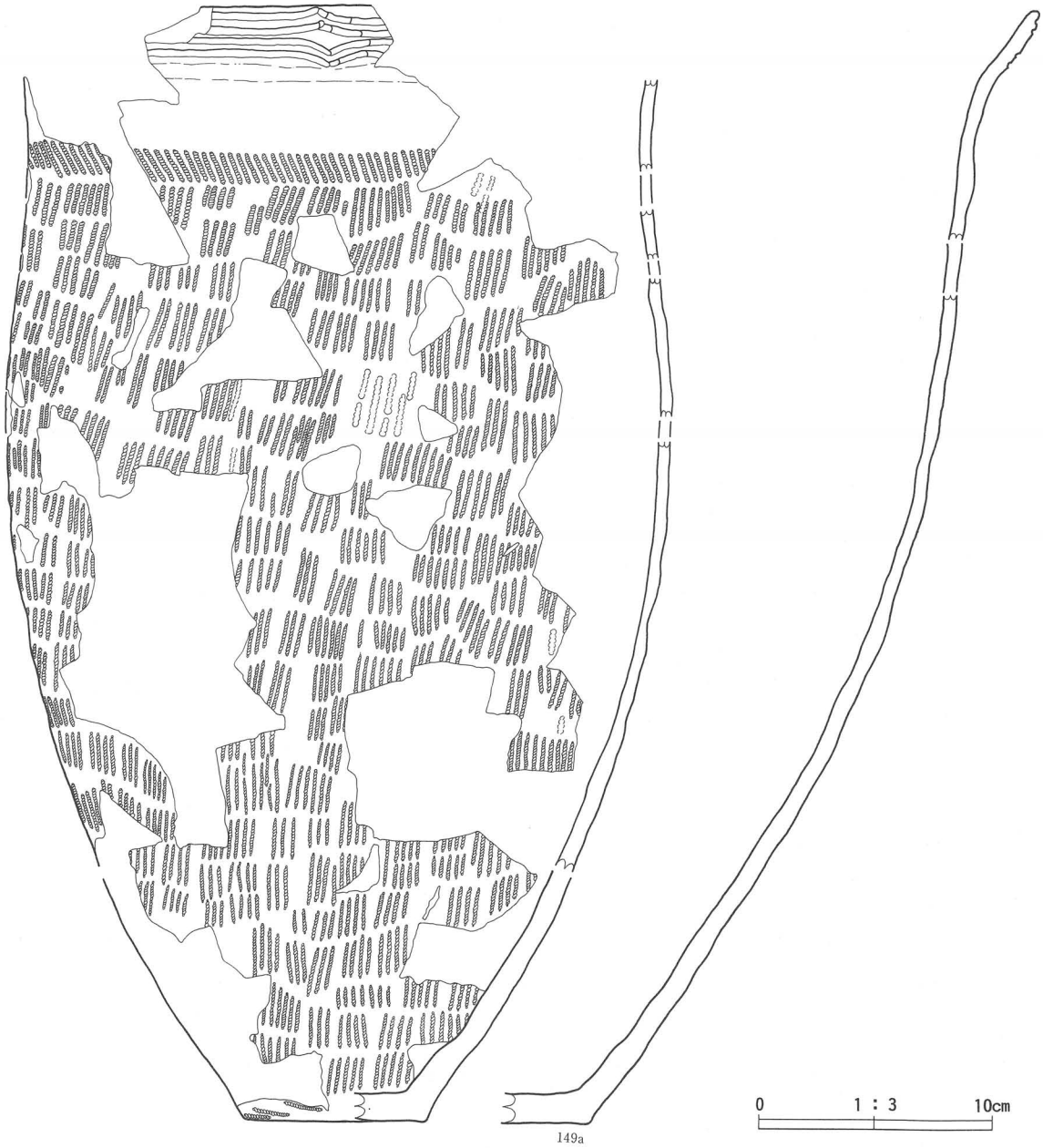
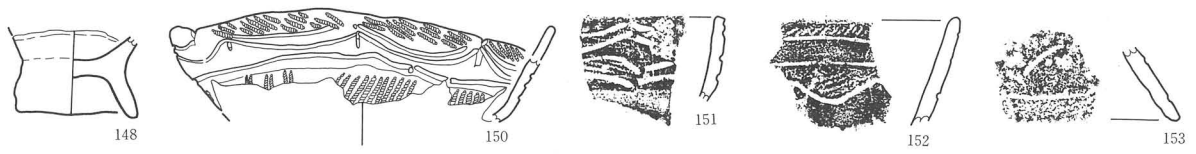
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
107	沢跡20Q④	浅鉢・口縁部	口唇部沈線・口縁最上部横位のB突起・刻目列・溝底の刺痕・縄文(LR)	ミガキ		
108	沢跡20Q④				107と同一個体	
109	沢跡20Q④	浅鉢?・口縁部	隆線状	摩耗	口縁内面水平沈線	
110	沢跡20Q④	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線・隆線状(・ミガキ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
111	沢跡20Q④	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線・隆線状(・ミガキ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
112	沢跡20Q④	壺?・底部	(ミガキ)	ナデ	全周	
113	沢跡20Q④	深鉢・胴部	羽状縄文(LR・RL)	ナデ	外面上部スス	
114	沢跡20Q④	浅鉢・口縁部	口唇部沈線・溝底の刺痕	不明	内外面摩耗	
115	沢跡20Q④	底部	底面直上沈線・縄文(LR)(・底面ナデ)	ナデ	全周・外面スス	
116	沢跡④	深鉢(口縁のみ全周)	口唇部押圧による小波状口縁	ナデ	外面スス付着	
117	B区尾根NO4	深鉢?・口縁部	口唇部押圧・縄文(LR?)・縄文(LR)→頸部ナデ	ナデ		
118	B区尾根NO5	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状・縄文(LR?)→ナデ	ナデ		
119	B区トレンチ17R②	深鉢・口縁部	口唇部押圧・沈線深く鋭角的	ナデ	口縁内面水平沈線	
120	B区トレンチ17R②	深鉢・口縁部	口唇部押圧	ナデ	口縁内面水平沈線	
121	B区トレンチ17R④	壺・口縁部	2条沈線下縦位の刺突列(137と同一個体)	ナデ	内外面赤色付着物	
122	B区17R④	浅鉢?・口縁部	鋭角的な大きい突起はさむ口唇部沈線・文様削り込みによる隆線状	ミガキ	口縁内面水平沈線	P118
123	B区17S④	台部	縄文(LR)(・台部内面もミガキ)	摩耗	1/3周	

第21図 縄文・弥生土器(8)



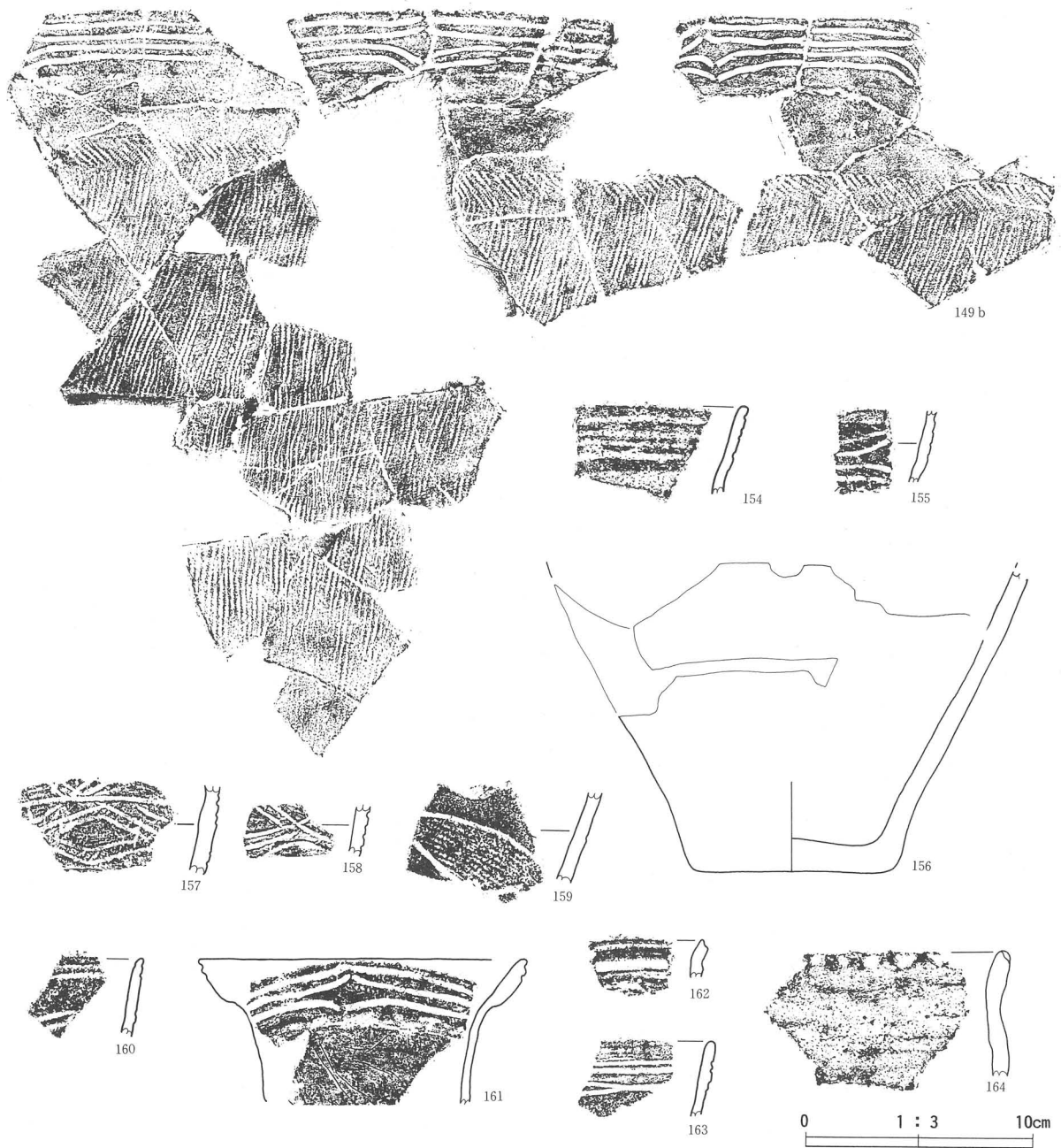
No	出土地点・層位	器種・部位	外面(文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文 記載
124	B区トレンチ17R④	底部	(ミガキ?)	ナデ	2/3周	
125	B区17S④	浅鉢?・口縁部	縄文(RL)	ナデ		
126	B区17S④	深鉢?・口縁部	2つ1単位の突起・縄文(LR)	ナデ(雑)		
127	B区17S④	深鉢?・口縁部	口唇部中央沈線、内面側刻目列・A突起・縄文(?)	ミガキ		
128	B区17S④	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状・縄文(LR)	ナデ		
129	B区17S④				3と同一個体	
130	B区トレンチ18Q④	鉢・口縁部	縄文(LR)→ミガキ・磨消浅い	ミガキ	口縁内面水平沈線	
131	B区トレンチ18R②	壺・胴部	縄文(LR)→沈線→ミガキ・磨消浅い	指なで		
132	B区トレンチ18R②	鉢?・口縁部	(ミガキ)	ミガキ?	口縁内面水平沈線	
133	B区トレンチ18R②	浅鉢	(ナデ)丸底	ナデ	全周(1/4欠損)	
134	B区トレンチ18R②	深鉢・胴部	縄文(LR)→ナデ	ナデ	外面下半スス付着	
135	B区トレンチ18R③	口縁部	口唇部沈線、内面側刻目列・縄文(LR)→沈線→ミガキ・磨消浅い	ミガキ	A突起・外面スス	
136	B区トレンチ18R③				135と同一個体	
137	B区トレンチ18R③				121同一個体	
138	B区18S①	台部(2/3周)	縄文(LR)→ミガキ(・台の裏側もミガキ)	ナデ		
139	B区18S①	深鉢・口縁部	口縁部不整形な隆帯状	ナデ	外面スス付着	
140	B区18S①	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状	ナデ	口縁内面水平沈線	
141	B区18S①	胴部	縄文(LR)	ナデ?	天地逆?	
142	B区トレンチ19Q④	深鉢・口縁部	口唇部押圧による小波状	ナデ?	内面摩擦	
143	B区トレンチ19Q④	浅鉢・口縁部	口唇部沈線と削り込みによる突起・縄文(LR)→沈線	ミガキ?	口縁内面2条水平沈線	
144	B区トレンチ19Q④	壺・肩部	文様内2つの瘤状突起?	指なで	やや摩擦	
145	B区19S①	浅鉢?・口縁部	押圧による大きなB突起・口唇部沈線・縄文(LR)→沈線→ミガキ	ミガキ	口縁内面水平沈線	
146	B区19S①	胴部	縄文(?)→深く細く鋭角的な沈線	ナデ		
147	B区21R③	口縁部	大きなB突起(ミガキ?)	ナデ?		

第22図 縄文・弥生土器(9)



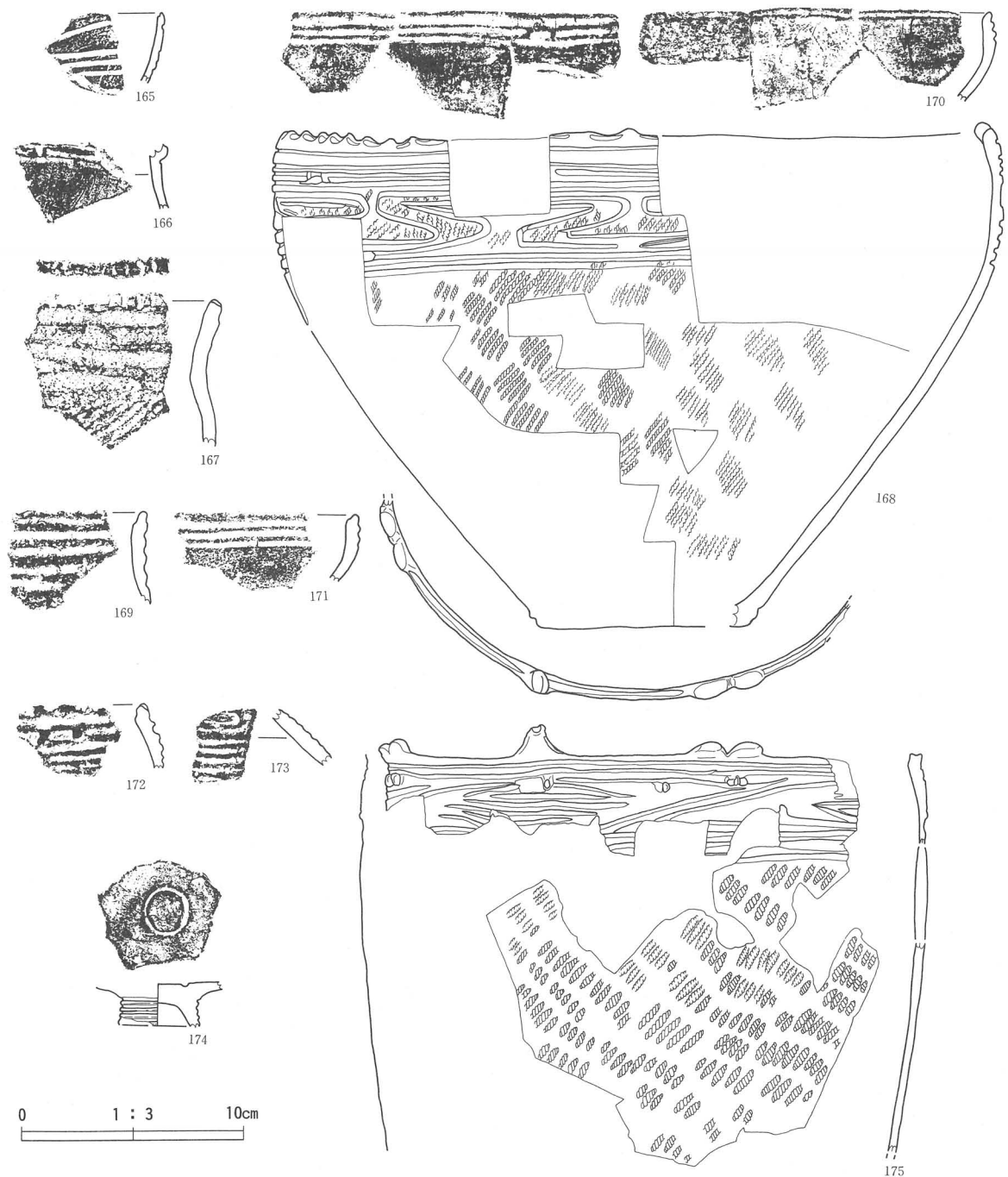
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾・地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
148	B区22R②	台部	縄文 (LR)	ナデ	摩耗	
149	B区トレンチ22R④	深鉢(胴部中位1/3周)	頸部、ナデ→縄文 (RL・0段多条)	ナデ	外面スス、二次焼成	P118
150	B区トレンチ22R④	壺・口縁部(1/2周)	文様8単位?・文様交点下に刺突、縄文 (RL・0段多条) →沈線	ナデ		
151	B区22R④	深鉢?・口縁部	沈線→縄文 (RL) →ナデ	ナデ	149と同一個体	
152	B区22R④	高坏?・口縁部	縄文 (?) →沈線→ミガキ	ミガキ?	蓋?	
153	B区22R④	蓋?	縄文?	不明	摩耗ひどい	

第23図 縄文・弥生土器(10)



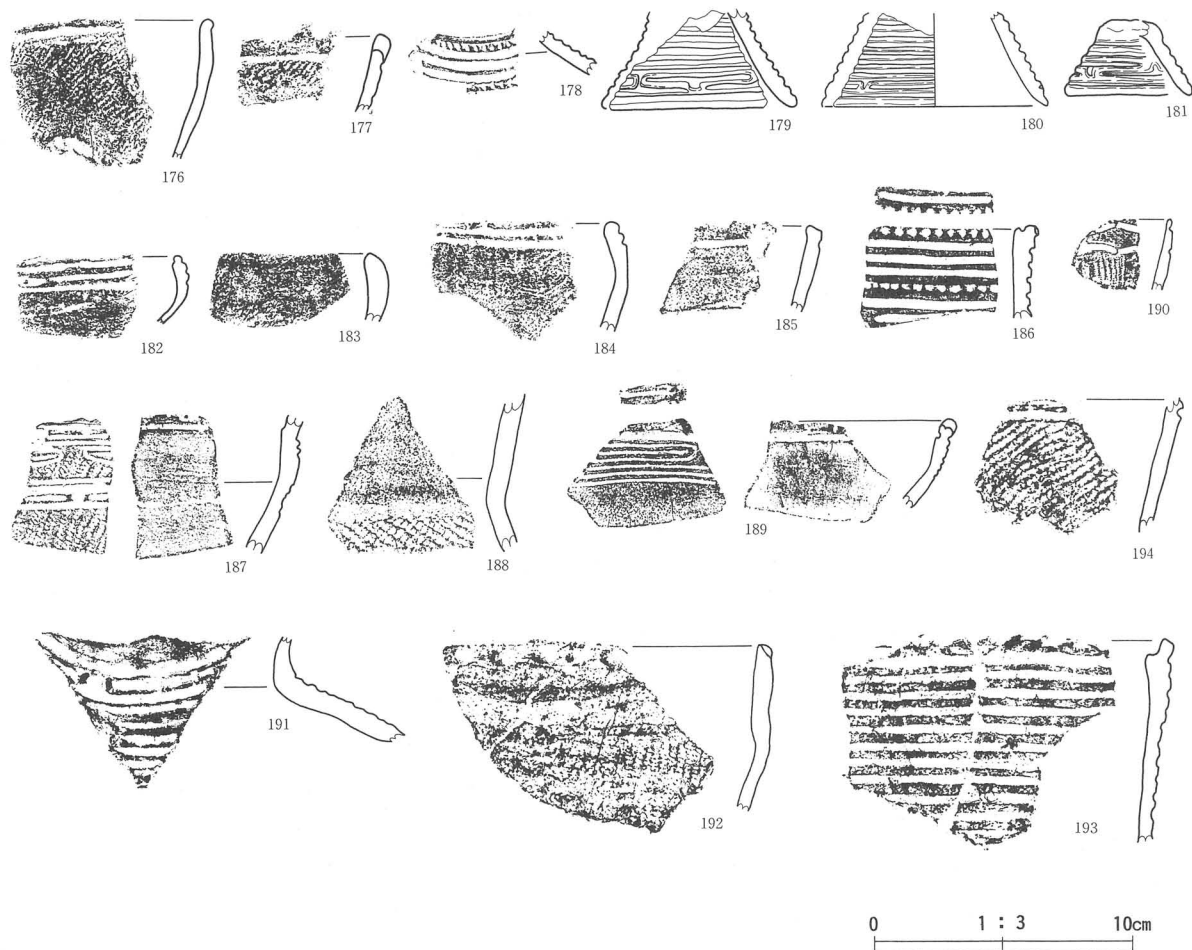
No	出土地点・層位	器種・部位	外面(文様・装飾、地文、原体など)	内面(調整など)	備考	本文記載
154	B区トレンチ22R④	口縁部	縄文(RL)→沈線	ナデ	外面摩耗	
155	B区トレンチ22R④	口縁部	(ケズリに近いナデ)・底面木葉痕→ナデ	(ボロボロ)	151と同一個体?	
156	22R包含層ベルト中	深鉢(底部のみ全周)	縄文?→細い深い沈線	ナデ		
157	B区22R?②	胴部		ナデ	158と同一個体	
158	B区トレンチ22S②		縄文(LR)→深い沈線→ミガキ		157と同一個体	
159	B区22T③	胴部		ナデ?		
160	B区22T④	口縁部		不明	口縁内面水平沈線	
161	B区23S①	壺・口縁部		ナデ		
162	B区23T②	口縁部		ナデ?	土師器?	
163	B区南東トレンチ24W③	口縁部	深い沈線	ナデ?		
164	B区トレンチ24X①	深鉢・口縁部	口縁部押圧	ナデ		

第24図 縄文・弥生土器(11)



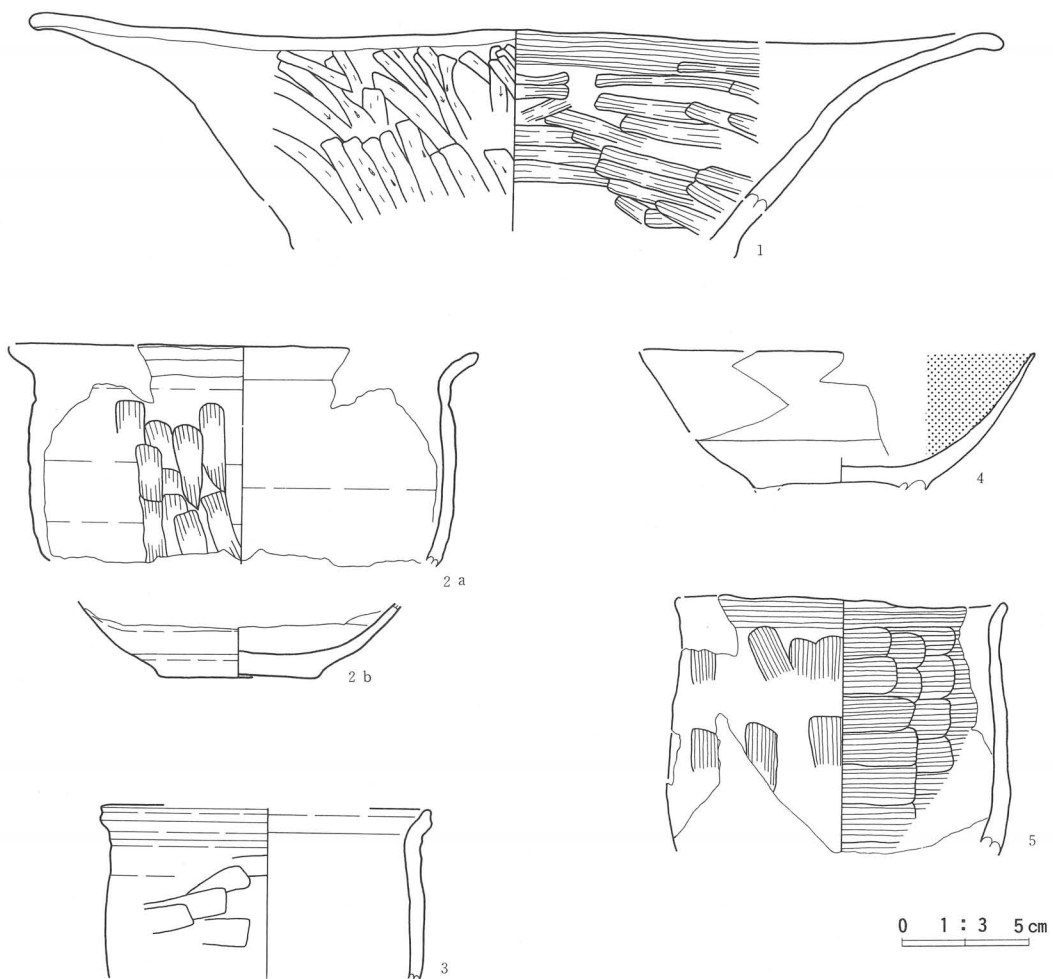
No	出土地点・層位	器種・部位	外面 (文様・装飾、地文、原体など)	内面 (調整など)	備考	本文記載
165	B区トレンチ24X④	胴部	細く深く鋭角的な沈線	ミガキ?		
166	B区トレンチ24X④	壺・口縁部	交点削り込み、小さい瘤状突起 (・ミガキ)	ナデ?		
167	B区トレンチ24X④	深鉢・口縁部	口唇部刻目・縄文 (LR) (・ナデ (雑))	ナデ (雑)		
168	B区トレンチ24X④、26W④	(口縁部1/3周、底部付近1/4周)	丸みのあるA突起をはさんで断続沈線・頸部瘤状突起2対・磨消縄文 (LR)	ミガキ・ナデ?	二次焼成?	P118
169	B区トレンチ25W④	深鉢・口縁部	(摩耗)		口縁内面水平沈線	
170	B区トレンチ25W④	台付浅鉢 (1/4周)	削り込みによる匹字文 (・ミガキ)	ミガキ	〃・内外面摩耗	
171	B区トレンチ25W④	台付浅鉢・口縁部	(ミガキ)	(摩耗)	口縁内面水平沈線	
172	B区25X②	浅鉢?・口縁部	交点刺突・やや大きめの瘤状突起・口唇部B突起?	(摩耗)	口縁内面水平沈線	
173	B区25X②	壺?・胴部		指などで	内外面摩耗	
174	B区25X②	台付浅鉢	(やや摩耗)	ミガキ		
175	B区トレンチ25X③	深鉢 (1/3周弱)	2種類の突起をはさんで口唇部沈線、突起下頸部2個1対の突起	ナデ	外面スス付着	P118

第25図 縄文・弥生土器(12)



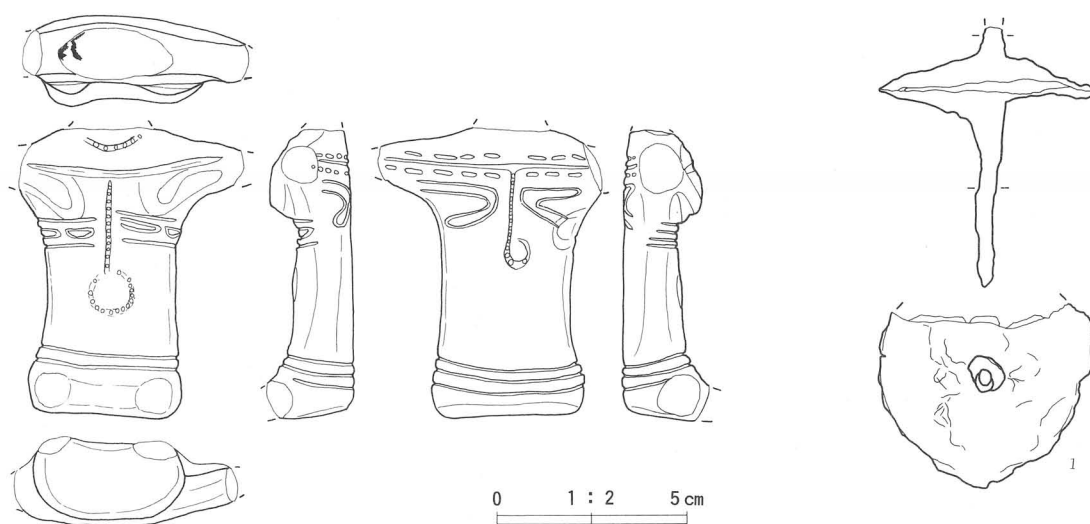
No	出土地点・層位	器種・部位	外面(文様・装飾、地文、原体など)	内面(調整など)	備考	本文記載
176	B区トレンチ25X③	鉢	縄文(LR)	ナデ	外面摩耗	
177	B区トレンチ25X③	深鉢?・口縁部	二又突起(押圧)・縄文(LR)	ナデ	摩耗	
178	B区トレンチ25X③	壺・肩部	溝底の刺痕	指なで		
179	B区26W③	台部(1/3周強)	三又状陰刻	ナデ?	やや摩耗	
180	B区26W③	台付浅鉢・台部	交点小さな瘤状突起	ナデ?		
181	B区26W④	台部(1/3周強)	三又状陰刻	ナデ?		
182	B区26W④	台付浅鉢・口縁部	交点小さな瘤状突起(・摩耗)	(摩耗)	口縁内面水平沈線	
183	B区26W④	鉢?・口縁部	(ナデ)	ナデ		
184	B区27T③	口縁部		指なで?	外面摩耗	P119
185	B区27T③	深鉢・口縁部	口唇部押圧により小波状	ナデ		P119
186	B区18S④重機攪乱	深鉢・口縁部	口唇部沈線・口縁最上部刻目列・溝底の刺痕(・ミガキ)	ミガキ		
187	B区18S④重機攪乱	台付浅鉢?	交点削り込み、瘤状小突起・縄文(LR)(・ミガキ?)	ミガキ?	やや摩耗	
188	B区18S④重機攪乱	深鉢・胴部	縄文(LR)	ナデ		
189	B区18S①重機攪乱後	台付浅鉢?・口縁部	口唇部突起とはさんで沈線・細く深い沈線(・ミガキ)	ミガキ	口縁内面水平沈線	
190	B区18S①重機攪乱後	口縁部?	縄文(0段多条・RL)	ナデ		
191	25W④重機攪乱	壺・肩部	交点削り込み、小さい瘤状突起、溝底の刺痕	頸部ミガキ?	内面頸から下指なで	
192	B区26W③あたり重機攪乱	深鉢?・口縁部	口縁最上部押圧・縄文(LR)→ナデ	ナデ		
193	B区トレンチ	深鉢?・口縁部	口唇部押圧により小波状	ナデ	口縁内面段・外面スス	
194	B区トレンチ	胴部	縄文(LR)→深い沈線	ナデ		

第26図 縄文・弥生土器(13)



No	出土地点・層位	器種・部位	外面(口縁部/胴部)	底面	内面(口縁部/胴部)	残存状況	備考	本文記載
1	第1号住居P1、P4ほか	鍋	ケズリ		ナデ	最大3/4周		P119
2a	第1号住居P8、P11ほか	甕・口縁部	ロクロナデ/ケズリ→ナデ?		ロクロナデ?	最大1/4周	内面焼けはじけ	P119
2b	第1号住居P10(2層)	甕・底部	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ?	底面全周	2aと同一個体?	P119
3	第1号住居P11(9層上面)	甕・口縁部	ロクロナデ/ロクロナデ→ケズリ		ロクロナデ?	破片(1/5周)	内面付着物?	
4	第1号住居6層	高台付坏・底部	(摩耗して不明)	回転糸切り?	黒色処理→ナデ?	底面のみ全周		P119
5	B区尾根NO2	甕・口縁部	ヨコナデ/ハケメ→ナデ		ヨコナデ/ハケメ	1/4周	外面スス、二次焼成	P119

第27図 土師器

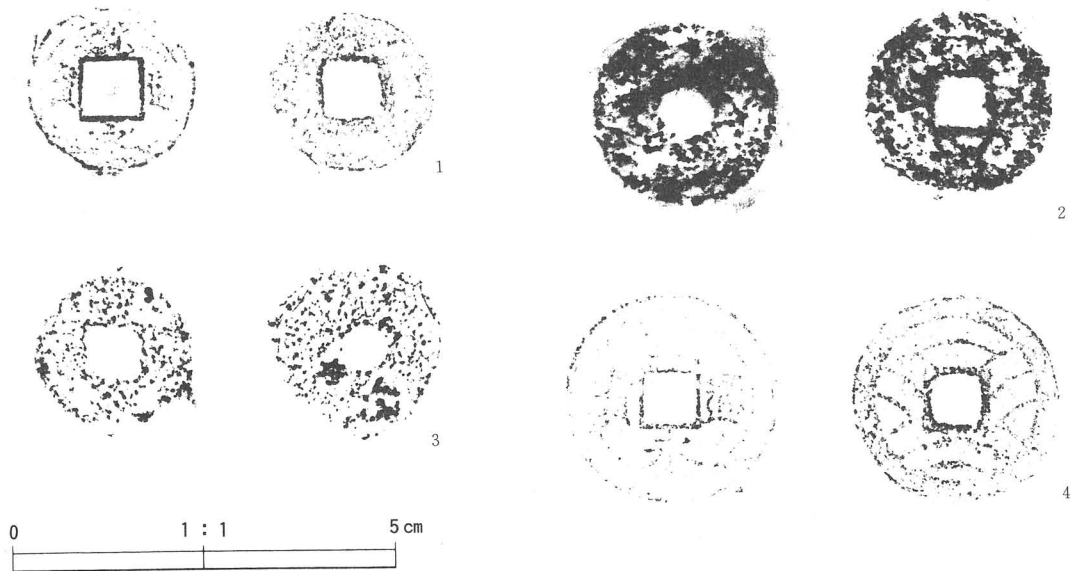


土偶

No	出土地点・層位	器種・部位	重さ(g)	つくり	文様など(地文・装飾)	付着物	備考	本文記載
1	22R④包含層?上面	四肢欠損(割口摩耗)	62.9	中実	溝底の刺痕?	頸に黒色付着物	摩耗ひどい・屈折像姿態	

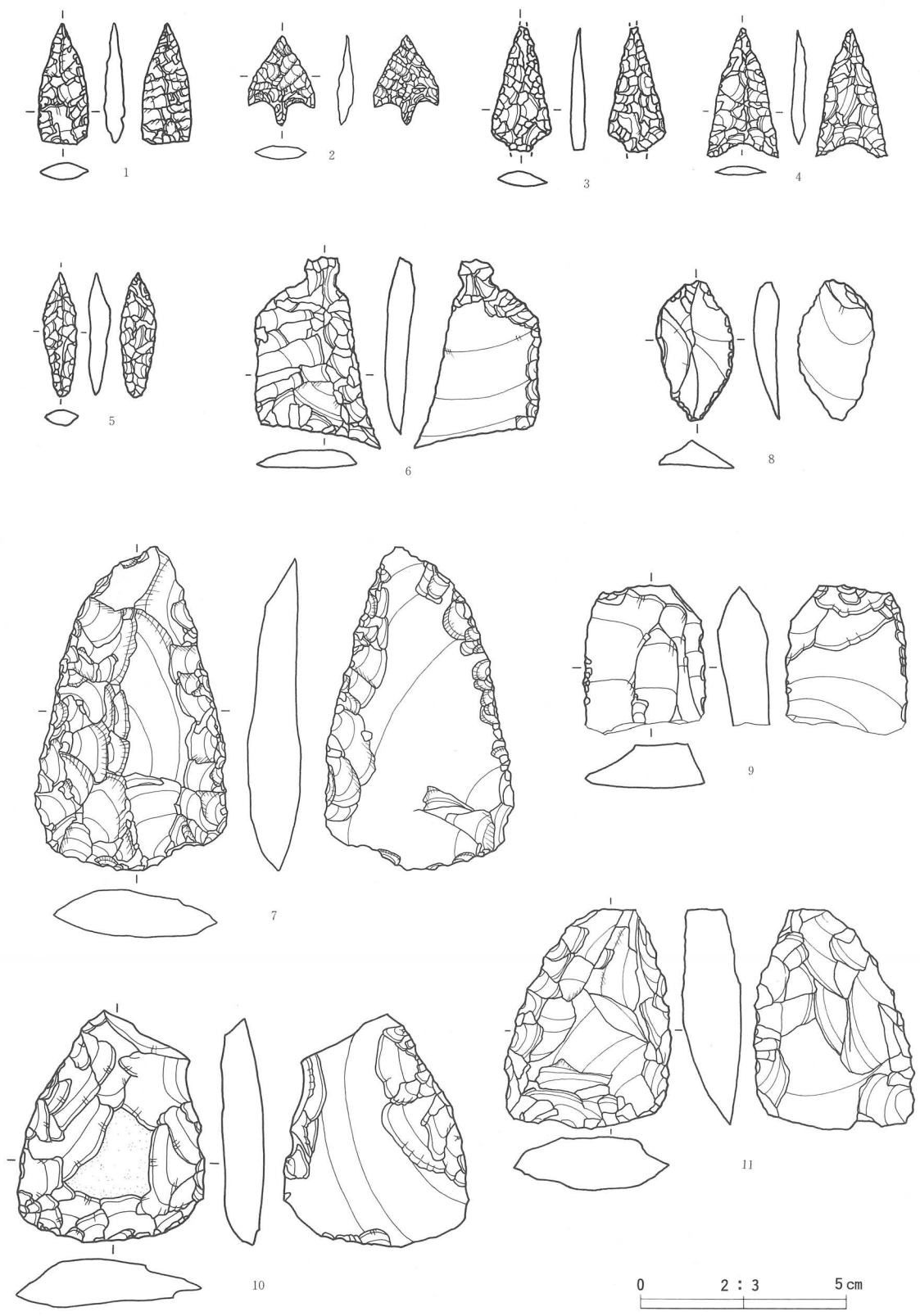
鉄製品

No	出土地点・層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	残存状況	備考
			長さ	幅	厚さ			
1	第1号住居・6層	紡錘車	6.9	5.6		34.27	両先端欠損	

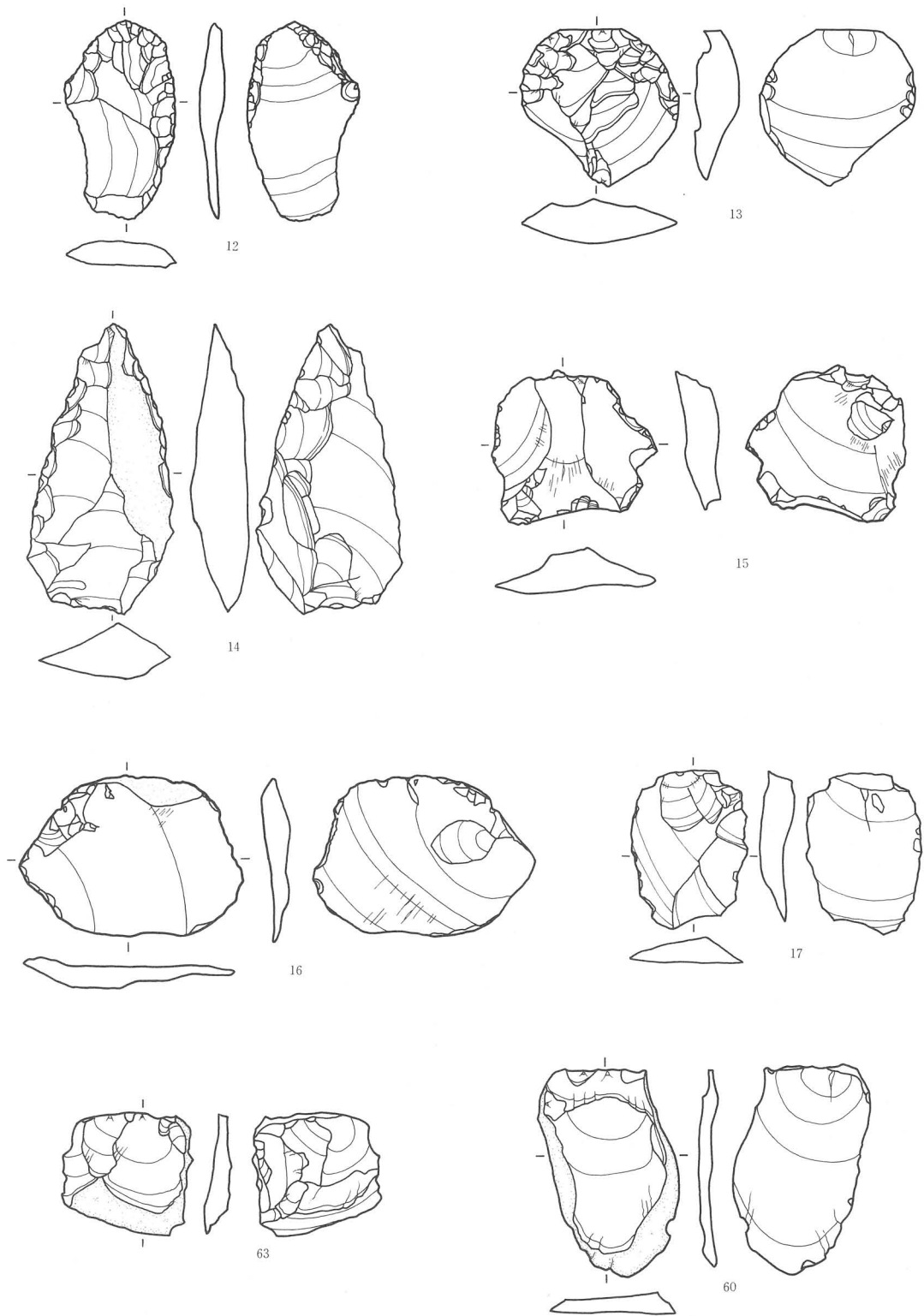


No	種類	出土地点・層位	残存状態	直径(cm)	重さ(g)	鑄造年代	備考
1	寛永通宝	礎石建物跡古銭NO.1	サビ	1.7	2.0		新寛永・ビタ銭か
2	鉄銭(サビひどく不明)	礎石建物跡古銭NO.3	サビひどい	1.9	3.2		寛永通宝?
3	鉄銭(サビひどく不明)	A区出土位置不明	サビひどい	2.0	3.8		寛永通宝?
4	寛永通宝(四文銭)	B区20R④付近・カクラン		2.3	4.8		新寛永

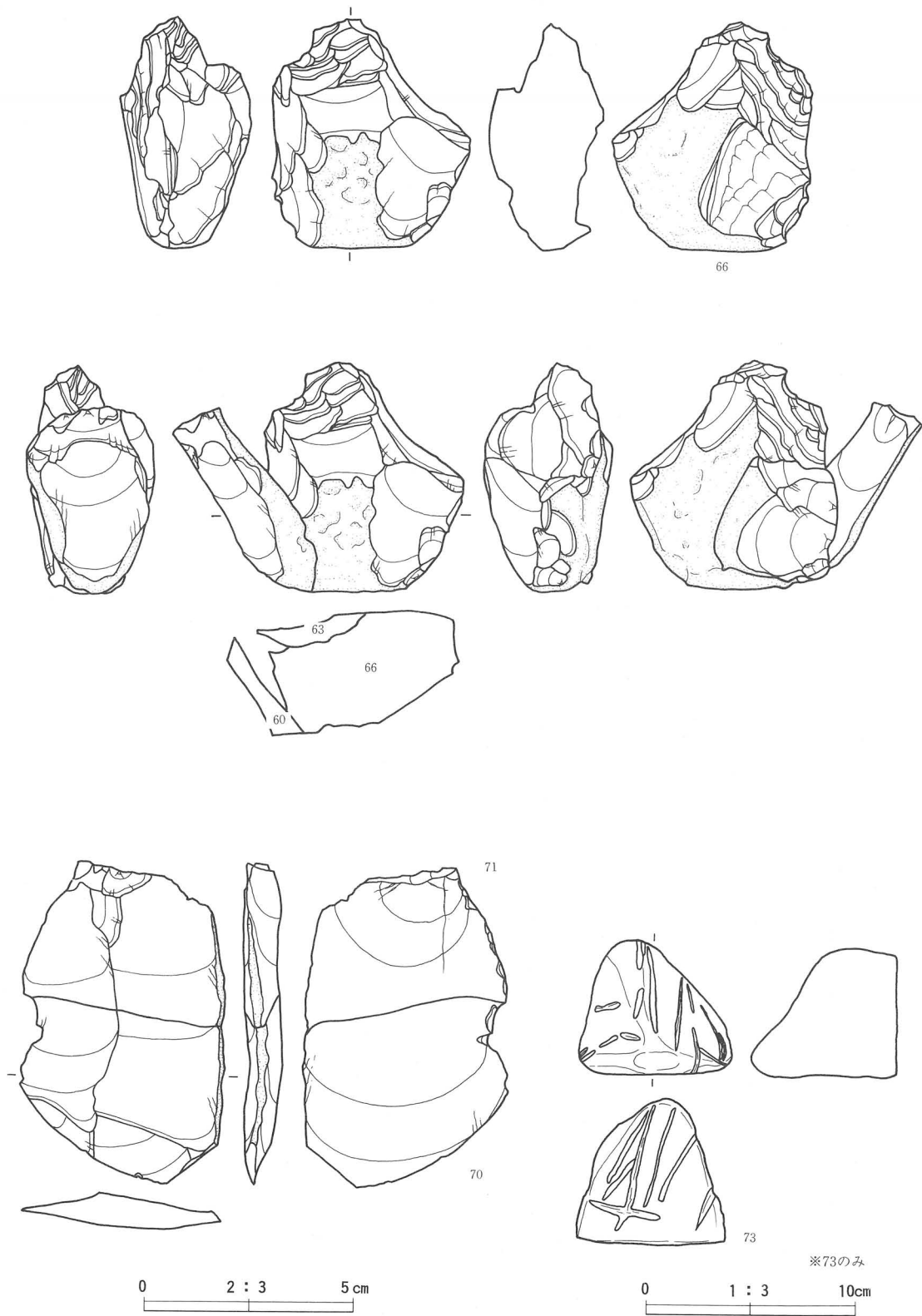
第28図 土偶、鉄製品、古銭



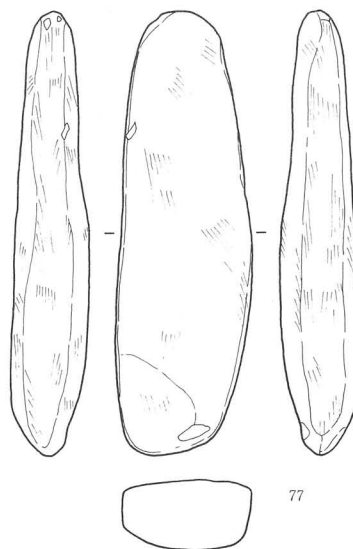
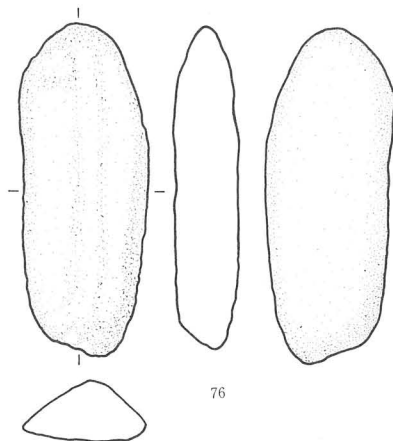
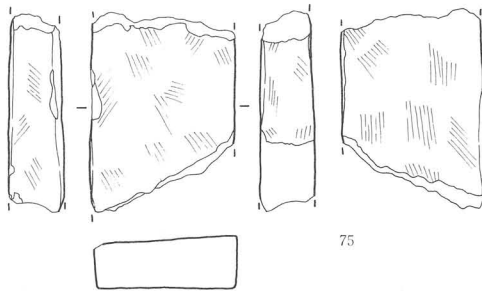
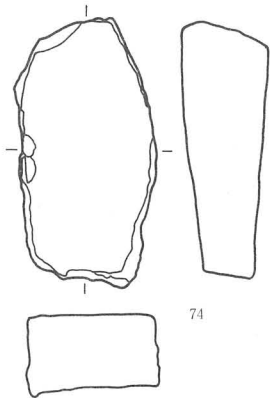
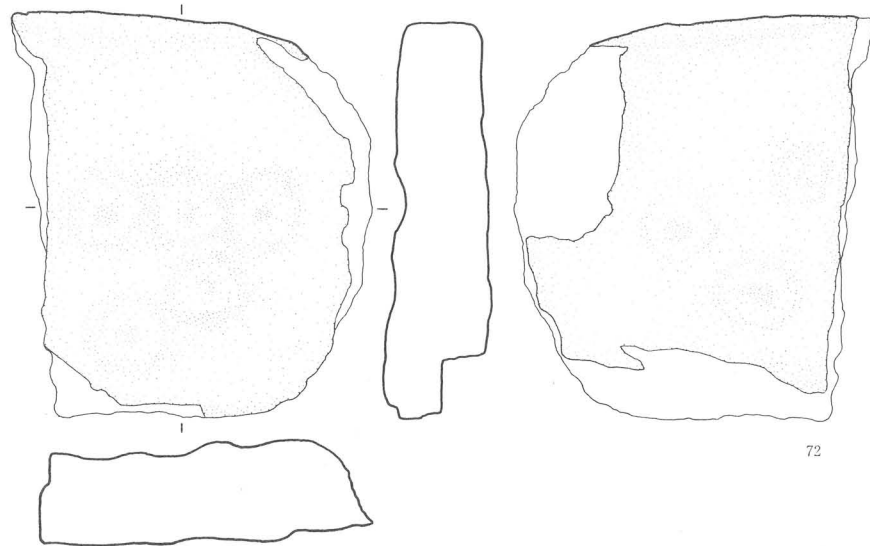
第29図 石器(1)



第30图 石器(2)

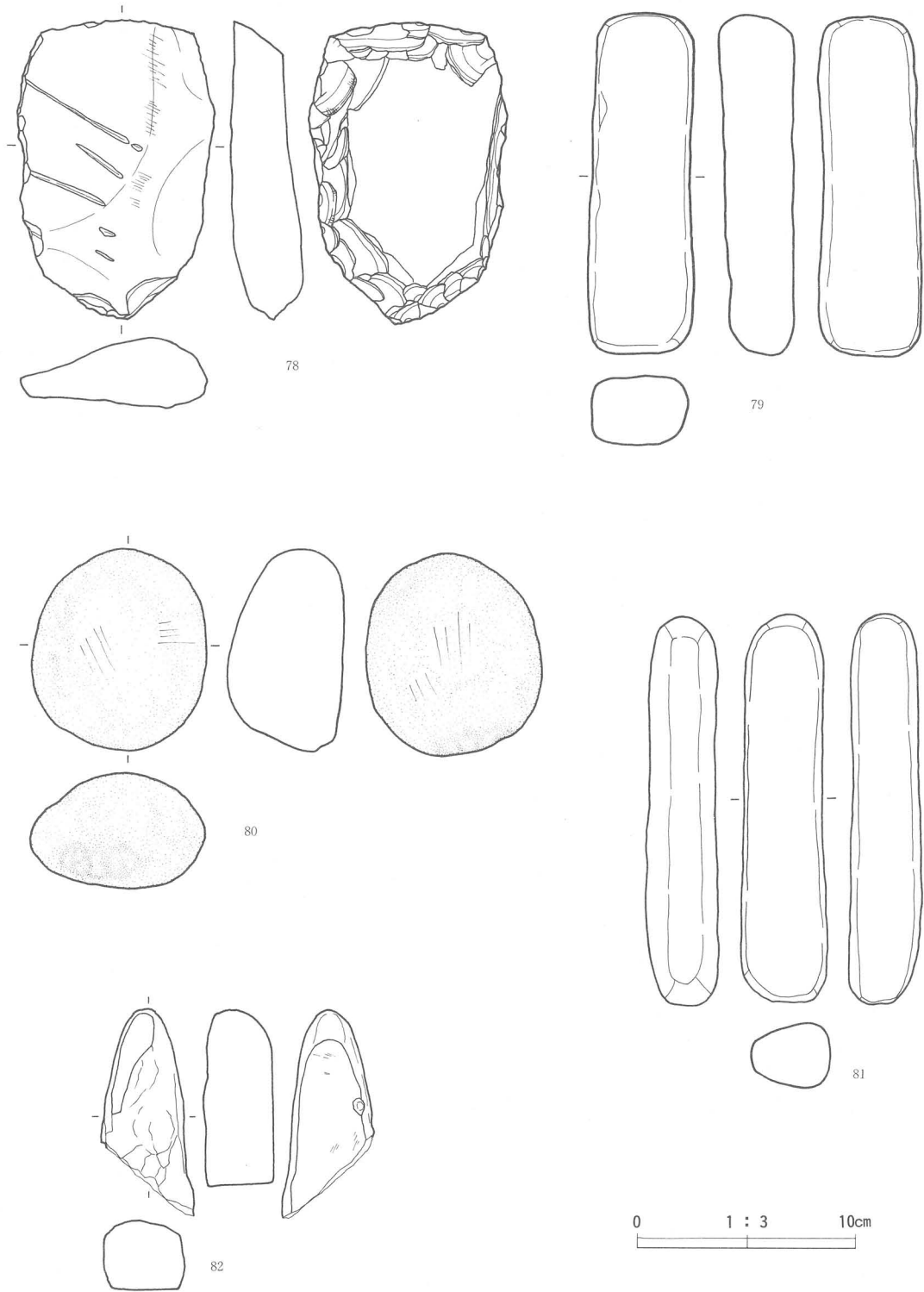


第31図 石器(3)



0 1 : 3 10cm

第32図 石器(4)



第33図 石器(5)

写真図版



西から(右側矢印は元の高松寺跡と言われている場所)



北から
写真図版1 遺跡遠景



調査区全景(北から)



A区全景(南から)

写真図版2 調査区全景(1)



B区全景(北から)



A区からB区を望む
写真図版3 調査区全景(2)



A区調査前全景



B区調査前全景(西から)

写真図版4 調査前風景(1)



B区調査前全景(B区尾根から)

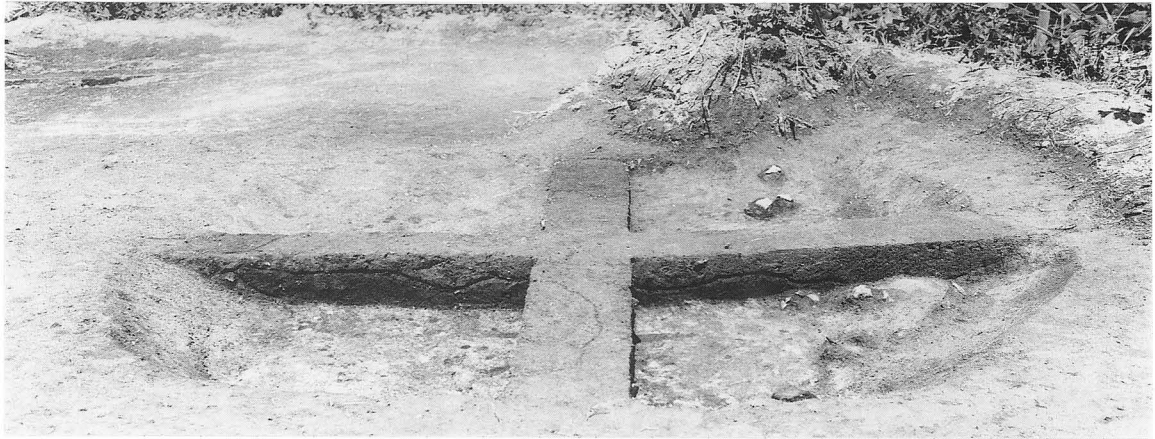


B区からA区を望む

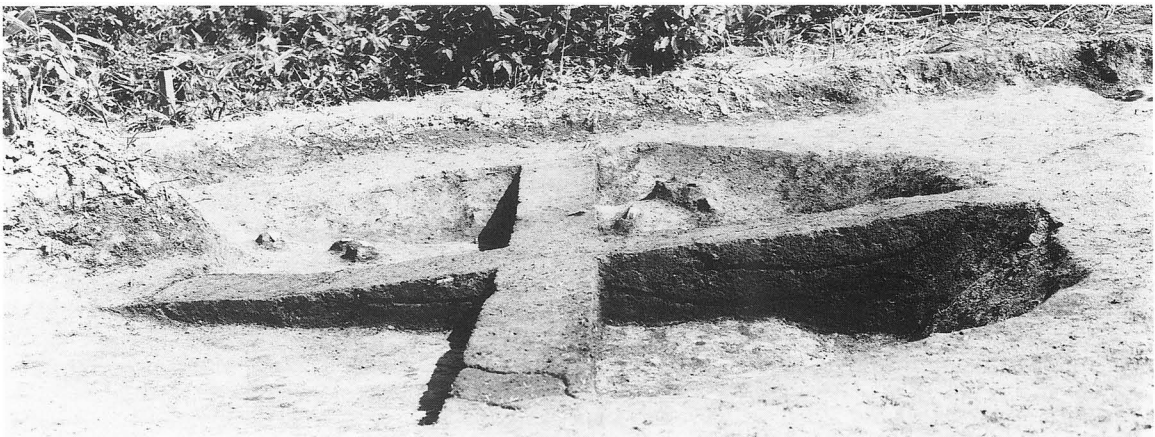
写真図版5 調査前風景(2)



豎穴住居跡全景



覆土断面(東西)



覆土断面(南北)

写真図版 6 豎穴住居跡(1)



カマド全景



カマド内遺物出土状況



カマド断面(1)



カマド断面(2)



カマド掘り上り



カマド燃烧部断ち割り



周溝断面(1)



周溝断面(2)

写真図版 7 竪穴住居跡(2)

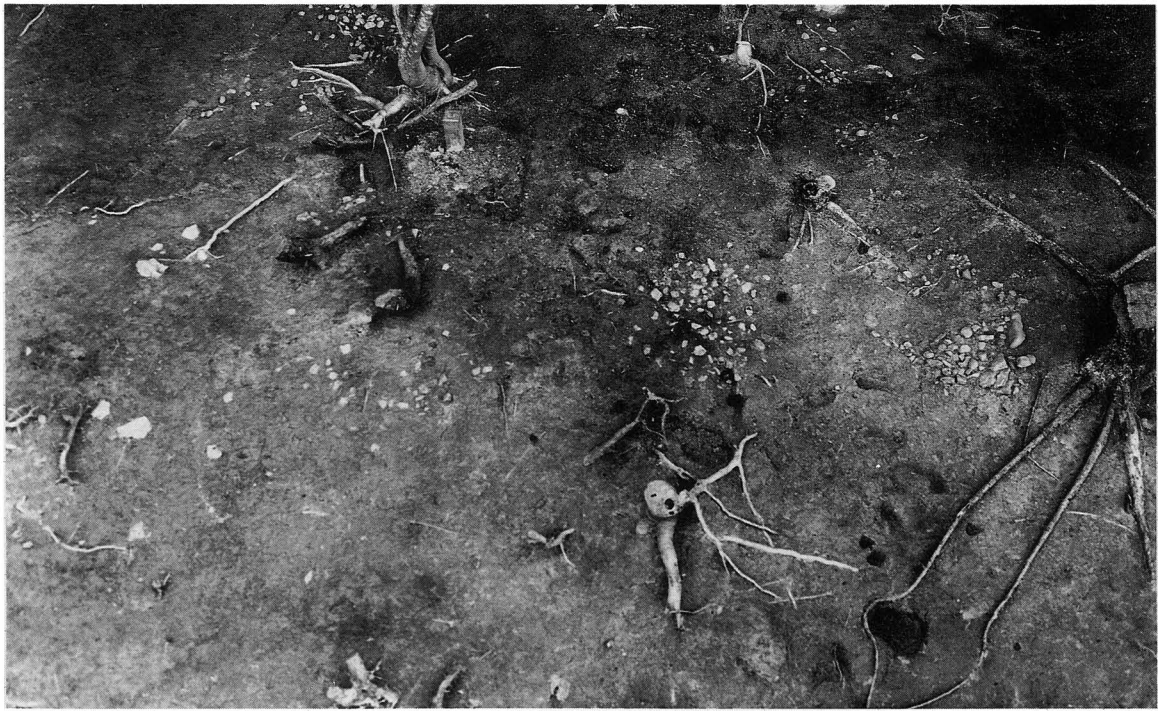


平場・土塁遠景



平場・土塁近景

写真図版 8 平場・土塁



礎石建物跡全景



根石集中区(1)



根石集中区(2)



根石集中区(3)



根石集中区(4)

写真図版 9 礎石建物跡(1)



根石集中区(5)



根石集中区(6)



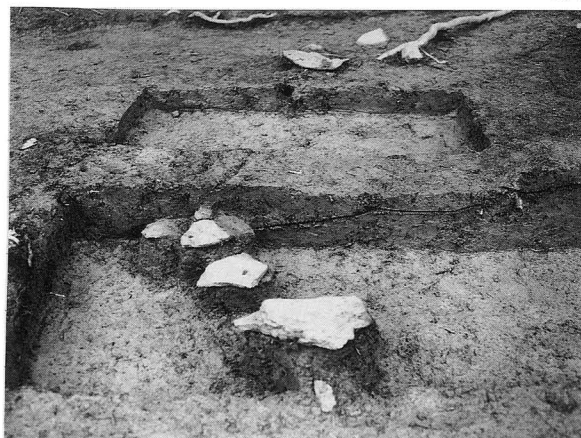
根石集中区(7)



根石集中区(8)



断ち割り全景



断ち割り近景(1)

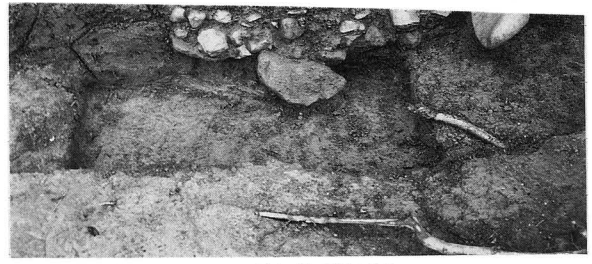


断ち割り近景(2)

写真図版10 礎石建物跡(2)



断ち割り近景(3)



断ち割り近景(4)



グライ化部分断ち割り



平場から参道跡を望む



参道跡全景(北から)

写真図版11 礎石建物跡(3)・参道跡



土壘断面(1)



土壘断面(2)



東側斜面～平場断面

写真図版12 土壘、東側斜面断面



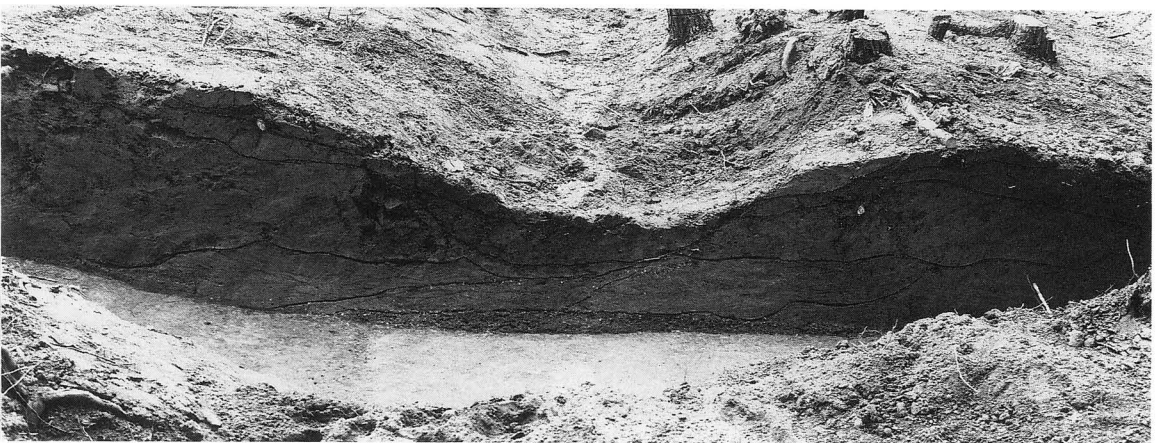
参道迹断面(1)



参道迹断面(2)



参道迹断面(3)



参道迹断面(4)

写真图版13 参道迹断面



平場断面(1)



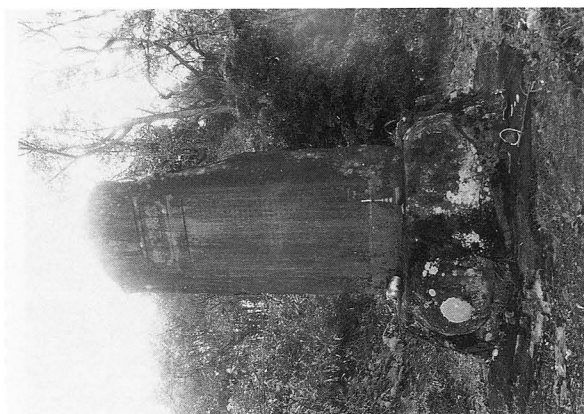
平場断面(2)



東側斜面から平場を望む



高松寺跡古碑遠景



古碑近景(1)



古碑近景(2)

写真図版14 平場断面・高松寺跡古碑



溝全景(南から)



溝断面(1)



溝断面(2)

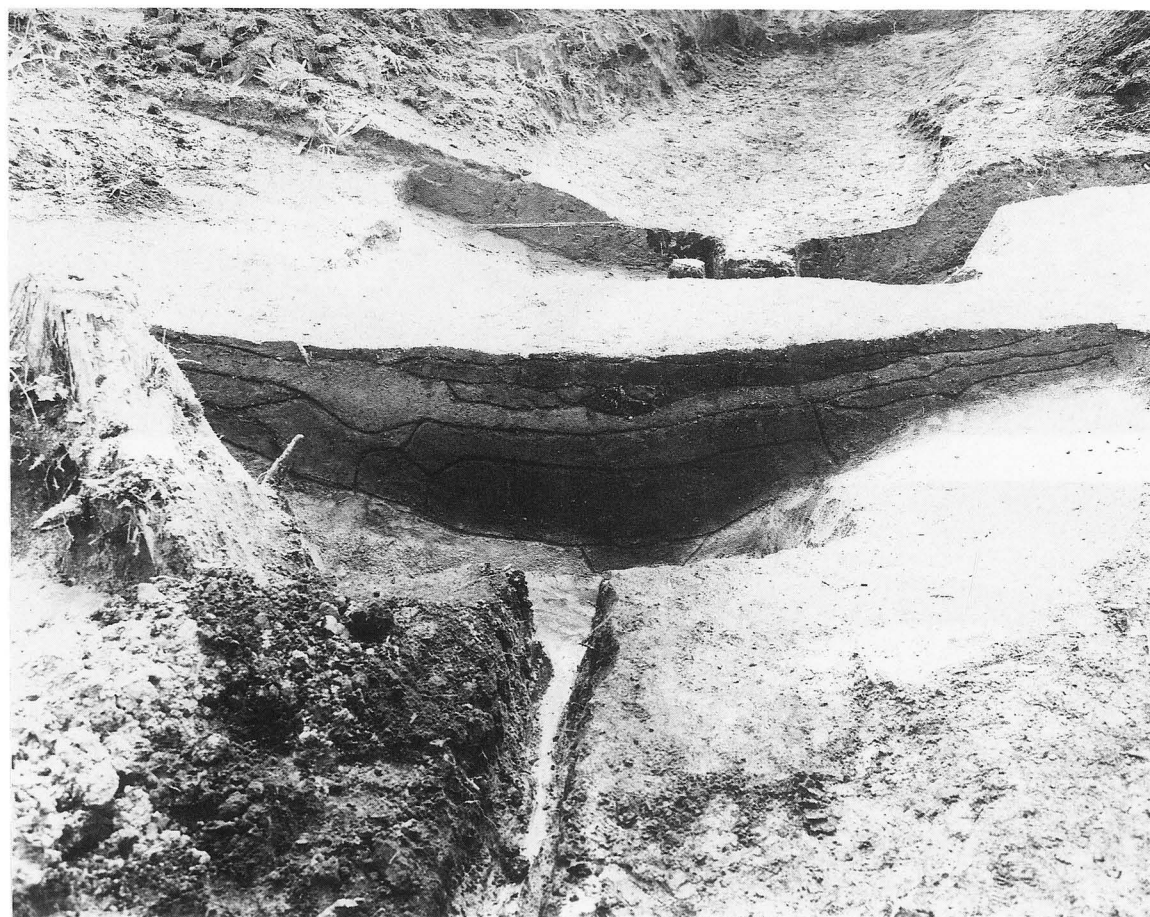


溝全景(北から)

写真図版15 溝

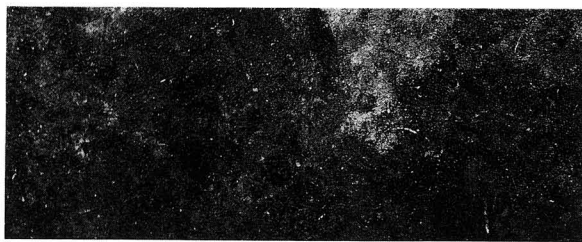


沢跡遺物出土状況(1)



沢跡断面

写真図版16 沢跡捨て場(1)



沢跡焼土検出状況



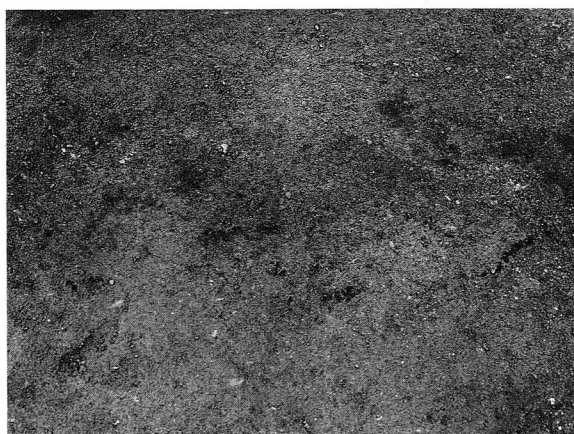
沢跡焼土検出状況(2)



有機物質捨て場？断面



B区尾根全景



尾根炭化物検出状況

写真図版17 沢跡捨て場(2)・有機物質捨て場・B区尾根遺物出土状況(1)



尾根土器出土状況(遠景)(1)



左写真の近景



尾根土器出土状況(遠景)(2)



左写真の近景



B区平坦面調査状況

写真図版18 B区尾根遺物出土状況(2)・B区平坦面調査状況



溝



高松寺跡参道入口？



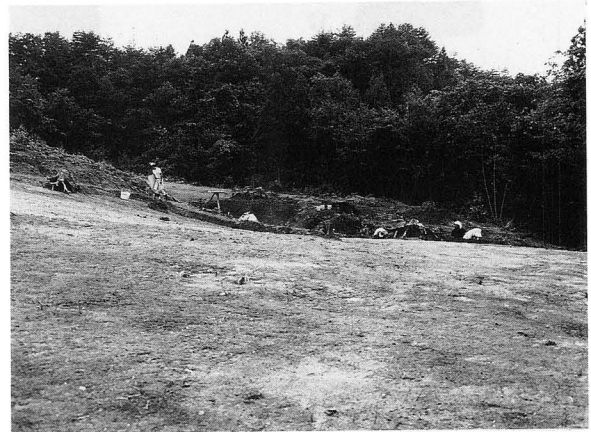
A区調査前風景



B区雑物撤去状況



雨後のB区平坦面



調査風景(1)

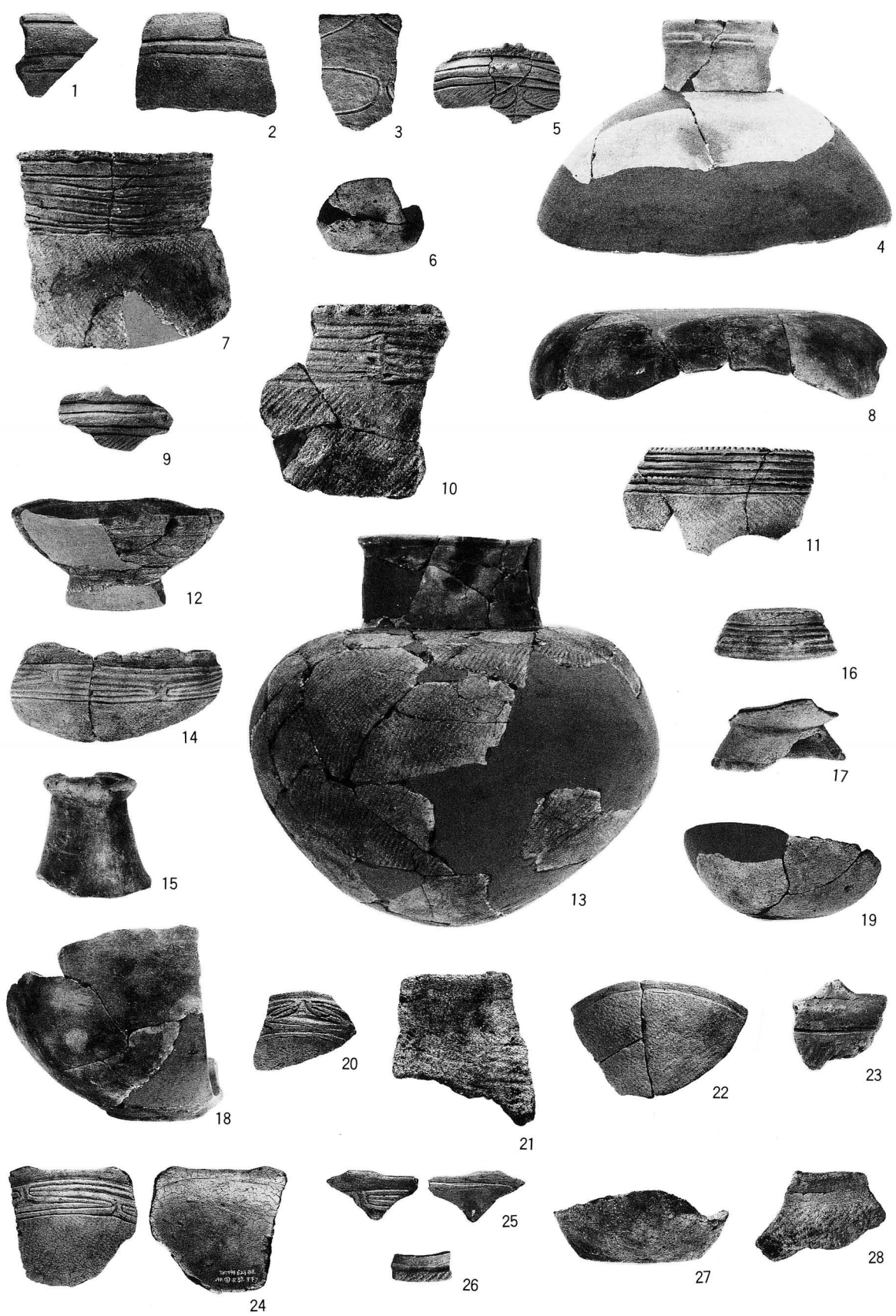


調査風景(2)

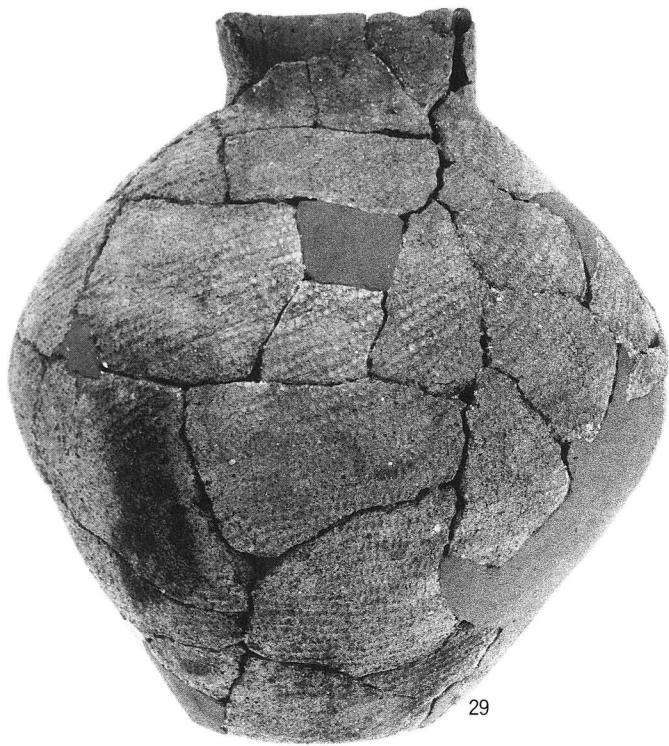


調査風景(3)

写真図版19 調査風景ほか



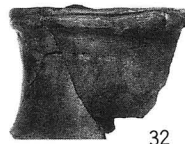
写真図版20 縄文・弥生土器(1)



29



31



32



33



34



35



36



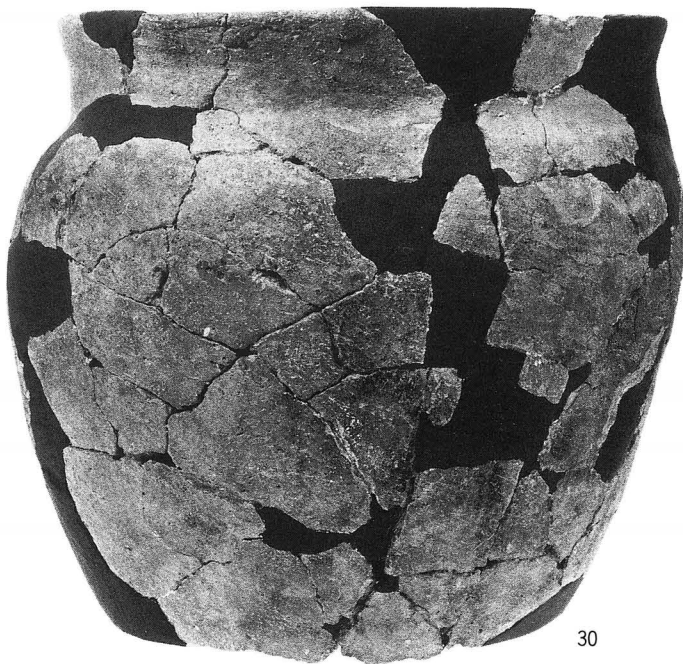
37



38

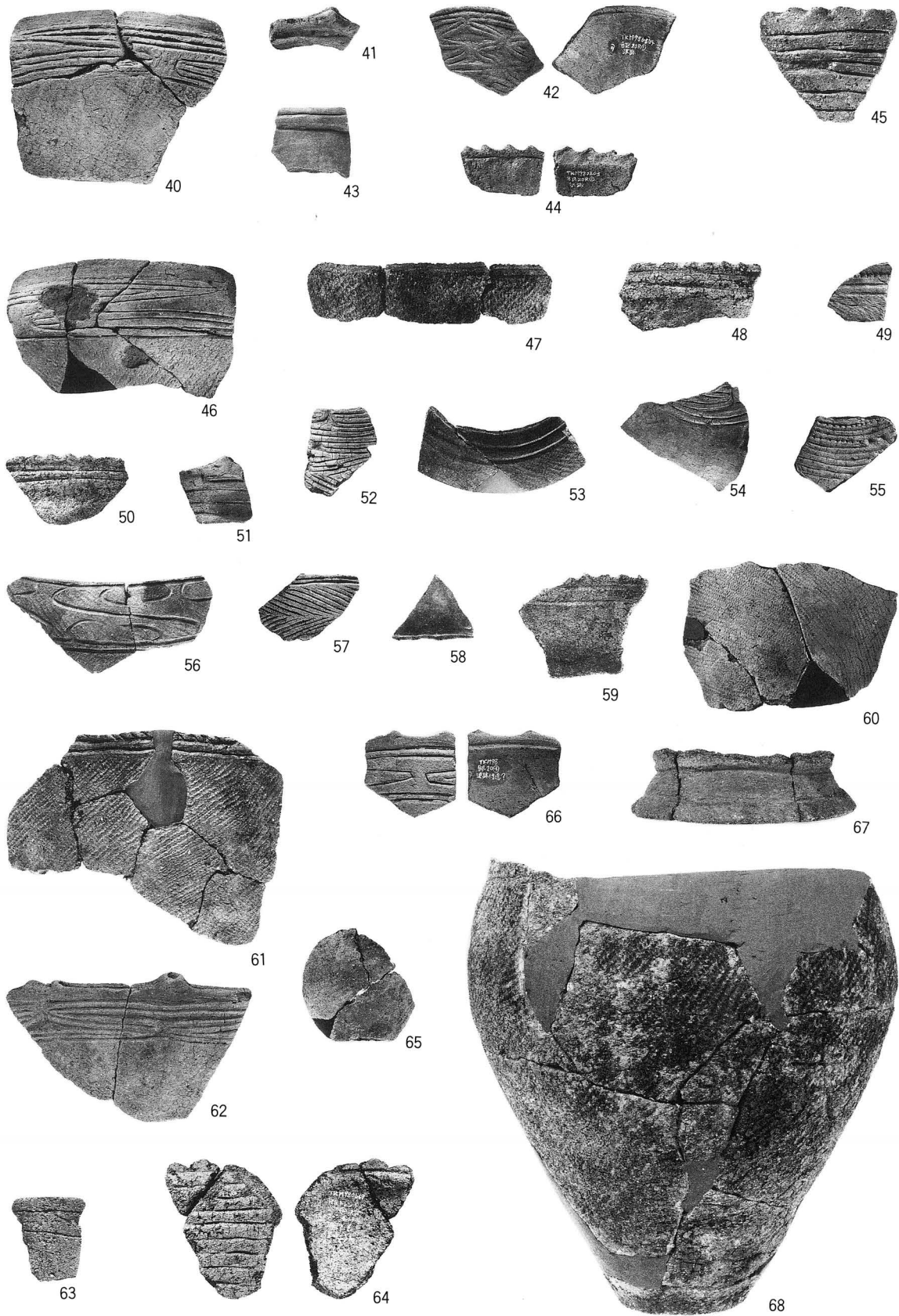


39

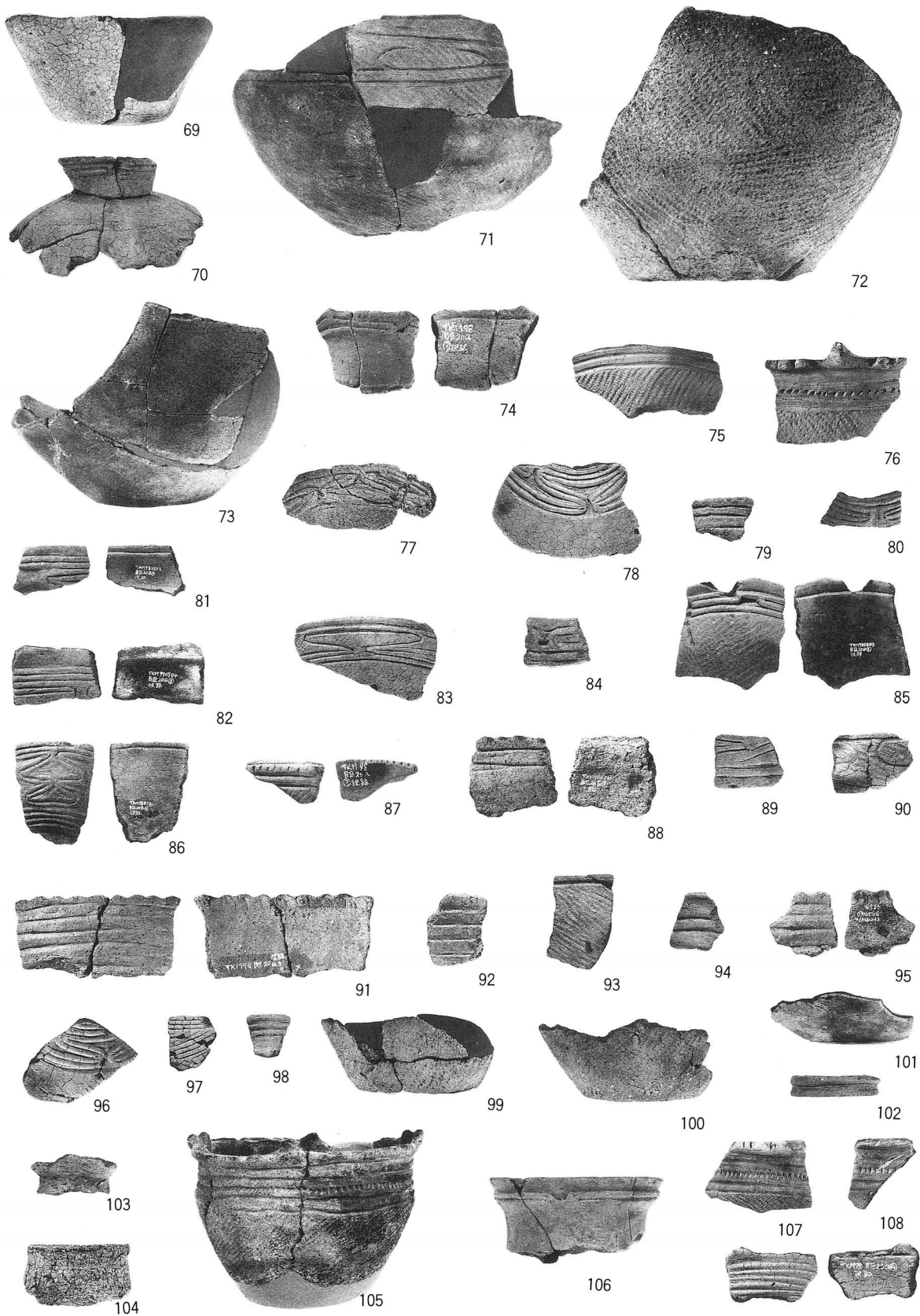


30

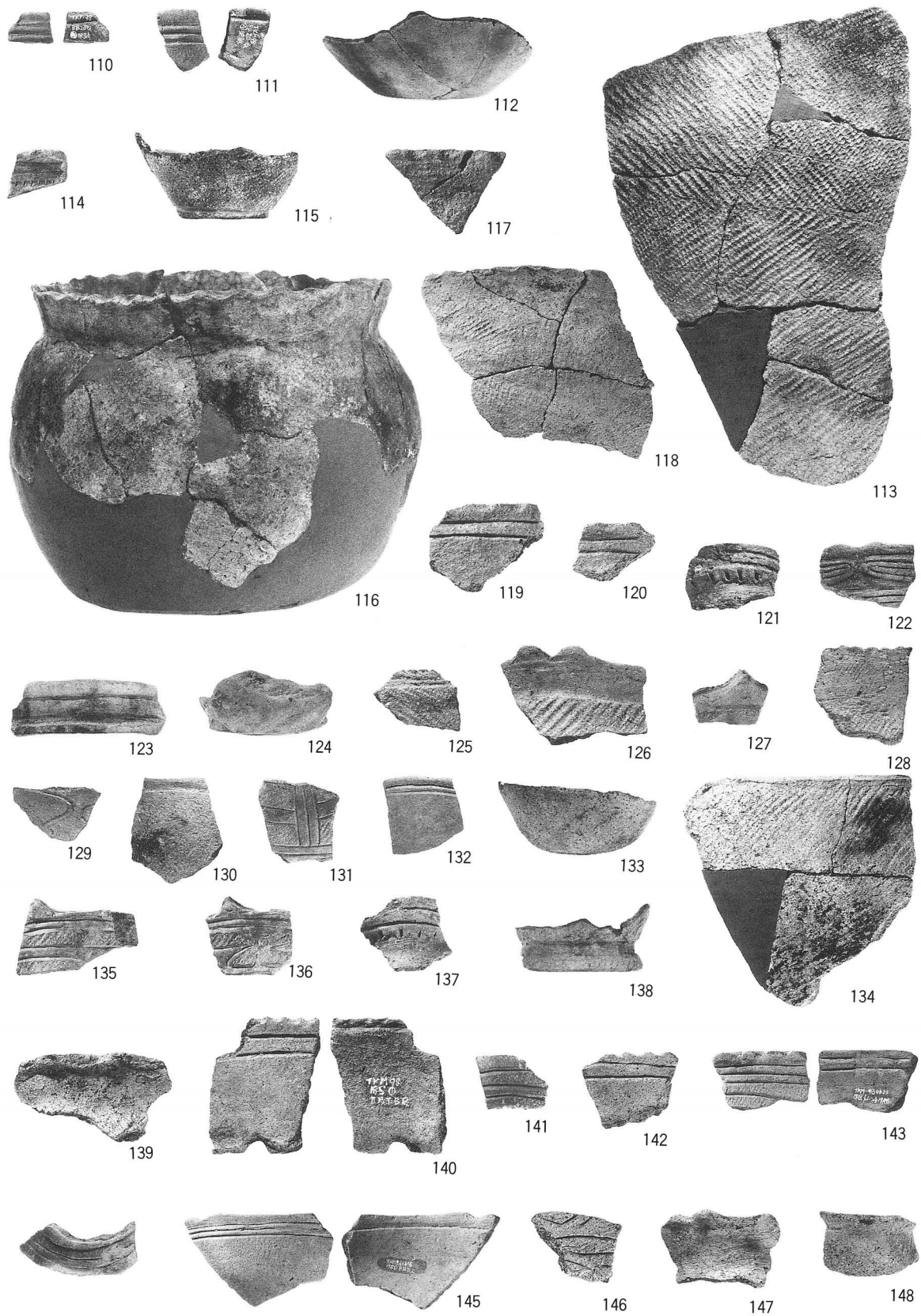
写真図版21 縄文・弥生土器(2)



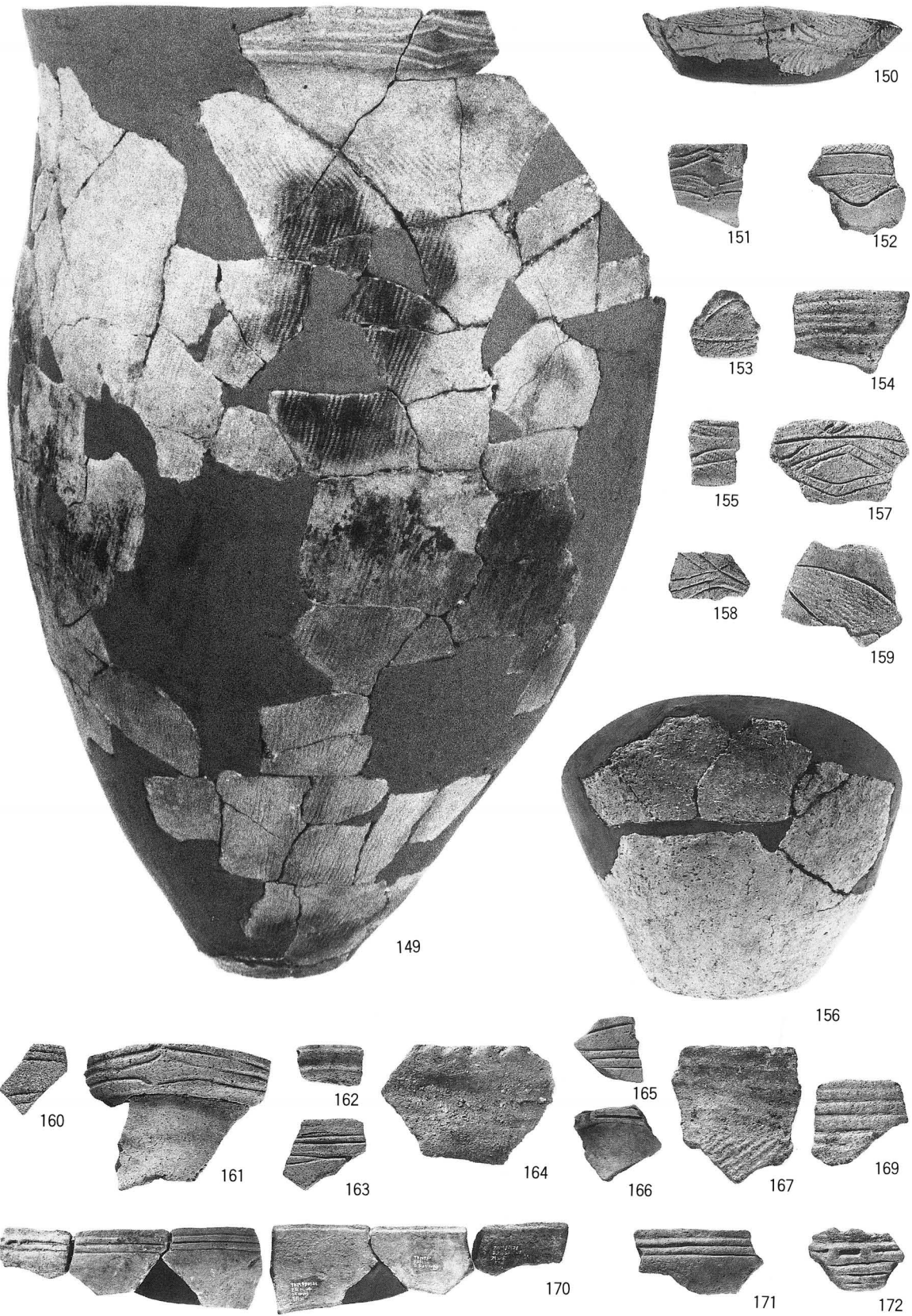
写真図版22 縄文・弥生土器(3)



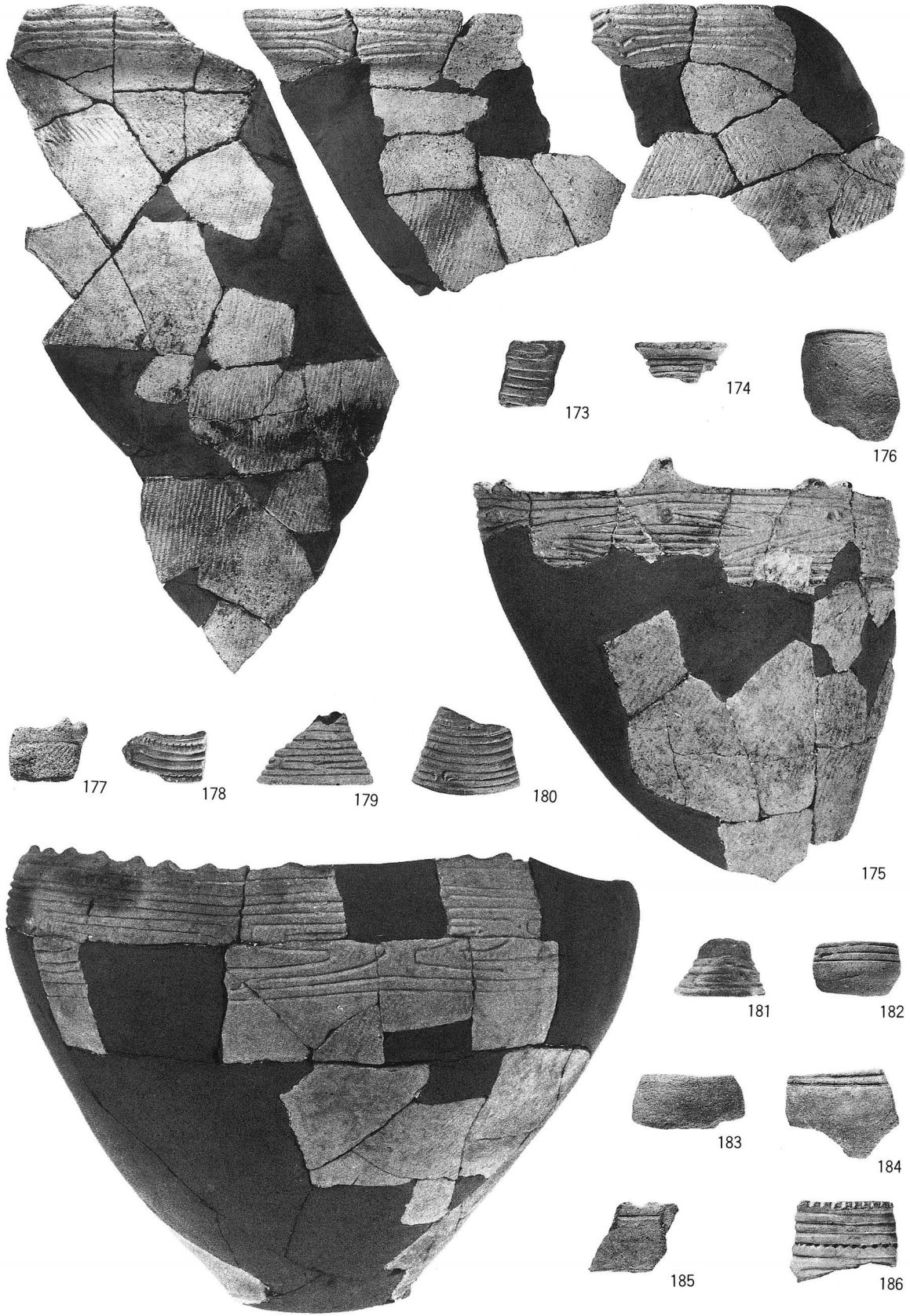
写真図版23 縄文・弥生土器(4)



写真図版24 縄文・弥生土器(5)



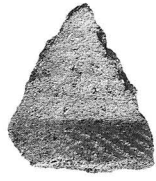
写真図版25 縄文・弥生土器(6)



写真図版26 縄文・弥生土器(7)



187



188



189



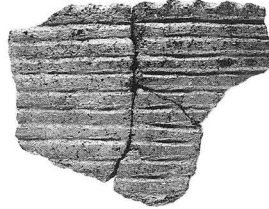
190



191



192



193



194



1



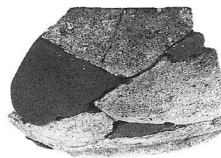
2a



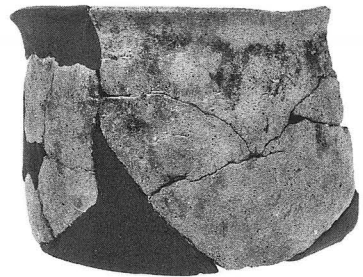
3



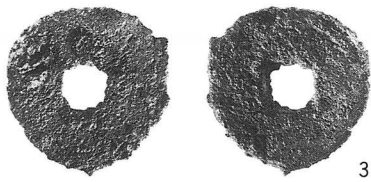
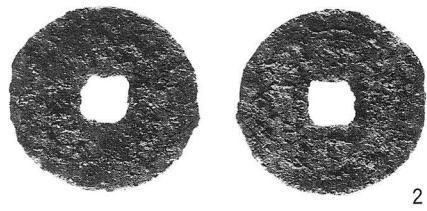
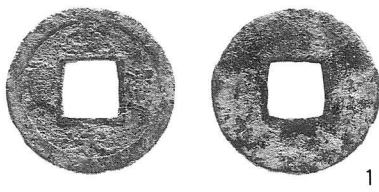
2b



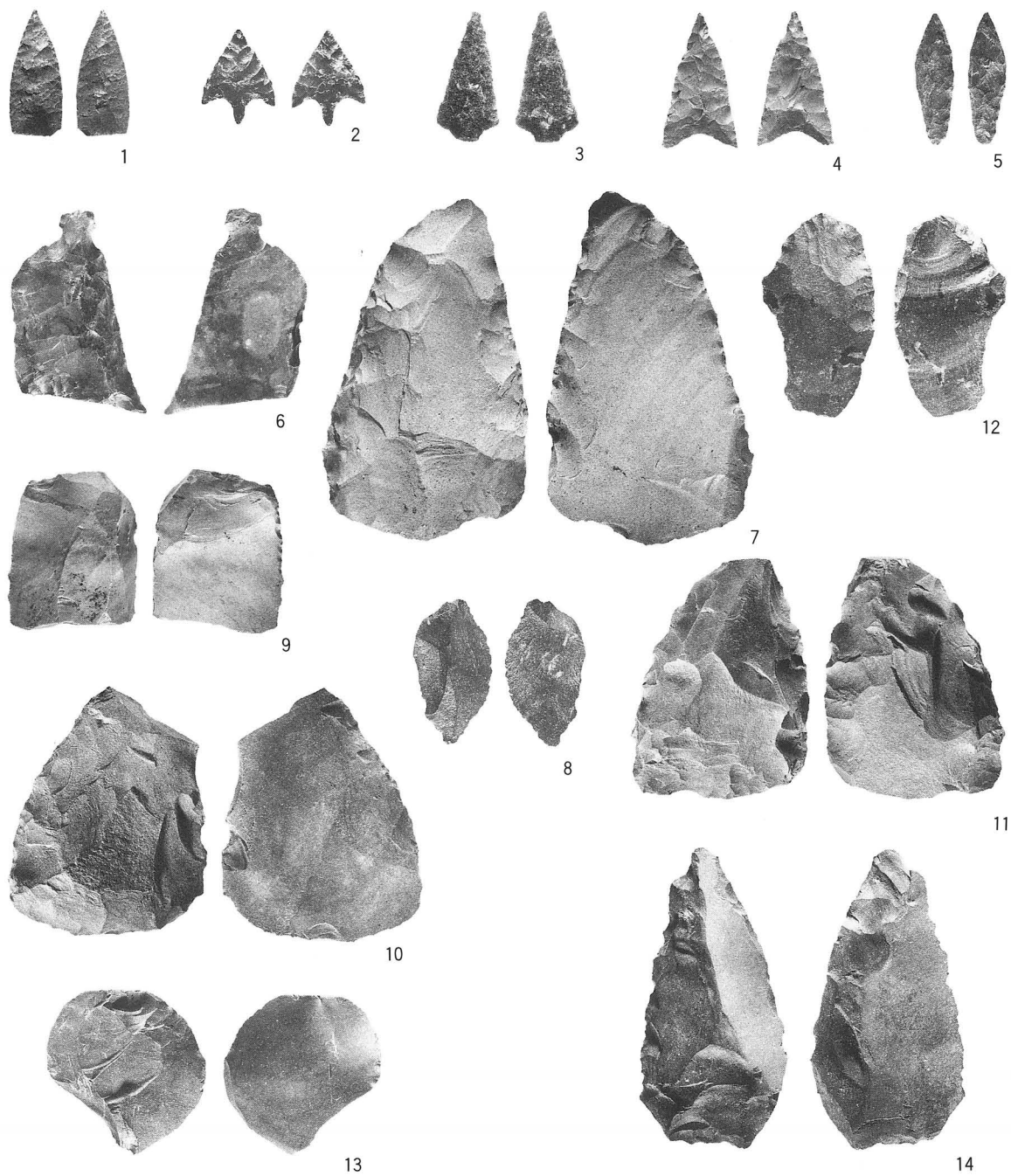
4



写真図版27 縄文・弥生土器(8)、土師器

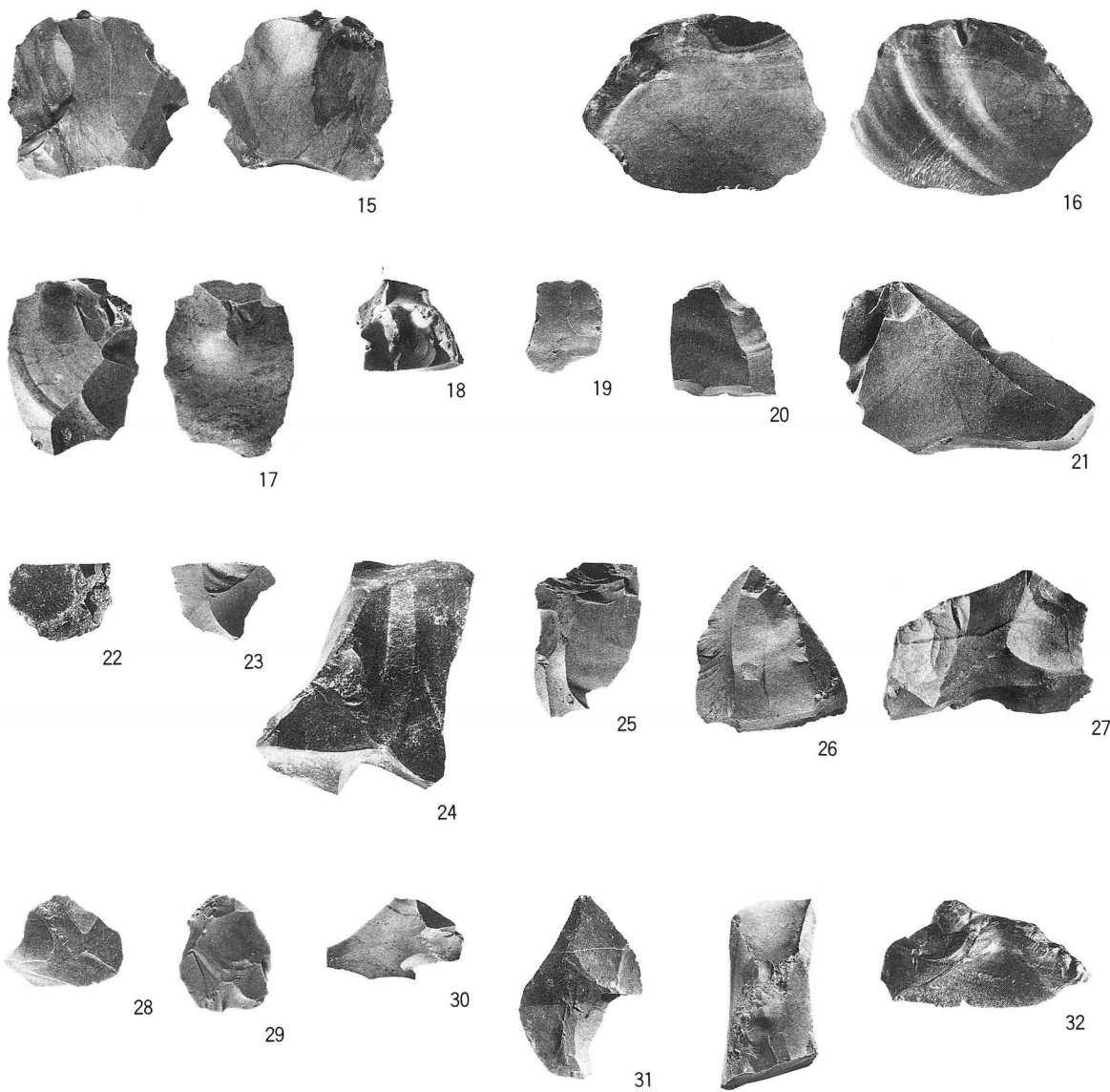


写真図版28 土偶、鉄製品、古銭



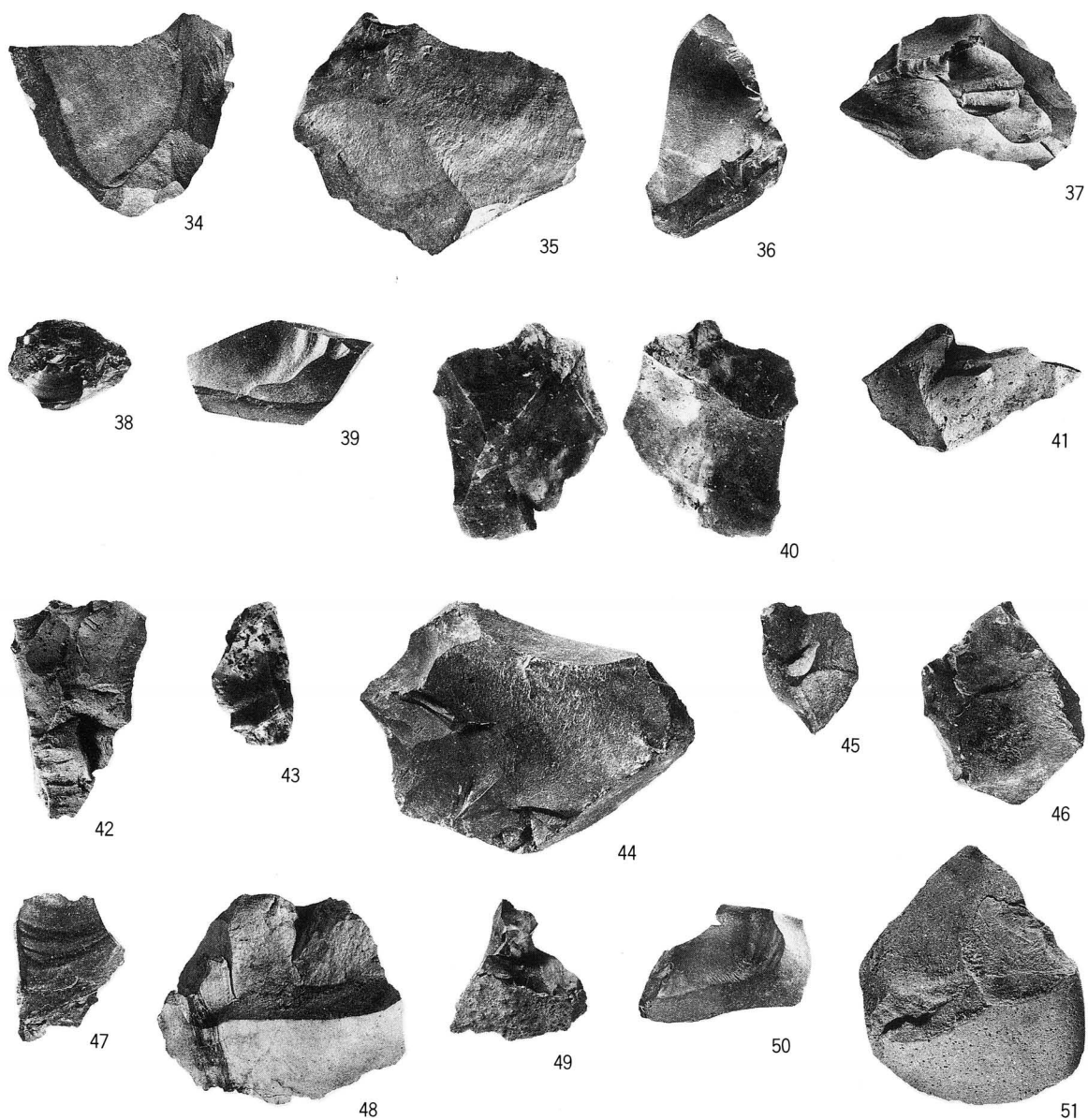
No	出土地点・層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
1	A区9L①土壘部分	石鏃(平基)	2.9	1.2	0.5	1.6	頁岩 奥羽山脈	基部わずかに欠損		
2	B区トレンチ18R③	石鏃(有茎)	2.2	1.6	0.35	0.8	赤色頁岩 奥羽山脈	完形		
3	B区20Q③沢跡	石鏃(有茎)	3.0	1.4	0.35	1.5	頁岩 奥羽山脈	基部、先端部欠損	石鏃に向かない石質?	
4	B区20Q③沢跡	石鏃(凹基)	3.2	1.7	0.35	1.5	頁岩 奥羽山脈	ほぼ完形		
5	10L①攪乱内	石鏃?	3.0	0.8	0.5	1.4	頁岩 奥羽山脈	先端部欠損		
6	B区17S④	石匙	4.6	2.95	0.7	9.0	頁岩 奥羽山脈	完形		
7	A区入口チカク(カクラン)	石筥	7.9	4.6	1.3	45.4	頁岩 奥羽山脈	完形		
8	A区11J③	搔・削器等その他	3.4	1.8	0.65	2.9	頁岩 奥羽山脈		Rフレイク	
9	A区11J③	搔・削器等その他	3.6	3.0	1.3	16.4	頁岩 奥羽山脈	欠損?		
10	A区10K②	搔・削器等その他	5.7	4.5	1.1	33.4	頁岩 奥羽山脈			
11	A区10K②	搔・削器等その他	5.3	3.9	1.4	36.8	頁岩 奥羽山脈			
12	B区20Q③トレンチ	搔・削器等その他	4.6	2.5	0.55	5.7	頁岩 奥羽山脈			
13	B区20Q③沢跡	搔・削器等その他	3.7	3.65	1.0	12.7	頁岩 奥羽山脈			
14	B区20R③沢跡	搔・削器等その他	6.8	3.4	1.35	29.1	頁岩 奥羽山脈			

写真図版29 石器(1)



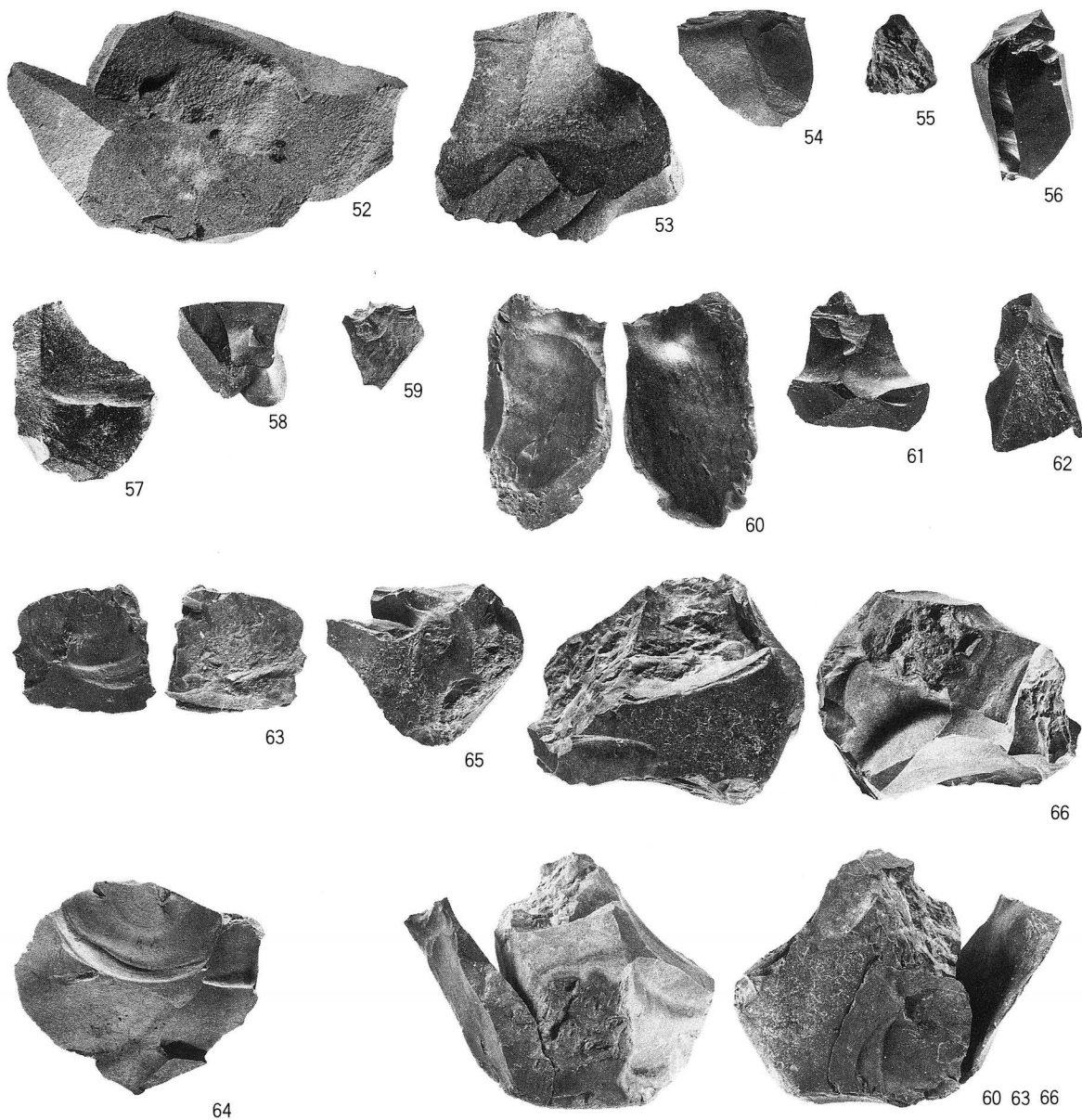
No	出土地点・層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
15	B区21T④	搔・削器等その他	3.6	3.8	1.0	14.3	頁岩 奥羽山脈			
16	25W④重機攪乱	搔・削器等その他	3.7	5.1	0.65	12.0	頁岩 奥羽山脈			
17	B区トレンチ25X②	剥片？(Uフレイク？)	3.7	2.7	0.8	8.0	頁岩 奥羽山脈			
18	礎石建物跡	残核？	2.45	2.2	1.55	5.7	緑色頁岩 奥羽山脈			
19	A区重機による路下	剥片	2.1	1.6	0.25	0.9	頁岩 奥羽山脈			
20	A区9K④	Uフレイク？	2.5	2.1	0.6	3.5	頁岩 奥羽山脈			
21	A区10K③	剥片	5.55	3.4	0.75	13.5	頁岩 奥羽山脈			
22	A区10K③	剥片	1.7	2.25	0.5	1.9	頁岩 奥羽山脈			
23	A区11K①	Uフレイク？	1.75	2.25	0.45	1.2	頁岩 奥羽山脈			
24	A区11K①	残核？	5.25	4.0	2.45	28.2	頁岩 奥羽山脈			
25	A区11K①	Uフレイク？	3.65	2.25	0.7	3.2	頁岩 奥羽山脈			
26	A区11K①	剥片	3.4	3.2	1.4	13.8	頁岩 奥羽山脈			
27	A区11K①	残核？	4.6	3.3	1.6	19.9	頁岩 奥羽山脈			
28	A区10L①付近重機攪乱	剥片	2.5	1.95	0.4	1.3	頁岩 奥羽山脈			
29	A区10M①	剥片	2.5	1.95	0.4	1.6	頁岩 奥羽山脈			
30	A区10M④付近(重機通路)	剥片	2.9	1.75	0.6	1.7	頁岩 奥羽山脈			
31	A区10M④付近(重機通路)	剥片	3.85	2.7	0.35	2.4	頁岩 奥羽山脈			
32	B区20Q②沢跡	残核？	3.9	1.85	1.7	15.9	頁岩 奥羽山脈		ただの石？	

写真図版30 石器(2)



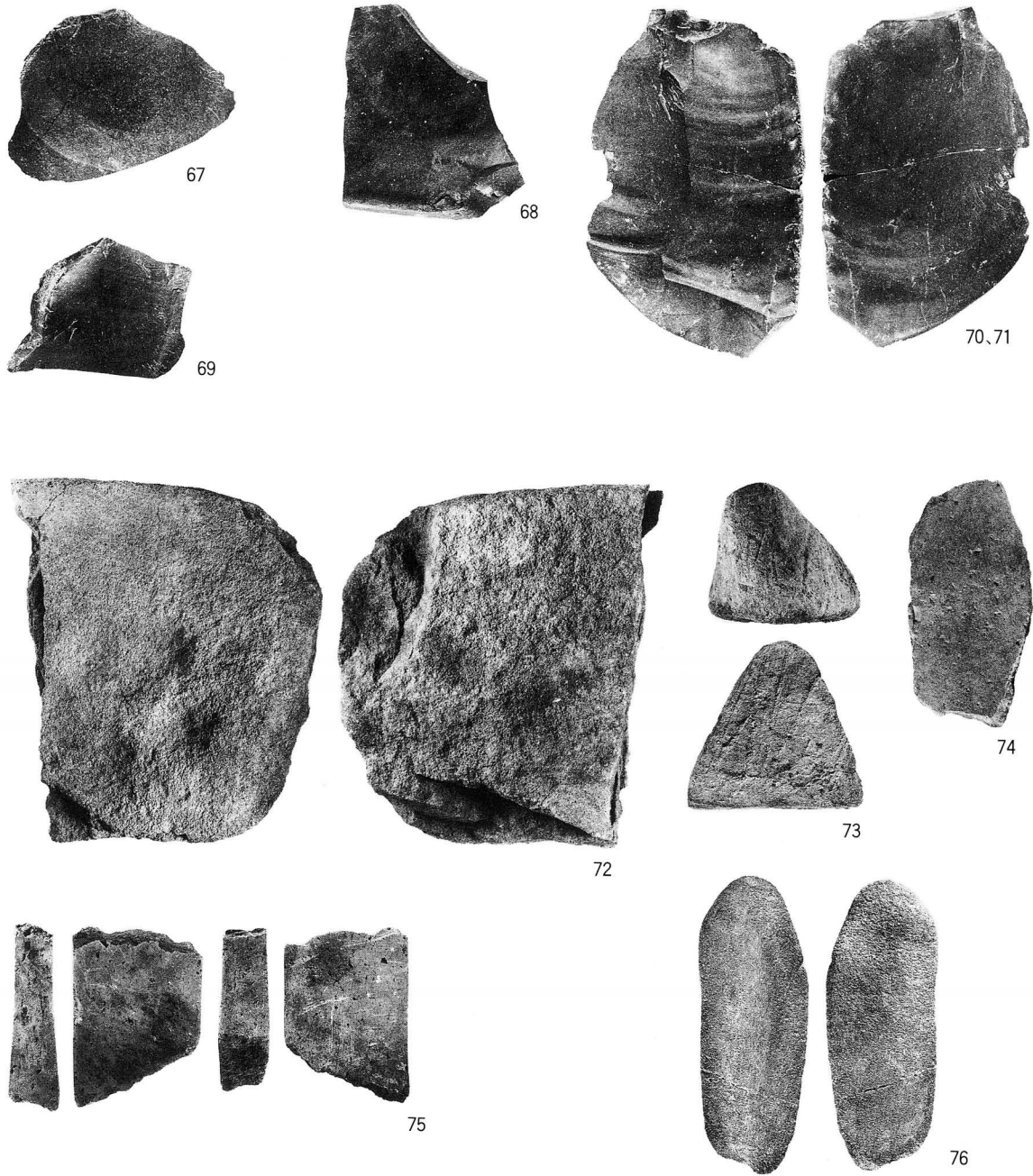
No	出土地点・層位	器種	最大計測値 (cm)			重量(g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
33	B区20Q③沢跡	剥片	4.4	2.3	1.2	6.6	頁岩 奥羽山脈			
34	B区20Q③沢跡	剥片	4.35	4.2	1.3	16.7	頁岩 奥羽山脈			
35	B区20Q③沢跡	剥片	6.2	5.3	1.35	34.7	頁岩 奥羽山脈			
36	B区20Q③沢跡	剥片	4.85	3.1	1.0	9.2	頁岩 奥羽山脈			
37	B区20Q③沢跡	残核?	4.9	3.55	1.4	18.7	頁岩 奥羽山脈			
38	B区20Q③沢跡	剥片	2.7	2.0	0.6	2.7	頁岩 奥羽山脈			
39	B区20Q③沢跡	剥片	3.95	2.35	0.95	6.7	頁岩 奥羽山脈			
40	B区20Q③沢跡	剥片	4.7	3.85	1.45	14.4	リパライト奥羽山脈			
41	B区20Q③沢跡	剥片	4.65	2.7	1.0	4.9	リパライト奥羽山脈			
42	B区20Q③沢跡	剥片	4.7	3.0	0.9	8.4	リパライト奥羽山脈			
43	B区20Q③沢跡	剥片	3.1	1.7	0.7	2.5	頁岩 奥羽山脈			
44	B区21Q③	剥片	7.0	5.0	1.4	53.7	頁岩 奥羽山脈			
45	B区21Q③	剥片	2.95	2.1	0.75	3.5	頁岩 奥羽山脈			
46	B区トレンチ18R②	剥片	3.8	3.2	0.7	9.1	頁岩 奥羽山脈			
47	B区19R③沢跡	剥片	3.3	2.65	0.4	3.0	頁岩 奥羽山脈			
48	B区19R④沢跡	残核?	5.0	4.45	1.45	27.6	頁岩 奥羽山脈			
49	B区20R①沢跡	剥片	2.85	3.1	1.1	6.3	頁岩 奥羽山脈			
50	B区20R①沢跡	剥片	3.9	2.5	0.8	5.7	頁岩 奥羽山脈			

写真図版31 石器(3)



No	出土地点・層位	器種	最大計測値(cm)			重量(g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
51	B区20R①沢跡	剥片??	5.45	4.7	2.15	38.6	リパイト奥羽山脈		ただの石?・図なし	
52	B区20R①沢跡	剥片??	8.95	5.0	1.8	46.1	砂岩 奥羽山脈		ただの石?・図なし	
53	B区20R①沢跡	残核?	5.3	4.7	1.65	30.3	頁岩 奥羽山脈		ただの石?・図なし	
54	B区20R①沢跡	残核?	2.55	3.9	0.9	5.7	頁岩 奥羽山脈		ただの石?・図なし	
55	B区21R④	ただの石?	1.65	1.85	1.7	2.6	緑色頁岩 奥羽山脈		図なし	
56	B区22R④	残核?	3.6	2.1	1.2	8.7	頁岩 奥羽山脈		図なし	
57	B区22R④	剥片	3.9	2.95	0.7	7.3	頁岩 奥羽山脈		図なし	
58	B区23R③	残核?	2.45	2.4	0.85	4.8	頁岩 奥羽山脈		ただの石?・図なし	
59	A区17S④付近	剥片	1.95	1.9	0.35	1.1	頁岩 奥羽山脈		図なし	
60	B区17S④	剥片	4.85	3.2	0.5	9.3	頁岩 奥羽山脈		図あり・63、66と接合	
61	B区17S④	残核?	3.3	3.05	1.05	5.7	頁岩		図なし	
62	B区17S④	剥片	3.3	2.0	0.9	3.9	頁岩		図なし・60、66と接合	
63	B区17S④	剥片	2.9	3.05	0.65	5.5	頁岩		図あり	
64	B区17S④	剥片	4.6	5.3	1.5	27.5	頁岩		図なし	
65	B区17S④	残核	3.9	3.75	1.7	23.4	頁岩		図なし	
66	B区17S④	残核	5.5	4.7	2.7	75.3	頁岩		図あり・60、63と接合	

写真図版32 石器(4)



No	出土地点・層位	器種	最大計測値 (cm)			重量 (g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
67	B区T①あたり廃土	剥片	3.7	5.15	0.65	12.9	頁岩		図なし	
68	B区25X②	剥片	4.15	5.35	0.65	16.1	頁岩		図なし	
69	B区25W④重機攪乱	剥片	3.2	3.9	0.6	6.7	頁岩		図なし	
70	B区25W④重機攪乱	剥片						欠損	図あり・70と接合(欠損したもの)	P121
71	B区26W③	剥片	7.35	5.5	0.95	34	頁岩		図あり・71と接合(欠損したもの)	P121
72	B区トレンチ19Q	石皿	16.3	14.4	4.35	1316.5	砂岩 奥羽山脈	破片	両側に凹み	
73	B区17S④重機攪乱後	砥石	6.45	7.3	6.9	359.7	砂岩 奥羽山脈	完形	鉄の刀物を砥いだもの(新しい)	
74	A区10L④	砥石	10.8	5.4	3.4	337.5	凝灰岩 奥羽山脈	破片	新しい	
75	B区21R②	砥石	8.0	5.7	2.1	148.5	泥岩 奥羽山脈	破片	新しい下の欠損部残っている(磨けにげ、スス)	
76	A区9K④	ただの石?	13.35	5.1	2.5	244.6	ホルンフェルス 北上産地		磨石?	

写真図版33 石器(5)



No	出土地点・層位	器種	最大計測値 (cm)			重量 (g)	石質	残存状況	備考	本文記載
			長さ	幅	厚さ					
77	A区10K④	磨石?	17.9	5.4	2.85	416.0	砂岩 北上山地		両側に面ができています	
78	A区11K③	打製石斧?・磨石	14.0	9.1	3.4	639.4	ホルンフェルス 北上山地		表面磨面→砥石痕 (新しい)	121
79	A区	磨石 (砥石?)	15.9	4.9	3.4	429.4	砂岩 奥羽山脈		表面にスス付着・新しい	
80	B区18T①重機攪乱後	磨石	9.4	8.15	5.35	531.1	砂岩 北上山脈			
81	B区20Q③沢跡	磨石 (砥石?)	18.25	3.95	3.0	353.0	砂岩 奥羽山脈		新しい	
82	B区東南トレンチ22V④	敲石?	9.75	4.2	3.2	182.0	リパライト 奥羽山脈		表面に敲打痕?	

写真図版34 石器(6)

V. ^{かみこまいた}上駒板遺跡

所在地 花巻市高松第32地割100ほか
委託者 日本道路公団東北支社 北上工事事務所
事業名 東北横断自動車道路建設
発掘調査期間 平成10年8月6日～10月1日
調査対象面積 6,640m²
発掘調査面積 6,640m²
遺跡番号・略号 ME27-2317・KKI-98
調査担当者 岩淵計・菊地榮壽・布谷義彦
協力機関 花巻市教育員会

1. 遺跡の立地

上駒板遺跡は花巻市高松第13地割100ほかに所在し、花巻市の市街地から西へ約5.7km、東北新幹線新花巻駅からは南東に約3.0kmの距離にある。遺跡から東へ約200m程で、東和町との境界になる。遺跡は北上川東岸、北上高地の西側辺縁部に当たる中起伏山地内の、標高約260mの高松山から続く、高松段丘と呼ばれる丘陵地にあり、北西方向に流れる小河川の高松川によって開析された、狭い沖積地に立地している。遺跡の標高は、高松山から続く丘陵地の部分が157m～136m、その下方の比較的傾斜の緩い部分が136m～127mで、東向きの斜面となる。現況は山林と、棚田状に広がる水田である。水田部分は昭和40年に大規模に造成されており、旧地形は大きく改変されていた。遺跡の東側を流れる高松川は、中起伏山地を源とし、約5km下流で幸田川と合流した後、中起伏山地の西端にある胡四王山の北側を流れ、北上川に注いでいる。

今回の調査で出土した遺物の主たる時期である、縄文時代晩期と平安時代の周辺の遺跡について簡略に述べると、山地内を大きく開析し、沖積地や河岸性の台地を形成しているのは、本遺跡から山地部分を挟んで、約2.8km南側を流れる、猿ヶ石川やその支流であり、その河谷部は、縄文時代の遺跡が比較的集中している地域となっている。中野D遺跡（高松遺跡）は東北新幹線建設関連の調査として岩手県教育委員会によって行われており、晩期後葉の捨て場と柱穴状ピット3基が検出されている。その他、該期の遺物が出土しているのは、同じ猿ヶ石川北岸の高松Ⅲ遺跡、明ヶ沢遺跡、中野B遺跡などである。また高松川沿いの、約4.5km下流の高松寺遺跡（本報告書「IV章 高松寺遺跡」で報告）から縄文時代晩期後葉の捨て場、平安時代の竪穴住居が確認されている。平安時代の遺跡では、前述の高松寺遺跡の他に、矢沢八幡遺跡、八ツ森遺跡、寺場遺跡、胡四王山館遺跡から該期の竪穴住居が検出され、経塚森遺跡では4基の塚が調査されている。さらに本遺跡の位置する高松山のほぼ頂上部分には、かつての高松寺があったとされる、高松山経塚遺跡がある。高松山経塚遺跡は花巻市教育委員会によって調査が行われ、平安時代の作とする常滑壺、竪穴住居が確認されており、古代仏教寺院跡と推定している。このように高松山から胡四王山に至る山地一帯は、古代仏教関連の施設の存在が注目される。さらに東和町内では、東和町教育委員会の詳細遺跡分布調査によると、本遺跡と同じ段丘上の猿ヶ石川の北岸は、遺跡が集中している地域になっている。縄文時代晩期後葉の遺物を確認している遺跡は、猿ヶ石川付近に9遺跡、平安時代の遺跡は多く、18遺跡を数える。ちなみに9～10世紀の作である毘沙門天立像が納められている成島毘沙門堂、熊野神社は本遺跡と同じ段丘面にあり、南に約2kmに位置する。これらの遺跡は「II章 周辺の遺跡」で述べているので、参照されたい。

2. 遺跡の基本土層

I層 暗褐色シルト (10YR3/4) 現在の表土及び耕作土。草木根を含む。層厚 10～15cm

II層 暗褐色シルト (10YR3/4) と黄褐色粘土質シルト (10YR5/6) との混合土。水田造成時の盛土。

層厚10～20cm

III層 黒褐色シルト (10YR2/2)

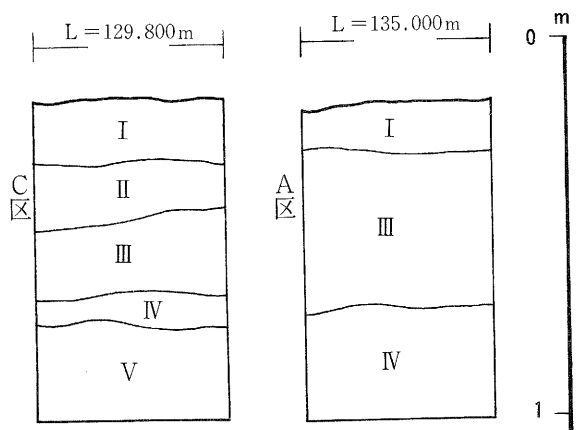
遺物を包含する。層厚12cm～55cm

IV層 黒色シルト (10YR2/1)

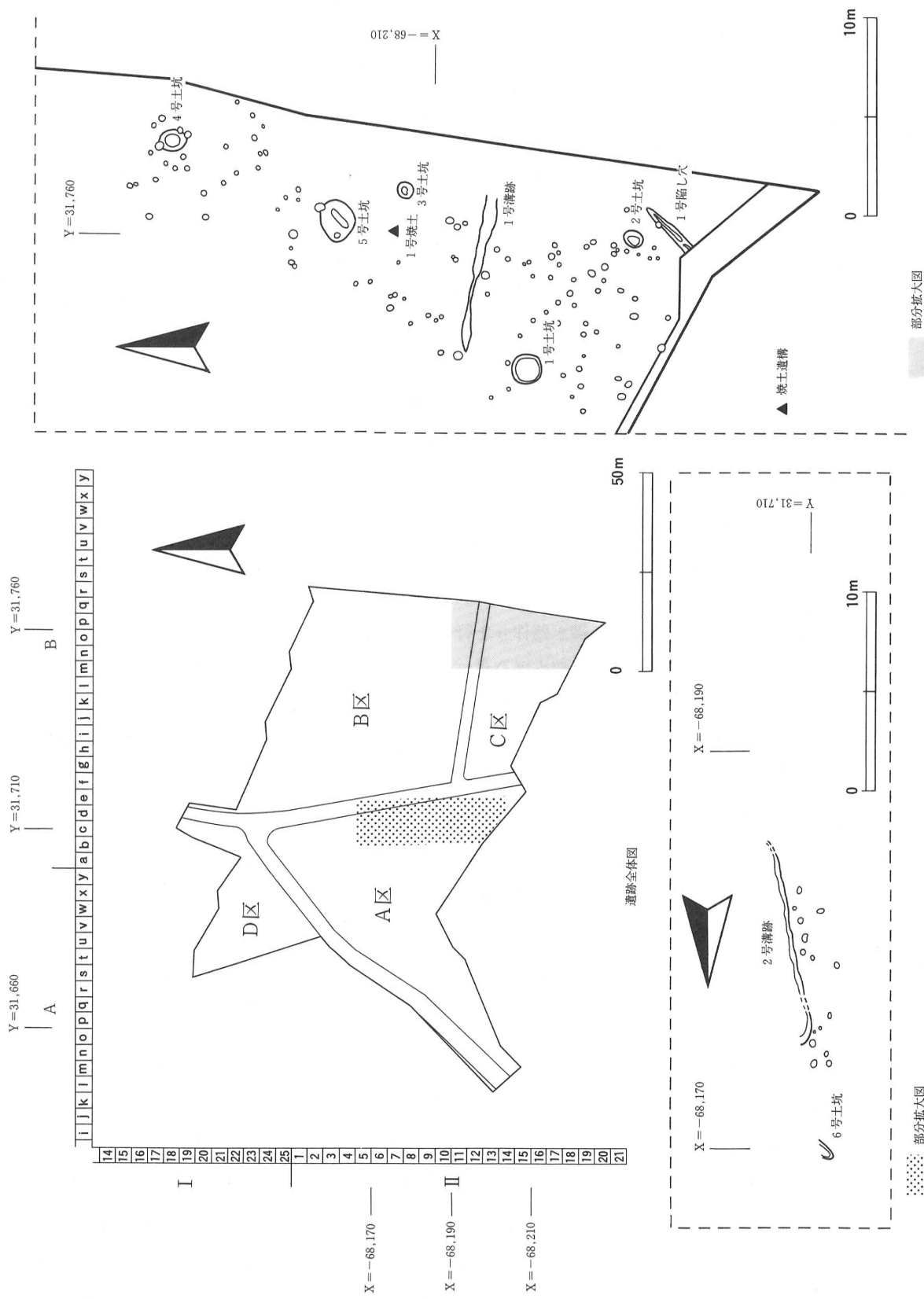
遺物を包含する。粘性ややあり V層の黄褐色粘土質シルトが10%混じる。層厚15～30cm

V層 黄褐色粘土質シルト (10YR5/6)

地山 遺構検出面 粘性ややあり



第1図 基本土層柱状図



第3図 遺構配置図

3. 調査と整理の方法

(1) 野外調査

① 調査区の設定

上駒板遺跡の調査区域は東北横断自動車道の橋脚と自動車道の付属施設にあたり、最も長い部分で南北方向に約90m、東西方向に約130mの長さになる。調査区の割付については、調査区の西側に広がる山林部分も次年度以降に調査の可能性があったために、平面直角座標（X系）に合わせ、100m×100mの大グリッドを設定した。大グリッドは南北方向は北からⅠ、Ⅱとローマ数字を、東西方向では西からA、Bとアルファベットの大文字を付し、その組み合わせでⅠA、ⅠBなどと呼称した。その際の基点としたⅡBの西北端の平面直角座標は、 $X = -68,150$ 、 $Y = +31,700$ である。大グリッドはさらに4m×4mの小グリッドによって25区画に細分した。小グリッドの呼称は南北方向は北から1、2、3…とアラビア数字を、東西方向では西からa、b、c…とアルファベットの小文字を用い、1a、1bなどとした。個々のグリッドは、大グリッドと小グリッドの組み合わせによってⅠA1aなどと表示した。

また調査区は棚田状に造成され、大きく分けると4段の平場から成っていた。それぞれの平場は1～2mの高低差があり、さらに調査区の中央付近は生活用道路が南北方向に、西部では南西方向に通っていた。そこで調査の便宜上、高低差と道路によって、調査区の南西部分をA区、北東部分をB区、南東部分をC区、北西部分をD区として調査を行った。

② 粗掘と遺構検出

調査は、現況が水田（休耕田）で梅雨の時期でもあり、水はけが悪く、試掘トレンチを入れられる状態ではなかったため、刈り払い作業の後に、排水路作りを行った。その後に、県教委文化課が実施した試掘トレンチの確認とクリーニングを行い、さらに調査区全体に試掘トレンチを10本設定し、土層の堆積状況や遺構の有無、遺物の出土状況を観察した。その結果、基本土層のⅠ層が表土および現在の水田、Ⅱ層が水田造成時の盛土であること、遺物を包含するⅢ層あるいはⅣ層が堆積しているのは、C区の東側半分とA区の西部のみで、その他の部分は造成時にかなり削平されていることを確認した。削平が激しい区域の表土直下の層は、A区の東部は山地からの砂が広く堆積しており、B区とC区の西半分はⅤ層であった。そこで粗掘は重機により、Ⅱ層まで掘り下げることとし、遺物が比較的まとまって出土したA区の西部のみ、人力で行うことにした。A区の東半分は、試掘トレンチで遺構らしきプランを検出した約2分の1の部分掘り下げた。結局は遺構とはならなかったが、遺物が少量出土し、取り上げ後のだめ押しの検出作業中に、A区の東側辺縁部にはⅣ、Ⅴ層が残存していることがわかり、Ⅴ層まで掘り下げ、遺構を検出した。西部はⅢ、Ⅳ層から遺物が出土したが、Ⅴ層まで掘り下げても遺構は検出されなかった。B区は最も低い、遺跡の東端にあたる平場部分の表土を除去した時点で、Ⅴ層も大きく削平されており、遺構、遺物とも検出できなかった。その他の平場部分も同じ状況であることを予想したが、念のために削平を免れている可能性がある平場部分の辺縁付近を南北方向に約4mの幅で、それと直交するように東西方向に3カ所を約2mの幅で表土を除去し、遺構、遺物とも無いことを確認した。C区では東側半分でⅢ層からⅣ層にかけての層から、遺物を確認したが、遺構は検出できなかったため、人力でⅣ層下面からⅤ層まで掘り下げ、遺構を検出した。西側半分はⅤ層まで削平されており、遺構、遺物は確認できなかった。なおD区は山林部分からの出水により湿地になっており、排水路の確保を試みたが十分でなく、人出にしろ、重機にしろ、作業の継続に危険が伴うため、調査不能と判断した。

③ 遺構名の付け方

検出された遺構は、土坑にはRD、焼土遺構にはRF、溝跡にはRGを冠し、それぞれ検出した順番に、通し番号で呼称した。なお本報告書では、番号の付け直しと遺構の種類の変更のため、室内整理の段階で、遺構の名称を変更した。変更した内容は以下の通りである。RD01→第1号土坑、RD02→第2号土坑、RD03→第3号土坑、RD04→第4号土坑、RD05→第5号土坑、RD07→第6号土坑、RF01→第1号焼土遺構、RG01→第1号溝跡、RG02→第1号陥し穴状遺構、RG04→第2号溝跡である。

④ 精査・実測

検出された遺構の精査は、土坑、焼土遺構、柱穴状小土坑は2分法で行い、溝跡や陥し穴状遺構は任意の敷カ所にベルトを設定して行った。その後、土層断面と平面を写真撮影と実測で記録しながら精査を進めた。

実測は、平面直角座標に合わせた1mメッシュを基本とする、簡易遣り方測量で行った。実測図は平面図断面図ともに20分の1の縮尺を基本としたが、溝跡の断面図は10分の1で実測した。

⑤ 写真撮影

野外の写真撮影は、35mm版のモノクロームとカラーリバーサルを各1台と6×7版のモノクロームを使用した。また調査のメモ的な記録のために、ポラロイドカメラを使用した。撮影する際には撮影状況を記した撮影カードを写し、整理しやすいようにした。

(2) 室内整理

① 遺構図版の作成

野外調査で作成した実測図は、座標値やセクションポイントなどの点検・修正をし、必要に応じ合成した。その後にトレースを行い、遺構図版を作成した。縮尺については以下の通りである。

土坑、焼土遺構、陥し穴状遺構→40分の1

溝跡→50分の1（断面図は25分の1）

柱穴状小土坑群→100分の1

遺構図版の表現方法については、凡例図に記載している。

② 遺物の整理

遺物は土器が大コンテナで1箱、石器が小コンテナ1箱程出土した。遺物の水洗は原則的に野外調査時の雨天の場合に実施したが、一部は室内整理が始まってから行った。遺物の多くは磨滅が激しく、特に土器は水洗の際にも、表面が溶けてしまう程で、水洗には注意を要した。さらに二次堆積と思われる層からの出土がほとんどであったこともあり、土器は識別不能な小破片が多かった。そのために土器の註記は、ある程度種別がわかるものに限りに行った。また接合・復元に関しても、磨滅した小破片が多いため、復元できたものは非常に少なかった。その後遺物の選別、登録、実測、拓本、写真撮影、トレースを行い、遺物図版を作成した。

遺物の掲載については、遺構内の出土遺物は僅かなため、すべて掲載している。しかし土器は激しく磨滅している小破片だけなので、写真による掲載に留めている。遺構外から出土した土器は比較的残りが良く、文様等が判別できるもの、径がわかるものを掲載している。石器については、使用痕や加工痕があるものはすべて掲載している。遺物図版の縮尺については以下の通りである。土器実測図・拓影→3分の1、剥片石器類→3分の2、打製石斧・石製品→3分の1。遺物図版に使用したスクリーントーンについては凡例図に記載している。写真図版については、基本的には以下の通りであるが、一部不定なものもある。

土器、剥片石器類→2分の1 打製石斧、石製品→3分の1。

4. 検出された遺構

(1) 土坑

第1号土坑

〈位置・検出状況〉 II B17n、C区東部に位置している。V層上面で検出した。

〈形態・規模〉 形状はほぼ円形を呈し、規模は開口部の直径が145cm、底部の直径が128cm、深さが27cmである。上部は大きく削平されている。

〈埋土〉 上部は黒褐色シルト主体で、下部は黒褐色シルトとV層黄褐色粘土質シルトが混じり合っている埋土である。

〈壁・底面〉 壁は上部が削平されているため、詳細は不明だが、直線的に立ち上がると推定される。底面はV層中で、埋土との違いがはっきりしなかったために掘り過ぎてしまったが、凸凹状になっていると思われる。

〈遺物〉 1は縄文土器と思われる土器片であるが、摩滅が激しく詳細は不明である。2と3は剥片である。

〈時期〉 断言はできないが、縄文時代の可能性がある。

第2号土坑

〈位置・検出状況〉 II B18o、C区東部に位置している。V層上面で検出した。

〈形態・規模〉 形状はほぼ円形を呈し、規模は開口部の直径が84cm、底部の直径が57cm、深さが22cmである。上部は大きく削平されている。

〈埋土〉 黒褐色シルトを主体とした埋土だが、V層黄褐色粘土質シルトが混じる。

〈壁・底面〉 上部がかなり削平されているため、壁は不明な点が多い。底面は傾斜していると思われる。

〈遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 不明である。

第3号土坑

〈位置・検出状況〉 II B15p、C区東端の平場の辺縁部に位置している。平場の辺縁部は水田の畦を除去すると、V層が下方の平場に向けて斜めに削平されており、その傾斜面で検出した。

〈形態・規模〉 上部が西から東に向けて、大きく、斜めに削平されているため、形状ははっきりしないが、底部の形状から楕円形だと推定される。規模は開口部の残存している部分の最大の直径は82cmで、底部の直径は48cm×37cm、深さは82cmである。

〈埋土〉 黒褐色シルト主体の埋土だが、V層黄褐色粘土質シルトが混じる。埋土上部に炭化物が含まれる。

〈壁・底面〉 壁、床ともV層中である。削平されていた部分が大きく、はっきりしないが、底面は段状になっており、壁は外傾し直線的に立ち上がると推定される。

〈遺物〉 出土遺物はない。

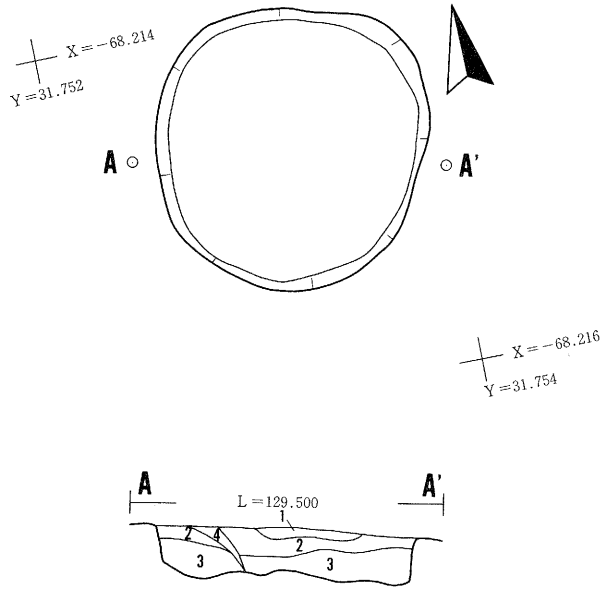
〈時期〉 不明である。

第4号土坑

〈位置・出土状況〉 II B12q、C区北東部に位置している。IV層下部で検出した。P P96とP P112の2つの柱穴状小土坑と重複しており、本土坑の方が古い。

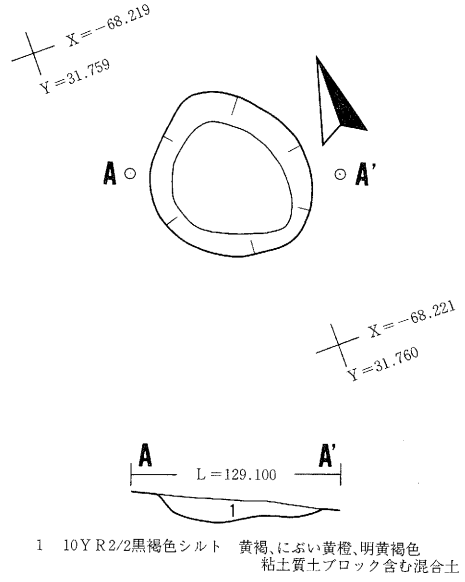
〈形態・規模〉 形状はほぼ楕円形である。規模は開口部の直径が132cm×107cm、底部の直径が74cm×59cm、深さが85cmである。

第1号土坑



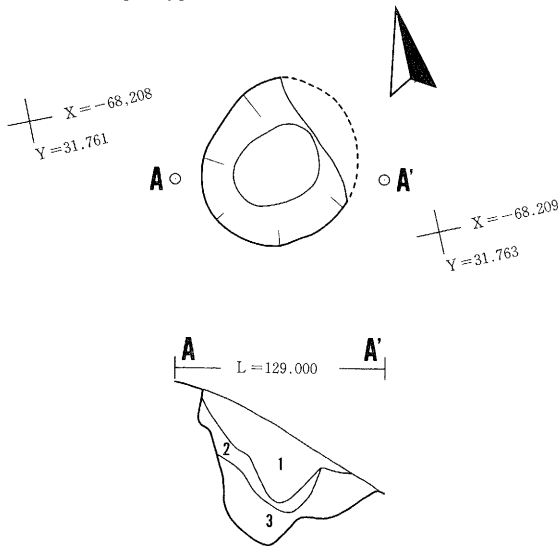
- 1 10Y R2/2黒褐色シルト
- 2 10Y R5/6黄褐色シルト 黒褐色土含む
- 3 10Y R5/6黄褐色シルト 黒褐色土少量含む
- 4 10Y R2/3黄褐色シルト 黄褐色粘土含む

第2号土坑



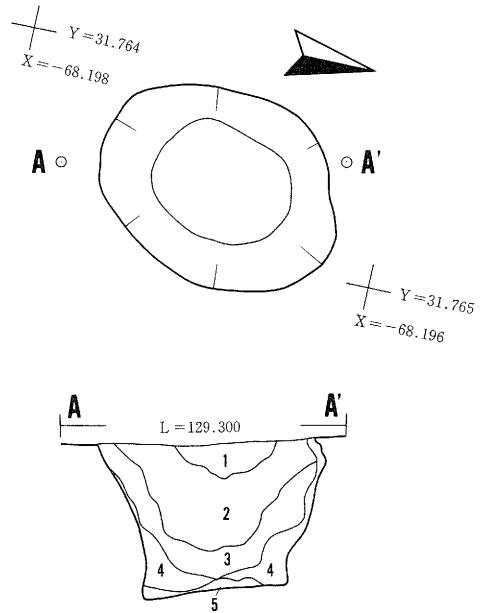
- 1 10Y R2/2黒褐色シルト 黄褐、にぶい黄橙、明黄褐色粘土質土ブロック含む混合物

第3号土坑

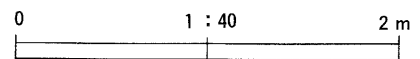


- 1 10Y R2/2黒褐色シルト 黄褐色土との混合物 炭化物少量含む
- 2 10Y R3/2黒褐色シルト 黄褐色粘土質土含む
- 3 10Y R5/6黄褐色粘土質シルト 褐、黒褐色土含む

第4号土坑



- 1 10Y R2/1黒色シルト
- 2 10Y R2/2黒褐色シルト 明黄褐色粘土質土粒含む
- 3 10Y R2/3黒褐色シルト 明黄褐色粘土質土ブロック含む
- 4 10Y R5/6黄褐色粘土質シルト 黒褐色土含む
- 5 10Y R2/3黒褐色シルト 黄褐色土ブロック含む



第4図 土坑(1)

〈埋土〉 黒褐色シルト主体の埋土である。下部ほどV層黄褐色粘土質シルトが多く混じる。壁の崩落土と考えられる埋土も見られる。

〈壁・底面〉 壁、底面ともにV層中で、壁は外傾し、底面は平坦である。

〈遺物〉 4は縄文土器片と思われる土器片であるが、摩滅が激しく詳細は不明である。5と7は剥片で、6は石核である。

〈時期〉 出土遺物が僅かで、土器片は摩滅しており、不明な点が多いが、本土坑を切るPP112から石鏃が出土しており、縄文時代の可能性が高い。

第5号土坑

〈位置・検出状況〉 II B14P、C区東部に位置する。PP73とPP74の二つの柱穴状小土坑と重複しており、本土坑の方が古い。V層上面で検出した。

〈形態・規模〉 形状は不整形な楕円形だが、掘りすぎてしまった傾向があり、底部の形状から判断すると、実際は隅丸方形を呈するであろう。規模は開口部の直径が182cm×173cm、底部が127cm×32cm、深さは73cmである。

〈埋土〉 上部は黒色土、下部は黒褐色土を主体とする。下部ほどV層黄褐色粘土質シルトが多く混じる。

〈壁・底面〉 壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。壁、床ともV層中である。

〈遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 不明である。

第6号土坑

〈位置・検出状況〉 IA6c、A区東端部に位置する。V層上面で検出した。

〈規模・形態〉 A区平場の東端に位置しているため、遺構の東側部分は調査できず、規模、形態とも不明である。

〈埋土〉 黒褐色土を主体とした単層である。

〈壁・床〉 壁、床ともV層中である。壁は外傾し、床はほぼ平坦である。

〈遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 不明である。

(2) 焼土遺構

第1号焼土遺構

〈位置・検出状況〉 II B15P、C区東部に位置し、V層上面で検出した。

〈形状・規模〉 形状は不整形な楕円形で、74cm×56cm程の範囲に分布する。厚さは13cmである。現地性であるが、焼成は良くない。

〈遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 不明である。

(3) 溝跡

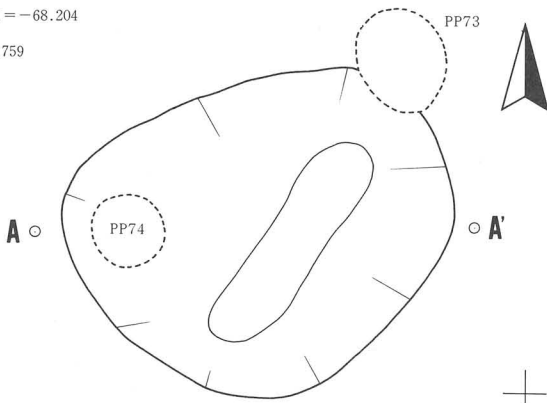
第1号溝跡

〈位置・検出状況〉 II B16n～16pにかけて、C区東部に位置する。IV層下部で検出した。

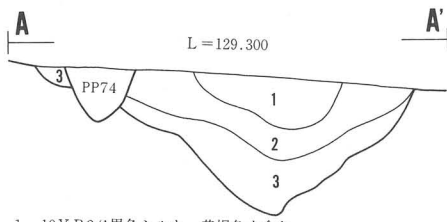
〈形状・規模・方向〉 規模は上端幅が最大で72cm、下端幅が13cm～35cm、深さが6cm～18cm、全長約8mにわたって検出した。断面形は緩やかな逆U字状を呈する。方向は東西方向に延びる。両端の高低差は約20cmである。

第5号土坑

X = -68.204
Y = 31.759



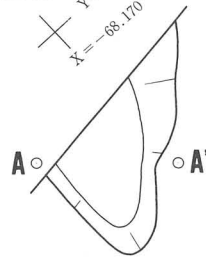
X = -68.206
Y = 31.762



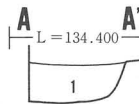
- 1 10Y R2/1黒色シルト 黄褐色土含む
- 2 10Y R2/2黒褐色シルト 黒色土との混合土 黄褐色土粒含む
- 3 10Y R2/1黒褐色シルト 黒褐色土との混合土 黄褐色土ブロック含む

第6号土坑

X = -68.170
Y = 31.710



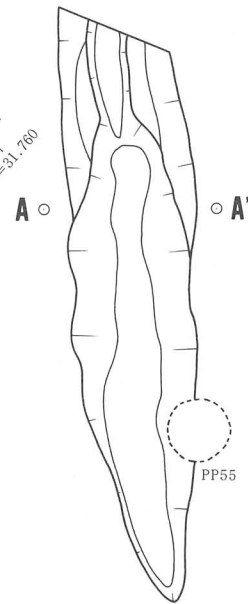
X = -68.170
Y = 31.708



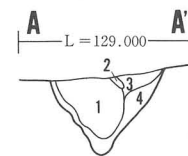
- 1 10Y R2/2黒褐色シルト 黄褐色土含む混合土

第1号陥し穴状遺構

X = -68.223
Y = 31.760



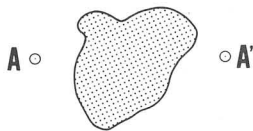
X = -68.221
Y = 31.760



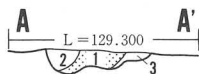
- 1 10Y R1.7/1黒色シルト 黄褐色土粒含む
- 2 10Y R2/1黒色シルト 黄褐色土粒含む
- 3 10Y R2/1黒色シルト 黄褐色土粒含む
- 4 10Y R2/3黒褐色シルト 黄褐、黒色土との混合土

第1号焼土遺構

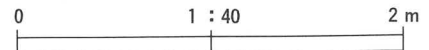
X = -68.207
Y = 31.760



X = -68.209
Y = 31.760

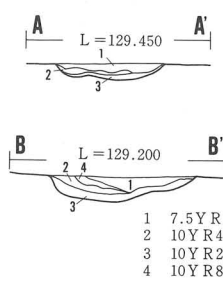
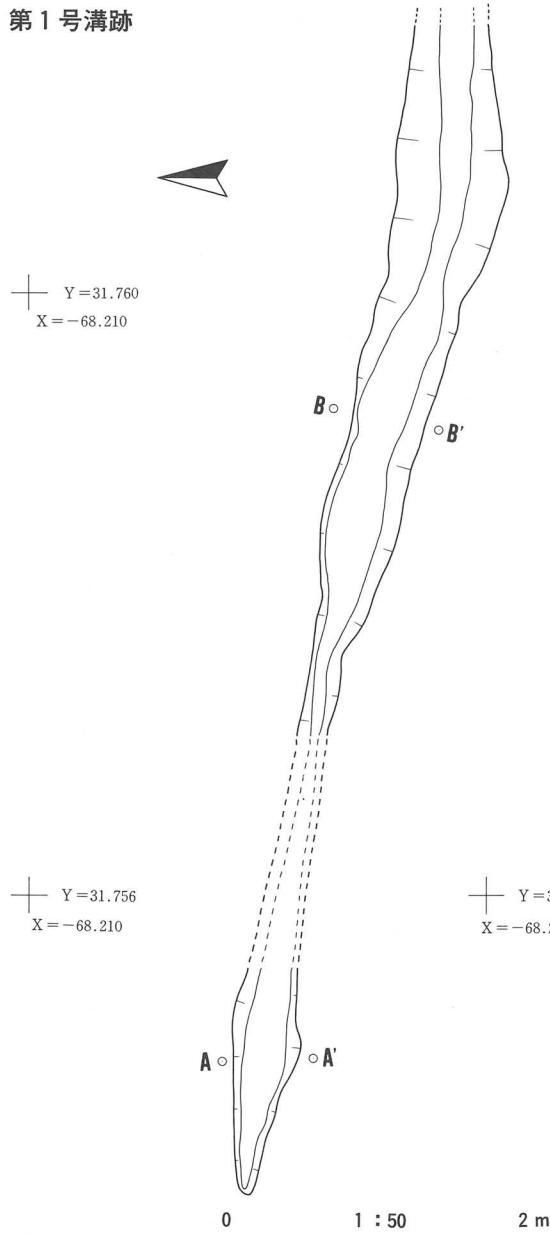


- 1 5Y R5/6明赤褐色シルト 黒褐色土ブロック含む
- 2 10Y R3/2黒褐色シルト 焼土粒、炭化物含む
- 3 10Y R5/6黒褐色シルト 焼土粒少量含む

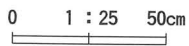


第5図 土坑(2)・焼土遺構・陥し穴状遺構

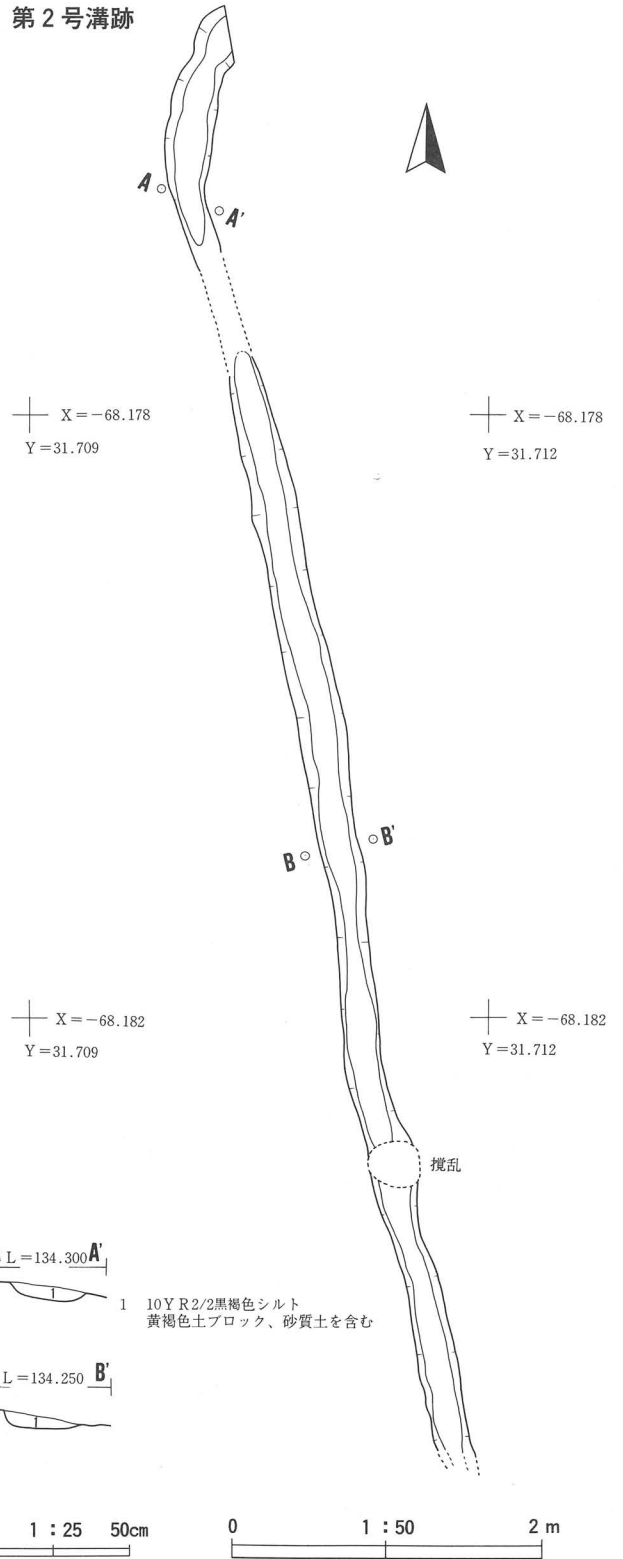
第1号溝跡



- 1 7.5Y R3/2黒褐色シルト
- 2 10Y R4/4褐色砂質シルト
- 3 10Y R2/3黒褐色シルト 黄褐色土ブロック含む
- 4 10Y R8/2灰白色砂質シルト



第2号溝跡



- 1 10Y R2/2黒褐色シルト 黄褐色土ブロック、砂質土を含む

第6図 溝跡

〈埋土〉 黒褐色土を主体とするが、上部と下部に砂質土が混じる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 雨水等の流路の可能性もあり、時期は不明である。

第2号溝跡

〈位置・検出状況〉 II B 7 c～10 cにかけて、A区東部に位置する。V層で検出した。

〈形状・規模・方向〉 規模は上端部が18cm～32cm、下端部が8cm～22cm、深さが8cm、全長約10mにわたって検出した。断面形は逆台形状を呈している。方向は北北西-南南東に走り、7cグリッドで北北東の方向に曲がり、削平されたA区の平場外へ延びる。両端の高低差は約17cmである。

〈埋土〉 砂質が混じる黒褐色土の単層である。

〈出土遺物〉 土師器の小破片である、8が出土した。内面が黒色処理されている。

〈時期〉 出土遺物が僅かなため不明である。雨水等の流路の可能性もある。

(4) 陥し穴状遺構

第1号陥し穴状遺構

〈位置・検出状況〉 II B 18 pから19 oにかけて、C区南東部に位置している。V層上面で検出した。

〈形状・規模〉 形状は溝状を呈し、規模は南側の先端部が調査区外に延びているため長軸は不明であるが、短軸が56cm、深さが42cmである。

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がり、断面形がV字状になる。

〈埋土〉 黒色シルト主体の埋土である。3、4層は自然堆積だが、1、2層は人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉 出土遺物はない。

〈時期〉 形状から縄文時代の遺構である可能性が高い。

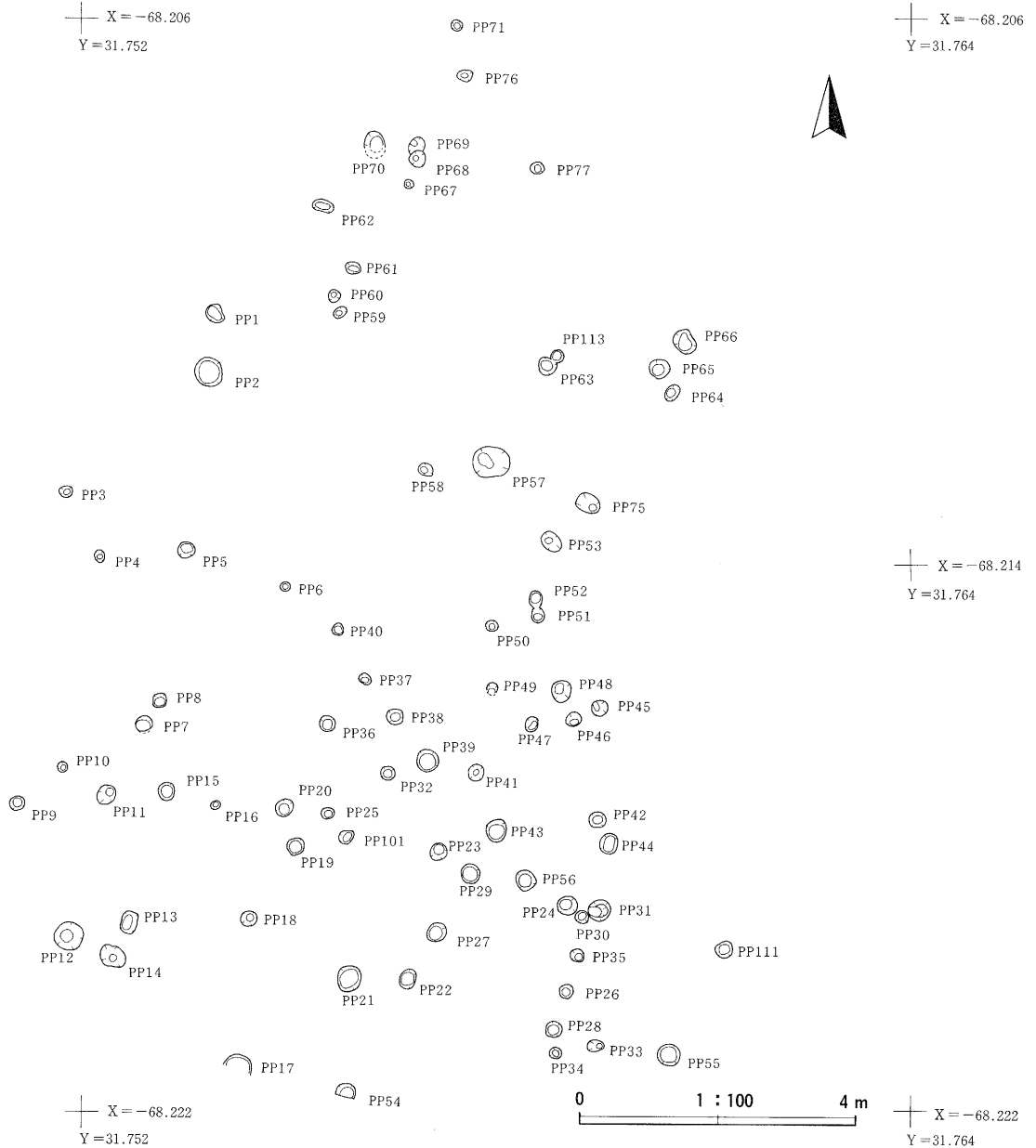
(5) 柱穴状小土坑

128基の柱穴状小土坑を確認した。検出した範囲はA区東部とC区東部で、他の遺構が分布している範囲と一致する。配列が直線的に並ぶ柱穴もいくつか見られるが、掘立柱建物跡とするには柱穴を欠き、柱穴間の

第1表 柱穴状小土坑観察表

P No.	径cm	深さcm	備考	P No.	径cm	深さcm	備考	P No.	径cm	深さcm	備考
1	29×24	29		27	31×25	41		53	32×25	14	
2	42×37	17		28	24×21	21		54	40×28	47	
3	18×15	13		29	28×27	22		55	34×32	43	
4	18×14	16		30	20×18	32		56	31×30	13	
5	25×24	11		31	32×30	19		57	55×48	28	
6	15×14	17		32	22×20	32		58	23×18	34	
7	24×22	22		33	23×17	19		59	19×16	38	
8	20×19	6		34	16×16	16		60	17×16	18	
9	23×20	8		35	20×19	11		61	23×18	15	
10	15×15	4		36	24×22	16		62	30×16	34	
11	27×26	16		37	18×15	11		63	26×25	9	
12	43×40	17		38	23×20	21		64	24×18	8	
13	35×23	11		39	32×31	17		65	30×27	14	
14	41×32	11		40	18×16	9		66	39×30	13	
15	37×24	11		41	24×22	23		67	15×14	17	
16	12×12	9		42	24×23	15		68	27×23	21	
17	40×40	13		43	34×30	34		69	25×24	25	
18	24×22	17		44	32×24	15		70	40×31	13	
19	26×24	17		45	24×24	25		71	16×15	8	
20	26×24	26		46	22×20	17		72	56×42	40	柱痕跡
21	38×32	18		47	21×17	14		73	57×47	17	
22	30×24	20		48	32×27	20		74	38×32	28	
23	25×24	37		49	16×15	23		75	36×25	32	
24	29×27	44		50	17×17	31		76	20×16	9	
25	17×16	12		51	22×19	16		77	18×17	15	
26	20×19	38		52	24×19	16		78	28×23	23	

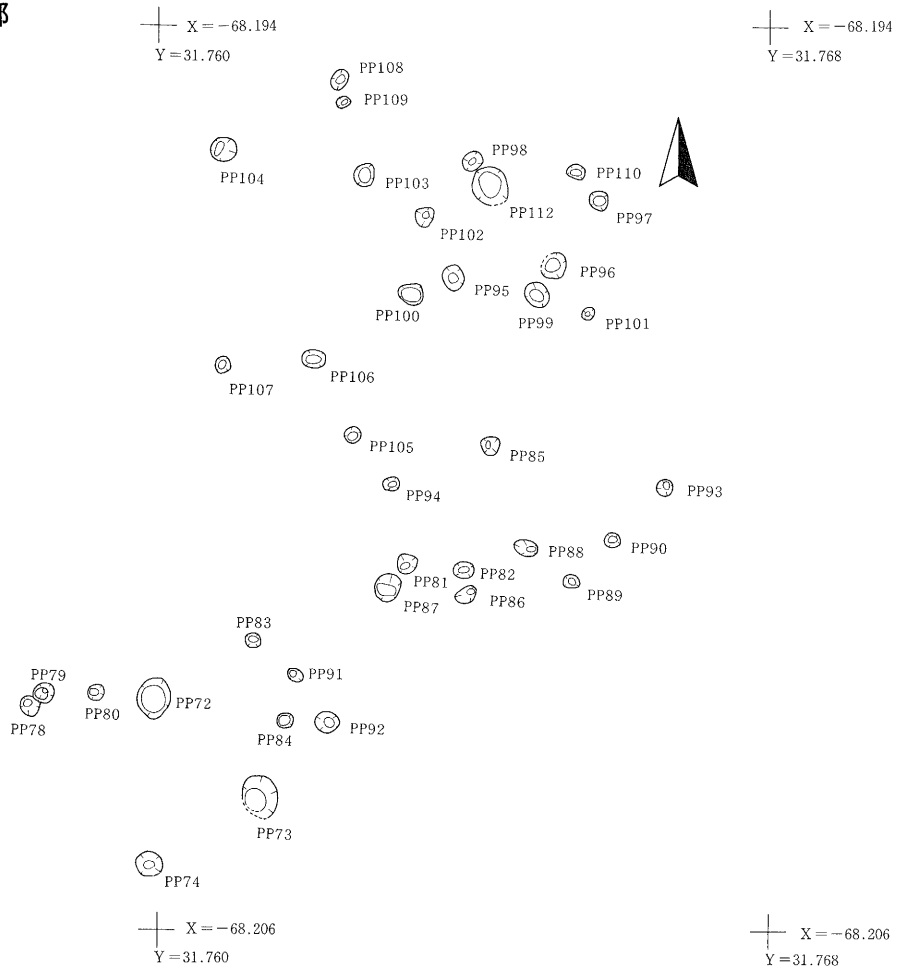
C区南東部



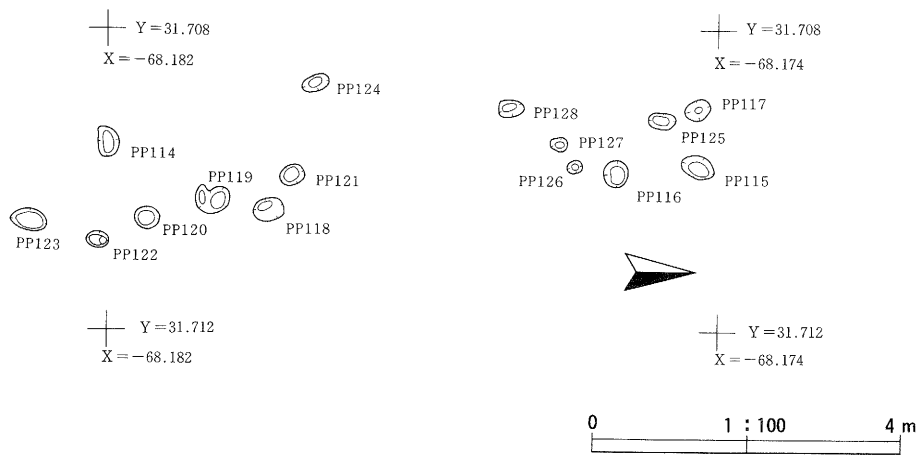
P No.	径cm	深さcm	備考	P No.	径cm	深さcm	備考	P No.	径cm	深さcm	備考
79	30×29	16		96	34×32	10		113	19×17	27	
80	22×22	40		97	26×26	36		114	39×29	19	
81	29×25	17		98	30×25	26		115	44×32	8	
82	29×23	29		99	36×31	25		116	33×33	6	
83	21×20	33		100	34×29	27		117	34×28	19	
84	22×20	17		101	24×18	12		118	43×32	14	
85	25×24	32		102	30×24	10		119	45×41	13	
86	30×20	16		103	30×26	7		120	33×30	8	
87	40×35	12		104	35×34	14		121	33×28	10	
88	31×23	11		105	23×21	33		122	31×24	14	
89	22×19	10		106	33×26	14		123	49×32	7	
90	20×20	15		107	22×20	16		124	35×23	?	
91	23×17	18		108	29×21	59		125	35×23	14	
92	31×29	13		109	21×16	31		126	18×17	7	
93	23×20	13		110	25×20	13		127	24×18	7	
94	22×18	27		111	27×24	27		128	33×25	20	
95	33×28	44		112	54×47	11					

第7図 柱穴状小土坑群(1)

C区北东部



A区南部



第8图 柱穴状小土坑群(2)

距離も狭い。形状は円形のを基調とするが、不整となるものも多い。埋土は黒褐色を主体とするが、下部に黄褐色粘土質土が混じる。検出面はⅣ層下部からⅤ層である。出土遺物はP P 26から9の剥片、P P 85からは縄文土器と思われる10の土器片と11と12の剥片が2片、P P 99からは縄文土器と思われる13の土器片、P P 112からは14の磨滅した縄文土器と思われる土器片と、15の石鏃が出土している。それぞれの柱穴状小土坑の計測値は、第1表に掲載している。

5 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は縄文土器片、土師器片、須恵器片が大コンテナで1箱、石器、石製品が小コンテナで1箱程であり、多くが遺構外からの出土である。遺物は、遺構を検出したD区東部から全体的に出土している。また土器は、二次堆積と思われるが、A区の北西部に残存していたⅢ、Ⅳ層に相当する黒色土及び黒褐色土の層から、ある程度まとまって出土した。土器片は小破片が多く、磨滅が激しいため、接合し難いものが非常に多かった。そこで掲載にあたっては、判別できるものを掲載している。

(1) 縄文土器

縄文時代晩期の土器が出土している。16は鉢の口縁部で山が8つの波状口縁を持ち、A突起を有する。その下には、平行沈線文が2本入る。17は壺の口縁部で沈線文が施文されている。2個1対の粘土瘤、口縁部まで垂直に立ち上がる。18は鉢の頸部から胴部で、頸部は無文帯となり、胴部は張り出した器形となる。19は皿の底部である。20は二山状の突起を有し、変形工字文が施文される。21と22は同一個体と思われるが、鉢の口縁部で、B突起を有する。変形工字文が施文され、突起に向かい内外面に溝状の沈線文が施される。口唇部にも沈線文が付され、口縁部の裏側に溝状の沈線文が施される。24は壺の口縁部で、2本の平行沈線文が巡り、やや外反する。25も壺の口縁部で沈線文が施文され、真っ直ぐに立ち上がる。これらの土器は、18が大洞C 2式の可能性があるが、それ以外は大洞A式に属すると考えられる。

(2) 土師器

磨滅が激しいため、すべての破片を判別することは難しいが、ほとんどがロクロ形成だと思われる。28、30、31、32は坏の口縁部だが、内面が黒色処理されている。34、35、36、37は坏の底部であるが、切り離し技法は回転糸切りである。時期は9世紀後半から10世紀初頭であると考えられる。

(3) 須恵器

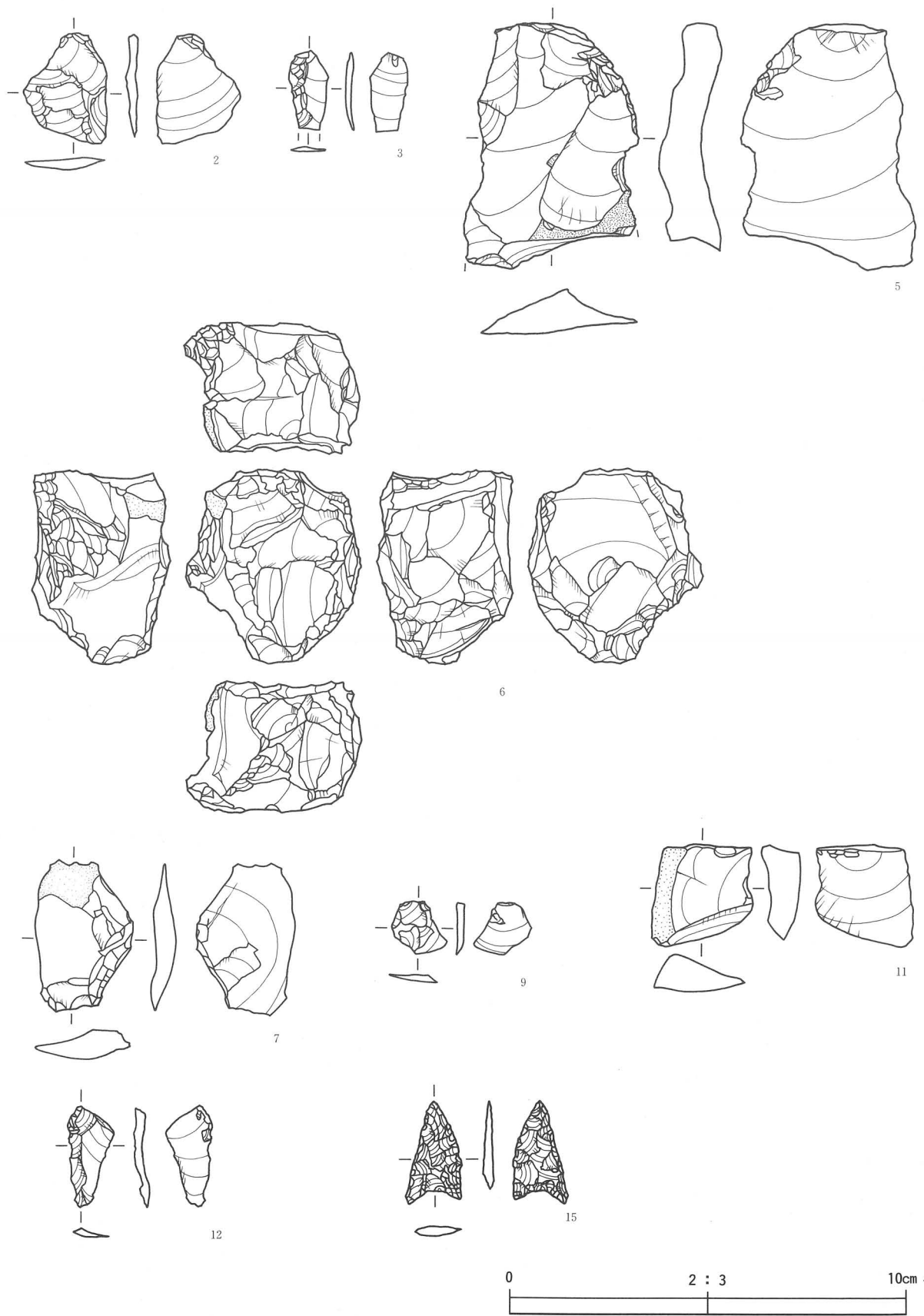
土師器に比べると破片の数は非常に少ない。38、39は内外面ともタタキ目痕が見られるが、焼きにむらがあり、酸化炎焼成的な部分が見られる。40は外面がヨコナデによる調整である。

(4) 石器

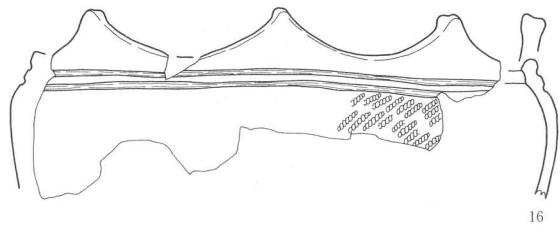
遺構外からは10点出土した。内訳は剥片石器類では削搔器が4点、礫石器類では打製石斧が6点である。石器はすべて、遺構を検出したD区東部からの出土である。41、42、43、44は削搔器で、41は3辺縁に、それ以外は1辺縁に刃部を持つ。45～50は打製石斧である。45は両面ともに細部調整されている。46は刃部が欠損しており、未製品の可能性もある。47は片面の周縁を加工している。48も片面の加工と思われるが、磨滅が激しい。49は撥形で、刃部は両面加工されている。50は49と同じタイプだが、小型のものである。

(5) 石製品

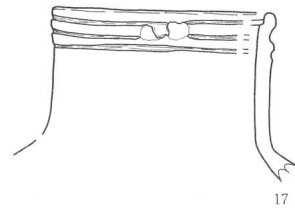
51、52はともに石冠状の石製品と思われる。底部はほぼ長方形で、側面は三角形である。正面部分には加工痕があり、平坦な面が作られている。用途は不明だが、磨石として使われた可能性も残る。



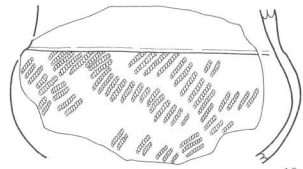
第9図 出土遺物(1)遺構内



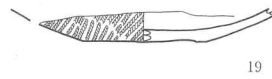
16



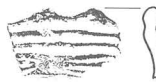
17



18



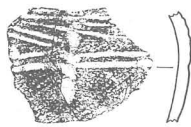
19



20

21

22



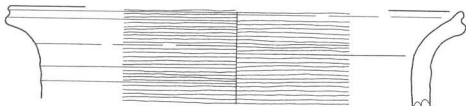
23



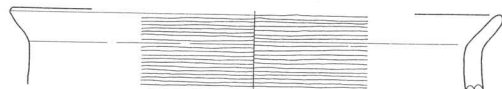
24



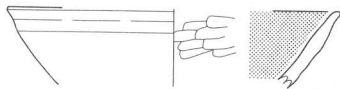
25



26



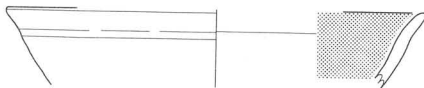
27



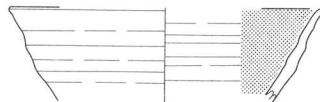
28



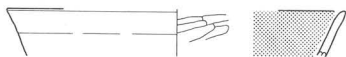
29



30



31



32



33

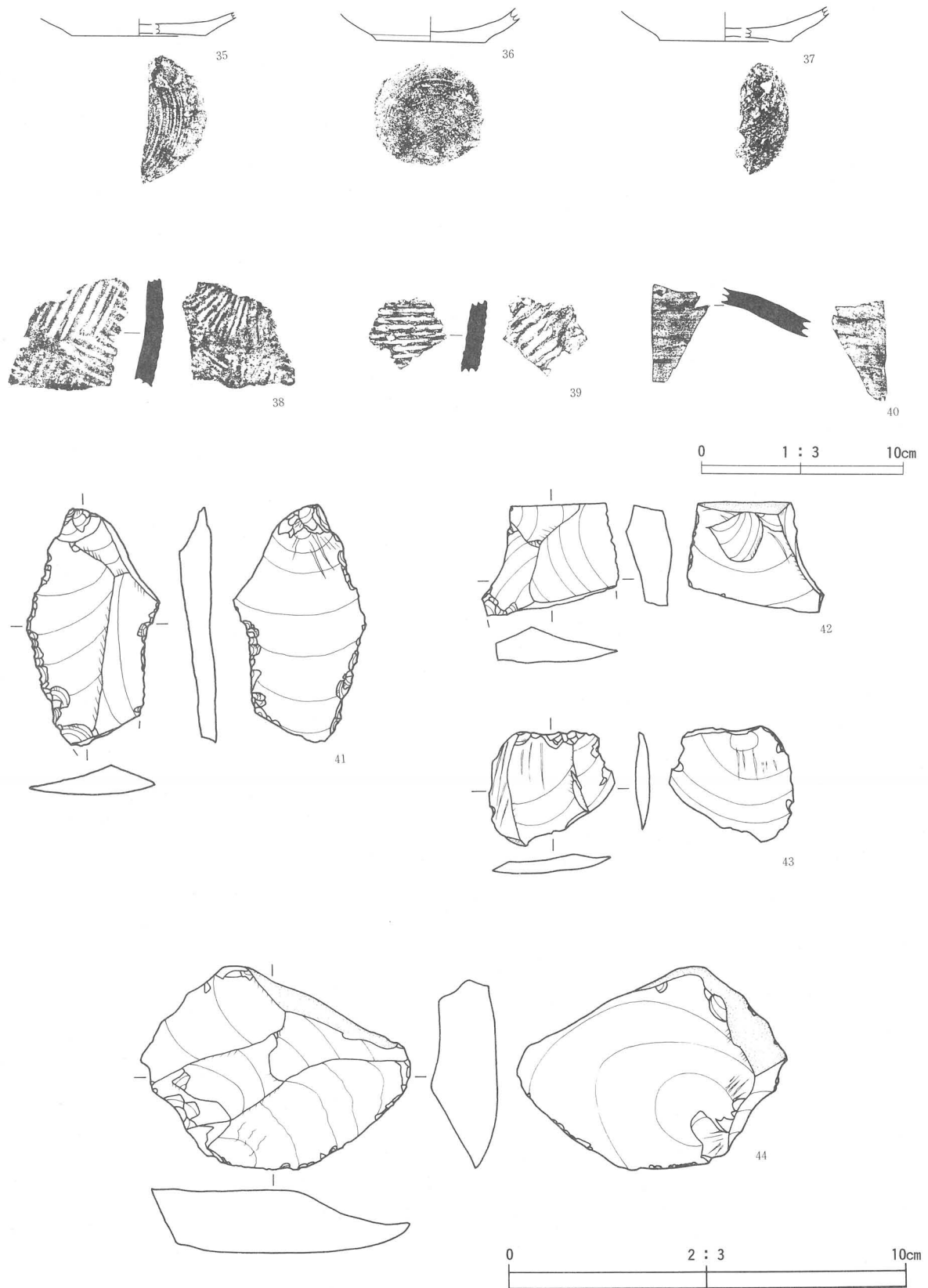


34



第10図 出土遺物(2)遺構外 土器

0 1 : 3 10cm



第11図 出土遺物(3)遺構外 土器・石器



第12図 出土遺物(4)遺構外 石器・石製品

第2表 土器観察表 縄文土器

番号	出土地点・層位	部種・部位	文様の特徴など	分類	図版	図説
1	1号土坑埋土	深鉢? 胴部	摩滅			7
4	4号土坑埋土	深鉢? 胴部	摩滅			7
10	PP85埋土	深鉢? 胴部	無文			7
13	PP99埋土	深鉢? 胴部	無文			7
14	PP112埋土	深鉢? 胴部	摩滅			7
16	II B9~10s・III	鉢 口縁部	波状口縁 A突起 沈線文 RL縄文 内面:ナデ? 沈線文	大洞A	10	7
17	II B9~10s・IV	壺 口縁部	変形工字文 2個一対の粘土瘤 内面:ミガキ	大洞A	10	7
18	II B140・III	鉢 頸~胴部	頸部:無文帯 胴部:LR縄文	大洞A	10	7
19	II B150・風倒木	皿 底部	LR縄文	大洞A	10	7
20	II B150・風倒木	鉢 口縁部	二山状突起 変形工字文 内面:ミガキ	大洞A	10	7
21	II B150・IV	鉢 口縁部	B突起 工字文 沈線文 内面:沈線文 ナデ	大洞A	10	7
22	II B140・IV	鉢 口縁部	B突起 工字文 沈線文 内面:沈線文 ナデ	大洞C2?	10	7
23	II B140・IV	鉢 胴部	沈線文 LR縄文 内面:ミガキ	大洞A	10	7
24	II B130・IV	壺 口縁部	沈線文 内面:ミガキ	大洞A	10	7
25	II B110・IV	壺 口縁部	沈線文 粘土瘤 内面:ミガキ	大洞A	10	7

第3表 土器観察表 土師器・須恵器

番号	出土地点・層位	種類	器種	部位	口径	底径	器高	調整	備考
8	2号溝跡埋土	土師器	坏?	胴部				内面:黒色処理	小破片
26	II A111t・IV	土師器	甕	口縁部	(17.7)		(3.8)	ヨコナデ	
27	II A111s・III	土師器	甕	口縁部	(19.1)		(2.1)	ヨコナデ	
28	II A111s・III	土師器	坏	口縁部	(13.0)		(3.1)	ヘラミガキ 内面:黒色処理	
29	II A10s・III	土師器	坏	口縁部	(13.4)		(2.7)		
30	II A10s・III	土師器	坏	口縁部	(14.3)		(3.1)	内面:黒色処理	
31	II A111t・IV	土師器	坏	口縁部	(12.2)		(3.8)	内面:黒色処理	
32	II A10s・III	土師器	坏	口縁部	(13.2)		(1.9)	ヘラミガキ 内面:黒色処理	
33	II A9r・I	土師器	坏	底部		(5.8)	(1.8)		
34	II A111t・III	土師器	坏?	底部		(3.6)	(0.9)		回転糸切り
35	II A111t・IV	土師器	坏	底部		(3.8)	(0.9)		回転糸切り
36	II A10t・I	土師器	坏	底部		5.5	(1.3)	内面:黒色処理	回転糸切り
37	II A10t・I	土師器	台付坏	底部		(6.7)	(1.5)		回転糸切り
38	II A111t・IV	須恵器	甕	胴部			(5.5)	タタキ目	焼成不完全
39	II A10s・III	須恵器	甕	胴部			(3.5)	タタキ目	焼成不完全
40	II A10s・III	須恵器	壺?	胴部				外面:ヨコナデ	

第4表 石器観察表

番号	器種	出土地点・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地
2	剥片	1号土坑北半埋土	2.9	2.1	0.3	1.4	頁岩	奥羽山脈
3	剥片	1号土坑北半埋土	2.1	1	0.2	0.4	頁岩	奥羽山脈
5	剥片	4号土坑埋土	5.4	4.5	1.6	34.9	砂岩	北上山地
6	石核	4号土坑埋土	5.0	4.4	3.5	89.0	玉ずい	奥羽山脈
7	剥片	4号土坑埋土	3.9	2.5	6	5.9	砂岩	北上山地
9	剥片	PP26埋土	1.4	1.4	0.2	0.3	頁岩	奥羽山脈
11	剥片	PP85埋土	2.6	2.5	1	7.2	頁岩	奥羽山脈
12	剥片	PP85埋土	2.6	1.2	0.4	0.6	頁岩	奥羽山脈
15	石鏃	PP112埋土	2.7	1.4	0.3	0.9	頁岩	奥羽山脈
41	削搔器	II B150~P・IV	5.2	3.4	0.9	13.5	頁岩	奥羽山脈
42	削搔器	II B140・IV	2.9	3.5	1.2	10.8	頁岩	奥羽山脈
43	削搔器	II B150東・III	2.9	3.2	3.5	4.2	頁岩	奥羽山脈
44	削搔器	II B150東・III	6.9	5.3	1.6	57.1	頁岩	奥羽山脈
45	打製石斧	II B18n・III	9.8	4	1.9	66.7	頁岩	奥羽山脈
46	打製石斧	II B130南・III	5.3	3.8	1.3	31.0	頁岩	奥羽山脈
47	打製石斧	II B18n・IV	9.8	5.3	2.1	126.3	砂岩	北上山地
48	打製石斧	II B18n・IV	9.2	4.1	2.1	80.2	ホルンフェルス	北上山地
49	打製石斧	II B18n・IV	10.9	7.6	3	189.5	砂岩	北上山地
50	打製石斧	II B150・IV	6.9	5	2	66.8	ホルンフェルス	北上山地

第5表 石製品観察表

番号	器種	出土地点・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	産地
51	石冠?	T9	13.8	6.0	6.4	740.6	安山岩	奥羽山脈
52	石冠?	II B140・IV	12.0	5.5	6.6	539.3	玢岩	奥羽山脈?

6. まとめ

今回の調査で検出された遺構は土坑が6基、焼土遺構が1基、陥し穴状遺構が1基、溝状遺構が2条、柱穴状小土坑が128基である。遺物は土器が大コンテナ1箱、石器、石製品が小コンテナで1箱ほど出土した。調査区は広い範囲で、地山部分まで削平を受けており、遺構や遺物を確認できたのは、棚田状に造成された平場の、斜面下方側の辺縁部のみであった。住居跡といった遺跡の主体部は、水田の造成、その他による地形の改変により破壊されてしまった可能性が高い。削平の影響の少なかった平場の辺縁部は黒褐色土、黒色土が残存しており、ほぼ全体から遺構、遺物を確認している。縄文時代では、該期と推定される土坑が2基、陥し穴状遺構1基をV層で検出したが、遺物を包含していたⅢ、Ⅳ層では確認できなかった。遺物は、大洞C2～A式土器が出土しており、晩期の遺跡が多い高松丘陵・猿ヶ石川系の地形に存在する、周辺の遺跡と同じ傾向を示す。現在は猿ヶ石川から約2.8km離れている本遺跡であるが、猿ヶ石川の流路の移動による、生活域の変化が関係しているものと思われる。石器の中に、晩期にはあまり見られない撥形の打製石斧が出土しており、今後の検討課題である。平安時代については、遺構は不明であるが、遺物では9世紀後半～10世紀初頭の土師器が出土している。多くはA区西部のⅢ、Ⅳ層相当の部分から、まとめて出土したが、縄文土器も同じく出土していることから、出土した層は少なからず動いていると考えられる。本遺跡の東側斜面の約1.5km上方の高松山の山頂部には、古代寺院跡と推定される高松山経塚遺跡があり、同時期のよく似た土師器が出土していることから、本遺跡との何らかの関連があるのかもしれない。その他の時代では、検出した柱穴状小土坑は形状や規模から、近世から現代までの耕作に伴う遺構が多いと推定される。

引用・参考文献

- 岩手県教育委員会 1979 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（高松遺跡・八幡遺跡）』岩手県文化財調査報告書第34集
（財）岩手県埋蔵文化財センター 1999 『庫理遺跡発掘調査報告書』岩埋文調査報告書第302集
（財）岩手県埋蔵文化財センター 1999 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成10年度）』岩埋文調査報告書第311集
東和町教育委員会 1997 『町内遺跡詳細分布調査報告書（矢沢地区）』東和町文化財調査報告書第18集
花巻市教育委員会 1991 『矢沢地区文化財調査報告書Ⅱ』花巻市文化財調査報告書第16集
花巻市教育委員会 1993 『花巻市内遺跡詳細分布調査報告書 矢沢地区』

写 真 图 版





遺跡遠景(東から)



C区近景(南から)



B区近景(南西から)

写真図版1 遺跡遠景・近景



A区近景(西から)

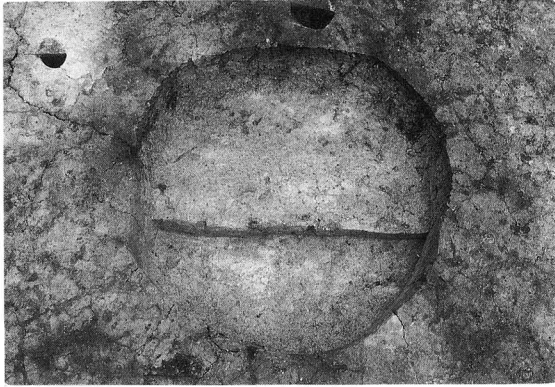


B・C区調査前風景(南西から)

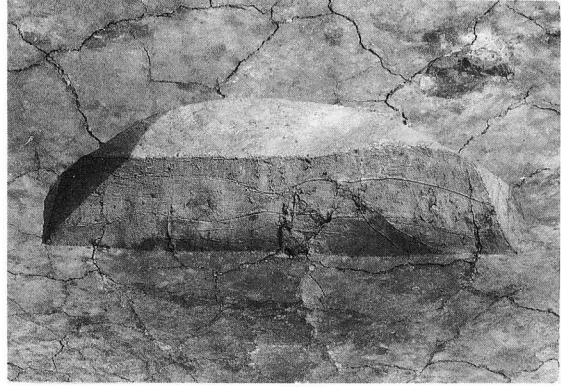


A区蒞り払い作業風景

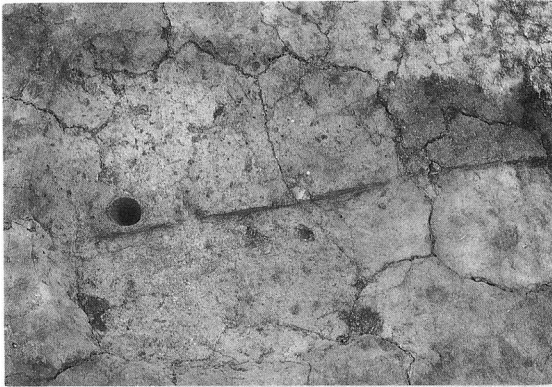
写真図版2 調査区近景・作業風景



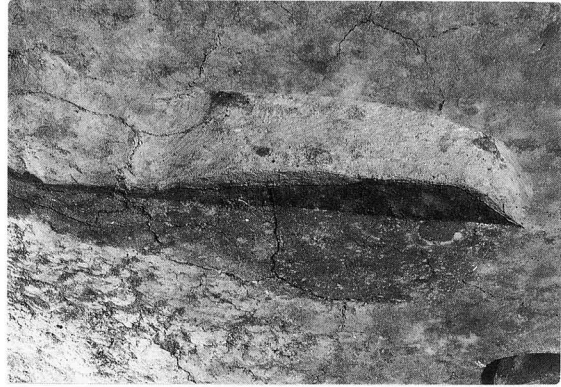
第 1 号土坑平面



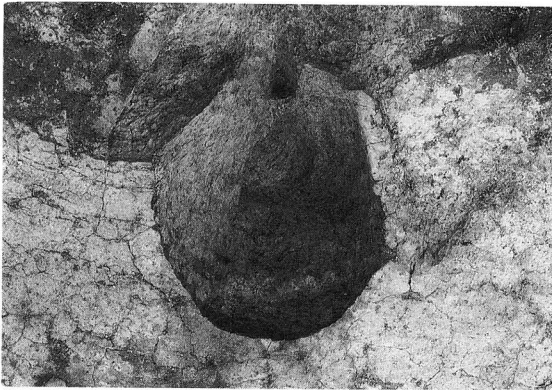
断面



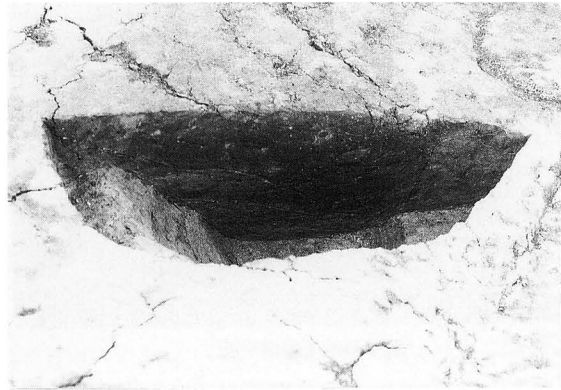
第 2 号土坑平面



断面



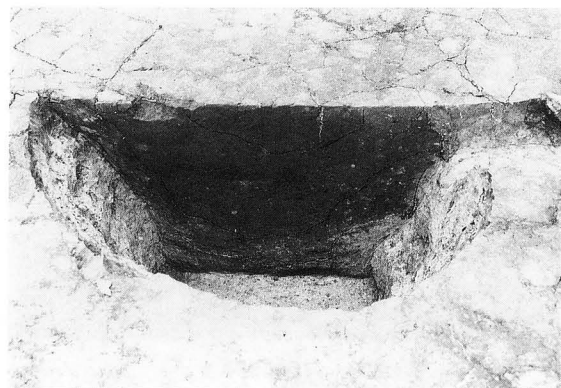
第 3 号土坑平面



断面



第 4 号土坑平面

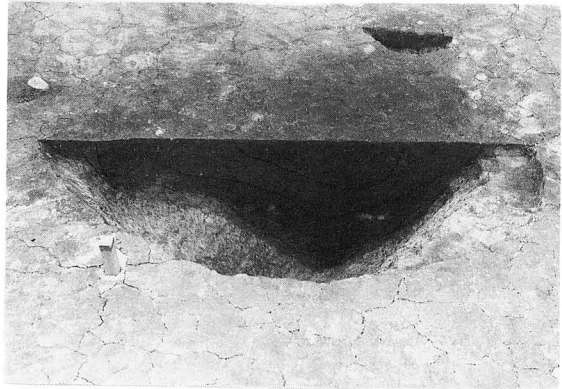


断面

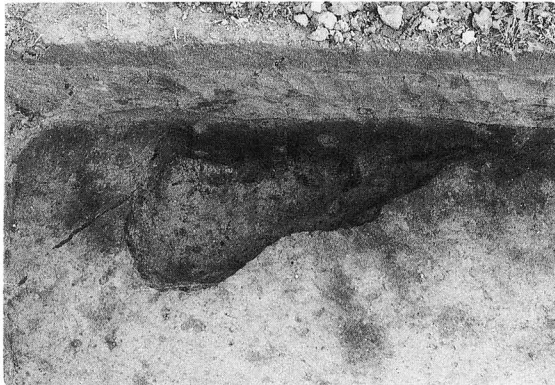
写真图版 3 土坑(1)



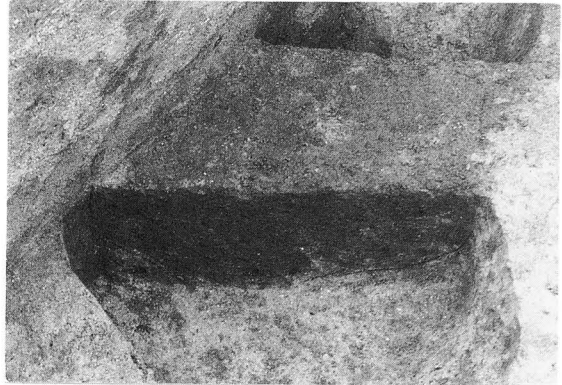
第5号土坑平面



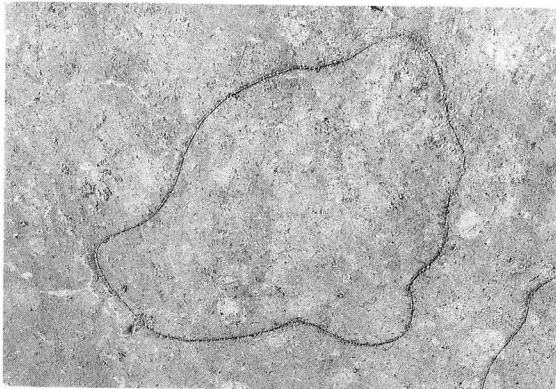
断面



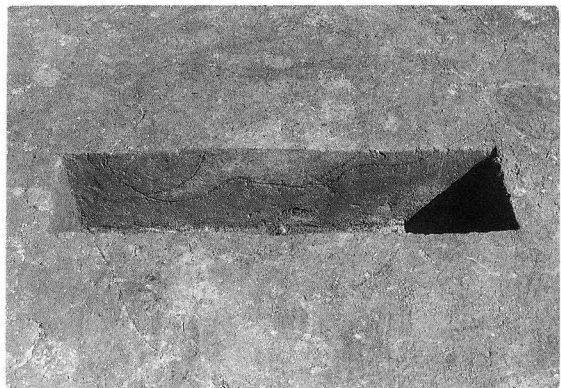
第6号土坑平面



断面



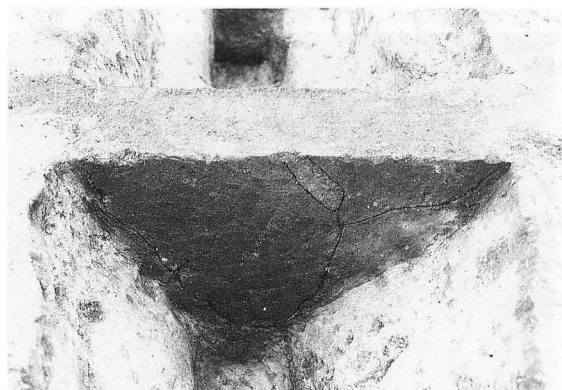
第1号烧土遺構平面



断面

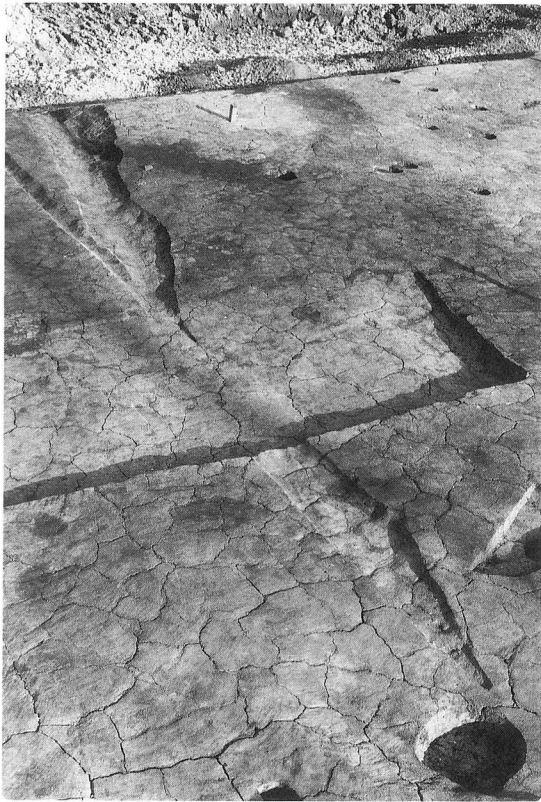


第1号陥し穴状遺構平面



断面

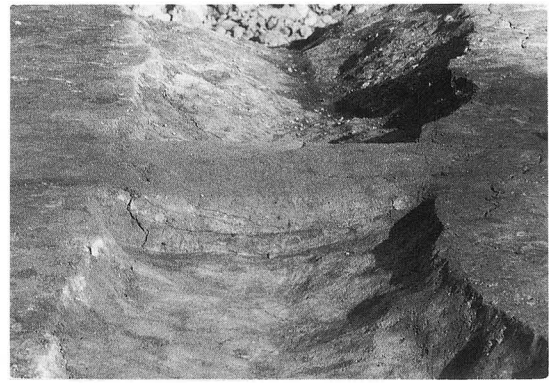
写真図版4 土坑(2)・烧土遺構・陥し穴状遺構



第1号沟迹 平面



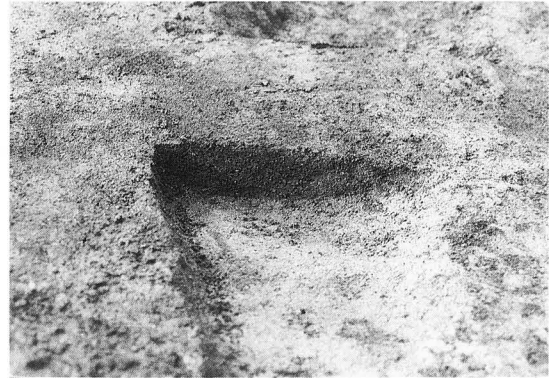
断面1



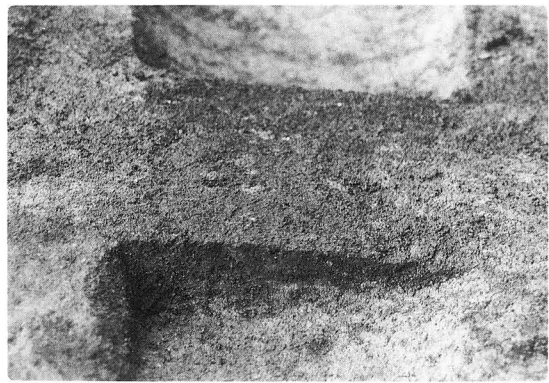
断面2



第2号沟迹 平面



断面1



断面2

写真图版5 沟迹



C区南東部 (南から)

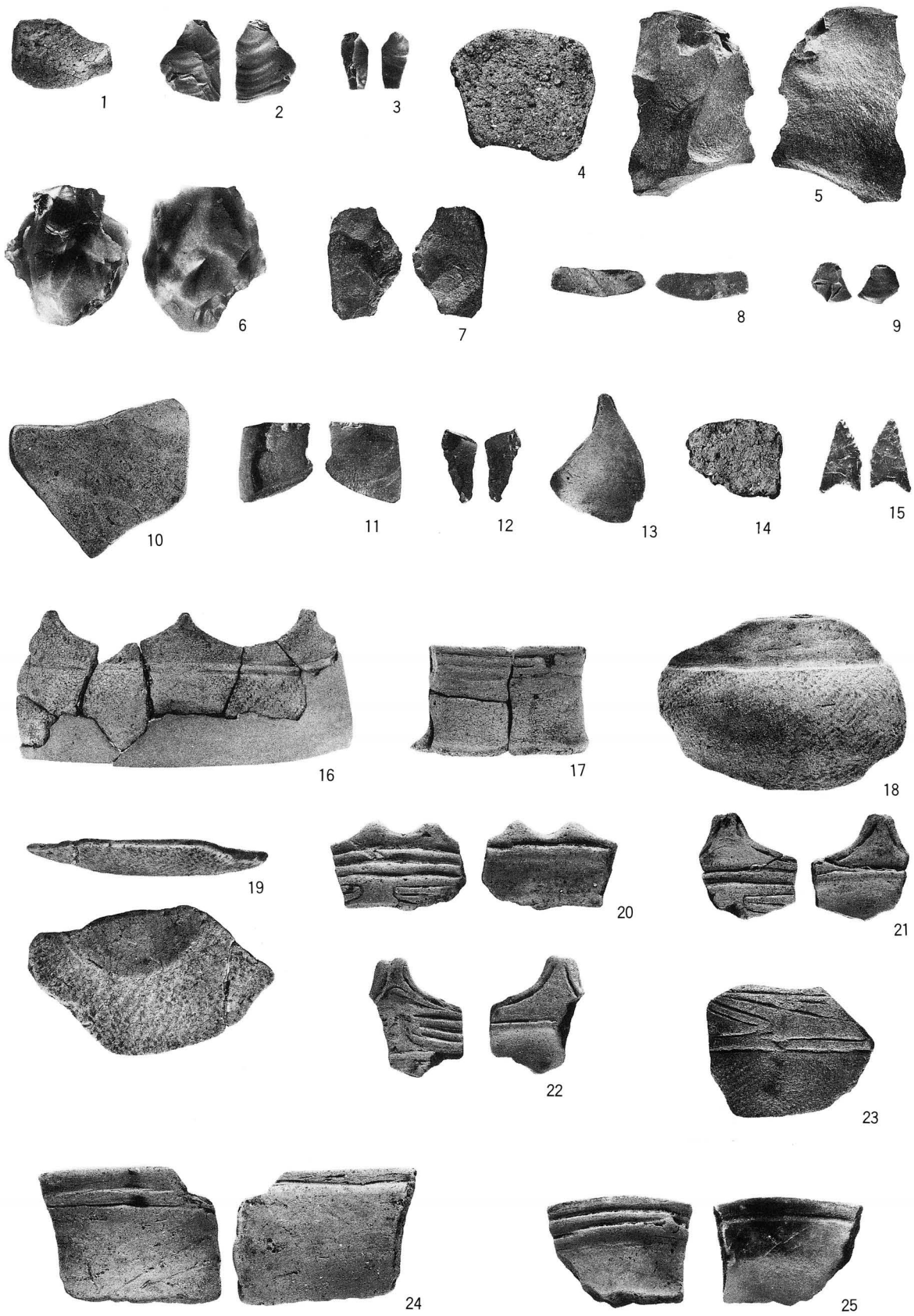


C区北東部 (北西から)

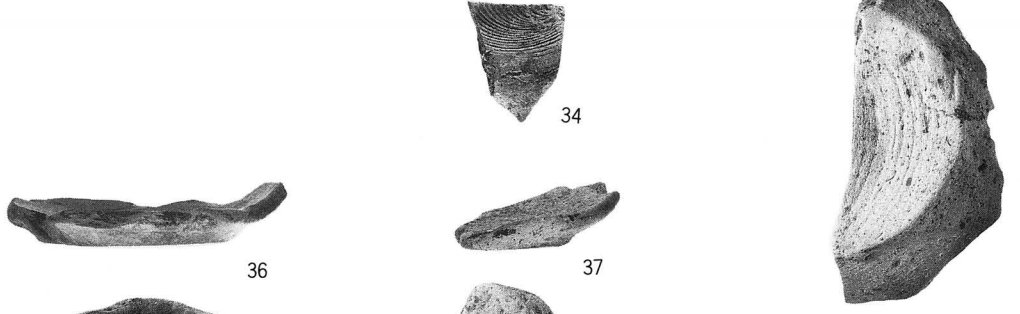
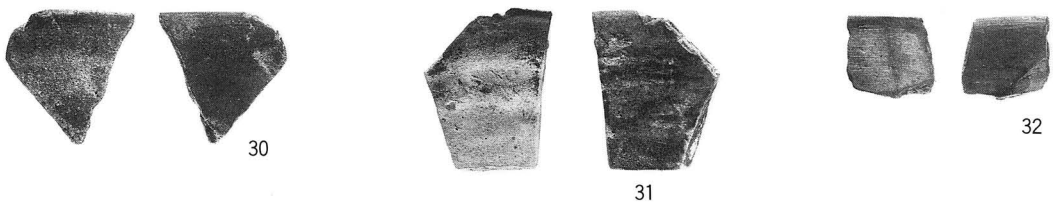
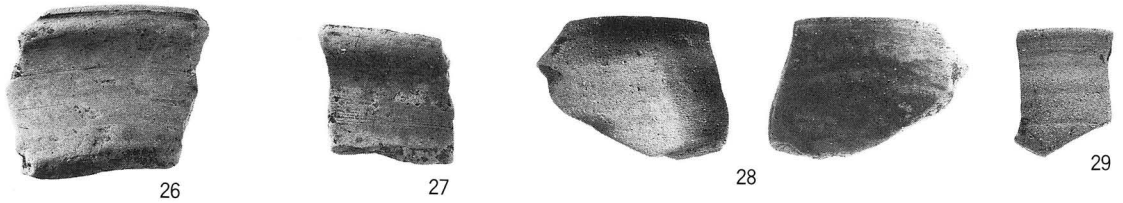


A区北東部 (北東から)

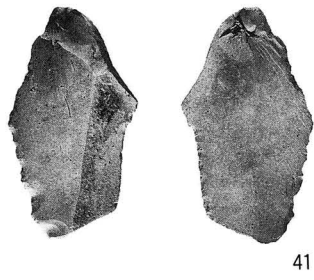
写真図版 6 柱穴状小土坑群



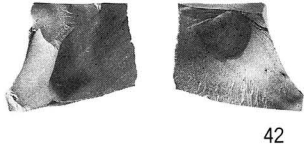
写真図版7 出土遺物(1)



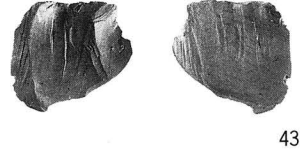
写真図版 8 出土遺物(2)



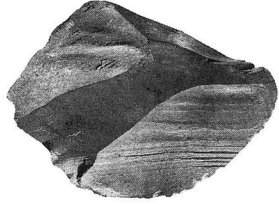
41



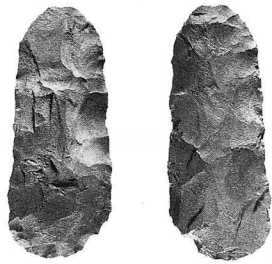
42



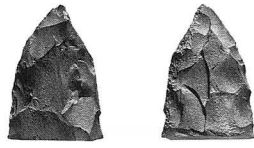
43



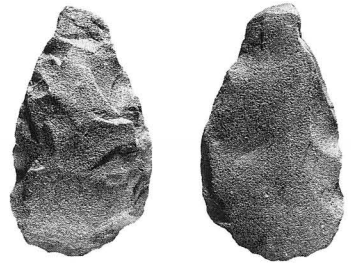
44



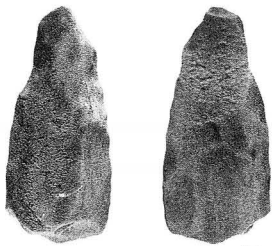
45



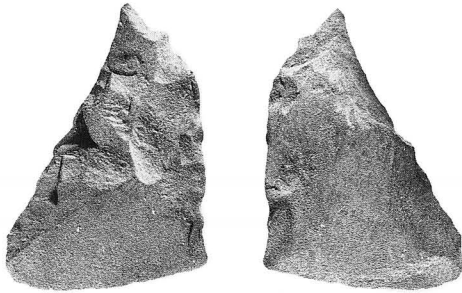
46



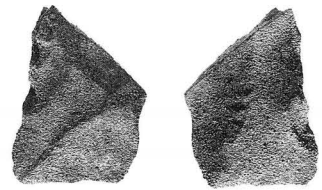
47



48



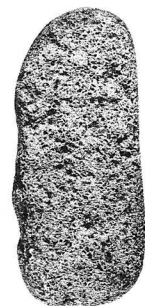
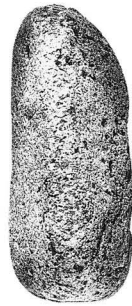
49



50



51



52

写真図版 9 出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	おおかみさわⅡ・たかまつてら・かみこまいたいせきはつかつちょうざほうこくしょ							
書名	狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線建設工事関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第319集							
編著者名	鳥居達人・金子昭彦・岩淵 計・中村比呂志							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2000年 3月 24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおかみさわⅡ 狼沢Ⅱ遺跡	いわてけんはなまきし 岩手県花巻市 狼沢		NE15-1313	39度 25分 12秒	141度 6分 14秒	19980413 ～ 19980715	3040㎡	「東北横断 自動車道釜 石秋田線建 設」事業に よる緊急発 掘調査
たかまつてら 高松寺遺跡	いわてけんはなまきし 岩手県花巻市 高松寺第26地 割39の1		NE27-1104	39度 23分 38秒	141度 10分 30秒	19980410 ～ 19980807	8250㎡	
かみこまいたい 上駒板遺跡	いわてけんはなまきし 岩手県花巻市 高松第13地割 100ほか		ME27-2317	39度 24分 47秒	141度 12分 10秒	19980806 ～ 19981001	6640㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
狼沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代 平安時代 その他	陥し穴 4基 竪穴住居跡 2棟 土坑 22基 柱穴 62基 溝 9条		深鉢(縄文時代晩期) 甕形土器(9世紀) 坏形土器(9世紀) 古銭・陶磁器		平安時代の大型の住 居跡2棟が確認され た	
高松寺遺跡	社寺跡	縄文時代晩期 弥生時代後期 平安時代 近世 時期不明	小規模な捨て場 竪穴住居跡 礎石建物跡 平場・土塁・参道跡 溝		縄文土器・石器・土偶 弥生土器 土師器・鉄製品(紡錘 車) 古銭(寛永通宝)		晩期後葉土偶 弥生後期土器 土なべ	
上駒板遺跡	散布地	縄文時代 平安時代 時代不明	土坑 6基 焼土遺構 1基 溝跡 2条 柱穴状小土坑 128基		縄文土器片(晩期) 石器(打製石斧 石鏃 不定形石器) 石製品(石冠状石製品) 土師器 須恵器		遺構・遺物に伴う集 落跡の存在が検討課 題	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第319集

狼沢Ⅱ・高松寺・上駒板遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線関連遺跡発掘調査

平成12年 3月15日 印刷

平成12年 3月24日 発行

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020-0016 盛岡市名須川町23-27

電話 (019) 625-2323
